

---

にやって来た！ 2

The Betrayer and A Lyric of Affection

笛吹葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

墮天使がうちにやって来た! 2 The Betrayer  
and A Lyric of Affection

### 【Nコード】

N1550S

### 【作者名】

笛吹葉月

### 【あらすじ】

想いを告げたあの日から半年、平和な日常が少しずつ崩れ出す。そして彼は彼女に背を向けた。「もう傍には居られない」 何故彼は堕ちたのか。彼女は何を背負っているのか。物語の起源が明らかになる第二部、ちよっぴりシリアスにスタートです。

\*\*\*

『墮天使がうちにやって来た!』 (“天然お坊ちゃんな墮天使が、心の広い女の子の家に居候して、ほのぼのと? やらかす話”) の続

編です。第一部を未読でも大丈夫なように書くつもりですが、この機会に読んで下されば、より楽しんで頂けるかと思えます。( 大  
半が一人称のため、やや不親切な描写があるかもしれせん。 )

## \*はじめに

はじめまして& a m p ;お久しぶりです、笛吹です！

私生活の方の諸事情によりかなりの間が開いてしまったこと、大変申し訳なく思っております（汗）。

すごく時間経ってるし、大分雰囲気違っし、また自己満足だし…と不安要素が満載ですが、第二部の開始をここにひっそりと宣言させていただきます。

さて、では少しばかり蛇足な気もするご説明をば。

まず、今作では回想……過去の話がちょこちょこ入ってきます。そこで一応区別のために、主に過去篇のタイトルは英語にしているかなーとか思っております。その方が目次にて一目でわかるのではないかと試みる予定です。

次に視点。前作と同様にほぼ一人称で進行して参ります。ただし真子さん以外の人物（？）が視点を担当すること、また稀に話によつては三人称のものがあることを了承頂ければ幸いです。読み辛いとは思いますが、どうかご容赦くださいませ。

内容に関して更に。天使や悪魔を扱う以上、宗教的観点から見ても何かまずい描写があるかもしれません。資料は参考にしてはいますが私の勝手な解釈が含まれている……というかほとんど妄想の産物です。あくまでも創作であつて、何ら悪意はないことをご了承下さい。

そして、これがいちばん重要かもしれないのですが、ええと……途中“もしかしたら”同性愛ととられてしまうような描写があるか

もしません。

年齢制限が必要なほどの描写はありません（ない……はず）。単にラブコールやら「愛してる攻撃」を送りまくるだけで、はい。広い意味での愛情としてとらえて下さると、とてもありがたいです。

長くなりましたが、作者からの蛇足は以上でございます。

至らない点も多々あるかもしれませんが、頑張って完結させようと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

それでは第二部、開幕です。

## プロローグ：ハジマリノウタ    N a t a l    D a y

扉が開いた。居た居た、主人が。

旅人踏み込み、笑って問うた。目標見定め「運命に沿わせる?」

主人は首振り、理由を述べた。結末来たりてありきたり、「退屈」  
くつくつ笑い声。

劇的悲劇で喜劇的。「適材適所」、役を当てはめ。

「いいね」「いいね」、惨事に贅辞を。けれどやっぱり最後は変わる?

はじまり、まじわり、代わりの変わり。着々進んで着地に成功。

「ごめんね」過ち謝りつつも、「そんなものだよ」「小さく苦笑。

さあ。惑え、惑え、掴め!

韻より何より大地を踏めば、それこそが無二の存在証明。

\*\*\*

ようこそ、《輪廻》。

それが、今回の名前?

うん。

ふうん、そうか。歓迎、感謝します。そしてはじめまして、  
《世界》。

はじめまして。キミとはうまくやれそう、《輪廻》。

同感だよ。その名前然り、さ。

お疲れ様、何回目?

ふふ、ありがとう。けれど何回目かなんて、忘れちゃったよ  
もう。いつもこんな風に扉を開けてくれればいいのにねえ。まった

く、《包括》が声を掛けておいてくれたら、他の子達も僕を恐がりたらないだろうに。君もそう思うだろう、《世界》？

難しい。《包括<sup>アレ</sup>》は、《梓組》に過ぎないから。

そうだね……。ところで、その《梓組》さんも、来ているんだろう？ 今回はどんな名前なんだい。また《包括》でいいのかな？

《器》。

その心は？

秘密。キミは退屈していそうだから、未知は少しでも多い方がいい。

そっか。まあ、どうせ直ぐに会うか。……それじゃあ、とりあえず挨拶しに行つて来ようかな。“今回も”よろしくね、って。

\*\*\*

むかしむかし、ずつとむかし、花咲き乱れる楽園に天使達が住んでおりました。純白の翼を持つ彼らは毎日空を自由に飛び回り、しかしただそこに存在するだけでした。

ある日、ひとりの天使が歌をうたいたいと思いました。

その時まで彼らはそれが歌だということを知りませんでしたし、自分から何かをしようと思ったのも初めてでしたから、最初はひどく戸惑いました。彼らは集まり、恐る恐る旋律を奏で始めました。

歌声は空より高く、花より鮮やかに。それまで感じたことのない不思議な気持ちに、彼らは嬉しくて翼を羽ばたかせました。そして彼らは主のもとへ行きました。主は仰いました、「それが意志というものですよ」。

それからというもの、天使達の日々は変わりました。花を見ては

喜び、領分を侵されては怒り、愛する者とのすれ違いに哀しみ、音楽を生み出しては楽しみました。

そんな子ども達をご覧になって、主はお考えになりました。何も知らない時は退屈だけれど平和だった、と。意志を持つ者の中にはそれらを束ねる者が必要です。主はお考えになりました。最高の天使を創りましょう。最も美しく、最も賢く、最も気高く、最も強く、最も愛すべき子を。

\*\*\*

水晶というものが天界に存在するならば、その部屋はまさしくそれでできているに違いなかった。壁も、床も、天井も、柱も、台座も。澄んだ薄蒼色は鋭い輝きを放っている。

そして台座の更に背後には流れる瀑布。端も見えない巨大な白い滝が静かに、けれど勢いよく落ちていた。

荘厳な部屋を更に幻想的に見せているのは、その床の上で燃えている炎だった。大きな炎からは煙は全く出しておらず、それでも眩しい赤橙色の炎が踊る。

さあ

炎の中に、ひとつの影。

生まれておいでなさい

次第に消えていく赤い輝き。姿を現し始めた《それ》は、長い体

軀を折り曲げて、声にならない産声を絞りだす。

### 愛しい子

《彼》の背には黄金に輝く翼が全部で十二。一糸纏わぬ素肌は雪のように白く透け、艶やかな漆黒の髪の毛の奥には、吸い込まれそうな魅惑の紅い宝玉。彼はその切れ長の瞳から、一筋の涙を流した。母を呼ぼうと開いた唇からは、擦れた声が漏れるのみ。依る辺を失くした子は濡れた瞳に世界を映し、歓喜と興奮に体を震わせる。

貴方には 多くを知ってもらわねばなりません

彼は四つん這いのままに台座を見上げ、ひとつづなずいた。それを受け入れねばならないことを、受け入れるのが当然であることを、彼は既に知っていた。

ありがとう 光の子

刹那、彼の体が弓なりに反った。突如として彼の中に流れ込んだモノ。それは主の願いであり、彼に託された詞達ことばであった。押し流されまいと床へ倒れた天使はすぐに己の存在理由を知る。何故自分が生まれたのか。自分は何をすべきなのか。

ルシフェル それが貴方の名

「あ、うあ……っ」

水晶を削らんと爪を突き立て、藻掻き、ようやく音が零れ出る。美しい羽根が幾枚も床に散らばる。内なる力が解放を求めて暴れ回る。それでも彼は耐えた、己の道を見たその目をきつく閉じて。

それは苦しくもあり、喜ばしくもあり、痛く、心地よく、切なく、狂おしい。力との闘い、己との対峙、自らの器を受け入れること。御し難いほどに溢れているのに、飢えと渇きに似たもどかしさ。熱い、背中が、熱い。 。  
彼が絶叫した瞬間。十二の翼は強大な力を証明するが如くひろがり、黄金の煌めきが突風と共に発散された。  
奥の瀑布の流れは変わりなかったが、それでも金色の膜は暫く辺り一面の水晶を覆い。

忘れてはなりません 貴方のそばには 愛があります

そして、子は母に頭を下げる。生み出してくれた母に、創り出してくれた主に、自分を迎えてくれた世界に、震えながら頭を下げる。彼の生は、ここに始まったのだ。

“自己”を手に入れた天使は体を支えることもできず、そのままそこに倒れこんだ。

知りなさい この世界を 己の責を 愛しい我が子よ

しかし、それは偶然か必然か。  
浅い息を繰り返しながら薄く目を開けた彼が見たものは、眼前の床に転がった、小さな小さな石のような塊。

未だ震える腕を伸ばして、微かな温もりを持つその塊を無言で握りしめる。握りしめる……ここに、こんなものが、在って良いはずがないのに。こんな、“不純物”が。

貴方は最高傑作 それは 間違いありません

純粋な聖なる炎、だが生まれた彼は“欠けていた”。投げ込まれた不純物は、誰の意図に囚われるだろう。

けれども 完全なる者は 足を進められない 貴方に 進んで欲しいからこそ

彼の知恵を以てしても、真意の理解に至ることはできなかつた。与えられた者に過ぎない。その事實は受け入れねばならぬとわかつてはいても、拳はより強く握りしめられる。

いいえ 貴方はもう切り離されたのです 己の生を 己だけの命を 燃やしなさい

本当は彼は尚も困惑していた。しかしそれ以上に、自分の内があたりたかな気持ちで満たされていくのがわかる。

愛されることで喜びを知り、理解できない物事の存在に哀しみ、不完全である己に怒りを覚え、そして先へ繋がる道を楽しみにして。

「しゅ、よ」

眠るのは、愛しいひとの腕の中。彼はただ、世界との出逢いを待つ。

## 第1話：墮天使、再び

夏。

ついこの間まで色とりどりの花を咲かせていた木々が、一斉に緑の葉を広げる季節。全てのものが生氣に溢れ、何だか気分も浮き立ってくる。まだまだこれから暑くなるんだろうなあ。

「……“追伸、たまには帰って来てください”……っ」と

放浪中の両親からの暑中見舞い。憎らしいくらいの笑顔の写真に苦笑し、あの旅人共は今頃は北欧かな、と思いを馳せて朝から書いた返事。住所が書いてあるし暫くは同じ所に滞在するらしいから、いくら転々としてるといつても急いで出したら返事は届くだろう……多分。

宛名は“進藤信彦・新”様。父親と母親の名前。新、と書いて“にい”と読む。外国に行った時は“膝(knee)”と同じ発音だからと呼んでもらいやすいらしい。まあ余談だけど。

裏に住所を書き、進藤真子、と名前を記してようやく息を吐いた。

あたしは無事に進級し、高校三年生となった。大事な時期と言われるけど、まだ自覚はなかったり。クラス替えもないので、去年と変わらない日々を過ごしている。

そして、家の中も変わらない。

「朝だよー」

「んう……」

両親は旅行中。けれど同居人がひとり。ごろりとソファーに寝転

がった長身の男。彼はそのクールな見た目にそぐわない可愛らしい呻き声をあげ、寝返りをうつ。

「……………」

「ん……………」

「…………朝ご飯、いらないのね」

「いる……………」

彼は細い体に似合わない食いしん坊でもあり。

「おはよう、ルシフェル」

「…………おあよ、真子」

欠伸を噛み殺しつつ、ぐしゃつと黒髪を掻き上げた彼の名は、ルシフェル。今から一年前、突如として我が家に転がりこんできた居候だ。

変わった名前だと思われるかもしれない。それは、そうだ。彼は人間ではない。墮天使、なんだから。それも墮天使全てを束ねるトップ、墮天使長。地獄の一都市《万魔殿》を統括する最高責任者なのです。すごいでしょ。

「眠……………」

切れ長の紅い瞳を擦る青年には“魔王”の面影なんてないけれど、本当はとんでもない力の持ち主だ。仲間をして「本気を出したら世界が滅びる」と言わしめたほど。地獄では威厳を保たなきゃならぬけれど、うちにいる時くらいは甘えさせてもいいよね、なんて。だから、あたし達の日常も変わらない。

「暑……………」

「はいはい、着替えるなら洗面所に行つてねー」  
「な、何故わかった?!」

でも、ちょっと変わったことを敢えて挙げるなら。

「真子、今日は休み?」

「うん」

「なら、私も朝食作りを手伝おう」

超金持ちお坊っちゃんが、料理に積極的になってくれたこと。料理音痴の克服のために、たまにこうして手伝ってくれるのだ。

……とはいえ。

「今日こそ“卵焼き”を成功させてみせるっ!」

「五度目の正直だからね……」

相変わらず、その腕前は泣けるくらい壊滅的。

「悠久を生きる我々が物事に上達する速度は、長い目で見ていながら、人間よりも遅いんだよ」

「あ、そう……」

まあ、ゆっくり慣れていけばいいよ。

\*\*\*

カオスと化した卵を食べ、落ち込む堕天使様を慰め。のんびりテレビを見てから、堕天使様の提案で散歩に出かけることにした。天気が良いからね。

「お昼はどうしよう。外で食べよっか？」

「良いな、それ」

「ちょっと遠いけど、最近できた和食バイキングの店がおいしいんだって」

「ふむ、そこにしよう。たくさん歩けば腹も減る」

他愛ない会話をしながら並んで歩く。太陽が眩しい。日焼け止めを塗ってきて良かった。

「ルシフェルはいいよねー。日に焼けないんだもん」

あたしが言うと、ルシフェルはちょっと困ったように笑った。雪のように白い肌。これも全然変わらない。

彼の容姿はいつも人の目を惹き付けてしまう。道行く人に振り返られるのも、もう慣れた。最初は恥ずかしかったなー、と懐かしく思ったり。類なく美人過ぎる彼は、連れて歩くだけで注目の的。

けれど今は、少しだけ胸を張って隣にいられる。それはこの一年でたくさん美しい堕天使さんや悪魔さんを見てきたおかげかもしれないし、ただの慣れかもしれないし、もしかしたら、ルシフェルとあたしの関係がちよっぴり進展したせいでもあるかもしれない。

現に、ほら。今でもあたし達の手首には、同じデザインのプレスレットがあるんだから。

……でも待てよ。と、たまに不安になる。彼は“そういう言葉”を言ってくれたわけなんだけど、言ってくれたはずなんだけど、勘違いっていうことがあり得る。何しろこのお兄さんは天然という最強種。向こうが何とも思ってたとしたら……あたし、めっち

や恥ずかしいよね?! え、大丈夫だよねー?!

「真子?」

「え?!」

「顔、赤いぞ。具合でも悪いのか?」

「ひっ、日に焼けたんじゃないかな?」

……こんなことを最近は特に考えるようになりました。ぶっちゃけあたしは、ルシフェルのことが好きなんです、はい。もうバレバシだけどね。

「少し休むか。暑くなってきた」

散々言ってきたけど、結局あたしはこのんびりした平和な日常が何よりも好きだ。ルシフェルだけじゃなく、みんなと過ごした日々が大切な宝物……なーんて、カッコよくない? あはは。

ちょうど陽も高くなってくる頃なので、散歩の途中で小休止することに。適当な公園の、適当な木陰のベンチに二人で座る。ふうー!

「涼しいね」

「ああ」

休日とあって、公園には結構たくさんの小学生がいた。元気だと!

「またバケツとかぶつけられないといいね」

「そんなこともあったな……。たかが人間時間の一年なのに、やけに懐かしいな」

「もう一年か……」と呟いてルシフェルは目を細めた。

本当に、あつという間だ。

寝起きを襲われかけた（？）あの日から、彼はなんとなくうちに来たとしれつと言い、ビルをひとつ消し飛ばし。初めて一緒に出かけたり、祭りに行ったり、地獄に行ったり。同じ布団で寝ていたら両親に見られたこともあった。文化祭、ハロウィン、クリスマス。色んな人と、色んな人外の方々と出会った。全部、ルシフェルが来たあの日から。

……ルシフェルはどうして我が家を選んだんだろう？ 本当に直感だけなの？

「ねえ、ルシフェル」

『わーっ、カップルカップル！』

『ヒューヒュー！』

気付けば目の前には小学生の男子が。

「う、うっさいっさい！」

『ヤベー、怒った！』

『逃げろーっ』

高校生ナメんなよ、ガキンチョ！

と、まあこんなこともできるようになりました。キヤーキヤーと逃げて行く姿を目で追いつつ、成長したなーチキンなあたし、と自分で感心。

とか言って、また苦笑いされてるんじゃないかなろうか。そう思っふと隣を見ると。

「……ルシフェル？」

彼はただ、まんじりともせず、顎に手をあて、地面を見つめていた。何か考えているような……心ここにあらず、って感じ。

「ルシフェルってば！」

「……ん?! あ、なんだ、斬れば良いのか?!」

違う違う。真昼の公園を鮮血で染めようとししないでください魔王様。

「今の見てなかったの？」

「すまない、考え事をしていた」

良かった……と言うべきか。

そう、そうだ。少し変わったことがもうひとつ。何故だか知らないけれど、ルシフェルは物思いに耽ることが多くなってきた。最近、特に。あたしの話を聞いていなかったり、夜遅くまで窓辺で黄昏を待っていたり。

一度だけ何を考えているのか尋ねたが、

「内緒。とても重要なことなんだ」

と、はぐらかされた。

地獄の重要機密、とかなのかな。だとしたら人間のあたしには、残念ながら教えてくれないだろう。ルシフェルだって万魔殿のトップだから忙しいんだなと思って、あまり気にはいなかったけどね。

唐突に、すごく唐突に。ぽつりと彼は呟いた。

「……………時間だ」

あたしはそれが、この休憩は終わりだという意味だと思った。だから、よし、と立ち上がる。

「なあ」

でもルシフェルは座ったままにあたしを見上げて。

「なに？」

「本当に、具合は悪くないんだな？」

……変なこと言うなあ。

「うん、元気だよ。ルシフェルこそ、最近ぼーっとしてるけど大丈夫？」

「私はいいんだ」

なんか心配されると逆に怖くなってくる。そんなに具合悪そうに見える？！

「……よし」

パン、と膝に手を当て立ち上がったルシフェルの顔には優しい笑顔。

「では、行くか」

いつも通りの、きれいな笑顔。

「うん。あ、ルシフェル、あんまりいっぱい食べて店の人を困らせ

ちやダメだよ」

「うっ……ほどほどにしておく」

頼むよ、バイキングキラー。

ちよつとだけ変化があった日常。でもきつと、ルシフェルが抱える地獄での問題とやらが解決すれば、再び元の日々に戻るに違いない。

だってルシフェルは、いつでも隣にいてくれたんだから。

## 第2話：彼の願いと彼女の戸惑い

襟割りの大きく開いた七分袖のシャツは普段着にしているようだけど、外で着ないのがもつたいたくないくらい、醸し出される色気が尋常でない。いや正直なところ、独り占めしたい気持ちの方が大きいのだけど。剥き出しの鎖骨についてい目がいってしまうのは、女の性さがってものですよ？

あたしは頭を振って邪念を払う。しかしまたしても、どうしても彼の姿を目で追ってしまう。台所で動くルシフェルの背中が、まさしく男の人のそれだった。細身のくせに、なんだか逞しい。人生経験の差ってやつのせい？

肩甲骨の辺り。あそこに翼があるのだと思うと、それもまた変な感じ。

あたしはこうして彼に見惚れてしまう時、彼が墮天使で良かったなあなんて、ふと思うのだ。墮天使じゃなかったら、こんなイケメンとは間違ってもお近づきになれなかっただろうから。まして一緒に住むなんて！

ちよつぱり悲しくなりつつ、目の前のチョコレートを口に放り込む。学校帰りに夕飯の買い出しのために寄ったお店で、おいしそうだったから勢いで買ってしまったチョコ。夏場なのに、ってツッコミはノーセンキュー。高かったんだよ。オレンジピールとか入ってるしさ、少し爽やかでしょ？

で、ルシフェルが台所にいるのは、コーヒーをいれるため。さすがに夕飯までは任せられないけど、墮天使様だってちよつとは進歩してるのです。

学校から帰って来たあたしがお菓子を持っていることを知ると、彼は大喜びでおやつタイムの準備を始めたのだ。食べ物のためなら労力は惜しまないらしい。まあ、まだ夕飯まで時間もあからね。

「できたっ」

甘党魔王め。甘い物があると、ルシフェルはかなり上機嫌になる。コトン、と置かれたマグカップ。熱々のホットコーヒー。気温とか気にしないのが墮天使長クオリティ。

あたしはカップの中身を瞬時に確認して、コーヒー色であることにそつと安堵する。失礼に思われるかもしれないが、これは長きにわたる彼との生活で身につけてしまった癖なのだ。お坊ちゃんの料理（？）に対する防衛本能。本人には内緒だ。多分しよげるだろうから。

少し冷ましてから、一口。

「……ん。上手くなったね」

「だろう？」

ルシフェルは嬉しそうにはにかんだ。

砂糖を一匙と牛乳を少しだけ。あたしの好きな味をルシフェルはわかってくれている。

そしてルシフェル本人の好みはといえば、もちろん甘いコーヒー。外出先では格好つけてブラックを頼んでいるけど、本当は砂糖もミルクもたっぷり入った甘いカフェオレが好きだったこと、ちゃんとあたしは知っている。

ブラックも、別に嫌いではないようだけど。喫茶店ではいつもそれと一緒にケーキやパフェを注文する。嬉々としてフルーツとクリームを頬張る姿は、いくらブラックコーヒーを飲んでいようと、もはや可愛いという印象しか周りに与えないのだが。

でもそんなあたしでさえも、ルシフェルが自分のカップの中身をかき回す度に“ジャリジャリ”とあり得ない音がするのにはビビった。どれだけ砂糖入ってるんだよ。

言わずもがな今回も。あたしだったら、チョコと甘々な飲み物は

嫌だけどなー。テーブルに伸びた彼の腕を見て思わず苦笑する。

「これ、何か入ってる？」

ほっそりした指がチョコをつまむ。それを鼻に近付けて匂いを嗅ぎながら、ルシフェルは首を傾げた。

「オレンジがちょっとね」

「ふうん。甘酸っぱくて、良い香りだな」

そのままチョコは口元へ。

……何故だろう。目が離せない。

桃色をした薄い唇が微かに開かれ、先を差し込まれたチョコレートが、そこに触れる。体温と吐息で溶かされた黒い塊を、前歯が小さな音と共に割る。

残りの半分が完全に口の中に消え、コーヒーで濡れた唇を紅い舌が舐めてしまうまで、あたしはつい彼を凝視してしまっていた。……って、何をしてんだっ！

「どうした」

笑い含みの声に我に返ると、麗しの堕天使様がニツと口端を吊り上げ、意地悪な笑顔であたしを見ていた。

「そんなに見つめて。私に見惚れていたのか？」

「い、いやっ、別に……！」

「まあ仕方あるまいよ。私は最高に美しいのだからな」  
「……………」

照れて、というか呆れて閉口。事実だから否定はしないけど。

ルシフェルはたまに、こんな俺様発言を試してみたりもする。本人は嫌味を言っているつもりはさらさらなく、本当のことを言っただけの悪いのかと聞き直るわけです。さすが魔王様。

ああ、それにしたってあたし、変態みたいじゃないか。軽く凹むなあ……。それもこれもルシフェルが美人なのがいけないんだ、うん。

そんな他愛もない会話がちらほらとあったけど、コーヒーを飲み終える頃には、ルシフェルはすっかり口を閉ざしてしまっていた。またここ最近の物思い。

ちらつと伺い見た横顔は……。やっぱりきれい、だけど。どこか影がある。

かといって彼は何か喋るのでもなかったから、あたしも黙って服の裾なんぞを弄っていたのだが。

「……ねえ、真子」

「ん？」

目が合った。ルシフェルの表情は魔王様のそれではなくて、優しくて、穏やかで、まるで天使みたい。ルシフェルは動物を見る時によくこういう温かい眼差しを見せる。たまにあたしに対しても。そしてあたしは、美しい堕天使のことなく鋭利なオーラがふと緩む、この瞬間にやられるのだ。

「……私達はな、人間が生まれるずっと前から世界に存在していたんだ」

「う、うん……」

「……」

「……」

何を言い出すんだろう？ 昔話にしては脈絡のない。ルシフェルはいつになく慎重に言葉を選んでみるみたいで、でも、沈黙に首を傾げるあたしから目を逸らしはしない。

「ルシフェル？」

「……人間の寿命は短い。そうだろう」

「え……うん、そりゃあ、まあ」

「不老不死を、望んだことはあるか？」

「不老…… え？」

とうとうルシフェルが体ごとこちらを向いた。……なんか、嫌な感じ。胸がざわざわする。

と思うと長い腕がするりと伸びてきて。あたしの肩を抱くように、静かな動作に見せかけたそれなりの力が、向かい合わざるを得ない状況を作り出す。

「限りある肉体を厭わしくは思わないか？ 悔いる時を待ち受けるのは怖くはないか？」

「だっ、堕天使さんって、不老不死？」

「いいや、完全にそうではない。消される者も無論いる」

「消される……？」

何か引つ掛かる言い回し。消される？ 誰かに、消される。

“誰に”？

いや、今は目の前のルシフェルのことを考えないと。確かに表情は穏やかなまま、だけど、どこか様子がおかしい。単に思い付きを話しているのとは違う気がする。

「我々のことはどうだって良い」

首に当たった彼の指先は冷たくて思わず震えたけれど、離れたいたった手が次にあたしの両肩を押さえつけたことを思えば、その冷たささえも恋しくなる。

「真子……」

名前を呼んだ熱っぽい声。優しかった瞳は、いつの間にか暗く潤んでいた。無意識に身を引こうとしても、既に背中にはソファアークにつ付いてしまっている。

「私なら、救えるんだ」

絞り出すように言う。決して好ましい事態ではないが、ルシフェルが何か伝えたがっているのなら、あたしに聞かないという選択肢はないのに。

救うって、何？ どうしてそんなに緊張してるの？

妖しく光る紅い瞳に、あたしはすっかり身動きをとれなくなっていた。それがいわゆる魅了されているという状態なのか、彼の魔力の一部が行使されているせいなのかはわからない。ただ確かなのは、あたしの立場がとても弱いということ。

「お前が望むなら……」

顔がどんどん近づいてくる。変な気持ち。何してんの！ って言えばいいのかもしれないけど、頭がぼつつとする。危うい感じがする一方で、このまま流されてもいいやと思う自分があるのが怖い。

そうか、怖いんだ。この奇妙なズレが、空気に吞まれそんな自分自身が。そのくせ読めないルシフェルのことが。

コクンと唾を飲み下した、男らしい筋張った喉。意を決して開かれた口がうわ言のように繰り返した、あたしの名前。

「真子……」

恐怖だなんてそんな。気が付いて、否定できなくて、ショックだった。

あたしはただ普通に過ごしたいだけだ。でも……でもルシフェルのこともきちんとわかりたい。

「ルシフェル、」

何を言ったらいいのかわからない。いや。何を言っても多分、痛いほどに両手に力を込めている彼には、もう。

「どうか……どうか、私と……！」

その時、玄関ドアのチャイムが鳴った。

突如の来客の報せに、二人同時に身を離す。というより、突き飛ばすように体を引いたのは向こう。あたしもドキドキしていたけど、何故かルシフェルも茫然と自分の手を見つめていた。夢から覚めたばかりのようにぼんやりとしていたかに見えた彼だったが、すぐに我に返って落ち着きなく視線を泳がせる。

その異様さに動揺は治まらなかつたけれども、染み付いた習慣というか、日常の動作をするだけの冷静さはあたしにあつたらしい。来客たる近所の奥様から煮物のお裾分けをありがたく頂き、どうにか笑顔でお礼は言えた……はずだ。

それからそつと部屋に戻ると、ルシフェルはソファに座ったまま目を合わせずに「ごめん」と一言だけ呟いた。あたしは何もかもよくわからなくて、「ううん」と返して首を振る。彼は痛みを飲み込むようにわずかに顔を歪め、それでも全くこちらを見る気配もな

く沈黙し続けるばかり。

もう一度ルシフェルの隣に座るのはどうにも気まずくて、少し早  
いけど夕飯の支度に取り掛かろうと、あたしは台所へ。二人で温か  
いご飯を食べたらきつと大丈夫だよ。自分に言い聞かせながら鍋を  
火にかける。

怒るとか、そういうのじゃなくて。ただ、なんだか幻みたいなき  
妙な出来事だったと思っていたのだ。そして、やっぱりルシフェル  
の様子がおかしいとも、思ってしまったのだ。

## The Apotheosis

カッソ、カッソ、カッソ

規則的な音は、革の長靴ちゅうかの底が大理石の床を叩く音。

蒼い髪をなびかせ、ひとりの天使が長い廊下を歩いていった。小脇に抱えるのは羊皮紙の束。

カッソ、カッソ、カッソ

彼は脇目もふらず、ただその翠の瞳で前を見つめ進む。窓の外には、陽光降り注ぐ美しい庭園が見えるというのに。

「次の角を右、二番目の角を左に折れた突き当たり……」

若々しい顔立ちを緊張に強ばらせ、眉間に軽く皺を寄せ何度も道順を反芻する。これから行われるのは大天使達の集まり。彼は今回初めて“会議室”へと向かう途中なのだ。

「次の角を右、二番目の角を左に折れた突き当たり……」

まったく、この宮殿は広すぎていけない。いくら天使の数が多いとはいえ、これほど複雑な構造にする必要はなかるうに。

多少の不満にため息はつけど、それでも彼はこの宮殿を気に入っていた。楽園の 天界のどこからでも見える巨大な白亜の建物。その白は、空の青にとてもよく映えるのだ。

複雑な内部であっても、本当は彼が迷うはずはないのだけれど。彼の頭の中には宮殿の構造も叩き込まれているから。

彼は大天使として誕生した、少しばかり特別な者。生まれた瞬間、頭に流れ込んできた情報の波……主の願い。あの衝撃を、彼は忘れることができない。

天界を統べる者として、様々な知識は既に授かったはず。宮殿の構造など、そのほんの一端に過ぎない知識だが……。彼が身に纏う床につくほどの白い長衣は、彼自身の責の重さを表すものでもあった。

そんな誇り高き大天使が遅刻などしてしまつては洒落にならない。心なし足を速め、角を右に曲がろうとした時。彼はもうひとりの天使と出くわした。瞬時に白い衣の丈を見れば、相手の上衣も床ずれすれの長さ。そして脇に抱えた紙の束。どうやら、その青年も同じく大天使らしい。

「会議室へ向かうところか？」

そう言われて初めて顔を見た。

美しい。

ただひとつの感想を除き、他の言葉は出なかった。艶やかな黒髪、どこか鋭さを秘めた紅い瞳。美醜の概念が意味を成さない天使というモノの内に入りながら、その天使はそれでも一線を画していた……とても言おうか。一目で相手を惹き付ける空気感は、まさしく与えられた才能と思つて間違いはない。

一方で見つめられた側は、どうした、と不思議そうに首を傾げ。慌てて手を振ってみせた天使は、気恥ずかしさに赤くなっていた。

「失礼した。貴方も、大天使か」

「ああ。良かったら一緒に行きよう」

そのままふたりは並んで歩き始める。

「……会議に出るのは初めてか？」

小気味良い足音を響かせながら、黒髪の天使が問う。背丈の都合から、ほんの少しだけ見下ろす形になる。

「ああ。ついこの間誕生したばかりで」

「それはおめでとう。歓迎するぞ、新たな友よ」

「ありがとう」

一つ目の角を過ぎる。仲間を見上げて微笑んだ若い天使は、ゆったりとした声音で次に疑問を紡ぐ。同胞を見つけたおかげで先より緊張は随分と和らぎ、色々なことを考える余裕も出てきたのだった。

「会議、というのはどういったことをやるのだろうか」

「そうだな……。まず、主の御言葉を使者が伝えに来る。ほら、《天意の間》という部屋があるだろう？ あそこにいるザドキエル、あれが主の御言葉を聞いて、それを使者に伝える。ザドキエル自身は、あの通り、動くことができないから」

「動けない？」

「彼は《器》だからな。まあ、見ればわかる。そしてその御言葉を聞いて、我々大天使は仕事に取り掛かる。新しい天使が誕生すれば祝福を行うし、まだ統制が進んでいないこの天界の事業も、執り行わなければならぬいな」

「……できるだろうか」

蒼い髪の天使の言葉に、黒髪の天使は声をたてて笑った。

「大丈夫さ、直に慣れる。私達もまだ戸惑うことばかりだからな。人手が増えるのは助かるよ」

やがて彼らは二つ目の角を左に曲がる。

「そう言ってももらえるとありがたい。貴方はずっとその集まりに参加しているのか？」

「そうだな。私の誕生と同時に統制が始まったと言ってもいい」

はたと蒼い髪の天使が足を止めた。もう一方も合わせて立ち止まる。紅い瞳が翠の瞳を見返した。時が、止まる。

「……もし、間違っていないければ」

そう言つと、若き大天使はその場に膝をつく。白い衣が一拍遅れて床へ舞い降りる。

そして彼は深々と頭を下げた。実は、先より、もっと緊張しなければならなかったのだとしたら。

「無礼をお許してください。もしも私の推測が間違いでなければ、貴方は 貴方様は、大天使長であらせられますか」

正式な方法とは多少違えど、その礼の形は最敬礼。黒髪の天使は床に平伏した天使を驚いたように見、やがて柔らかく微笑んだ。

「……いかにも。私は天使の長。主より《光》の名を授けられし者」

名乗りは誇り高く、慈しみの微笑は己を信じているからこそ。天使長は同じように膝をつき、若い天使と目を合わせた。

「立ちなさい。私もまだ若造に過ぎない、ひとりの天使だ。どうか先程のように気安く話して欲しい。……そうだ、名をまだ聞いていなかったな」

「……ラファエル、と」  
「ラファエル……良い名だ」

呟き、味わう。名前は彼らにとって大切な証だった。だから名の持ち主自身は当然のこと、聞いた側もその言の葉の意味に思いを馳せるもの。たとえ完全に主の願いを理解できなかったとしても、彼かのひとに愛されていることはわかるから、嬉しい。

「貴方の、御名前は」

「私の名はルシフェル。よろしく頼む、ラファエル」

更に頭を下げようとした天使を制し、大天使長は前方を指差した。そして笑いながら肩をすくめてみせる。

「詳しくは後だ。大天使がふたりで遅刻だなんて、笑えない」

彼らの目の前にある部屋。扉に書かれた流麗な金文字は、その部屋こそが彼らの目的地であることを示していた。

\*\*\*

これだけなのか？、とラファエルは思わずにはいられなかった。中に入ったふたたりを待ち受けていたのは、たった三名の天使だった。しかもそのうち、円卓を囲んでいるのは二名のみ。残るひとりには扉の傍に佇んでいる。見れば、その立ったままの若者の上衣の丈は短い。

さほど広くはない部屋に円卓と、質素な窓と。戸惑うラファエルを促しながら、先に中の天使へと声をかけたのはルシフェルだった。

「やあウリエル、ガブリエル」

「おはよう」

「おはようルシフェル。その天使は、ひよつとして」

彼らが大天使長の名を普通に呼んだことに驚きつつ、自分のことを言われているのだと気付いて、ラファエルは慌てて一礼する。恐らくはその場の大天使は皆、ラファエルよりも“先輩”なのだ。

「はじめまして。ラファエルと申します。新しく大天使として」

「ああ、君が」

へ、と声の方を見る。どうやら遮ったのは円卓に座る天使の一方。赤みがかった髪に、意志の強そうな黒耀石の目。彼は自分の隣をコンコンと指で叩く。

「席はここだ。ほら、座れ」

初めて来たのにもかかわらず、きちんとラファエルの椅子が用意されている。どうということなのか。

「もうっ、ウリエル！」

咎めるように言ったのはもうひとりの天使。暗い茶色の髪は腰に届くくらい長く、髪色と同じ茶色の瞳は優しい光を帯びている。

ルシフェルや、もちろんウリエルという天使も美しい。しかしガブリエルにはまた別の美しさがあった。決してのんびりしているというわけではないのだが、小さな所作にも他の二名にはないきめ細

やかな優美さがあるような。

「もう少し丁寧に言っておけないと、わからないでしょう」  
「そうは言ってもな。生まれてきた時に大体のことは知ったはずだ  
らう」

声で確信する。ガブリエルは、女性だ。

彼女はラファエルに優しく笑む。

「ごめんなさいね、ラファエル。改めて、歓迎するわ」  
「は、はあ……。でもどうしてお　いえ、私の席が」  
「そう気負うな。敬語なんて使う必要はない」

ウリエルに言われてますます困惑する。またしても説明を加えたのはガブリエルだった。

「貴方が来ることは聞いていたのよ。そこにいる使者が運んできた、  
主の御言葉にね」

扉の傍に黙って立っていた天使が恭しく頭を下げる。  
なるほど、あの天使が先にルシフェルの言っていた使者か。  
言われるままにウリエルの隣に座り、ラファエルがそんな風に思  
っている、ルシフェルの方は慣れた様子で一段高くなっている席  
に着いた。

「そうか、では既に報告してしまったのだな。悪いが、もう一度私  
……とラファエルに聞かせて欲しい」

はい、と使者の天使は手に持った紙を広げて読み始める。

「一つ。本日、新たな大天使が統制に携わる。名はラファエル。風を司り、治癒と調剤の才有り。二つ。大天使は各々五名の天使の祝福を担当せよ。新たな命の旅立ちに幸を添えよ。以上でございます」

「なるほど。わかった、さがって良い」

使者がもう一礼して部屋を出て行くと、暫しの間の後、何故かルシフェルはため息を吐いた。

「ど、どうしたんだ？」

違和感を抱きつつも言われた通りに敬語をやめれば、彼はその端正な顔に苦笑を浮かべて。

「まだ慣れないんだよ、大天使長としての“威厳”というものを保つことに」

ラファエルは驚きながらも、そんなものだろうかとも思う。見たところ、ルシフェルを含め、大天使達の年齢は若い。見た目と実際の年齢は必ずしも一致しないが、生まれてからの年月にそれほど違くないことは、同じ天使としてわかる。

我らが天界を統べる者。

誇りある大天使として誕生したことを、ラファエルは再び主に感謝する。それは仲間に出会い沸いた喜び故の思いであったし、紛れもない希望を実感したせいでもあった。

「……ということは、祝福の儀が終われば、あとは自由でいいんだな」

ウリエルの言葉に我にかえるラファエル。ぼんやりしていたのではないものの、自身に託された課題　彼は治療師らを束ねる立場にあつたから、それに関する報告が主だった　をこなし、当たり前のように他の大天使と歩調を合わせ、それでも当たり前前に行きないうちがあることに気付いたのだ。そういえば……

「良かった。これから、天界の出入りに関しての取り決めについて話し合わなければならぬからな」

「あの、ちよつといいかな」

紅と黒と茶の視線が一齐に注がれる。

「祝福、というのは俺もやるんだよな？」

「……」

「……何というか……やり方を知らないのだが」

すると場の空気が一気に緩む。ああ、とルシフェルは笑い、おもむろに腕を組んで椅子にもたれた。

「そう難しくはないよ。大丈夫さ、私達が教えるから」

“祝福”。そんな知識は確かにどの天使の頭にも入っていないかつた。伝えられなかったこと自体が意味する主の伝言は　好きにやれ、という解釈で合っているだろうか？　祝福は特別な権利。それゆえ答えは四通りだ、今のところは。

「……そういえば、ウリエルも最初はこんな感じだったな」

「ええ、思い出したわ。ラファエルよりずっと愛想が悪かったけれど」

「仕方ないだろ。誕生したばかりで、勝手がわからなかったのだから」

その意味を敢えて気にする者はない。理は世界の手の中。

だから慚然とするウリエルに、ラファエルも思わず笑う。知識の欠如を気にしない、そもそも欠如だとは思わないからだ。若き大天使が今思うのは、彼らの仲間に入れたことへの純粋な嬉しさ。

「ああっ！」

と、そんな和やかな空気の中、唐突に声を上げたのは他ならぬ……

「どうしたの、ルシフェル？」

「うん、いや、ちよつとなっ」

先ほどとは打って変わって、大天使長は別人のように慌ただしく白衣を探り始めた。重みさえ感じられたあの落ち着きはどこへやら。

「ウリエルに頼みがあつてな」

「俺に？」

「今日は忘れずに持つてきたはず……………あつた！」

やがて取り出されたのは、何とも奇妙な物体だった。溶けて再び固まった金属のように複雑な凹凸を示す、小さな銀色の塊。親指の爪ほどのそれを手のひらに乗せて差し出し、ルシフェルは言う。

「ウリエル、お前、手先が器用だろう？　これで首飾りを作つて欲しいんだ」

「首飾り？」

うなずいたルシフェルに、ラファエルはそつと尋ねてみた。

「それは？」

「これはな、……」

主から頂いた、大切なものなんだ

そう口にした時の彼の表情は、何とも形容し難いものだった。喜びに満ちた笑顔かと思えば自嘲のようでもあり、悲嘆とまではないかないけれども、微かに諦めに似た色があった。

ラファエルは、この表情を忘れることはきつとないだろうと思っ  
た。

ウリエルも惚けたようにルシフェルを見つめ、それから気を取り直して了承の意を示す。

「別に構わんが」

「ありがとう、ウリエル」

未だ疑問符の消えぬ三名を尻目、ルシフェルは席から立ち上がる。

「では行くか、祝福の儀に！」

「え……あ、ああ！」

ころりと変わった表情は、一点の曇りもない明るい笑顔。

ときばきと扉へ向かうウリエルらと一緒に立ち上がりながら、ラファエルは本人には聞こえぬように、隣のガブリエルへとそつと耳打ち。

「（……彼、いつもあんな感じなのか？）」

正直、想像していた“天使長”と本物の天使長は、どこか決定的に異なるようにラファエルには思われた。公の顔が先行するのは仕方ないとしても、幼ささえも感じさせる等身大の彼の姿に、皆の前に立つことの意味を考えざるを得ない。もちろん、考えすぎの可能性もあるが。

何を思ってたか、ガブリエルは変わらず優しい笑みを返す。

「（驚いたでしょう。偉大なる大天使様は、意外と抜けているところがあるから、そこにも注意してね）」

「（覚えておくよ）」

不安を取り除いてくれるような笑顔。ラファエルは自分の気にしすぎを軽く笑い、彼らもまた部屋を後にしたのだった。

## The Apotheosis (後書き)

追い求め、示さなければならぬ。その【理想像】を夢見るのは自分ではなく、きつと愛するあのひとのため。

「本日新たに誕生する天使は八名。大天使は」

使者の言葉を聞きながら、私は円卓を見下ろした。少し高くなっているこの座席からは、全ての面々を見渡せる。

ガブリエル。焦茶の髪と瞳をもつ優美な天使。大天使の中で唯一の女性ながら、私の次に誕生し、統括体制の構築に尽力してくれた。ウリエル。仕事熱心な真面目な天使だ。今も気の強そうな黒耀の瞳で書類を睨んでいる。下級天使達からは密かに恐がられているようだ……。もう少し、口調が穏やかになれば良いのだろう。

そしてラファエル。彼は逆に下級天使からの人気が高いそうだ。蒼く長い髪も、穏やかな翠の目も、風を司る癒しの天使の名に相応しい。一番新参だが、すっかり慣れたようだ。私と話すにも緊張していた頃が懐かしい。もう遠い昔の話か。

「そして大天使長様」

唐突に呼ばれ、私は慌てて使者へと目を移す。

「どうした」

「はい。今日は記念すべき日になると　大天使長様、弟君が誕生したそうでございます」

私に……弟？

がたつ、と椅子を鳴らしたのはガブリエル。彼女は私よりも先に声をあげる。

「まあ！ ルシフェルに弟だなんて。とても美しい子に違いないわ！」

この知らせにはさすがのウリエルも顔を上げた。その隣、ラファエルも穏やかに微笑む。

「ルシフェルに弟か。喜ばしいことじゃないか」

「良かったな、ルシフェル」

「あ、ああ……」

急過ぎて、いまいち状況が飲み込めない。それは確かに、今まで兄弟や姉妹の天使の誕生を見届けたことはあつたが。いざ自分に弟ができると言われても、どう思えば良いのやら。

私の弟　つまり、私と同じ炎から生まれた天使。以前ウリエルに作ってもらった首飾りを無意識のうちに握っていた。その天使の炎は、純粹だったのだろうか。

「つきましては、大天使長御自ら祝福の儀を執り行って頂きたく……」

使者が言う。私がうなずく前に、またしてもガブリエルが口を開いた。自分の弟ではないのに彼女はやけに嬉しそうで、ありがたく思いながらも私は喜び方が余計にわからなくなってしまう。

「早く行きなさい、ルシフェル。あとは私達がやるから」

「しかし、」

「いいから。行って来い、ルシフェル」

全員に追われるような形で部屋を出た私。次にやって来たのは《天意の間》。

新しい天使はこの部屋にいるはず。祝福の儀を行う者はひとりずつ、自分が担当する天使とここで対面するのだ。ひとりの大天使が入れば、ひとりの新たな天使が待っている。それと……この部屋の主人もか。

今のところ例外はないし、決まった形をわざわざ崩したいという気持ちはこれっぽっちもなかった。不思議な仕組みだと思う。だが、それは我々が考えずとも良いこと。全ては主の御心のままに。

いつものように深呼吸し、その扉を開く。いつも出合いは緊張するから。

まるで別世界に来たかのような輝きに、思わず目を細めた。《天意の間》は床も壁も全面が水晶でできた部屋なのだ。

見えないほど高い天井を指してそびえる鋭い水晶柱は、攻撃的である以前に美しい。純粹でなければこんなにも見事な輝きは放てまい。そして、中央に立つ一際大きなそれに“突き刺さった”白い人影。私はやや離れた位置からその青年の名を呼んだ。

「ザドキエル」

白い衣、真っ白な髪、白過ぎる肌。消え入りそうな姿の中で、唯一こちらを見た瞳だけが痛いほどに赤い。衣に白以外の色は一滴たりとも付いていない。

表情を動かすのに音が出るのだとしたら、その微笑への変化は“無音”だった。仰向けのまま、眠たげに。

「……やあ《光の子》。思ったより早かったじゃないか」

ゆっくりゆっくり、言葉を噛みしめるように話す天使。彼こそが

この天界でたつたひとり、主の意志を受け、伝えることのできる《器》。この《天意の間》の主人。

「ザドキエル、私に弟が？」

「そうさ。君と同じ火種から創られた。主が、そう仰ったんだよ」

腹を鋭利な水晶に貫かれたまま、手足をだらりと投げ出した状態でザドキエルは笑う。いつ来ても近寄ることが躊躇われるのは、その見た目のせいだろうか。それとも、彼が主の御言葉を口にするからだろうか。

おいで、と言われてようやく足を踏み出す。近づくにつれて、床に、いつものように揺りかごが置かれていることに気付いた。あの中に……私の弟がいるはずだ。

「名はミカエル。ルシフェルの弟。時を渡る才有り。……まあ、このくらいだね。あとは任せる」

そう言っただドキエルは目を閉じてしまった。彼は毎回、祝福しているところは見えない。必要な情報だけを伝えて、あとはまるで飾り物であるかのように何も干渉してこないのだ。

ミカエル、と伝えられた名前をひとり呟いて、私は揺りかごの中を覗き込んだ。

その瞬間。

何か、言い知れぬ衝撃が体を駆け抜けた。他の天使を見た時は感じたことのない、奇妙な感覚。

私は知らず小さく喘ぎ、息を整え、再びその眠る天使を見た。

小さな、天使だった。そして……今までに見た何ものよりも美しい天使だった。

白く滑らかな頬。柔らかそうな、緩く波打った淡い金色の髪。瞳を縁取った長いまつ毛も、形の良い桃色の唇も。何もかもがいとおいしくて仕方なくなった。

そう、いとおいしいのだ、初めて出会ったというのに。美しさを鑑賞の対象として満足できるような贅美の気持ちではない。初めてだ。これほどまでに何かを欲するのは。

この天使は、この天使だけは、何があっても泣かすまい。《光》も、自分のためだけに望むことは許されるのだろうか？ もしも欲望を抱くことが許されないのだとしたら、それは苦しいと、初めて思った。

……ああ、この目蓋が開いた時、瞳は何色をしているのだろうか、どんな声で話すのだろうか。私のことを 兄として認めてくれるだろうか。

先程の奇妙な感じ……それは私が他ならぬこの天使の“兄だから”なのか？

わからない。けれど、願うのは紛れもなくこの子の幸福。ならば私は、最高の祝福を与えよう。

私は揺りかごの前に跪き、小声で主へと祈りを捧げた。気を集中し、しまっていた翼を解放する。背中にわずかに熱を感じ、同時に身体中に力が巡るのがわかる。黄金の光を帯びた白く柔らかな羽根が数枚、水晶の床へとゆっくり着地した。

この者の行く先を、私の光によって照らそう。

翼で包むように揺りかごへかぶさり、金色の髪をそっと掻き上げた。

大天使ルシフェルの名に於いて、小さき者に幸を与えよう。

そして、そっと額に口付けを落とす。彼は 弟は身動きひとつ

せず、静かに眠ったまま。

普段ならばここで終わるところ。だが私は次に……その唇に自分の唇を合わせた。堪えられなかったのだ、しかし、ほんの一瞬だけ。今度は少し動いたような気がして。それを目の端で確認しながら、私は収まらない動悸にひどく狼狽していた。

「……っ」

どうしたというのか。この感覚は、知らない。胸が苦しい。“罰”でないことに安堵しながら、“未知”が恐ろしい。私の心を乱すのは一体。

いや、そればかりではない。

ほんの一瞬、にもかかわらず触れた唇から流れ込んできた“力”。まさか……これがこの子の力？ すぐには信じられないほど、その力の波は大きな流れだった。

普通、誕生したばかりの天使は自分の力を制御することができない。波動のような揺らぎが放出されっ放しの状態にいる。大天使の我々にはある程度、発散される力は目視可能だ。だから祝福の儀は本当は力量の見極めも兼ねている。そして今回。ミカエルからはあまり見えない……そう思っていたのに。

「……ザドキエル」

思わず呼んだ。真っ白な天使はゆっくりと顔を動かし、相変わらず眠たそうな眼でこちらを見る。

「珍しいねえ、君から話しかけてくるなんて。しかも祝福の最中に」  
「教えてくれ、ザドキエル。この子は……ミカエルは一体何者だ」  
「何者って、嫌だなあ。君の弟だって言ってるじゃないか」

違う、そうではない。首を振るも、ザドキエルはクスクスと笑うばかり。

「いくら君の頼みでもねえ、これ以上の情報はあげられないよ。だって僕は《器》だから。受けることはできても、注ぎ終えたらもう終わりなんだ」

「何かが違うんだ、この子は。違和感の正体……まだ私は知らなくとも良いということなのか？ それが主の御心だと？」

「僕が思うに、君達が兄弟だからじゃないかなあ。つまり、“君の” 弟だからだよねえ、きつと」

またクスクスと肩を揺らされる。

私の弟だから。妙だと思しながらも、傍に置いておきたいと望んでしまうこの感情も、そこから生じているというのか。何故だ。小さなこの子を……“自分のものになりたい”と願ってしまうのは。

だが、と再び冷静に考えを巡らせる。私が傍へ置きたいと願えば、宮殿の中へ入れることとなる。必然的に何らかの役職は担わねばなるまい。

宮殿の中にいる天使は大天使ばかりではないが、“統治”に関連する特別な任を負う者がほとんど。その他の天使にも役割はあるものの、治められる側である上での役割だ。線引きがなければ……私の存在理由が失われよう。天使長が在ること、それが即ち、制度の正当化。

見下ろした先で、可愛い天使は安らかに寝息をたてている。小さな小さな体に、私達と同じ責を負わせるのは酷だ。それに私の弟とはいえ、特例を認めることは避けたい。誕生したばかりで宮殿に入ることはあり得ない。私でさえも、本当にわずかな期間だったが、長でない時期はあったのだ。

名残惜しいが、暫くは離れて過ごすのが良いだろう。他の天使達と同様、少しの間は宮殿の外で自由に学び遊ばせよう。私が兄だと

知らせるのも、後で良い。……それが良いことなのかは確信は持てないが。

愛すべき弟、ミカエル。

もう一度、彼の頭を優しく撫でた。暫しの別れだ。ザドキエルに任せておけば、そのままこの子も宮殿外の教育機関へと送られるだろう。そこで下級天使達に世話をしてもらうか。といっても、怪我のないように見てもらっただけだが。将来を考えるのはそれからでも遅くはない。宮殿に入る資格があるかどうかはまだわからないのだから……などという思いは、彼のあの力と誕生の起源を知れば、心にもないけれども。

「……ああ、そうだ」

私が立ち上がると、ザドキエルが、ふと思いついたように言った。

「ね、君、彼の名前の意味を教えてください。何か手がかりになるかも」

「名前の意味？」

主より頂いた大切な名前。自らの責を表し、主の期待がこめられている言の葉。

弟のものならば、先に知っておくのも悪くない。

顔をあげると、白の天使は笑みの形の口を開いた。

「そう、彼の役割さ。よく聞いてね《暁の輝ける子》。彼の名前の意味は……」

## Bliss (後書き)

彼のひと以外に初めて出会った【無上の幸福】。愛する理由に気付いた方が幸せなのか、否か。

### 第3話：予兆

万魔殿　パンデモニウム　という都はいつ来ても素敵だ。あたしの好きな場所のひとつ。

巨大な宮殿を中心に石畳の街道が張り巡らされ、鬱蒼と茂る森有り、古風なアンティークショップ有り、壮大なコロシウム有り。どこか中世ヨーロッパを思わせるこの街が悪魔の住む地獄の一部だなんて、きつと誰にもわからないだろう。

今日も万魔殿のメインストリートは黒衣の人々(?)や、人型の光　魂達で賑わっている。買い物を楽しむ者、道端で談笑する者等々。時折、黒塗りの馬車が通りを駆け抜けて行く。

あたしがここへ来たのはお呼びだしを食らったから………といつても、何も悪いことはしていない。《紳士同盟》の会長であり、地獄の一流ブランド《トロイメライ》の社長でもあるお茶目なおじさま、メフィストフェレスさんから、同盟主宰のティーパーティーに招待されてやって来たのだ。

実はこれまでも何度かパーティーには参加したことがある。あまり人数は多くはない会だが、色々な堕天使さんや悪魔の皆さんと話すのが楽しくて、時間がある時にはこうして万魔殿へ二人で遊びに来る。

二人。

厳密に言えば最初に招待されていたのは、あたしじゃなくて堕天使長なんだけどね。

「………妙だな」

隣で見上げたルシフェルは、地獄に出かける時用の真っ黒な堕天

使の衣装。目立ちたくないからか、今日は銀刺繍の上着は羽織っていない。

「妙だ」

彼は確かめるようにもう一度繰り返した。妙だ、って？

「どうしたの？」

「民のざわめきが違う」

わずかに柳眉をひそめて言う。

あたしにも何かわかるだろうかと、少し耳を澄まして会話を拾ってみる。

「逃げ出して」

「幹部の方々が だから、」

「の通りはもう」

……さっぱりわからない。

そもそもあたしはこの住人ではないのだ。いくら頻繁に来ているとはいえ、そんな微妙な違和感を感じ取れようはずもない。

「宮殿に行けば何かわかるかもしれない」

ルシフェルは道端に停まる馬車の方へ。お茶会はいつも宮殿の裏手にある林の中で開かれているから、ここからだ結構な距離がある。あたしはルシフェルの“レポート”で運ばれてきたわけだけど、彼が直接林へと転移しないのには理由があつて。

曰く、「突然現れては不躰だろう」とのこと。さすがは《紳士同盟》出身者。一応、礼儀をわきまえてのことらしい。ま、あたしは

毎回の馬車での道程も楽しくて好きなんだけども。

「今日はちょっと遠いね」

今回はなんだか普段よりも宮殿から遠い、気がする。宮殿の姿が少し小さく見えるのは気のせい？

「遠い、だろうか……。目標地点がブレたのかもしれないな」

そう言って、ルシフェルは薄く苦笑した。

\*\*\*

仮面の地獄役人・レムレースさんが動かす馬車に揺られること暫し。あたし達は、見上げるほどの立派な宮殿の前へと到着していた。……でも、いつもと違う。これはあたしにもわかる。

「門が……」

「開いている……？」

固く閉ざされているはずの入り口の門が、開きっぱなし。おまけに門番のレムレースさん達もいない。

「構わない。出してくれ」

御者台に座るレムレースさんも困っていたようだったが、ルシフ

エルの言葉に再びゆっくりと馬車が動き始める、  
やがて、何やら騒ぐ声が。

窓からちよつと覗くと、宮殿の庭にダークスーツを着た大勢の男  
達……仮面のレムレースさん達がいる。なんだか様子が変だ。

「……いい」

ルシフェルは馬車を停まらせ、ひらりと席から飛び降りた。次いで、あたしも手伝ってもらって地へ降りる。

レムレースさん達が駆け回る中に、一際目立つ白く長い髪が見えた。

「ベル！」

ルシフェルが呼ぶとその悪魔さんは、思い切り不機嫌そうにこちらを振り返る。

「殿下！」

「お帰りなさいませ！」

レムレースさんが頭を下げる中、白髪の彼だけは、そのグレーの瞳で墮天使長を睨み付ける。

「間が良いのか悪いのか……この忙しい時に来おって。あとその名で呼ぶな殺すぞ」

「……ごめん。一体どうしたんだ？ ベルフェゴール」

ベルフェゴールさん。それが彼の名前だ。いつも無然としているのがもつたいない、端正な顔立ちの悪魔さん。まるで女性みたい……と言ったら本気で殺されかねないのだが。彼はこの都の幹部のひ

とりでもあり、いつも寒々しくくらいに苛烈な空気を纏っている。

「やはり何かあったようだな。門が開いたままになっていたから」「何だと?」

何気なく言ったルシフェル。続けて、ベルフェゴールさんの怒号が響く。

「衛兵! 何をしている、早く行って門を閉める!!」

慌てて走って行くレムレースさん数人を見やり、ベルフェゴールさんは小さく舌打ちをした。かなり苛立っているみたい。

「ルシフェル、貴様、何も知らずにここへ戻ってきたのか。人間まで連れて」

「別の用事があったんだ。だが何か妙な気はした。街の様子がおかしい。皆、浮き足立っていたというか……どうかしたのか」

「どうもこうもない」

顔をしかめて悪魔が示した先。そこには、これまた大きな木造の小屋のようなものがあった。厩舎……みただけど、壁が壊れているしどこかぼろぼろだ。おまけに……中が空っぽ。

「……逃げた、のか?」

呆然としたようにルシフェルが呟く。

「らしいな。レムレース達によると、馬共は急に暴れ出したらしい。そしてそのまま厩舎の壁を突き破って脱走した」

「まさか! そんなこと、」

「ああ、そうさ！ 滅多にあることではない。だから忙しいんだ」

地獄の馬……って、馬車をひいているような馬達だろうか？ 脱走ってかなりまずい、気がする。しかも厩の規模から考えると一頭や二頭じゃない。それが猛スピードで暴走するなんて絶対に危険だ。当然のことながら、ルシフェルの顔にも焦燥感が伺える。それでもパニックを起こさないのは流石というか。比べてあたしが取り乱さないのは、単に実感が無いからだが。

「被害は。皆は無事なのか」

「幸い、街とは反対方向へ向かったようだ。怪我人の報告もまだ入っていない。今アスモデウスが止めに行っている」

「ひとりでか？！ 早く応援を」

「わかっている！ だがあの馬に普通の馬の足で追い付けると思っているのか？！」

ルシフェルが焦るほどにベルフェゴールさんは苛立ちを増してくようだ。自分でも熱くなり過ぎたと思ったのか、極寒の悪魔さんはひとつ深呼吸した。

「……それに。いくら奴らが暴れたとはいえ、この厩舎には鍵がかかっていた。弱いものだが結界も張ってあった。誰かが手を出さねば、脱走などそう簡単にできるものではない」

二人の後について歩き近くで見た馬小屋は、遠くから見るとはるかに悲惨な状態だった。ただの木片と化した壁、ひしゃげた柵、そこらじゅうに散らばる木端……相当な事態だったらしい。

と、あたしはふと、小屋の片隅に“あるもの”が居るのを見つけた。

「下手に魔力を使って街に被害が出るのは避けたい。奴らを追うのはアスモデウスに任せ、俺はこの調査を」  
「ルシフェル！ ベルフェゴールさん！」

あたしが遮ると、ベルフェゴールさんは苦虫を大量に噛み潰した顔で振り向いた。ごっ、ごめんさい。

「あの、この子……」  
「なんと」

惚けたように呟いたのはルシフェル。ベルフェゴールさんはまたしてもため息。

「……そう、こいつのことも言おうと思っていた。貴様が丁度こへ来たから」

あたしが見つけたもの。それは 馬、だった。大破した小屋の片隅に、柵がないにもかかわらず逃げようともしない一頭の黒馬。

美しい馬だった。全身は艶々とした漆黒の毛並みに包まれており、たてがみと尾は蒼白くてまるで焰が燃えているよう。更に蹄にも蒼い光を纏っていて。何より美しいのはその目。本物の宝石みたいな、サファイアブルーをした目がじつとこちらを見つめていた。

人間界の馬とは全然違うし、馬車をひいていたようなただの黒馬とも違う。ビロードにも似た毛に触れてみたくて、あたしは思わず手を伸ばし

「触るな！」  
「！」

ルシフェルの鋭い声に、びくつとその手を引っ込めた。

つかつかと寄ってきた彼はあたしの手首を掴んで下ろさせる。怒っているのかとびくびくしてしまっただけ、その丁寧な力加減で、心配してくれているのだとよくわかった。

「触ってはいけない。火傷をする」

「火傷？」

「この軍馬が気をゆるしていない者がそのたてがみに触れると、皮膚が焼け爛ただれてしまうんだ。これは煉獄の炎だから」

「ルシフェル！」

咎めるようなベルフェゴールさんの声も気にならなかった。

軍馬。

あたしは再び漆黒の馬を見る。何事にも動じない、凜とした姿。これは……戦をするための馬なのか。

「お前は、残っていたんだな……」

馬に歩み寄ったルシフェルが何か、呪文のような聞き慣れない言葉葉を小声で言う。たった一言、短い息吹。

「わっ?!」

そしてサファイアブルーの瞳でルシフェルを捉えた途端、黒馬は大きないななきと共に後ろ足で立ち上がった。その迫力に圧倒されてしまう。

「行くのか、ルシフェル」

腕組みしたまま語尾を下げてベルフェゴールさん。ルシフェルは無言で鞍と手綱を厩舎から引っ張り出して用意し、手際よく取り付

けた。その間も馬は、蒼く燃える蹄で地面を蹴っている。

「……軍馬なら、軍馬に追い付けるだろう」

ようやく口を開いたルシフェル。あたしに注意したにもかかわらず、軽やかに軍馬に飛び乗った。たてがみにも触れている。ということとは、つまりこの馬は。

「真子を頼むぞ、ベルフェゴール」

それだけ言うと彼は馬の腹を蹴った。鋭い鳴き声をひとつあげ、ルシフェルを乗せた黒馬はあっという間に門の方へと駆けて行ってしまった。

「……頼む、と言われてもな」

彼らが去った方向をぼんやりと見てみると、珍しくベルフェゴールさんが困惑したように見下ろしているのに気付く。ぽかんと顔をあげたら一瞬で戸惑いは威嚇の色に変わってしまったが。

「あの、ベルさん」

「貴様は魂として地獄へ来たいのか」

「す、すいません」

怖っ。視線だけで人を殺せちゃいそうだ。

「べ、ベルフェゴールさん」

「……なんだ」

「あの軍馬、ルシフェルの馬なんですか」

「そうだ」



にも頼まれたしな」

……ベルさんって、意外と面倒見がいいよね。素直じゃない感じもするけど。

そんなことを考えているうちにベルフェゴールさんに呼ばれたレムリースさんが来て、あたしは宮殿の中でルシフェルの帰りを待つことになった。

## 第4話：契約と悪魔と

何故だ！

どうしてこの時期に逃げる？ 脱走の手助けをしたのは誰だ？

一体……ここで何が起ころうとしている？

「お前も、何か感じるか……」

自分の下で疾駆する相棒に問うてみる。無論、答えは返ってこないが。

私には軍馬達が向かった方向はわからない。だがこいつは知っている、わかっている。足取りに迷いが無いから。

真子がこいつに触れようとした時は焦った。煉獄の炎は生きた人間が触れていいものでは決してない。それにいくら慣らしたとはいえ、私にもこの馬の気性の荒さを完全に御することはできない。“私”ならばあるいは脅しつけることは容易いが……今の状態で“私”を呼ぶのはあまりにも、危険だ。それにおとなしくてはこれらの馬は役割を果たせまい。

街の裏へ回り、森を抜け、川を飛び越え。谷のような場所を見下ろせる位置に来て、ようやく土煙を上げる黒い集団を見つけた。谷底を駆ける脱走馬。その前方にひとりの男がいる。

「アスモデウス！」

馬上から叫べば、こちらを見上げた顔が輝いた。彼は馬の群れと一定の距離を保ちながら、猛スピードで後ろ向きに飛んでいるのだ。

「あ、ルシフェルうゝ！」

アスモデウス。万魔殿の幹部の悪魔。中性的な顔立ちではあるが  
れっきとした男であり、極度の女誑おんなたらしであり、  
は女のみおんなのみに留まらず

「会いたかったよおおっ」

……この性格さえなければ申し分ないのだが。投げキッスは要ら  
ん。

しかも今それどころではないの是一目瞭然。

「何をしている！ 早く止める！」

「え〜！ こうしてずっと走らせてたら、きっとルシフェルが来て  
くれるんじゃないかと思ってー」

……阿呆が。ここまでくると呆れるしかない。晴れ晴れとした笑  
顔を見ていると、怒る気力も失せるというもの。

「大丈夫、ちゃんとひとがいない方に誘導したから！」

確かに奴は器用に後ろへ飛びながら時折その手から電撃を繰り出  
し、道から外れそうになる馬の進路を調整していた。こんなことが  
できる力があるなら、別のことへ利用すれば良いものを。

にしても、彼らはどこに向かって走っているのか と、前方を  
見た私は思わず叫んでいた。

「止まれアスモデウス！！」

先には、何も無い。本当に大地が途切れているのだ。……既に万  
魔殿の端に来ていたか！

落下の心配はないが、むしろそれが仇となる可能性に気付き心臓が跳ねた。万魔殿の端には結界が張つてある。そこへ突撃することは、いわば硬い壁へ身を打ち付けるようなもの。

軍馬の最高速度と同等以上の勢いで衝突した場合、いくら頑丈な我々の肉体とて無事では済むまい。彼らを止めるべく力を発動させようと構えた私より先に、アスモデウスは空中で急停止。そしてそのまま突っ込んでくる黒い群れに向かって両手を突き出す。

「電撃掃射 《ブリッツクリーグ・ストレイフ》！！」

凄まじい轟音と地響き。彼が得意とする技能 雷が馬達の足元を直撃する。さすがに私の馬も急に足を止めていなないたため、振り落とされないように手綱を引き締め脚に力を込めた。

そう、アスモデウスには最初からこうして暴走を止めることは可能だったのだ。敢えてそれをしなかったのは本当に私の到着を待っていただけなのか、別の理由でもあるのか……それが理解できるなら私はもう少し安堵感を味わうことができただろうが。

やがて土煙が晴れると、谷底にたくさんの馬が横たわっているのが見えてくる。その前に立ち、気の抜けるような笑みを浮かべた悪魔は軽く手を払った。

「一丁あがり」

慎重に私も谷底へと降り立つ。……どうやら馬達は気絶しているだけのようだ。彼らの目と耳は大丈夫なのかは気になるが、まあ並みの馬ではないのだし、と思い直すことにする。

それよりも今は悪魔のことだ。どうせろくな回答も得られないだろうが、何もしないよりはましだからとりあえず尋ねるだけ尋ねてみようとした。

「アスモデ」  
「きゃーんルシフェルうう！」

……ほら見る。

「抱きつく変態」  
「いいじゃないか、僕の大大だーい好きな《ルーク》っ」

だからこいつは苦手なんだ。

そうやって呼ばれると、何だか自分の中に土足で踏み込まれているようで気分が悪くなる。地上でも奇妙な呼び名をつけられてはいたが、人間ならば“支配”されることは起こり得ないが故に、名に手を出されたとして平気だった。

支配。《名前》はすなわち存在を定義付ける“鎖”。この私が掌握されるはずがない、そう思う一方で、無遠慮に触れられるのを厭わしく感じる己がいることもまた事実。私の大事な証。せめてここにだけは、ずっと“あの方”の期待を負っておきたい。

悪魔の手が腰の付近を滑り、思わず息を詰める。私が顔をしかめていることに早く気付いてくれないだろうか。

「離してくれ。仕事がある」

「仕事？」

「この馬達を私の能力で、」

「いらぬいらぬ！ レムレースの到着を待とう？ それまでは保つくらい強力なのをお見舞いしておいたんだから」

「しかし」

尚も私が言いかけると、奴はすっと離れて至近距離で私を見つめた。

「 いらないよ。君、今は力を使っちゃいけないんだろう? 」

くるりと虹色の輝きが回る、その金眼に一瞬見惚れる。……こいつは妙なところで勘が鋭い。ベルには悟られていないようだったから安心しきっていたのだが。

「 ……お前は聡いな 」

「 ふふ。愛する君のことなら、なんだってお見通しなんだよ 」

奴は珍しく自ら手を離すと私に背を向けた。嫌な予感がする。

「 ……この間、万魔殿に地震があつてね 」

ゆっくりと語る声を、私はただ聴くしかない。

「 本当に小さな揺れだったんだけど、ほら、あの地震を操る墮天使……アガレスといったかい? 彼に尋ねても、原因がわからないと言ったそうだよ 」

「 …… 」  
「 おかしいよね、そんなこと 」

アスモデウスは大地の端へ近づき、そこでようやく足を止めた。だから何だ 訊けるはずもない。彼は恐らく、気付いている。

「 ねえルシフェル 」

「 …… 」  
「 君、かなり無理をしているんじゃないかい? 」

息を呑む。覚悟していたことではあれど、どこかで否定したい気持ちが残っていたに違いなかった。

咎める気配はない代わりに、こちらを見つめる表情にいつものふざけた笑みもない。淡々と問われて怖気を感じてしまったのは目の前の悪魔に恐怖したわけではなく、自分の責任を思い出したせい。

無理、だなんて絶対に認めないけれど。それでも少しだけ　ほんの、少しだけ　私は迷いを感じていて、過去は蘇りかけていて、恐らくそれがこの都の異常に繋がっていることは事実だった。だからこそ私は思うように力を行使することもできない。人間の少女にさえ訝られるくらいに。

これ以上万魔殿に何か異常があれば、私は玉座から降ろされてしまつに違いない。仲間を犠牲にしてまでせつかく得た席　責なのに。“あの方”のために、ようやく信じられた私の役割を果たせる場なのに。

「まだまだ……まだ私にはできるから、だから、どうか」

奪わないでくれ、この都を、私の存在意義を。

「まつ、僕には大好きな君を裏切るつもりなんて毛頭ないけど……」

言つて奴は穏やかな表情で肩をすくめた。だが何よりも私の目を奪つたのは。

「実力社会だからね。力が衰えた者はいつやられるとも限らないよ」

風、が。

「ねえルシフェル。僕が何も考えずに、ただ追いかけてこをしてたと思う？」

「な、ぜだ……」

吹くはずのない、風が。

「何故そこに“在る”　　?!」

大地の端に立つアスモデウスの金色の長い髪。それが下から吹き上げる風になびいている。

目の前の現実を受け入れることができない。だってこれは手遅れの証明じゃないか。

「あり得ない……」

自ずと体が震え、ぐらりと視界が揺れる。血の気が引くとはこういうことなのか。

「あり得ない！　私は完璧だった！」

叫んだ私を、アスモデウスは静かに見つめる。それどころか手を伸ばしたのだ、結界で弾かれるはずの“端”の向こうに。静かに伸ばされた腕は何の抵抗を受けることもなく、滑らかな動きで世界の“外”の空間を掴んだ。

「万魔殿の外には何も無い……“無”が広がっているはずだよね、ルシフェル」

「そこには何も存在しない。世界はこの端で終わっているはず。それなのに」

「今は、“闇”が広がっている……」

無。何もない場所。ただ万魔殿だけがそこに存在する。ただこの都で世界が完結する。“私がそのようにつくったはずだった”。

「結界を保っていたのも、君だったね」

「……………」

「でも今は。僕ぐらいの力を持つ者なら結界を破ることができる。これが何を意味するか、賢い君ならとづくにわかっているよね？」

全てこの都市を保っていたのは私だ。私の精神、そして私の存在自体がこの都 否、世界の要だった。

役割を果たせない者は、与えられた責を負いきれない弱者は、ただ捨てられる。

遠い過去の恐怖を思い出した瞬間に無意識に口をついて出たのは拒絶の言葉。「いやだ」、溢れ出す感情を呟けども声は出ない。もう見捨てられるのは嫌なんだ！ “あの方” に相応しい完全なる最高傑作にならねば、特別の座を保たなければ、私の愛は届かない！ 確かに“あの方”は私を不完全にした、それは正しいことだと仰った。愚かな私を今でも見守ってください。しかしもしもこの先“完全”なものが創られたなら？ 私に、一体誰が愛情を注いでくれる？！

私は唯一でありたい。最高でありたいのだ。

「忘れちゃいけないよ、ルシフェル」

金糸が、また揺れた。闇から吹き付ける風に。もう見たくないというのに否でも脳裏に焼きつくその光景。

忘れるものか。それどころか、そもそも……私にとっての過去の記憶とは、墮天前後の記憶ばかりなのだ。それ以外が曖昧な理由は、対価として、“悪魔”に差し出したから。

だが。最近、失ったはずの思い出が蘇りかけているのだ。時に夢を通じ、またふとした単語に反応して、さらにある時は彼女の向こうに。しかも少しずつその周期が短くなっているような気さえする。

ちらつく金色の影の正体、私はもうすぐ思い出してしまつたろう。思い出せば、対価は対価として認められない。そうなれば“悪魔”との契約も無効になる。そして私は……消える、はず。

つまりこの状況は……彼女のこと、過去の自分のこと、世界のこと、内側に眠る“悪魔”のこと　いくら何でも多過ぎるから、か？　だから契約を途中で無効にすると？

馬鹿に、するな。

契約破棄　あるいは“悪魔”にとつての目的達成の予兆がこの状況であるなら、嘗めた真似をするものだと思う。この私に無理だと？　こんなに簡単に結界が破られるはずはない。私が展開したのだ、ならば何としても私が保つてみせる。

「忘れちゃいけない。君が堕ちた理由を。この都市が存在する理由を。君は何のために栄光を捨てたの？　何のために仲間を裏切つたの？」

「私は……っ」

「迷いが揺らぎをもたらすのなら、君が諸々の感覚を捨ててしまうのも一つの手だろう。ただの人形になつても僕は君を愛するさ。だけれどももし彼女が原因なら……解決する方法は実に簡単だ」

彼女が、原因なら。

そうだ、契約を一方的に破算にするなど許さぬ。抗議は、実力で私の力を見せつけければあの“悪魔”にだって勝てるかもしれない、最高傑作の座を守り続けることができるかもしれない。決裂の証を叩き付けるのは向こうではなく、私だ。

「わかるよね」

「ああ……！」

決断を迫る顔には、笑み。こいつはつくづく悪魔なのだ、半ば

思考を放棄しかけた頭の隅で思う。いくら私が拒否しないとしてもこれほど残酷な選択を容易く突き付けてくるとは。

「そう……そうだな」

けれど何故だか私も笑えてしまった。そうか……本当に残酷なのは、私じゃないか。こんな思考をしていること自体、天使ではあり得ない。

アスモデウスの言う通り、実に簡単な話だ。命の数、私の過去、その重さ。彼女と世界。二つは天秤にかけるまでもない。もしこの世界が崩れる可能性があるのなら、何を迷う必要がある。答えはもう決まっている。

「期待しているよ」

悪魔の言葉にうなずいた。転移のために手を掲げ、向かうのは少女が待つ宮殿。何もかもきつと、原因を“消してしまえば”済む話なのだ。

## 第5話：決別

【Side-Girl】

応接室のような部屋で一人で暫く待っていると、複数の足音が近づいてきた。静かだったからすぐにわかる。

「ここで良い。控えている」

「はっ！」

低い声、レムレースさんとの応酬。よかった、誰か知らない人だったらどうしようかと少しだけ緊張していたんだ。そして開けられたドア。

「ルシフェル！」

ひょっこり覗いた端正な顔がふと緩む。

「ただいま」

あたしが駆け寄ると、ルシフェルは静かに笑ってそう言った。見たところ、どこも怪我はないみたいだ。

「お帰り。良かった、無事で」

「当然だ。私は墮天使長だぞ」

変わらない台詞に思わず笑う。得意気に軽く胸まで張って、なんだか子供っぽいところも微笑ましい。颯爽と軍馬に飛び乗って駆け

ていった人物と同一であるとはとても思えない。

「逃げた馬って、大丈夫？」

「ああ。今レムレーズ達が現場へ向かっている。幸い、アスモデウスが足止めしてくれていてな。これといった被害はなかった」

アスモデウスさん……ああ、あのルシフェルのことが大好きな、金髪金眼の悪魔さん。ちゃんと仕事してるんだ、と失礼ながら感心してしまった。あの妖しい美青年についてはデートに全身全霊を懸けていた印象が強烈すぎる。あと浮気性なイメージと。彼も幹部の一人だそうだから、やっぱりやる時はやるんだろう。

大したことがなかったと聞いて安心したあたしだったが、ルシフェルはちよつと困ったように頬を掻く。

「だが少し用事ができてしまって」

「用事？」

「そう。私も働かなければ」

ということだから、と続けて。

「真子は先に戻っていてくれ。いつ片付くかわからない」

え、先に？ 初めてじゃないかな、こんなこと。まあ、でも別に。

「いいよ」

あたしに言わないだけで、本当は大変な事態だったんだろうか。

ルシフェルまで居残りして事後処理にあたらなといけないうち……いやいや、最高責任者なんだからこれが普通か。どうにも放蕩

魔王様に慣れてしまっているものだから、つい。

「夕飯までには戻る」

「うん、待ってる」

すぐにワープさせるのかと思って待っていたら、何故か彼はちょっとした間、無言であたしを見つめ。どうしたのかなと突っ立っていると、不意にあたしの方へと両腕を伸ばす。

怖くなかったと言えば嘘になる。またこの間の出来事のように奇妙なことを言い出して、あたしを力尽くでどうにかしようとするのかと思ってしまったから。

「……………?!」

でも、その予想は外れた。

気が付けば、ルシフェルの腕の中。締め付けることもなく、いつそ触れているのかさえわからないくらいの強さで彼はあたしを包み込んでくれた。

「な、なにひて、」

……………「何してるの」と言いたかったのだ、あたしは。もごもごと、黒衣のせいで籠った声で問いかける。

いや、顔が彼の肩に当たって口元が布に塞がれそうだったからだけではなく、単純に恥ずかしくて舌が上手く回らない。これは抱き締められてると言っているのでしょうか。ルシフェルさん、本当に何をしてくれているのでしょうか。

しばらくそうした後（実際にはそれほどの間ではなかったのかもしれないが）、最初よりもゆっくりと腕が解かれた。

「……………すまない。なんだか無性にお前を抱き締めたくなっただ」

「はッ?!」

あっさりとおたしを解放し、彼は何のてらいもなく言った。て、照れるでしょうがっ!

ひたすら何も言えずにいるあたしとは対照的に、ルシフェルは余裕顔でふつと笑って手を挙げた。こちらの反応を見て楽しんでいるのかと思いきや、どうやらそういうわけでもないらしい。ただ優しい表情をしていた。気合なんていうものを優雅なる墮天使様に求めはしないけれど、気力がないような、どこか諦念漂うこの笑みもいまいち見たくはない。

嬉し恥ずかしではあるものの、ちょっと変な態度に違和感と不安いきなり抱いたりとか、この前の部屋での出来事もそうだけど、何を考えているのかさっぱり読めない。単純に好いてくれているのだと能天気な解釈はできないくらいに彼の様子はどこか不自然だったし、行動の理由を推測するためにはあたしはルシフェルのことを知らなさ過ぎる。

「ではな、真子……」

「あ、あのさっ!」

「ん?」

指を鳴らしかけて、やめる。不思議そうに首を傾げる様子は、いつもと同じ。だけど。

「帰ってくるよね?」

帰る。彼の家はあたしの家だと、確信したような言い方に自分で苦笑い。それでもあたしはちゃんとした言葉が聞きたかった。ただ自分が安心したいだけなのかもしれないけど、黙って転移させられるのは我慢できなかったから。

「ああ、帰るぞ。絶対に」

“絶対”。そう言った。ならとりあえず安心だ。ルシフェルは約束を破らない。

あたしが納得したのを見たのだろう、今度こそルシフェルは指を鳴らす。

「後でな」

「うん。気を付けて」

周囲が白くなっていく中で、あたしの返事が届いたかどうかは知らない。

\*\*\*

【Side - Boy . . . ?】

「……………」

……………行っただか。

彼女が地上に戻ったことを確認した私は踵を返し、部屋を出た。

……………しかし変な気も起きたものだ。あんな感情は久々に抱く。まして無意識の衝動など……………以前も彼女の家で先走った己に動揺し嫌悪感まで抱いたというのに。この手は、体は、如何に安息を求めて

いるというのだろう。

「殿下、どちらへ」

「少し出かけてくる。ベルフェゴールに伝えておいてくれ。そして真子の面倒を見てくれて感謝する、ともな」

「承知致しました」

宮殿を出て、ひとり、街の中を歩く。

こうしてひとりで都を廻るのはいつ以来か。特に最近はずっと隣に彼女がいた。いつも私の隣で笑い、私の心配をしてくれる少女。

最初は、偶然だった。偶然地上へ行き、偶然彼女を見つけた。今でも言葉にすることが出来ないあの感じ、初めて彼女を見つけた時の奇妙な……いわば、興奮。別に見逃しても良かったのだ。人間ひとりが必要な運命を背負っていたようが、私には関係のないこと。

では地上に留まろうとしたのは何故？

同情？ 違う。

興味？ それだけではない。

料理？ ……それも、あるけれど。

違う、もつと、根本的な何か。私の過去が、彼女の未来が。

これも定められていたことなのですか、主よ。

貴女が未だ箱庭を見捨てておられないのならば、子に救いの手を差し伸べてくださるのならば。堕ちた私を、まだ愛してくださいさるのならば。……願わくは、小さき者にお答えを。

そんなことを祈らずにはおれないあたり、私にはやはり、過去への未練があるのだろう。

わかっている。現状を打破するのに最も手っ取り早いのは彼女との縁を断ち切ってしまうことだ。だが一度交わった運命をなかつたことにすることはできない。いくら歴史を書き換えようと事実はそこに存在し、変えることは不可能なのだから。さらに、短時間に言

葉を交わしただけで、姿を目にしただけで、あっさりと覆る私の決意など何の役に立つというのだろう。

実際、彼女を見るまでは私はアスモデウスの言に従うつもりでいたのだ。少女がひとり消えることで安寧が得られるのなら、どれほど私自身が悲しい思いをしようと構うまいと思っていた。

しかしそれはもう叶わないことがわかった。やはり、駄目だった。大義のために小さな個を見捨てる……それは昔の過ちに通じるところがある。同じ轍を踏むなど、最高傑作にあるまじき失敗ではないか。そして何より……彼女を救いたいと、私の心が叫ぶのだ。

もう二度と、大事なものをなくしてたまるものか。何とかして真子を生かしたい、そう願ったのはいいが。不幸にして、我々には出会った時から猶予が残されていなかった。

どうしたら、どうしたらうまくいくのだろう。厄介なのは私にも彼女にも、それぞれの事情に別々の悪魔が絡んでいるという点。下級悪魔なら脅しつければどうにかなったかもしれないが、そうはいかない。彼女を縛る悪魔と争うには。そして勝つには。こちら側もそれなりの覚悟が必要になる。なんといつても私が存在を掌握できない、最悪の相手であるから。

真子をあの最悪なる墮天使　悪魔から解放できさえすればいいのだけだ。

彼女の“器”を破壊して魂だけ地獄じごくで練り直せば、きっと共にいられるが……果たしてこれは万魔殿の禁則事項だったか？　ずっと昔にあのベルフェゴールが、惚れた娘にやろうとしていたくらいだから平気か。否、あれもなかなか直情的な面があるから……。まあいい、この都市の規則に過ぎないなら私の一存でどうにでもなる世界の“決まり”でないのなら、取るに足りぬ。

しかしこちら側、地獄に彼女を連れてきたとして、だ。彼女を縛るあの悪魔の追撃は避けられるか？　……ああ、彼らの契約内容には相違ないからいいのか。間違いなく契約書に記された内容

“彼女が死ぬこと”に反してはいない。問題は、あの悪魔が死をどう定義して契約したかだが……。否、待てよ。そもそもが“魂を繋ぎ止めること”への力の貸与だったのだから、肉体と精神が切り離された段階で奴と彼女の関わりはなくなるはず。とすれば、この方法はやはり間違っではない。

何度もなぞった思考は、いつだって答えに辿り着けずに終わる。

しかし今回は新たな要素、証拠がある。万魔殿の壊れていた結果、脱走した軍馬。あれに手を出したのは間違いない、彼女を縛る“奴”だ。

だが、ならば尚更、奴は私と……“殺し合い”を望んでいるということになる。時が来て契約が果たされれば彼女は死ぬし、その前に私が地獄へ連れ込んでも生を終える。力の貸与期間を縮めた、契約の早期達成を嫌がるわけもなし、対価を奴は得たのだから黙って引き下がることに不利益はないはずだ。私と奴が契約を争わずとも奴の契約書の内容は果たされる。むしろ私は手助けする方向に動くようにしている。というのに、あの悪魔、わざわざこちらを挑発するような真似をしてきたということはつまり、そういうことなのだろう。

届くはずもないとわかっていながら、心の中で奴に語り掛ける……私はお前に“門”を任せたこと、後悔はしなかつもりなのだが、なあ。お前はいつも少しやり過ぎるのだよ。

ため息を吐き出す。懸念は、そればかりではなかった。

刹那の生を辿る者が、何を“幸福”とするのかが私にはわからなかった。彼女は どうしたい？ わからない。社会との繋がりを保つこと、友と共に過ごすこと、親の願いに応えること。一体どれと釣り合うんだ、彼ら“人間”の生への願望は？ 己の命のためにどれなら捨てられるんだ？ 何かひとつでも彼女が悲しむ要素があるのなら、彼女を“殺して生かす”ことは正解ではないのではない

か？ 本人に伝えられれば正解は得られるのかもしれない。だが……よもや、これほど惨い事実を本人に言えるものか。怖い。

この私が、踏み切ることができない。二度も過ちを犯すわけにはいかないのは勿論……ただ……彼女の幸福に私がどこまで踏み込めるのか、それが気になっていた。地獄じごくに連れてきた彼女を、私が永劫縛ることになるのだとしたら、彼女はそれをどこまで望むだろう？ とおい未来にもしも彼女が「疲れた」と言ったなら 我々でさえ厭わしい時があるのだ、悠久の生は その時、私は彼女をまた手にかけることができるのだろうか？ ……迷っている時点で答えは明確だが……現時点では。

これはきつと私の我が儘。と、ほんの少しの……義理、のような？ 生かしたい、けれど、彼女の望む幸福の形がわからない。ひよつとすると手を引くべきは私の方か？ 彼女が自分の生を手に入れた暁には、我々のことを忘却してしまった方があるいは幸せなのかもしれない。日常を返してやるべきなのかもしれない。それは私にとって痛みを伴う決断ではあるが、救われるのなら、致し方のないこと。

とはいえ。いずれにせよ、この都市に手を出された以上は黙っているわけにはいかない。それとこれとは話が別。私には彼女以外にも守るべきものがあるのだから。

街を抜け、森へ分け入る。木立を背に、整備された道を再び踏む。幾つもの命。幾つもの灯。

これが、私の守るべき世界。この場所を失うわけにはいかない。最後に戻ってきた宮殿。その庭の外れにひっそりと佇む、石造りの小さな塔。見た目はまるで廃墟だが。この塔が万魔殿の最重要機関であるなど誰が思うだろう。

これで私の罪が軽くなるのなら。

「……」

全てを終わらせる時が来た。私は全てを終わらせ、全ての灯を守るのだ。彼女を含めたこの世界を守ったなら、必ずや完全への一歩となるはず。

お前は、また泣くだろうか。

一瞬よぎった金色の影を頭を振ってやり過ごし、私はゆっくりと塔の入り口に手をかけた。

## 第6話：答えは、「大丈夫」

テーブルの上には茶碗と皿が二人分。台所からはいい匂い。だつて、鍋の中には既にスープが出来上がっているんだから。

外は夕暮れ。昼がいくらか長いので、まだ真つ暗にはなっていない。普段ならもう「いただきます」をしている時間だけど、今は待たないと。ルシフェルは絶対に帰ってくるって言っただからね。

それにしても、今日のルシフェルの行動にはびっくりさせられっぱなしだ。特に、急に抱き締められたあの瞬間。……幸せだなあと思ってしまったよ。ほんのちよつとの時間だったけど、なんて言うか、その、すごく安心感のある腕の中だった。変態じみた発言を許してもらえるなら……墮天使長、めっちゃいい香りがしたので。さすが美形。

なんだろうなあ、香水や洗剤の匂いとかではないんだけど。ぽかぽか……ほこほこ？ うん、ほこほこしてたんだ。彼の手はいつもひんやりと冷たいのだけど、優しさを温度にしたらたぶんあんな感じ。

けれど、今日いちばんの驚きは。

《ドン！！》

「！？」

突如として玄関の方で響いた大きな音。少し部屋が揺れたし、ドアに何かがぶつかったようだけど。

あたしはちよつと怖くて、おっかなびっくり玄関へ。

《ガチャーン!》

「!?!」

ノブが動くのにもいちいちびっくり。だ、誰?

と、思っていたら。ドアが開いて、滑るように入ってきた長身のシルエット。なーんだ、ようやく。

「お帰りルシフェル。珍しいね、わざわざ玄関から……」

ふらりと彼が揺れた。

「え　?」

止まるはずの体は傾いたまま。彼はそのままよろめいて、入り口の壁へとぶつかる。その表情は苦しげで。

「く、う……っ」

「ルシフェル!?!」

なんで、こんなに。

「た、だいまっ………」

やっとのことで一步を踏み出した彼の膝が、がくと折れる。反射的に飛び出したあたしの肩にのっかる重たい頭部。

片手は戸棚に、そしてもう片方の手と頭はあたしに。支えがなければ立つてさえいられないほどに、彼はぼろぼろだった。

「何があつたの?! どうしてこんな、」

「何でも、ない……」

「っ!」

この期に及んで、まだあたしにそうやって嘘を吐くの? こんなに顔色が悪くて、ふらふらで、何でもないはずじゃない!

墮天使の黒い衣装は 単に汚れが目立たないだけかもしれないが 特別変なところはないように見える。でも気付いてしまった。彼の少しだけ乱れた黒髪に、小さな羽根の一部が付着していることに。誰のものはわからない、けれど漆黒の羽根。

ゆっくり、ゆっくりとずり落ちるように靴箱へ体をもたせかけながらルシフェルは玄関に座り込み、緩慢な動作でブーツの紐を解き始めた。こんな時まで律儀に……。戸惑いはしたが、あたしも靴を脱ぐのを手伝おうと手を出す。

「いい、から」

しかし呟くと同時、やんわりと紐を取られ 拒絶された。

「大丈夫」だとか「自分でやる」とか。あたしもたくさん言ってきた言葉ではあるけれど、そういう頑張りが相手を傷つけることがあるんだと初めて知った。時には甘えた方がいいことだってある。人間が魔王様に「頼って欲しい」なんて言うのは、傲慢だと彼は機嫌を悪くするだろうか。

シヨックを感じる暇もなく、立ち上がろうとする彼のために自然と体は動き。肩を掴んだ手指に力が入ったかと思うと彼は腕に力を込めてどうにか立ち直って、あたしが口を開く間すら与えずにリビングへ向かってしまう。全くおぼつかない足取りが見えていてひやひやする、けれどまた不要だといわれるのが怖いのかあたしの脚は今度は動いてくれなかった。

「ちょっと！」

「悪いが、後だ……。疲れた……。少し寝させてくれ……」

やっとのことで声だけ投げれば、返球はまるで暴投。返事をするより先に、ルシフェルはソファーへと倒れるように身を横たえた。

……。それきり。それつきりぴくりとも動かなくなった。

弾かれたように駆け寄り慌てて覗くと、良かった、胸がちゅんと上下している。

死んだように眠る青年に、そつと毛布をかけてあげる。自然と手が震える。

ルシフェルが倒れた。あの墮天使長様が。

蒼白と言つには白過ぎる、本当に血の気がない顔。疲れ切った表情。……。初めてだ、こんなの。

頭の中はぐちゃぐちゃで、それでもあたしの頭は割と冷静に物を考えられるらしい。現金というか、脳は偉大というか。

今日一日のことを思い出す。そして最近のルシフェルの様子。総合した結果、あたしはひとつの仮説を立てた。

彼は何かの病気に罹<sup>かか</sup>っていた、あるいは以前から具合が悪かったのではないか。妙に距離が足りないように感じた地獄へのワープも、部屋の中に現れずに玄関から帰ってきた理由も、一応は説明がつきそうに思える。多分ひよつとしたら、“飛ばなかった”のではなく“飛ばなかった”のじゃないだろうか。墮天使が罹る何らかの病気のせいで、使える能力が限られていた。魔力や体力が減っていたからどこか元気がなく、物思いに沈むことが増えた。そう考えるのもアリだと思つ。

もしこの仮説が当たっているなら、今晚ルシフェルを放って寝るわけにはいかない。何かがあつてからでは遅いのだ。

今のところは静かに眠っているだけ。別段あたしが何かをする必

要はなさそうだ。　　というのは言い聞かせているようなもので。本当は不安で仕方がない。あのルシフェルが倒れるなんて、そんな、もしも重病だったらどうしたらいいのだろう。もしもこのま目覚めなかったら……あたしは、どうしたらいいのか。嫌な可能性ばかりが思い浮かんでどうしようもない。こんなことで笑われるかもしれないが、普段が普段だけに、微かな呼吸を聴いていなければすぐにでも泣き出してしまいそうだった。

助けて、誰でもいい。お願いします、彼がちゃんと元気になりますように。単純に疲れて睡眠をとっているだけでありませうに。あたしは今夜はずっと、寝ずに見守っていようと心に決めたのだ。　　

\*\*\*

……でも、結局は。

「あ……」

慌てて時計を見る。数時間分の記憶がない。外はうつすら明るいし……寝ちゃったのか、あたしの馬鹿。

ソファーを見てみると、まだ彼はそこにいた。眠ってるみたい。ひよっとして居なくなったらどうしようかと思っただけ。

ずっとテーブルに伏せていたせいか、枕にしていた腕がじんじん痺れる。痛む目をちょっと押さえながら、ぼんやりと考えを巡らせる。頭が起動するまでには時間がかかるのだ。

朝食までにはまだ数時間。ルシフェルがそろそろ目を覚ますかもしれないし、今度こそちゃんと傍にいて起きていよう。

……とりあえずうがいをしたい。ということで洗面所へ向かう。寝起きの口の中は、少し気持ち悪い。

さて、ルシフェルが目を覚ましたらどうしようかな。具合が悪いんだとしたら、それなりのことを考えなきゃ。

地獄に連れて行くのが一番いいのだろうか。あそこは悪魔さん達の街だし、もしかして専門の医者みたいな人もひとりくらいはいかな。それじゃなかったら魔力で治療とかできないのかな。……ああ、ダメだ。地獄にこちら側から行くには患者である彼自身に力を使わせる他ない。それなら、それなら……

あ、しかも今日は平日だ。うん、よし、決めた。今日は学校休む。休むったら休むのだ。真面目で通っている真子さんだけど、仮病でも何でも使ってやるんだ。

ようやく目が覚め始め、でも完全には覚醒しきっていない頭で、仮病は何にしようなんて呑気なことを考える。取り留めもない思考、こんなことを考えるより先にもっと大事なことがあるのに。わかっているのに考えていることがあつちこつちにバラけて、思うように集中できない。それが自分で意図してのことだったら、あたしはとんでもなく薄情な人間だと思う。働け、集中しろあたしの頭。

そうして洗面所を出たあたしは、ふと変な音が聞こえてくることに気付いた。

何か、こう。すきま風でも吹いているような、ヒューヒューという音。我が家の立て付けはそんなに悪くないはずなんだけど。

角の壁に歪みがあった？ ベランダへの窓が開いていた？

リビングに置いてあるソファアに近付くにつれ、音もだんだんと近くなっていく。ソファア…… まさか！

「ルシフェル……?!」

空気の漏れるような音。その音はそこに横たわる墮天使の喉から聞こえる、彼の呼吸の音だったのだ。

「ん、はあ……っ！」

苦しげに息を吐くと、ルシフェルは眉をひそめた。汗が、すごい濡れた漆黒の前髪をかき分けて額に触れ、その異常な熱さに思わず手を引っ込める。

これは、熱……なの？！

ヒューヒューと風を切る音。時には詰まるくらい呼吸が辛そうで墮天使が体調不良だなんてそれこそ聞いたことがないけれど、紛れもなく彼の症状は風邪に酷似していた。そして間違いなく見た目には悪化していた。

どうしよう、どうしよう、ルシフェルが。……や、いや、

「……お、落ち着け、落ち着け……！」

焦るな慌てるな考えることをやめるな！

ルシフェルは、大丈夫。きっと大丈夫。彼は強いんだもの。

こんなことで慌ててどうする、ここで頑張らないでどうする自分支える、って決めたじゃないか。今ここにはあたししかないんだ。あたしが踏ん張らないで誰がやる？！

墮天使だって言っても食事は同じだった。だったら栄養を摂る方法だって、もちろん風邪を治す方法だって、人間と一緒にかもしれないじゃないか。そう、見た目は悪化しているけど熱が出るのは体がウイルスと闘ってる証だと聞いたことがある。今ルシフェルの体が一生懸命に悪い物質と闘っているのだとしたら、それをサポートしてやるのが人間のあたしにもできる精一杯。

とにかく台所へ。氷嚢ひょうすいを作って頭にのせる。頭を冷やして体を温めるのがいいんだよね、確か。

それからタオルを持ってきて汗を拭く。顔と首まではできたけど、服はさすがに脱がせられなくて、仕方なく首元だけ弛めておく。

あとは、飲み物と食べ物。だけど軽く揺さ振ってもルシフェルは起きてくれない。苦しそうにうなされているのに。困った拳げ句、スポーツドリンクを半ば無理に流し込んだ。頭を持ち上げて支えて……テレビか何かの見よう見まねだ。

一応、一段落。あたし今日は絶対に学校休もう。それと、……

と、ここでやっと最良の策に気が付いた。どうしてすぐに思い至らなかったのだろう。自分の間抜けさに思わず脱力して、床にへたり込んだまま取り出したのは携帯電話。早朝にも早い時間帯だけど緊急だからたぶん、大丈夫。

『……はい？』

案の定、最初に電話を取ってくれたのは“主人”ではなく“居候”さんの方。既にしゃきつと起きた声に、さすがは武人だと感心してしまう。あたしが連絡をしたのは、ルシフェルのことを最もよく知っていそうな墮天使さんのところ。ちなみにソファーで眠る彼は、未だに目を覚ます気配もない。

「アシユタロスさん、あの、あたしです、真子です」

『おや、おはようございます。早いんですね。黎香さんはまだ寝ているんですけど』

「ううんいいの、アシユタロスさんに用事があつて、その……アシユタロスさん、あ、あのね、ルシフェルが熱を出しちゃったみたいで、その……」

『な……っ……』

やっぱり保身に走りそうな言い回しで上手く伝えられない、それでもその反応の鋭敏さが事の重大さを示していた。アシユタロスさんがあたしを責めることは絶対にならないとわかっている。でもとても申し訳なくなつて、一瞬泣きそうになつた。

『わ、わかりました。すぐにそちらへ参りますので』  
「ありがとう」

電話口の向こうで「黎香も行くー！」という声が聞こえる。アシユタロスさんの居候先の主人……あたしの友達の声。起きたんだ。多分、携帯を奪おうとしているが、身長が足りなくて取り戻せないんだろう。その光景を想像したら、ちよつとだけ気持ちが悪らいだ。電話が切れ、ツー……という音が三回聞こえた時には既に、床の上に淡緑色に光る魔方陣が現れていた。もうすっかり見慣れた特有の幾何学模様。ふわつとトレードマークとも言える銀髪が広がる。黒いローブに包まれた全身が抜け出るや否や、彼はソファアールへと駆け寄つた。

「ルシフェル様！」

墮天使長のいちばんの忠臣は跪いて主の名を呼ぶ。けれど、その切れ長の瞳は一向に開く兆しを見せない。

「アシユタロスさん……」

うなだれたアシユタロスさんの横顔が本当に悲しそうで。その痛みはきつとあたしよりも大きくて。

「ごめんね……！」

謝らずにはいられなかった。謝ってどうなるものでもないし、誰に何を謝りたいのかもわからなかったけれど。それでも何か言っただけ欲しかったのだ、たぶん。

「あたしが、もつとちゃんと……」

「真子さん……」

再び顔を上げた時、銀髪の墮天使は穏やかに笑んでいた。そこに痛みのはかりは見当たらない。

「貴女のせいじゃない。どうか謝らないでください。真子さんがそんな顔をしていたら、僕らも悲しい。だから、どうか」

「……うん」

アシユタロスさんはひとつづつなずいてくれる。救われるような優しさを、向けてくれる。

彼らは大きい。人間のあたしがとても及ばないくらいに。

「……見たところ、現段階では命にかかわるほどではないようですから安心してください。処置も、まあこのくらいが妥当でしょう。よく頑張りましたね」

「……」

「本当に、よくひとりで。でももう肩の力を抜いて……そうですね、まず、一体何があったのかお聞かせ願えますか？　って、もしや真子さん、今日は学校がある日でしょうか？」

「あ、うん……でも今日は休むことにしたから大丈夫」

「そうですね。良いと思います」

小さく笑ったアシユタロスさんに、あたしは知っている限りのこ

とを話した。

「万魔殿の軍馬が逃げ出したこと。ルシフェルが仕事があると言っていたこと。そして戻ってきたら倒れたこと。最近、様子が変わったこと。」

彼はただ黙って聴いてくれたから、ついでに自分の仮説も話してみた。もしいち中していたなら、それはそれで力になれるかと思っただから。病気ではないのかとあたしが言うと、

「恐らく、順序が逆だと思います」

と、アシュタロスさんは言った。

「逆？」

「ええ」

彼はずっと真剣な顔で思索していたが、暫くして軽く首を傾げながら口を開く。

「我々は滅多に体調を崩しません。人間とは違いますからね。つまり、病気になったから力が衰えたのではなく、力が弱まったから熱が出たのだと、」

「余計なことを言うな、アシュタロス」

擦れた声が聞こえたのはその時だった。

「ルシフェル！」

「ルシフェル様！」

見れば、ルシフェルが上体を起こそうと苦心しているところ。あたしより先に反射の速度で飛び出したアシュタロスさんがそれを手

伝う。まだ息苦しそうだし頬も上気しているけれど、紅い双貌はしっかりとこちらを見据えていた。

「あまり喋り過ぎるな。……それは、人間が知る必要のないことだ」  
「も、申し訳ありません……」

アシユタロスさんは小声で謝った。でもあたしはルシフェルのその言い方にむっとして。

「余計なことじゃないよ。ルシフェルのことが心配なんだから、あたしにだって知る権利くらい」

思わず口走ると、彼は口端を僅かに上げた。

「お前がそれを知って、一体どうするといふのだ」  
「え……?」

まるで、馬鹿にしたような笑み。……変、だ。冷酷だとかそんなことを言うつもりはない。でも何かおかしい。

人間、人間、人間。わかった。あたし達は結局違う者同士。それでもその壁をこんなにも意識したのは初めてだった。

「真子」

気のせいかと思うほど、嘲笑めいた笑みはすぐに鳴りをひそめてしまった。彼はすっかり水になってしまった氷嚢を下ろし、こちらに差し出す。

「水を、くれないか」

「水?」

「ああ。喉が乾いた」

照れたような微笑。いつもの笑顔。やっぱりさっきのは気のせい  
か。

「水ね。わかった」

「悪いな」

あたしは何か違和感を覚えつつ、でも気付かない振りをして立ち  
上がった。気付いたら大切なものが壊れてしまいそうな気がして、  
それよりなら、罅<sup>ひび</sup>を覆い隠してしまった方がお互いのためなのかも  
しれなかったから。

## 第7話：墮天使と光の源

「解放」

今まで抑制していた制限を解除、目一杯に広げる十二の翼。身体中に力が巡る感覚と緊張に思わず震えた。

突風が吹き荒れ、吹雪のように自分の漆黒の羽根が舞う。

空中から見下ろした先にあるのはひとつの光源。核、と私は呼んでいる。万魔殿の敷地内にある塔、結界を解き地下へ辿り着けば、そこにあるのは万魔殿という都市の要。その光源は全てを保つ魔力の源。都市に比べたらあまりに小さな。

万魔殿の基本的な機関も、周囲の結界も、全ての源がこの核だ。そして私はいわば自分の“魔力回路”をここに直結させ、地獄にいる時も地上にいる時でさえも、常に力を注ぎ続けてきた。

魔力を注ぎ続けねばならないのは都市の統治のためだけではない。もつと大切な目的、私が見出した万魔殿の存在意義。そもそもこの都自体が膨大な魔力の塊として存在しなければならぬのだ、その目的を達成するためには。とはいえ実質は片手間、半ば無意識の作業。安定しているうちは私の力のほんの僅かだけで事足りる程度であつたからだが……私の力が安定を欠いているのか、それとも単に彼女を縛るあの悪魔がやり過ぎていただけなのか、今この都市は非常に危険な状態にある。安定していることが絶対条件ならば、ほんの少しの揺らぎであってもそれは異常事態に他ならない。ともかく可能な限りの防御策を施さなければ。

もしも私に原因の一端があるとすれば、暫くはこの中枢部に私は関わらない方が良さそう。そして気持ちの整理がつけられない弱い自分は……真子にも、もう関わらない方が良さそう。

存在を消せぬなら忘却すればよい。彼女を悪魔から解放して、それで、終わりだ。“私は幸福になつてはいけない。”万一にも私がいないことで彼女が幸福でないというのなら、その時は彼女が私を忘れてしまえばよいのだ。

私の欠片よ、聡い子よ。少しずつ、消費するよつに。

核は生き物ではあるまいに。言う必要もないことを言つて、微妙に自嘲じみた笑みを浮かべる。何をしているのだから。

自分自身が保持する力は猶予のための最低限、残りの魔力は全て注げばいい。やらなければ何もかもが意味を失う。過去の犠牲も、数多の後悔も。

私なら、できるに決まっている。……

万魔殿 宮殿へ、門を入れて一本道を進む。そこから逸れて建築物の裏手へ入ろうとすれば、誰でも容易に近づくことのできる小さな石の塔。目立つ場所にある“要”は、いかにも番犬の目と鼻の先。この中に何かがあるかなど大概の民は知らない、知る必要もない。

反逆の可能性。

レムレースの場合。まさかそんな気を起こすはずがないし、そもそも転生を待ち受ける彼らが償いの最中に罪を犯して、何の得があるろうか。それに“いくら元が人間の魂とはいえ”、彼らにはそういった栄光を得る道への願望が存在しない。奉仕の意志、それに伴う最低限の推進力 “欲望”を残して、その他種々の欲を削がれた存在。それがレムレースという者。

外部からの侵入者の場合。これもあり得ない。逆説的ではあるが、この都に攻め入られた段階で、既にこの中枢は機能していないはず。

いわば最初で最後の砦なのだ。

悪魔らの場合。実力主義の万魔殿、私のことを快く思わない者も恐らくいるだろう。だが覇権を奪いたいのなら直接この私に挑んでくれば良い。その時は納得するまできちんと序列を教えてやる。この程度の自信もなく、幾万、幾億の頂点に立つことなどできはしない。元より覚悟はできている。

現段階で最も玉座に近いのは　ベルゼブブも、そうはそうなのだが　きつとベルフェゴールだ、今も尚。万魔殿の“元”最高責任者。だが彼は絶対にこの都を第一に考える、故に万魔殿の存在を揺るがすような真似はしない。それにあれば聡い悪魔だ、私が一目置くほどに。とはいえ、彼は以前はこの核をさほど重視していたわけではなく……それが私の墮天の一因であったのだが、しかし過去とは状況が違うのだから、それを理由に欠点をあげつらうことは私にもできない。結果が全てだ。

私と敵対することはつまり、己の足元を自ら突き崩すことと同義だと、他の者も十分に理解しているはず。　しかし、その保証は暫くあてにできなくなるだろう。今からの、私の行為によって。

まあ、侵入云々の心配は杞憂に終わるのだが。何せこの塔、端的に言って……最深部へ至るまでが相当に面倒くさい。塔は外からは上に伸びているように見えるが、実は上部には空っぽの空間があるだけ。本当の中身は地下にある。内部には延々と続く螺旋階段があり、それを降りつつ、幾重も立ちはだかる結界を解除していかねばならない。

ちなみに塔自体の破壊は不可能だ。単なる石造りに見えても保護結界の式が隙間なく埋め込まれているし。と、いうか……不可能なものとは不可能だ、としか断言できない。つまり塔はそこに“在る”ことだけで完結している。《世界》の構成要素のひとつだとしても言いがたない、というのは分かりにくい。ともかく、地下へ至る道が何故“塔”の外見なのかとか、結界を組み込んだのは誰かとか、

そういつた問いを発すること自体が無意味、無駄、時間と言葉の浪費。要を内包した塔が在る、それでお仕舞いなのだ。

さて、その結界による障壁だが　階段を半周ほど降りる毎に異なる式の壁が立ち現れ、しかも、塔に入る度に不規則的に変化する。仮に以前の解法を記憶していたとしても、何の役にも立たないというわけだ。だから解除には一々、全ての手順を踏む必然性が出てくる。即ち、まずその結界の術式を読み取り、それを逆算し、最後に魔力を流し入れて相殺する。

当然ながら一枚一枚が複雑かつ緻密に組み立てられた結界。多分、あのアシユタロスでさえ考える時間を要する。（あれは大概“直感的に” 式を編んでいるような奴だ。）私だっつうんざりだけれど、やはり、急を要する時にはもうこんな結界など無いだろうから、あの意味ではこの手間も理に適ってはいるのかもしれないと思う。…少しだけだが。

幸いなのは、帰りに再度同じことをしなくて済むという点か。一度解除した結界は塔の外に出るまでそのままだ。無論、転移術の類は遮断されるから、これは素直に嬉しいところ。帰りは飛んで出ればいい。

無防備そうにも見えるが、塔の側もよくわかっている　後をつけようが何らかの手段で侵入しようが、“最後の防壁”を破ることができる者は、唯一無二。今は…今は、私だ。私が“鍵”を持っている。だから本当は結界など必要ない。この過剰なまでの防御は、きつと“鍵”の持ち主を試す意味もあるに違いない。もしくは、あり得ないことではあるうが…：“鍵”の譲渡に失敗した場合への備え、という可能性も捨てきれないけれども。まあ良い。無為な思考をした。

水底のように暗く、蒼い空間で。捧げられるが如く台座に載るたつたひとつの金色の光源　核。

周囲に展開する無数の魔方陣は自分が無意識のうちに敷いてしまつたに違ひなかつた。まるでこれでは邪悪な儀式に見えるけれども、立ちほだかる“最後の防壁”は光源を護る半球の壁。核の煌めきに呼応するように、“鍵”を埋め込んだ額が疼く。私に“鍵”を渡してくれたベルフェゴールも、かつてはこの光景を見ていたのだろうか。

目を閉じるとより神経が研ぎ澄まされていくようだ。力の流れを意識しながら防壁に触れれば、一瞬だけ存在が溶け消えたような錯覚。溶けて……世界と繋がれる、感覚。

潜る、名乗る 《光》ではなく《傲慢》の名を。

「……」

浮上の感触は“開錠”の合図。もはや自分の魔方陣によつて眩しいほどに膨れ上がった蒼の奔流の中、薄らと目を開け、手を伸ばせば触れられそうなあたたかな光源の存在を確認した。翼を広げ、飛び上がる。

しかしながら、と辿つて来た道を空中で見上げて僅か戸惑つた。力を解放した拳げ句、出口まで飛ぶだけの力が残るだろうか？ もつと言え……“飛べる”、だろうか？ 彼女のところまで。

これは天意をはかる量る儀でもあるのか。魔力は我々の生命に直結するから、成功したとしてもそれなりの反動は確実だつた。だが私にはやらねばならないことがある。一步目で戦線離脱？ 馬鹿な話だ！ 必ずや 必ずや“あの方”はご助力くださる。運は、天は、私の味方。

ああ……私は今でも貴女に全てを捧げたい。これもみな貴女のため、本当は人間に捧ぐ身などひと欠片もないのです。どうぞ、どうぞ、見ていてください。この手が今度こそ救いをもたらす様を。あの娘を救つたなら、貴女もきつとお喜びになりましょう。私は誓いを違えませんが、生まれを裏切りません、貴女にだけは何もかも……

偉大なる《憤怒》よ “主”よ！

「、  
」  
小声で祈りを呟いた。他の悪魔らがいるところでは口にしたことのない、この身と心に刻まれた文句。ここなら届くような気がしたから。

愛しています。貴女ならば何の呵責もなく愛することができません。主よ、お許しを。私はこれから己が殺す焰を救います、他ならぬ己が呪った命に手を加えます。これを以て、我が正道の証明に。

さあ。

一点集中。私の全てをあそこに !

\*\*\*

「ルシフェル様」

気付けば、紫苑の瞳がこちらを不安そうに見つめていた。

頭が、目の奥が、ずきずきと疼く。吐き出す呼気は自分でもわかるほどに熱い。

「一体、何が」

ああ、そうか。真子がこいつを呼んでくれたのだったか、とぼんやりする頭で考える。なるほど、これは好都合だった。

やっと、のろのろと頭の中の歯車が回転を始めた気がする。私は飛べたのだ、この家まで。辿り着いた玄関先……意識までもが飛ぶ

直前、彼女は何だか辛そうな顔をしていた……

だがそれさえもむしろ“好都合”。私の決断、独り善がりの……  
しかし、最良の。

「貴方ほどの方が倒れるなんて、尋常ではありません。……万魔殿にも影響が」

「それは、ない」

……忌々しい。口を開くのも億劫なくらいに体が怠い。本当に久し振りにあれだけの魔力を消費したが、やはり使いすぎたか。供給がなくとも機関が保てるように蓄えてきたのだから、当然と言えば当然の結果か。

まず、とりあえずは台所へと声を投げる。確か私は彼女に飲み水を頼んだはず、だ？

「……真子」

「なに？」

「湯冷ましを」

「あ、うん」

彼女の声色はいつもと変わりないように思えた。僅かな変化にまで気を払えるほどの余裕が自分になかっただけかもしれないが、それについて考えようものならまた決意が揺らぐことは目に見えている。

今思うことはただひとつ　できる限り時間をかけさせなければならぬ、彼女に会話を聞かれてはならない。

「えーっと、アシユタロスさんはお茶でいいかな？」

「いえ、僕は……」

そう言って我々に尋ねたのは彼女自身。どこか大人びたいつも通りの気遣いが、別の意味で、私には嬉しかった。

断りかけたアシユタロスには目配せをする。それだけで意図を汲み取ってくれたのだらう、いつでも一歩引いているような《忠臣》も今回は慌てたように訂正する。

「はい、お願いします」

「はいはい」

良かった、些細ではあるがこれでいくらか時間を稼ぐことが出来るだらう。彼女が戻ってくる前に、目の前の友に説明をしなければ。そうは思えど簡単に考えがまとまるはずもない。説明すべきは“全て”ではないからだ。いかに本人が望もうとも、私の重荷までも背負わせるわけにはいかない。

嘘を織り交ぜることは臣の忠誠に対して真摯ではない？ 仲間を傷つけぬためなら長が背負うべき？ 悩んだ私がようやくアシユタロスに伝えたのは、単なる事実でしかなかった。

「万魔殿との繋がりを断ち切ってきた」

「え？」

驚かれるのは百も承知。みるみる青ざめていく顔を見ても、私自身は冷静でいられた。私も逆の立場であったなら、間違いなくアシユタロスのような反応をしていたらう。

「そんな……そんな馬鹿な！ どうして！」

「アシユタロス」

そつと名を呼び、その唇に人差し指を添えて塞ぐ。腕が重い、けれど騒がれては困る。

珍しく戸惑いを見せた堕天使が声を飲み込んだのを確認してから、静かに指を離してやる。腕を下ろすのは、重力に任せた。

「落ち着け。切断は一時的なものだ」

「一時的？」

幾分か冷静さを取り戻したようだったが、それでも動揺したままのアシュタロス。私はできるだけゆっくりと、噛んで含めるように言い聞かせる。こいつの気が動転したままでは私も落ち着かない。

「最近、万魔殿に異変が起きていた。危機を察知している者は少ないが、放っておける問題ではない。何より……万魔殿を囲む結界が解けていたからな」

「それは、つまり」

息を呑むアシュタロスに、私はひとつうなづく。

「私の精神が、安定を欠いているということだ」

万魔殿という都。統治は幹部が担っていても、根本的に機関自体を支えていたのはこの私だ。常に核へ魔力を供給し続けていたのも、都市の周囲に結界を張り巡らしていたのも、あの都市を都として形を保たせていたのも、私だったのだ。

そして魔力というのは使用者の精神状態に左右されやすく、気が乱れていては本来の能力は発揮できない。だから私は常に平静でいなければならなかった。また、滅多なことでは都市を揺るがすほどの影響は出ないはず。それなのに。

「何が原因かはまだわからない。だが、私を根本から変えるような、そんな変化が起きつつある可能性は、否めない」

「……真子さん、ですか」

「……はつきりしたことはわからないと言ったろう。断定するのは早い」

少し、狼狽えた。半ば確信はあったが、証拠のないうちはこの返事も嘘にはなるまい……と思いたい。

目の前の友は言い訳だと見抜くだろうか。不安に苛まれながら、さらに。

「しかも他にも怪しい動きがある。いくら私の魔力が弱まったからといって、こつも急速に異変が生じるはずがない」

逃げ出した軍馬。あれはどう考えても作為的な事件だった。私とて、たかが人間一人に振り回されるような弱小天使ではない。

これは前兆。あの悪魔からの挑戦状、最終通告。  
私とあの悪魔と彼女の両親。それ以外、誰も知るまい。時はもうじき満ちようとしている。

「とはいえ、これ以上の影響を地獄あぢしうに与えるわけにはいかない。だから一時的に繋がり断った。そのために、暫く保つようと魔力を一気に注ぎ込んできたのだ」

「何という無茶を……」

息を吐いたアシュタロスはまだに不安そうではあったが、先よりもわずかに落ち着いていた。

「グリゴリの二の舞にならないようにと、僕は最初に申し上げましたよね？」

「……そんな気もする」

「まったく、貴方ってひとは！ あの時に無理にでも連れ帰るべき

でしたよ」

たとえ苦笑でも、笑顔を見られると安心する。こいつにはいつも苦勞をかけてばかりだな、とふと思った。

「私は、この間に全てのケリをつける。魔力が底をつく前に全て終わらせる」

「……では、僕も手伝いましょう」

「すまないな」

「僕は貴方の部下ですからね。当然でしょう」

本当に良い仲間を持った。何も言わずとも信用してくれる、こいつのそういう優しさが好きだ。

“全て終わらせる”。己の過去のためにも、傷ついた仲間のためにも、私だけが幸福を享受することなどあつてはならないのだ。一生、背負わねばならない罪が私にはある。

故に優先させるべきは、仲間の命を踏み台にして得たも同然の万魔殿。この世界。だが彼女が不幸になることを良しとするのは“最高傑作”としてあるまじき思考。ならば両方だ、両方を救えばいい。

彼女を地獄へ連れてくることはもうしないことに決めた。それは彼女ではなく私にとつての幸福に繋がってしまうから。その上に万魔殿の統治が疎かになった暁には、私は長として最低じゃないか。そうなれば恐らくベル達も私を許してなどくれまい。いや……もう既にベル達との約束は破ってしまったのかもしれない。

しかし私は進まなければならぬのだ。何もしなければよかった、特別な感情など抱かなければよかった、出会わなければよかった。それなら出会う前に戻ろう、彼女に日常を返してやろう。彼女との契約を、勝ち取ってから。

「詳しいことは後で話す。とりあえず今、ひとつ、頼まれて欲しいことがあるのだが」  
「何でしょう?」

計画のために確かめておかなばならないことがある。それは思い出として一括りにするのはあまりに辛い。悲しい消失と忘却、望んだ裏切りの軌跡、そして……そして、金色の幸福が還るのも、もうすぐ。それは、彼女がいなくなった後に心を埋めてくれる……はずもない、か。

ああ、我ながら汚らわしい!“楽園”を血で染めた罪を忘れたわけでもあるまいに、己は!

そんなことだから私は最後まで純粹な《光》であることができなかったのだ。苦い思いを心の奥に留めて口を開く。

「アシユタロス……天界に、行ってきてくれ」

## 第8話・目覚め

一日目。ずっと彼は眠ったままだった。少なくとも、あたしが起きている間は一度も目を覚まさなかった。それでも前日より容態は良くなっているみたい。そっと額に触れてみたけど熱は下がっているようだったし、呼吸も規則的なものに落ち着いてきていたから、氷嚢ひやうすいも外し、冷えたタオルよりも温めたタオルで汗を拭いたり、季節外れのちよつと高いりんごをひとつ、いつでもすりおろせるようにまな板の上に準備しておいたり。その日はあたしもソファアの傍で座ったまま睡眠をとった。寝るつもりはなかったというのは主張させてもらいたいところだけど、彼の様子が安定してきて気が抜けたのも事実。うなされることもなく本当に静かな眠りだったから、夜中に起きるといふこともなかった……のは良いことなのかな。

二日目。数時間おきに眼を開けた彼と、会話をした。といつても、「学校に行ってくるけど、大丈夫？」に返された「うん」と、「ご飯は食べられそう？」に返された「いや」の二言だけ。微睡まじろみの中、あたしと視線を合わせることさえしてくれずに、彼は目覚めている貴重な短い時間をずっと天井を眺めて過ごしていた。

食事は摂らないけど水だけはどうか飲めるみたいで、一応はと用意しておいたボトル入りのスポーツドリンクが少し減っていた。探るようなことはしたくないのだけど、恐らく彼はあたしが寝ている間にも何度か目を覚ましていたのだろう。わざとなんかではないんだと信じたいからか、日中の寝顔が狸寝入りに見えることはなかった。本当のところどうなのだかは知らない……別に、知りたいとも思わない。

穏やかな寝顔は幸せそうで、それが逆に辛くなる。意志がなければ立ち上がることはできない。気の遠くなるような年月を生きてき

た墮天使様の顔には時々あどけない影さえも窺えて、夢の世界にいた方がどんなにか心が休まるのだろう、目覚めることを諦めないで欲しいと思う自分と、それさえも彼を苦しめるのじゃないかと迷う自分と二律背反。そして彼は　あたしの大好きなひとはとても疲れていたのだと、改めて思う。

三日目。起きている時間が長くなる。彼は相変わらずソファアの上に仰向けに寝そべったまま、腕を伸ばして何やら手を動かしていた。手の中は空っぽなのに、まるで棒のようなものを弄ぶように、くるくると細い指を動かす。

くるん、ぱしん。くるん、ぱしん。

やわやわと奇妙な手の動きは怪しいといえれば怪しかったが、天井を見上げた目には色がなくて、何かにとりつかれたかのように頻りに手を動かして続いていた。そこに声をかけることなんてできなかつたあたしは、ただ普段の生活をできる限り心がけた。

四日目。前の日と同じように腕を伸ばし、今度は本当に物を……テーブルにあったボールペンを弄っていた。くるん、と回して消したかと思えばテーブルに出現させ、と次の瞬間にはひゅん、と指を折り曲げて手元へ戻す。飽きもせず黙々と、一見して無駄にも思える些細な能力行使。だからそれは暇潰しというよりも、リハビリに近いように見えた。

ずっとソファアに寝ているのは辛くなってきたらうか、とあたしはタイミングを計って自分のベッドに移ることを何度か奨めたのだが、断固として拒否された。「ここでいい、ここがいい」って。単に女子のベッドに寝ることに抵抗があるとか、一年間の生活を鑑みるにそういう思考の持ち主でないことは確かだ。

水だけは、相変わらず口にした。とうとうおかわりを頼まれた時に再度何か食べないのかと尋ねたものの返答は変わらず、「水は生命の源だろう」と、そんなことを言っていた。

そして、倒れてから五日目の今日。

ルシフェルはようやく体を起こした。ぼさぼさの黒髪、極端に蒼白な顔色。それでも水だけで数日を過ごした割には、思ったほど痩せかけてはいなかった。まあルシフェルがこれ以上痩せたら、本当に病的なガリガリになってしまっただけだ。

幸いにも今日から夏休み。講習もなく学校は休みだったから、彼が起きた時にちゃんと傍にいられた。

「……よく寝た」

どうにか自力で身を起こし、ソファアの上に胡坐をかいた彼の第一声がそれだった。安心するやら呆れるやらちよつと腹立たしいやらで、あたしは思わずため息を吐く。ぼんやりしている顔は、それでも、朝の光に照らされてとても美しかった。

長い間閉ざされていた瞳にいつもの鋭さはなかったけれど、その代わり、どこともない　しいて言えば自身の手元の一点に視線を落としていたから、すごく円やかでやわらかくて……脆い印象を受けた。

「……力を、使い過ぎた」

「えっ？」

予想に反して先に口を開いたのはルシフェル。ぼさぼさと、言い訳がましく。

「思ったより犯人を捜すのに手間取ってな。こう……万魔殿全体に意識を発散させていたら、魔力を消耗するのが速くて」

犯人……あの、軍馬を逃がした？

意識の“発散”。なるほど、その言い方はわかりやすいかもしれない。あたしはかつてルシフェルの体を使ったことがあるが（お互いの中身が入れ替わってしまったのだ、どういうわけか）、その時に自分の周囲に感覚の系のようなものが無数に張り巡らされているのを感じた。本人曰く、その系で他のモノの存在に“触れて”干渉するのだそう。あまりに危険だからあたしは実践はしなかったけど、今回はそれをセンサーのように働かせたということなのかもしれないと思った。

「犯人って捕まったの？」

「あ……うん、まあ」

消え入りそうな声で呟くと、そのまま彼は洗面所へ。顔でも洗いにいったのか。怠そうな足の運びだったが、しつかりとまっすぐに進んでいるのを見て、少なくとも一から十まで空元気ではないとわかる。

一方のあたしは台所へ。ちょうど朝食の準備をしようと思っていたところだったのだ。冷凍しておいた米をレンジで解凍し、昨日の残り物の豆腐ハンバーグに根菜の炒め物を添える。フリーズドライの卵スープの素は、ご飯と煮てルシフェルに雑炊を作ってあげるためのもの。簡単なものになってしまっけど起きたのが急だったし、と心の中で言い訳を呟いてお湯を沸かす。それより何より、ルシフェルが少しでも元気になってくれた嬉しさと安堵感ですごく楽しい気分だった。誰かのために料理するのは本当に嬉しい。

それにしても、たったひとりを捕まえるために彼はどんなに力を使ったんだろう……というのは失礼かな。万魔殿は広いから大変だった？ それとも犯人が手強かった？ でも魔王が、墮天使長が、こつも簡単に倒れてしまうものだろうか？

けど、とにかく。回復してくれたのは良いことだ。ルシフェルが何も語らないのだから、これでいいに決まってる。またいつもの生

活が始まるに違いないんだ。

早く朝食をでかしてしまおうと台所に立つあたしの背中に声がぶつかる。

「ああ、あとな」

「うん？」

「私の分の食事は、要らないから」

「……は？」

耳を疑った。食事が要らないって言った？

「ま、まだ食べられないの？ 具合悪い？」

「いや、そうじゃないが。単に不要だと言っている。これから先も」

「え、ちよっ……！」

なんだ、どういうことだ。あの超がつくほどの食いしん坊が。あの無限の胃袋が。

思わずお椀を取り落としそうになる。レンジから、解凍終了を告げる場違いな音が響いた。火にかけた愛用の鍋の中で、お湯はとつくにぐらぐらと苛立たしげに沸いている。

顔を拭き濡れた前髪を手櫛で軽く整えながらやって来たルシフェルは、硬直するあたしの横をすり抜けて長い腕を伸ばし、ガスコンロの火を止めた。普段は聞こえないような消火後の微かな残響を聞いたまま、黙って彼の心を読み取るうと見上げるあたしと、小さく純な笑いを零した彼と。

「そんなに驚くなよ。私は墮天使だぞ。人間と違って食べ物を摂る必要がないと言ったろう？」

「それは、そうだけど」

諭すような口調に腹が立つよりも困惑する。何と言ったらいいか。確かにどこにもおかしいところはないはずだ。理論的には当たり前のこと、微笑んだ堕天使が言っていることは正しいのだから、うなずく以外に正解はない。

けど違う、違うよ。ルシフェルはいつもご飯を楽しみにしてたじやないか。堕天使なのに、食べることが好きだったし……あたしの料理を、おいしいって言うてくれたじゃないか！

「……」

でも、結局は彼の論理の前に崩れてしまうこの気持ち、どう表現して伝えたらいいのかわからなくて。何も言えないあたしを置いて、ルシフェルはベランダへ出るための窓を開ける。

待って、行かないで。

どうしてこんなに焦ったような気になるのだろう　　ならなければ、いけないのだろうか？

「私がいると気を遣わせてしまうだろうから、食事の時間は外にいるよ。その辺をうろついてくる」

また後で。

そう言っ飛んだ彼を見送って、あたしは呆然と台所に突っ立っていた。

## 第9話：契約〜彼の場合

頬を撫でる風が心地好い。より澄んだ空気を吸いたくて、川の方へと飛んだ。

飛び立つ瞬間は少しだけバランスを崩しかけたが、さすがは私、既に力は再生し始めているようだった。もっとも、全て戻るにはどれだけの時間がかかるか知れないが。

そつと降り立った川岸の土手。いっぱい伸びた草の若々しい輝きが眩しい。陽光の下、一對の黒い巨翼をしまい、ようやく深く息を吐いた。

……そういえば、この土手は以前も夏祭りの時に来た所だ。彼女と並んで座り、夜空を照らす大きな花火を眺めたのだったか。そんな場所に来ていたことに気付いて、私は苦々しい思いを禁じ得なかった。

“ 来年も一緒に来たいな ”

そう笑った少女に私は確かにうなずいたのだ。だが。

「 ……悪いな。約束、守れそうもない 」

ひとり、呟く。もうさつき嘘を吐いたというのに、我ながら未練がましい。魔力を消耗したのは犯人捜しのためではない。本当のことを言わなかったのは心配させないためではなく、ただ知られなくなっただけだった。これは私の我儘だ。一つ嘘を吐こうが、百の嘘を吐こうが、染まることのできる純白の余地は己にもう残されてはいないのに。

私の幸福のために彼女を救うのではない。彼女の幸福のために私は傷つかなければならない。それが“墮天使長”のために傷ついた友のための償い、私自身の過去へ対する……償い。

今更、というのが相応しいか。かつて自分で呪った焰 “人間” に関してここまで振り回されるとは、なんと滑稽なことか。様々な不吉を運び込むのは彼女を縛るあの悪魔だが、そもそも彼が真子を縛ることになった大元の原因は私にある。

と、座っている私の片手に何か冷たいものが触れた。思わず手を引くと、そこにいたのは一匹の子犬。どれほど自分はびくついていたのやら、と照れを誤魔化す苦笑が漏れた。

迷い子だろうか。見回してみたが周囲には誰もおらず、よく観察してみると首輪も着けていない。

「……ひとりか？」

尋ねれば、悲しそうな鳴き声をあげながら頻りに鼻を押し付けてくる。なるほど、あの湿ったものの正体はこれだったか。

茶色の毛並みの、小さな犬だった。どうやら気に入られてしまったらしい。薄汚れた毛をゆっくり撫でてやると、余計に身を寄せてきた。

悲しみが、伝わってくる。何故自分だけが そう叫ぶ気力さえ失った哀れな心。孤独……虚無感。

私は頼られることが好きなのに違いない。寂しさに同調しているなどと自らの内だけで説明を加えるのは、自分でも間抜けなことと思うし、悲劇の英雄を気取るなんて考えただけで虫唾ものだというのに。 ああ、どうして私の思考はこうも“煤”に塗れている？

この身に宿る命は聖なる炎によって生み出されたものではなかったか。

「……お前は、世界が嫌いか」

己を暗く寒い隅へと追いやった世間が嫌いか。人間が嫌いか。私でよければお前の声を聞いてやるから。少しの間でよければ傍であたためてやるから。それが一時的なその場凌ぎであれ、さらに先の辛さを増させる温もりであれ、他ならぬ私にこの迷い子を見逃すことがどうしてできよう？

「壊れる前に心を解放しろ。でないと……私のようになるぞ」

私の声は届いたろうか。お前の声は届いているよ。お前の灯は強く、美しく燃えている。……

こんな私でもこうして動物には好かれるのだ、昔から。

人間にも？

不意に浮かんだ疑問を打ち消す。馬鹿馬鹿しい！ 好かれていたら何だというのか。“私は人間を呪った”のだ。我が能力を以てしても覆すことのできない厳然たる事実、史実。あの時も心は決して穏やかではなかったが、これほどまでに悔いる日が来るとは一体誰が想像できたらう？

だからこそ、だ。“二度目の”だからこそ、なのだ。私は少女を見殺しになどしない、しかしこれ以上親しもうとも思わない。思っってはならない。

少しずつ、少しずつ、用意を進めねば。彼女を縛る悪魔に感付かれる前に……時が来てしまう前に。

これでいいのだ、何もかも。私ひとりが我慢すればいい。私だけが罰を受ければいい。同じ過ちを繰り返すものか。

彼女の泣き顔を見るのはもちろん辛い。もしかすると、私のせいで彼女は泣くかもしれない。それでも……傍にはいられない。やる

べきことをやったらもう……でないと、これ以上彼女の顔を見ていたら私は、私はきつと彼女を

(『 殺してしまう、か? 』)

「……!」

突如として頭の中に響いた声に、思わず手を止めた。不思議そうに見上げてきた犬と目が合う。黒く、潤んだ瞳。跳ね上がる鼓動。この耳障りな音は血潮が満ちる音が、引く音が。

皮膚を切り裂く自分の爪。悲鳴。剥き出しの肉塊にほとばしる血潮。死臭。真つ赤に濡れた手のひら。血の海を前に私は嗤い…

…

「っ!」

次瞬、私は反射的に身をひねった。

深々と土を抉る右手。これが生き物に突き刺さっていたかと思うと身の毛がよだつ。犬は怯えたような悲痛な声を上げ、どこかへ駆けていってしまった。

それさえ遠くに。体の中を廻る水流の音にも紛れない甘く冷たい囁きは、永い眠りを思わせないくらい滑らかで生気に満ちている。

(『 惜しい。せつかくの血が 』)

脳裏に焼き付く幻影の赤い色。久しく嗅いでいない戦場の匂いが蘇る。ぞわぞわと背中を這うような気持ちの悪さは寒気であつてくれ。断じて興奮ではないと、誰か。

思考を引つ掻き回され、怒りと恐怖に体が震えた。それでも忌々しいことに“彼”とは鼓動が重なっているのだ。何せ我々は……“契約者同士”なのだから。

「あ、あ……っ」

しかしあまりに急過ぎるじゃないか、卑怯者！ 出てくるな、せめてあと少し、あとほんの少しの間だけでいい……！

右腕が、言うことを聞かない。懸命に左手で押さえつけながら、歯を食い縛り目をきつく閉じる。他の生き物が見えないように。…  
…“獲物”が視界に入らないように。

(『言つたはず。いつか貴様を殺してやる、内から喰らい尽くしてやると』)

声が、聞こえる。契約者であり最大の敵でもある“彼” 否、“私”を名乗る“悪魔”の、久しく聞いていなかった冷たく甘美な呪詛。それが自分の内側に直接響いてくる。

「まさか、力が？」

(『まだ完全ではないがな。たかが腕一本が限界だ』)

争うべきはこの肉体。かつて自分は生き延びるためだけにこの悪魔に大切なものを捧げた。記憶もそのひとつ。きつと愚かな私の、その中でも最大の、失敗。

通常の契約は情を挟むことなど無為の、無味乾燥な遣り取りに終始する。求める側が対価を捧げれば(余程の場合でなければ)力が貸与され、目的達成の暁には力を失い、対価を支払い、また縁も切れる。だが我々の契約は、利害の一致に基づく合意であると同時に敵対の始まりでもあった。互いの存在を認めることが自己の存在意義を揺るがすことに繋がってしまうから、我々はどちらも交渉の際に譲れぬ領域を開放することを一度たりともしなかった。だから少しばかり特別な“契約”をする羽目になったのだ。

過去、対価を捧げた灯は再び燃え上がった。現にこうして私は生きています。しかしそのおかげで終に灯が消えるより前に、私と“彼”、どちらが殺されるのが先か……常に命懸けの奪い合いを引き摺り続ける運命を負った。

事の仔細は、同朋でさえも知らない。

折れんばかりに押さえつけた甲斐あつてか、ようやく感覚が戻り始めた右手に安堵する。と同時に、目の前が暗くなっていくのを感じた。まだ、と言ったいうことは。

(『今回は警告をしにきた』)

「警告？」

未だ緊張を解くことのできないままに問えば、呆れたような小さな溜息が聞こえる。不思議と挙動がいちいち馴染む気がするのは、誰よりも永い間を共に過ごしたからだろうか。まるで違うイキモノだというのに……苛立たしい！

(『人間の小娘が何だ、弱小天使が何だというのだ。他の悪魔にかまけるなよ臆病者。貴様の相手はただひとり、この私だ。……何を迷っている？ 簡単だろう、世界を壊すことくらい。貴様は既に“神を殺したのだから”』)

「黙れえっ!!」

堪らず叫んだ。残響が、川面に吸い込まれていく。

恐ろしいことを。世界を壊すだと？ そんなことをしたらここに生きる者が 彼女が。

(『裏切り者めが。何を今更になって躊躇っている？』)

「違う、あれは私でなくお前が……」

(『違う。貴様は既に堕ちたのだ。過去の罪は消せない』)

「嫌だ……嫌だ、嫌だ！」

頭に鋭い痛みがはしる。まずい “ 吞まれる ”。否定を無視を断絶を。早く、早くこちらへ。己の意識をこちらへ！

過去の話など聞きたくない。見たくない。認めたくない。知るな……私の過去を、私以外が知るなっ！

「あ、がつ……！」

（『……時間切れだ。チイツ、動きにくくてかなわない。以前よりも強いこの鎖、貴様によるものではないな……？』）

悪魔が、何か言っている。見えないはずの視線が怖い。

（『……まあ良い。《光の子》、また私は暫く眠る。次に目覚めた時には片腕だけでは済まないぞ』）

耐えきれず崩れるように身を丸めた途端、またしても唐突に体が軽くなる。ふっと、押し掛かっていたものが消失したような。

息を整えながら恐る恐る目を開けると、土で汚れた右手と、白くなるくらいに力を込めてそれを押さえつける左手が見えた。もう声は聞こえない。視線も、感じない。

そつと手を離して汗を拭う。まだ動悸は治まらないが、とりあえずは保ったか。頭痛も徐々にひいていく。

暫く眠る……、と。本人が言うのなら、多分そうなんだろう。奴は暫くは来ないはずだ。

まったく、厄介なことになった。

いつかは来るとわかっていたが、今回は確かに自分にも非がある。“彼”は契約の時に言っていた 「貴様が最も弱った時を狙う」と。つまり私の魔力が不足したところを、もつと言えば精神的な負

担が大きく膨れ上がってくるところを見計らって仕掛けてきたということになる。その程度、私は予測できているべきだった。

悪魔をひとり相手にするだけでも手一杯だというのに、この上更に、か。おまけにあの「次は片腕では済まない」という言葉。……否、気にするな。こちらとて、次に向こうが目覚める時までには迎え討つ準備くらいできていよう。この肉体は渡さない。

そう、これが私の罪の重さ。“彼”の存在そのものが《光》と呼ばれた大天使の裏切りの証。一体何度……いや何度でも、恐らくはこの命尽きるまで。大罪を犯した者に、幸福になる権利などないのだろう。気付けば本当になんと間抜けなことか 資格云々以前に不可能だとは。自分がなれないのなら、せめて他者の幸福を願うことぐらい、赦されて欲しいものだけだ。

私には泣く権利もない。ひとつ、深呼吸。様々な感情の波は全て心の奥に押し込めて、ゆっくりと立ち上がった。

## 第10話：強制共鳴

【From the Underground】

見上げて光が在ったなら、どんなにかましかったことだろう。唯一自由にできる頭をもたげてみても、その空間に終わりがあるはずもなかった。

十字、磔。永い眠りという名の潜伏。すっかり錆びてしまった鎖は、抜け出すことを試みなければ肌を傷つけることもない。どれほどの時間こうしていたのか、男は自分でもわからなかった。

何故、十字架なのだろう。それは単純に起源の話、無防備に羞恥へ貶めるための形状、ただ自由を奪うに都合が良かっただけなのかもしれない。

ともかく彼は晒される。暗闇に潜む数多の視線に、憎むべき“相棒”の監視の前に。

しかし奇妙なことをするものだ、と彼は半ば“相棒”と溶け合った思考の海をゆらゆら漂う。“相棒” 憎むべき《枷》は、自ら鎖を解こうとしているように彼には感じられた。かつて彼を縛った者が、今度は戒めを弛める手助けをしている。自らの信念さえ裏切るうとしていた。好機。だが彼は抜け出すことができない 二番目の鎖があるせいで。

最近は変化が特に急激だ。

一年。人間の時間ではぼ一年前からだと彼は記憶している。微睡から覚めた時には錆びた鎖の上からもう一本、金色に輝く細い鎖が身体に巻き付いていた。驚愕した彼は次の瞬間には怒りに震え、黄金の戒めを引き千切ろうとした。しかし弱々しい見た目とは裏腹に、二本目の鎖には彼の力を以てしてもまったく歯が立たなかった。そのおかげで錆びた鎖までも、その命を保っている始末。

男は焦っていた。このままだと己の存在自体が危うくなる。  
永い眠りは確かに感覚など麻痺してしまうほどの苦痛であったが、  
同時に充分過ぎる休養でもあった。

永過ぎる。

獣は吼える、悪魔は嗤う。二度目の抑圧。解放するのは

\*\*\*

テーブルの上には開いた教科書と問題集と、キャップを外したま  
まのペンと。やりかけの課題をすぐ目の前に置きながら、あたしは  
……震えていた。

あたしはルシフェルが出て行ってから、なんとなく寂しい朝食を  
済ましてテレビをぼーっと眺めていた。ひとりのご飯。ひとりの朝。  
以前と同じ生活に戻っただけなのに、とても寂しい気がして。何を  
するのも気分がいまいち晴れなくて。小さなことだけど、彼のため  
にと出しておいた朝食の用意を片付ける時は惨めさに似た思いも抱  
いてしまったし、食器を洗う水も気のせいかもしれない。冷たく感じ  
られて憂鬱になった。

沈んでばかりじゃいけない。彼には彼の事情があるんだから、悲  
観的になっただってどうしようもないじゃないか。

そうは思えど悶々と。日差しが少し強くなってきた頃やっと、特  
に面白いテレビ番組もないなら気分転換に課題にでも手をつけよう  
と思い立ったのだ。時間がもったいないし、何かに集中していれば  
気が紛れそうだったし。

最初に開いた苦手な数学になんて集中できるはずもなく、あれこ  
れとつまみ食いして落ち着いたのは、比較的得意な英語の和訳問題。

辞書と格闘し続け、始めてから一時間くらい経っただろうか。近頃ルシフェルのことが気になってちゃんと寝ていなかったのもあったけれど、少し休憩するつもりが居眠りしてしまった。

そして、夢を見た。

何も無い真っ暗な空間にあたしは立っていた。夢の中のあたしは、それが夢だとわかっていた。またいつかみたい……彼に係ある夢だということも。今回は隣に彼が眠っているわけでもないのに。

目を凝らす。次第に暗闇の中に浮かび上がるひとつの影。彫刻かと思っただけど、違う。

それは、美しい、黒髪の堕天使の姿だった。何も纏わない、生まれたまの姿。

しかしその筋肉質でしなやかな細身の体は、頑丈な鎖によって縛られていた。淡い光を放つ黄金の鎖は闇の中では一際目立つ。全身をがんじがらめにされ、まるで磔にされているように両手をだらりと広げた格好で、彼は……眠っているのだった。

磔。罪人。封印。何故かそんな単語が思い浮かんだ。

「ルシフェル」

堪らずに名前を呼んだ。声はちゃんと響く。

するとどうだろう。黄金の鎖は解けるどころか、あたしの声に反応するかのようになり始めたのだ。

そしてとうとうきしむほどに締め付けが強くなった時、やっと彼は静かに目を開けた。

地を這うような低い音は唸り声。他ならぬ目の前の堕天使が、あたしがよく見知った堕天使の長が、あの紅眼でこちらを睨み付けて唸っている。暗闇で見えないはずなのに認識できる。捕らえられ自

由を奪われた姿は獣みたいで、鋭い眼差しに足が竦んだ。

『……この鎖は、貴様の仕業か』

あたしの、仕業？

わからない、知らない。どうしてルシフェルは縛られているのか。どうしてこんなにも殺気立っているのか。どうして　そもそもこれは、ルシフェルなのか。

質問してみることはおろか、向こうの問いかけに答えることもできなかつた。全身を貫くような殺気が怖くて、瞳に込められた感情の昂ぶりがあたしをその場に縫い止めてしまったみたいだつた。

美しい紅玉の奥には少年のような好奇心も、いつもの穏やかさも見られない。あるのはただ憎悪、苦痛、そして呪咀。

『答える。私を縛るのは貴様か！』

勢いでどうにか首を振ると、彼は歯を剥き出して低く怒鳴る。

『ならば立ち去れ……今すぐ私の前から失せろ！！』

……そこで、夢は終わった。

あまりの恐怖に飛び起きて今に至る。あれはルシフェルじゃないんだ、ただの夢なんだと自分に言い聞かせてみても、震えが止まらない。いつも隣で慰めてくれる彼もいない。泣きそうだった。

特にあの目。憎んで憎んで、自分が辛くなっても憎まずにはいられなくて……そんな怖い目。けど同時に、とても悲しそうな目だつた。ああ、もしかすると、あたしは怖さを感じているだけじゃなくて、同情してしまってもいるのか？

怖かった、怖かったけど。これはあたしと彼、どちらの思いの結果なのだろうか、落ち着いてきたらそんな下らないことが気になった。というのも昔は夢を見た側ではなく、夢に出てきた側が相手のことを考えているという解釈になっただけで、古典の授業で聞いたのを思い出したから。今の心理学とかから考えるとあまりに非科学的なこと　むしろ夢を見た側の深層心理？　なんかが関わってくるのかもしれないけど、そういう解釈を拠り所にできるならいいなと、ふと思ったのだ

《ドン、ドン》

「っ？！」

リビングの窓が揺れる音にまた飛び上がる。びっくりして見るとルシフェルがベランダに立っていた。マンションの五階のベランダに現れたのが彼ら“人外”でなかったら大問題だけど。直接部屋の中に現れないのは、まだ力が戻っていないからかな。

すっかり見慣れた人間の服を着てぼんやり立っている彼を見て、安心したのは内緒。恥ずかしい。さっき夢の中にいたのはルシフェルじゃないっていうのに、何をびくびくしているんだろう。

それでも鍵を開け窓を開けてから、一瞬だけ身構えてしまいそうになった。そっと見上げた紅い瞳。その光は穏やかだ。でも、こことなくいつもと違う気もする。

瞳が……昏い。

色褪せたように、無機質な紅色。冷たさはないけど、代わりに感情自体をすっぽりとどこかに置き去りにしてきてしまったような。なんだか家を出る前より疲れてない？

「どうした？」

「あっ、いや、ううん！」

ずっと見ていたからか、彼は不思議そうに首を傾げる。慌てて答えたら変な声が出てしまった。そう？、とベランダから部屋の中へと入ってきた彼からは、外の匂いがした。

丁寧に窓を閉めてから振り返った墮天使様と、そんな彼の動きをじっと見つめてしまっていたあたしの視線ががち合う。一瞬で喉元までジャンプするあたしの心臓。この切ない痛みをどうにか伝えたいのに、じっと立ち尽くしたルシフェルの姿はどちらかという戸惑っているようで、特にこちらが口を開くのを待っている風にも見えなかった。実際、奇妙な沈黙を先に破ったのはあたしではなかった。

「……顔」

「へ？」

「顔色悪くないか。何かあったのか？」

さすがは共に暮らしているだけあって、すぐにバレってしまった。それとも自分はそんなに強張った表情をしていたのか。

とはいえ、まさか「怖い夢見たよ〜！」なんて言えるはずもない。小さい子供じゃあるまいし、客観的に見たら笑われたって文句は言えないような理由だ。

「何でもないよ。ちょっと寝ちゃったからかな」

「無理はするなよ……」

整った顔が曇る。些細なことも心配してくれた彼は、あたしに触れようと伸ばした手を……途中でぴたりと止めて急いで引っ込めた。何か思いついて気が変わったみたいだ。

「ルシフェル？」

「いや……汚れてる、から」

確かに片手は泥まみれ。窓を閉めた時も全然気づかなかった。既に白っぽく乾きかけている汚れは土以外には見えない。爪の間に入ると気持ち悪いんだよね、あれ。

土いじりでもしたの？、なんて自分でもあり得るかどうかわいようなことを尋ねようとして、はっと口をつぐむ。汚れた手の、手首の方が帯状に赤くなっている。不自然な形……あれは、指の痕？再びあたしが口を開こうとしたのと、ルシフェルが右手を庇うように隠したのは同時。

「ちょっと転んでしまって」

照れたように笑う。昏い目を軽く伏せたまま。

「洗ってくる」

「あ、うん……」

嘘だ。

わかっていたのに何も言えなかった。洗面所に向かう背中を黙って見送る。

それに、本当のことを言うほどでもなかったのかもしれないと思直した。あたしが夢のことを言わなかったのと同じで、彼も、きつと。

## 第11話：ただ、邂逅の場所にて

嘘を吐かれるということが、こんなにも悲しいことだとは知らなかった。心にぽっかりと穴が空いてしまったような。

ああ、真子もこんな気持ちだったのか。今になって気付く私はやはり愚か者なのだろう。けれど……私はこの方法しか知らない。

見上げた空は漆黒の闇。だのに、視線を下るせば眩しい光の海。我々が展開する魔力光とは異なった、人間が作った無機質な光。それが眼下いっぱい広がっている。

「……貴様らも、充分愚かだ」

生温い風の吹く学校の屋上で、負け惜しみのように呟いてみる。自己嫌悪に苛まれながら痛みを擦り付けようとしてみる。

どうして抗おうとする？ 空は闇を要求しているというのに。所詮貴様らは光ではないのだから、黙って世界の影を受け入れれば良いものを。それでも灯りを灯し続けようとするのは、何故だ。

影、と言うと彼女を縛るあの悪魔のことを思い出す。奴は文字通り影を従えていたから。それは世界の側面、忌避されることは本当はあつてはならない不可欠な要素。だからこそ彼は主に愛されていたのだと私は思う。影を背負ったあの悪魔と対を為す位置に、未だ私が居るのかどうかはわからないが。

初めて彼女を見つけたのもこの灰色の四角い建造物に於いてだった。私と出会うこともなければ取るに足りない小さな存在であったはずの少女はあの日、楽しそうに“悪魔”の絵 我々からすれば馬鹿げた妄想の産物 を描いて見せていた。今思えば何と皮肉なことだったか。

まったく、遠い過去だ。だが確かに……楽しい日々だった……。

今頃、彼女は夕飯を食べているだろうか。一年も地上で過ごしていればわかる。ひとりの食事は決して安らかなものではないことくらい、“家族”というものが彼ら人間にとってどういった意味を成すかくらい。不思議な不思議な“親子”という繋がり、彼女の親にかつて言われた言葉、『頼む』と。それなら今の私の選択は間違っているのだろうか。

そうしてまた昼間のことを思い出した。私を見た時の、真子のあの怯えた表情。『何でもない』？ それで誤魔化したつもりなのか。あれだけ青い顔をして、ふざけるな。

悲しみの次には怒りが沸いてきた。自分はどうだと問いかけてくる声は無視した。

彼女は“私の何を見た”？ もしや私は……知られることを恐れているというのか。醜い本性を曝すことを厭うているというのか。

馬鹿な、何を焦る必要がある。私は最後まで光明であるのだ、きつと“最期まで”光で在るのだ。一度は潰えたこの命、次に死ぬ時は《光》として死ぬと、私は心に決めている。

だが、その最期の時が彼女のために捧げられて良いものか、私にはまだわからないまま。否、その正当性を認めて自分を納得させることができないのだ。救いたい、それは確かだ。しかし我が身を“あの方”以外の糧とすることを、過去を抱き込んだ私の自尊心は受け容れられないに違いない。そうして迷っている間にも運命の時は近づき、そうして苛立ちが募っていくばかり。

大体……、と。あの親子が、いつそのこと、嫌いだ。どうして私を巻き込んでくれた。どうして彼女らは全てを忘却の彼方に置き去りにすることを許してくれなかった。何故、私が面倒を見なければならぬ！

「……………」

震える息を吐き出して目を閉じる。いけない、冷静にならなければ。

ひとりでいるとここまで強気でいられるし、大義のための冷酷な決断も容易。過去の信念を貫くことだって覚悟できる。それなのに当人を前にすると弱気な自分が顔を出す、迷いが生まれる。らしくないと自覚すらしているから一層、ひとりになった時に苛立つのだ。そう、そうだ、覚えている。面倒を見るというのは、責任を持つというのは、最初は彼女の両親とやりに頼みこまれたにしろ結局は私が自分から言い出したこと。まったくもって馬鹿げている。

深呼吸。

少女がいる部屋に帰る気にはなれなかった。かといってこのまま夜を明かすのも出掛けの言葉を破ることになる。完全に回復していない状態であり派手に動き回るわけにもいかないし、果たしてどうしたものだろう。

何をするでもなく、そのまましばらく光の海を見て立ち尽くしている。キン、と何かが来る気配を感じた。瞬時の緊張。あらゆる感覚を研ぎ澄ませ、万が一に備えて周囲の“糸”を通じ意識を集中させる。この気は

「アシュタロスか」

振り向かずに、詰めていた息を吐き出す。微かに布が擦れる音がして、返ってきたのは予想通りの柔らかな声。

「ここにいらっしやいましたか、ルシフェル様。真子さんの家ではないだろうとは思っていましたが」

「よく探せたな」

「貴方の気を僕が見失うはずがありません」

傲慢な声音に少し笑う。さすがだ。

「貴方の気配は、いつだって金色をしていますから」

本当に？ 問いたくなつた衝動を飲み込む。私が何を言おうと、アシュタロスには必死で応えようとしてくれるだろう。無駄な労力は必要ない。私の翼が黒いという事実は変わらないのだから。

「天界へ行つてきてくれたか？」

「はい。時間がかかってしまつて申し訳ありませんでした。黎香さんに怪しまれないよう、数回に分けて調査へ行つたものですから」  
「構わん、ご苦労だった。私が行くのがいちばん速いのだが……」

アシュタロス達に実際に言葉にして伝えたことはいないが……天界に行くことだけは、どうしても、私にはできなかった。如何な罰を受けようとも構うまいと思つてはいるものの、あの場所へ降り立つことを考えただけでも足が竦んで、どうにも動けなくなつてしまふ。悔しくも認められる唯一の不可能と言つても過言ではないかもしれない。

行く必要も、ないのだけれども。

拒否反応などとするのは生温い。何か別の力が働いているのではないかというほどなのだ。どんなに気合を入れようと故郷へだけは絶対に行くことができないから、本当にあそこは、墮天使としてそれきりだった。だからだろうか、部下の墮天使達も私を知る限りでは一度も天界へ行こうとする者はなかった。

今回はかなり特殊な事態だったと言えるだろう。私に天界行きを命じられたアシュタロスも、初めのうちは異様なくらいにひどく狼狽していた。

「して、どうだった？」

「思っていたような異変は何も。ルシフェル様が仰ったような、その……“端”に関しても」

近づいてくる足音。それでも振り向かなかつた。遂に横に並んでから、やっと視線を隣へずらす。

友であり忠実な臣下である大切な仲間。私より少し背の低い墮天使は、また不安げにこちらを見上げてくる。闇夜に映える銀髪が綺麗だと、そんなことを思った。

「あの、ルシフェル様。これはやはり“煉獄”が何か  
「さあな」

私が再び街を見下ろして返事をする気がないことを示すと、それきりアシユタロスも口をつぐんでしまった。

淀んだ風が吹き抜ける。あまり気持ちは良くない。もっと澄んだ風の吹く場所を、私は恐らく知っている。

「……この光景を見て、お前は何を思う」

疑問には答えずに、逆に問うた。

そうですね、と呟き、ほんの少しの間をおいて。

「……眩しいです」

小さく零してアシユタロスは笑った。細められた瞳は優しい。天界を追われ堕ちた身であれ、我々はきつと慈愛の心を失ってなどいないのだ。それでも、すべてに分け隔てなくその優しさを向けることのできる友のことが少しだけ羨ましくもあった。

「僕らとは違う光です、当然。けれど彼らも必死なのでしょう。本能か……彼らとて闇に呑まれるのは怖いはず。だからこうして灯を点ける。人間が、それを意識しているかどうかは別ですが」

「……」

「ルシフェル様？」

急に、理由もわからず笑いたくなくなった。大声で、何も気にしないで。

何もかも意味のないことのように思えてきたのだ。私がどんなに気を揉もすが、世界の理に近づこうとしようが、血を流そうが。見る、と自分に言い聞かせる。見る、世界は進んでいく！

「どう、なさいました？」

「アシユタロス……」

世界は廻る。人間一人消えようと、きっと何事もなかったかのよう。ただ一人の少女がこの世界から消える、それはほんの些細なこと。何もかもを押し流してしまいかねない運命の流れに比べたらとても些細な、取るに足りないこと。

それなのに、どうして私はこんなにも悲しい？

「不甲斐ないな、私は」

小さなたつたひとつの繋がりに縛られて、かつての心を失ってしまった。傷つくまいと造った壁が崩れていく。私が、私でなくなっていく。馬鹿げている……そう思いながら、懲りもせずに後悔をして。

守ると約束した相手に何かあつたら大変だと思っているのに傍にいられない。怖いから。自分を抑えられる自信すらないから。本当に治めねばならないのは地獄ではなくて、自分の心なのだ。それが、

私には……

「ルシフェル」

静かな声が。芯のある、それでいて優しい声が。

「そつやってひとりで抱え込もうとするのは、貴方の悪い癖です」

そつと手を握られる。驚いて隣を見ると、穏やかな微笑がそこにはあった。

見上げているのにこちらを宥めてくるような。それが一瞬だけ嬉しくて、目の奥が熱くなって、ずっとずっと……悔しい。

「もつと僕らを頼ってください。貴方は貴方でいい」

繋がる手と手。どこか懐かしい感覚。

そつだ、以前にも。誰だったろう、同じように繋がっていたのは彼女ではなく、もつと昔の。私はその温もりをとて愛しく思っていた気がする。小さなあたたかい手。あの手を私は、何があるかと離すものと強く握りしめて……向こうも私を頼って……

金色。

私ではない、金色。

「ルシフェル？」

守ると言った。誰を？

傍にいたと言った。今と同じように？

だがそれは果たされなかったに違いない、今ここに愛しい温もりが存在しないのなら。では私は “何を忘れてきた”……？

「私は、私を知らないんだ」

気付けばそんなことを口走っていた。

「全て、私がやらなければならないのに……っ」

皆、この私が背負わなければならないのに。  
繋がれていた手を離す。自分の心音が煩くて、堪らず両の耳を塞いでしゃがみ込んだ。

慌てて同じように片膝を着いたアシユタロスの悲しそうな顔。聞こえてしまう震える気付の声に己の弱さを呪う。何度目だろうか、こうして心配をかけてしまうのは。

ああ、そうだ、忘れるな。この命は己だけのものではない。こいつらのためにも、私はやり遂げねばならないのだ。

「お願いです、僕らをもっと頼ってください。もう貴方が消えるのは嫌なんです、だから……！」

顔をあげた私が助けを求めているかのようにアシユタロスには見えなかったのかもしれない。悲痛な表情を見た時、泣き出しそうな紫苑の瞳を見た時、とうとう悟ってしまった。納得と失望に呻く。

こいつは 私の知らない私を知っているのだ。

「お前は、天界での私の様子を記憶している」

低く言えば、華奢な両肩が微かに跳ねた。

「私ではない金色の光を知っているか」

「言えません」

「命令だと言っても？」

「……言えません、“我が主”よ」

答えているのと同じことだと気付かないのだろうか。否、聡明なこといがわからないはずがない。それでも忠臣は自身の口で語ることを頑なに拒んだ。

一気に襲ってきた脱力感に身を任せて冷えた地面に腰を下ろし、苛立ちから無意識のうちに片手で頭を掻き毟った。重たい確信は思いの外すんなりと胸の奥に落ち着く。返還されかけている対価は、なかなかどうして真実であるらしい。ならば私には本当に時間が残されていない。

「……それがお前達の忠義の証か」

「申し訳、ありません」

だとしたら、この身の生まれを思えば一層、それは惨いことだ。

部下に重荷を背負うことを手伝わせ、気を遣わせて……その時点で私は既に長失格だろうに。

目を伏せられたことが逆に辛かった。……けれど多分もつと辛いのは、こんな長についていかねばならない彼らの側だろう。忘れるな、私は主以外に頭を垂れぬ。八つ当たりをしそうになった己を恥ずかしく思いながらゆっくりと首を振る。

「……良い、謝るな。己の役割も満足に果たせない私が悪いのだ。

責任を放り出すわけにはいかない……きつとすぐに終わらせるから」

私がやらなければ。

そう呟いた時、アシュタロスが少しだけ顔を歪めたように思えた。だが今度は向こうが首を横に振ったのは間違いなかった。どうしてだろう、何を否定しているのか。私はそれほどまでに頼りなく、言

葉も信用ならないというのか……？

「申し上げたはずです。僕は貴方にこの命を捧げると」

知っている、憶えている。もったいないくらいの仲間を持ったと今でも変わらず思っているのだ。こんな風に言ってくれるから、私は安心して皆に後ろを任せて事にあたれるんじゃないか。今更、それが一体何だと？

「貴方は我々を信用してくれていますか？」

「何？」

本当に今更なことを言う。目の前で睨むように瞳を潤ませている友が何を言いたいのか、長い付き合いがあるというのにさっぱりわからなかった。

「ルシフェル、僕は貴方が考えているよりもずっと小物なんです。

自分で護ると決めたひとが他人に救われるのが、厭なんですよ」

「……訳がわからない」

「僕は貴方の力になりたい。それだけが望みです」

危なっかしい、とても。肉体的にも精神的にも頑丈な奴ではあるが、このまま行動させてはならないと何となく直感する。

確かに平素からの毒舌家ではあるけれども、こんなに引きつった微笑を放っておいて良いものか。“主君”にすべてを捧げると誓う気持ちは相手が違えど共有できていると思っていたのだが、私は本当はこいつのことも何ひとつわかっていなかったのかもしれない。

それでも託されたのは私なのだ。過去の友　かつて同胞であった天使から、この真面目で心優しい友のことを頼まれたあの時も、むしろ私は自分から背負うと宣言してやった。だからこれも最後まで

で。

「アシユタロス、ひとつ、命じるぞ」

「はい」

「私の指示があるまで勝手に動くな。いつも通りの生活をここで送り、そして待機していてくれ。くれぐれも……煉獄に行こうなどとは考えるなよ。あれはお前に抑えられるものではないこと、わかっているだろう?」

「そうですね」

「私に任せるんだ。手伝いが要る時は呼ぶから」

素直と見せかけて、その返事とはとてつもなく軽いもの。嘆息。だが今はこいつと、自分の言葉の重みを信じるしかない。

私が真子のもとへ戻れば、アシユタロスもすることがなくなつて黎香のところへ帰るだろう。促して夜の街に飛び立ち、しばらくしてから能力を使って確認した時は、向こうもちゃんと居候先へ帰宅の途を辿っているのを感じ取ることができた。

## 第12話：禁断の恋？

【From the Background】

《輪廻》。ふたり、同時に消えるの？

うん。でも、できない。

また選択して、また後悔するんだ。

そうだね。だけど今回はまだだ。まだ彼は世界にお別れして  
いないから、消すのは少し待つことにしよう。昔の彼はすごかった  
んだよ、本当に。

今でも。

うん、わかってるよ。だからむくれないで。

なんで、ダメなの？

彼はすごいけれど、僕が求めているのとは違うんだ。

忘れちゃったの？

多分ね。時間というのは恐ろしい。やり方もその心も……も  
う昔とは違うみたいだ。

それでも、行くの？

当たり前だろう。それが僕の役目、存在する意味。

どうして。

“今回の”世界は結構好きなんだよ、《世界》。それに理由  
なんて決まっているじゃないか。僕が、そうしたいと望むからだよ。

\*\*\*

「ねえ、真子ちゃん」

放課後の喧騒の中で話しかけてきたのは奏太だった。

今日は講習。夏休みとはいえ、さすがに高校三年生に長期の休暇はないのだ。

ハードな授業にヘトヘトになって、ああそれでも文化部は今から部活が大変だなあ……なんて思っていた時。あたしの前の空いた座席に座り、爽やかスポーツ少年がこつちを振り返った。また同じクラスで過ごすことになった彼は相変わらず乙女より乙女で、それでも同年代のみならず後輩からも慕われている。うーん、少し髪伸びた？

「最近、ルシフェルさん元気？」

「えっ？」

きちんと膝を閉じて小首を傾げた友達に思わず聞き返してしまう。唐突だな。あんまり心の準備ができてないんだけど。

「ん、まあ元気ってば元気だよ」

倒れたのは数日前だし、まったくの嘘にはならないよね、と本当は単に言えないだけだったり。

あたしはどうとでも取れる返事をして場をやり過ごすつもりだったのだが、いまいち奏太の表情が晴れない。単に久しく会っていないからといって尋ねてきたのではなさそうだ。

「えーと……どうして急に？」

「いや、あのね、……俺、いっつも朝はジョギングしてるんだけど」

おお、偉いなー。

インターハイを目指していたバスケット部だったが、残念ながら他の部と同時に初夏に引退してしまっていた。だから部活のためじゃなくて、自分で体を鍛えるために走ってるんだね。運動不足な生活を送っている身としてはそれはもう感心の一言に尽きる。すごいな奏太。でも……それで？

「この間も川沿いの道を走ってたのね。そしたら土手のところに誰かがいるのが見えて、朝から珍しいなーと思って確認したら……」  
「ルシフェルだったの？」

うなずかれる。多分あたしの朝食の時間のことだろうとわかったから、そんなに驚きはしなかった。気にかかるのは、奏太の困ったような表情。

「まさかあんな綺麗なひとを見間違えるわけないじゃない？ だから、あれは絶対にルシフェルさんだと思うんだけど……」

「うん」

「声をかけようとしたわよ、もちろん。でも……なんだか様子が変わったのよ」

「変？」

ゆるゆると、不安感が足元から上ってくるような気がした。

そこで言い淀まないで。またいつもみたいに天然ボケをかましてたって、苦笑しながら言っただけなのに。

「あの、ね、なんて言うか……何か小さい声でぶつぶつ言ってるけど、しかも、こつ……体を震わせながら、まるで何かを堪えてるみたいだったの」

「堪えてる？ 震えながら？」

「そう。それから誰もいないのにいきなり“黙れ!!”って大声で怒鳴って。もー、あんまり怖い顔してるから、思わずスルーしてきちゃったわよ」

最後は恥ずかしそうに言う。

あたしの頭をよぎるのはあの夢。鎖で縛られ、別人のようにあたしを睨み付けていた彼。……まさか、あり得ないよ。

「それで、元気にしてるかな、って。人違いってことも、なくはないかもしれないし」

『変っ！ 変だよ真子ちゃん!!』

ところが突如として会話に参加してきたのは元気澆刺ポニーテール娘、黎香。相変わらず神出鬼没だな。

小柄な彼女はパンツと机を叩き、全体重を乗せんばかりに身を乗り出して訴えてくる。

「どっしよつかね諸君?!」

「どっしよっ……っ、何が」

「アッシュのこと!」

アシュタロスさんにも何かあったのだろうか。

顔を見合わせるあたしと奏太に、黎香は泣き真似をしながら言う。

「アッシュが浮気してるんだよぉ〜!!」

「はっ?!」

内容の、あまりの落差に口を開けてしまった。う、浮気だって?

「最近、毎日毎日どっかに出かけるの。帰ってくるのは夜遅くだし、

どこに行くのか聞いてもはぐらかされるし……」

あなたはアシユタロスさんの妻かい。色々突っ込みたいけど、当人は真剣に悩んでるみたいだからやめておく。

そういえばあたしは、ルシフェルが毎回食事の時にどこに出かけているのかわからない。そうそう繰り返して川沿いへ行っているわけもないだろうし、人間の服を着たままベルフェゴールさんのいるような万魔殿へ行くはずもないし。今度聞いてみようかな、答えてくれるかどうかはわからないけど。

「どうしたらいいかなあ？！ 黎香、ヤダよつ。アツシユを誑かす輩はこの黎香様が許さんぜよーッ！」

むきいー！と、もはや嫉妬心丸出し。まだ浮気って決まったわけじゃないだろうに、その白ハンカチは一体どこから取り出した。

……まあ、それだけ黎香にとって、アシユタロスさんは大切な存在だっということなんだろう。仮に“そういう”関係じゃなかったとしても。あたしも、その気持ちはなんとなくわかる。それに一年間も同じ屋根の下で共に過ごしてきたのだ、もうそれは家族と似たようなものじゃなかるうか。彼女の場合、あたしよりも心配のベクトルがぶっ飛んでいるのは認めざるを得ないが。

「ふぬう〜！ おっしや、発信機とかつけちやるかつ？！」

鼻息荒い昼ドラ妻 というより興奮状態にある牛馬？ を諫

める。やめれやめれ。っていうか、彼なら恐らく気付くぞ。アシユタロスさんが怒ったら……にこにここと怖い笑顔で小型の機械のひつつやふたつ、片手で握りつぶしてしまいそうだもん。だって武人だし、魔王様のお目付け役だし。

見た目は全然そうは見えないんだけどなあ。いつもの緩いローブ

を脱いだ時に、むしろ華奢だったのが印象に残っている。浴衣姿なんてルシフェルと並んでも見劣りしないくらい本当に美人さんだった。

「ま、アシユタロスさんも美形だからねえ」

と何気なく思ったままを口にすると、

「ふええ〜ん」

あ、ヤバ。今度はだばだばと目から滝を放出させ始めた黎香に、内心ちよつと慌ててしまう。そんなつもりで言ったんじゃない……！

「な、泣かないでよ黎香ー。ね、奏太？」

「そ、そうよ。黎香、もっと魅力的な女を目指しましょ！」

汗を垂らしながら引きつった笑顔でフォローフォロー。沈黙。そのまま黙って奏太を見ていた黎香だったが……

「…………黎香は今でも魅力的なのがいい〜!!」

うわうわわわ、滝の水量が倍になったよ。何故そこで泣く?!

「おろろろろ〜!!」

「ごっ、ごめんって！ えと、ほら、今よりもっとよ！ ねえ真子ちゃん?！」

あたしに振ったな奏太ー！

増援を求める視線に文句と驚きをどうにか飲み下して、ともかくこの大音量をどうにかしなければと試みる。早くしないと教室中の

注目的的、つてもう時は既に遅しかもしれない。そもそも黎香の第一声の段階で、帰り支度をしていたはずの皆が聞き耳を立てたのは空気の变化でわかったのだ。

「え、そ、そうだよ！　そしたら、世界征服達成も近くなるかもよ？！」

そんな中で何を言ってるんだ、あたしは。世界征服。それこそ魔王のような野望は、発明家の家に生まれた彼女の長年の夢ではあったけど、冷静になってみれば我ながらおかしな慰め方。でも。

「マジ？！」

黎香の顔が輝いた。うは、効果テキメン。

「黎香もイイ女になれる？！」

「なれるなれる！」

「世界征服できる？！」

「できるできる！　俺が協力するから」

「わはーい！　ありがと、そうたあーん！」

というわけで奏太も野望の片棒を担ぐことになりました、なんて単純というか何というか。ついさっきまで泣いていたその涙も乾かないうちに、黎香は嬉々として自作の新しい便利グッズの構想を語っている。兵器じゃなくてよかった。すっかり楽しげな二人の会話に苦笑い、そして一安心。

黎香は黎香で大変なようだけど、あたしの不安も消え去ってはくれない。何か、日常がずれていくような、そんな違和感。奏太の話で拍車がかかった怖い妄想。

……嫌な感じだ。

それでも心のどこかには、大したことないんだと信じたい気持ちがあつて。実はルシフェルとアシュタロスさんの禁断の恋?!、なんてオチだったら、良……くはないけど、ずっと気が楽だなあとそんな下らないことを考えていた。

### 第13話：足踏み

「ただいまー」

「お帰り」

居間に入ってきた真子は、墮天使の服を着て漫然と座っている私を見て目を丸くした。

何のことはない。人間界に馴染んだ体を元に戻したくなって、形から入ろうとしただけだ。外側が変われば内面も変わるかもしれないと期待しただけ。それが証拠に銀刺繍の上衣は畳んで置きっぱなしだ。

「珍しいね。万魔殿に行ったの？」

「ああ、まあな」

ほら、またこうやって嘘を吐く。今日は私が地上で使った物の整理をしていたら、いつの間にか日が暮れていた。地獄なんて行っていない。

だが仕方ないだろう？　これが最善なのだから。

「あのさ、ルシフェル」

「そうだ。郵便、そこに置いておいたから」

「あ……ああ、うん」

この声の調子で少し躊躇いがちに口を開く時、真子は決まって何かを質問してくる。それも、割と大切なことを。

軽く握られた小さな手を視界の端に捉えつつも、戸惑いの滲む声に気付かない振りをした。このまま自分の独擅場とでもなればいいさ。喋るから、否定しなければならなくなる、余計に突き放さねば

ならなくなる。それならいつそ疑念も説得も哀訴も黙っていてくれた方が互いのためだろうよ。

「風呂掃除もしておいた。真子が来てからにしようと思っていたんだが、先に湯を浴びてもいいか？」

「うん、別にいいけど」

視線から逃げるように立ち上がる。アシユタロスにはあんなことを言っておいて、にもかかわらず、追及されるのを避けようとする弱い自分がいた。ちゃんと向き合わなければならぬと、頭ではわかってはいるのに。

そのまま顔を俯けて、彼女の横を通り過ぎようとした時。

「ねえルシフェル、今日ちょっと奏太から聞いたんだけど」

強い口調が私の足を止めた。こうなってしまうては無視するわけにいかないな。それはあまりに不自然だし、不信感を抱かせるのは本意ではない。

嘘や隠し事が多いと自覚しているとはいえ、私は別に疑われることを好ましく思っているわけではないのだ。極力平静を装いながら、振り返る。

「どうした？」

「奏太がさ、ルシフェルが川のところで震えてるのを見たんだって」

まずい、見られていたのか。

真っ先に浮かんだのは焦りだった。何せあの時は必死だったから、よもや誰かに、しかも知り合いに見られていようなどとは思ってもなかった。

と同時に、少し安堵もした。良かった、もしも気付いていたなら

ば大変なことになっていたかもしれない。……奴はたとえ私の知り合いが相手だろうと、容赦しないに決まっているから。血に飢えた獣め、たかだか子犬相手にさえ堪えるのがやっとだったあの時の私に衝動を抑えられたかどうか。

どこまで見られていたのだろうか、それが少し気になった。何かしら私の様子を曲解でもした奏太からの話が真子の耳に入っていたら？　そう思って見下ろした彼女の瞳の中には以前ほどの恐怖の色もなく。

「ひよつとして、まだ具合が良くない？　だったら無理して外に出ない方がいいよ。ひとりでご飯食べるのだって、全然あたしは気まずくないから、ね？」

心配そうに言われる。気遣いが、とても嬉しいのだけど。こうして優しさに触れてしまえばその度に決意が揺らぐ。近くに居たいと思ってしまう。

迷っている時間などないはず。判断力が鈍るより前に、やはり不安要素は無視し強行突破して今すぐに手を打つべきか？

いや、急くな。急いても良い結果は得られない。着実に、かつ早く。矛盾するようだが失敗は許されない。時間はないが機会は一度きりだろうから。たとえ私が、この身を誰に捧げるにしても。

「平気。あれだけ寝たし、もう体調もすっかり万全だ」

だから彼女のそういった気遣いはまだ早い、もしくはもう必要ない。笑顔をつくる。自然に笑えていることを願った。

「奏太の人違いか何かじゃないか？　大体、こんなに暑い中で震えると思う？」

答え方を間違っただろうか？ 怪訝そうな彼女の顔に訂正したものと逡巡したが、まあいいだろう。

動揺を悟られないようにするのは得意だと、自分では思う。感情の起伏を全て抑圧して、相手が何も読めないように笑顔で蓋をする。少し寂しくなるのは事実だけれど……きっと自分はもう作り笑いをすることに何の抵抗もなくなるほどに慣れてしまったのだと、その度に認識するのはいつものこと。それでも私が笑ってさえいれば、私の目の前にいる誰も悲しい顔をしないと知っているから。周囲に憐れまれるよりなら、己の感情などどうとでも偽ってやる。強い像を他者の中には保たなければならぬ、それが長の義務だ。

真子は一瞬戸惑ったように言葉に詰まり、しかし、それからつられたように笑った、笑ってくれた。

「……だよ。ルシフェル、暑がりだもんね。変なこと言ってごめん」  
「いや」

こんな隠し方がいつまでも通用するとも思えなかったが、それでもしばらくはこうし続けるしかない。

洗面所に入り彼女と扉で隔てられてから、ようやく大きく息を吐いた。疲労感が全身を支配していく気がした。何故、疲れているのだろう。ずっとしてきたことなのに。

留め金を外して服を脱ぎ、狭い浴室の扉を開ける。この状況で人間界の湯を浴びるのは気が進まなかったが、わざわざ万魔殿の自室に戻るのも面倒だ。それに、早く汗を流したかった。汗と……汚れも。

蛇口を捻ると熱い湯が上からかかる。頭からそれを浴びて、目を閉じて何とは無しに思いを巡らせる。風呂場というのはどうも思考に沈みやすい場所らしい。

……そうだ、思い出した。初めて彼女に頭を下げた日、初めて好きだと言葉にして告げた日。あの時も私は浴室で色々なことを考えたのだ。

何故あれだけ素直に好意を口にできたのだろうか。

当時の気持ちなんて忘れてしまったが、柄にもなく緊張していたという記憶だけはある。今考えてもとんでもない決心だった。単なる気まぐれという可能性もあるが、恐らくは……言わないと後悔すると思っただのかもしれない。

知らず、自嘲が漏れた。なんだ、私はまるでこうなることをわかっていたみたいじゃないか。

……いいや。

本当はわかっていたはずだ。直視してこなかったのは他ならぬ私自身。わかっていたながら甘えてきた。共にいる時間が長ければ長いほど結局は互いを傷付けるだけだと知りながら、ずるずるとここまですべてやってきてしまった。

拳句の果てに、未だはつきりとした答えが見えていない。彼女の両親には“半年”で見定めると約束した、そしてその期間も過ぎようとしているというのに。彼女の親から対価は貰っていないから、新たな契約を“上書き”するも彼女を見殺しにするも、私自身の両手に委ねられているのだ。

最低だ、私は。

見殺しなんて。ぞっとするような考えを自分で打ち消した。否、否。彼女を救うことはもう決めたのだ、私に《光》の名を授けてくださった主のために。だがそれを“上書き”の形で成すことに踏み切れない。しかもまた、彼女の傍から立ち去ろうと、そんな醜い自分の要求を押し付けようとしている。

彼女は私を知らない。私が卑怯な患者であることも、内に秘めた

どす黒い心のことも、血で穢れた過去の偶像を引きずっていることも知らないはずだ。

知れば、きつと嫌われるだろう。

どうやら私はそれは厭であるらしい。嫌われてしまえば離れることは容易い。だが、私の本性を曝すことによつて嫌われることは避けたいと思つてしまう。彼女の中の私を守るために、私に好意を抱いてくれた彼女の心を守るために、私は私であることを保ちながら距離をおかねばならないのだ。それはどこか長として生きるための方法に似ていた。

何より、私は彼女の幸福を願っている。

そうは言つても、だ。契約の“上書き”は禁忌なのであつて。

“上書き”以外の選択肢はないのだろうか？ また何もかもを捨てなければならぬのだろうか？ 命だけではない、むしろ私の命だけで済むならば軽いもの……捨てねばならないのは過去の自分の足跡、守ると誓つた世界、そのために傷ついた仲間の想い、そして主こと《憤怒》への忠誠。墮天した時よりももっと本当の意味で“裏切り者”にならなければならぬはずだ、もしもこの身を人間の一少女のために墮とすのなら。

なあ、真子。

どうか開き直りを許して欲しい。私はこれまで散々わがままを言つてきた。だから最後までわがまままでいさせて欲しい。

お前の幸せを、私が定義している。何が幸せかを決めるのは私ではないとわかっているけれど、今はその定義が正しいと確信しているんだ。……あと少しだけ、優しさに甘えたいんだ。

シャワーを止め、蒸気が立ち込める空間で、独り。

素肌を雫が伝つていく。首筋に張り付いた髪感触がやけに気に

なった。

どれだけ体を磨こうが、私はもう白くはなれない。傍目には白く映るかもしれないこの身。だが私には見えるのだ、くつきりと刻まれた無数の罪の印が。永劫この両手の汚れが落ちることも、本来ならとうに痕も見えなくなるはずの胸の傷痕が消えることも、ない。

きれいなものに触れてはいけない。この手が汚してしまうから。脆いものに近付いてはいけない。この手が壊してしまうから。

今度はこの手が何かを救うことができようか、誰かを生かすことが可能だろうか。

未来を紡ぎたいと望みながらも過去に寄り掛かり続ける自分が、弱くて嫌いだ。せつかく主にいただいた命を一瞬でも厭わしく思ってしまう自分は、もっとずっと大嫌いだ。

## 第14話：詮無い十分間

寒さのせいじゃないことくらい、わかってるっつーの！

腹立たしいやら悲しいやら。天然であることは可愛いと思ってきたけど時々残酷だ、切実な意味で。嘘を嘘とわかっていながら受け容れるのは、それはそれはきついことなんだと、是非とも本人に言っつてやりたかった。そして今までこんなことなかったのにつて思っつと、なんだか泣きそうになった。

そりゃあこれまでもちよつと揉めることはあつたけど……。原因もくだらなかつたし、大抵は日をおかないで仲直りできたのだ。

例えば。

小さい時から一緒に寝てきたぬいぐるみを納戸で発見した彼が「“氣”を吸い取られるから処分すべきだ」と主張したのに対して「思い出だから絶対に捨てない」と言い張ったこととか。近所で不審者出没の噂が流れた時に「外出は禁止！」なんて制限されそうになつて「学校があるんだからそれは困る！」と散々説得したこととか。揉めたとやつてもどれも結局はいわば優しさ（？）からだった。あんまりにもあたしのことを安全の中に囲おうとするせいで、過保護だーとか黎香には言われていたけど、なんだかんだで彼はいつだつてあたしの意志を尊重してくれたから。

それに万が一あつたとしても喧嘩ならまだいい。原因がわかればお互いに悪いところがあるんだつて反省できるし、ぶつかり合っつてことはちゃんと向き合っつていてことでもあると思っつし。

現状はどうだろう。原因……原因？ これは仲違い、なのかな。そもそもあたし達は対立した覚えはない。ぶつかつてすら、いない。

「倦怠期かしら？ 乗り越えればもつといいパートナーになるわ

よ」なんて奏太は言ってくれる。倦怠期だなんて恋人でもあるまいしと恥ずかしくなったのも事実だけど。

でも、どこか違う。今の彼はまるで……まるであたしを避けているみたい。自分から距離をおこうとしているような、そんな感じ。

ひよつとして、嫌われちゃったのかな。

一瞬、怖い考えが浮かぶ。好きだって、信用してるんだっていうのはあたしの独り善がりだったわけ？

この際もう特別な感情を抱いてくなくてなくなっただっていい。彼にとってのただひとりになれなくたって構わない。ただ、嫌わないで欲しい。つい数か月前までの自分が知ったらびっくりするくらいの後ろ向きだけど、それだけあたしは彼に疎ましく思われるのが怖くて。冷たい手のひらがこちらに向けられるのが怖くて。

「真子」

シャワーを浴び終えて出てきたルシフェルは、入浴前と同様にまたしても墮天使の黒い服を着ていた。あたしのタンスには入らないからと、部屋の隅に置かれた彼用の衣装ケース。彼はいつもそこから着る服を選んでいたけれど、今その中には男物の人間の服が嫌味なほど整然と畳まれて入っていた。もう着る気はないと言わんばかりに、ご丁寧に蓋まできっちり閉めて。

地獄に行ってきたという彼の言葉も本当かどうかわからない。けれど、まとめられた衣服は拒絶の意思表示にも思われた。もう彼が人間の服を着ることは、きつとない。

思えば彼は最初に「人間として生活してみたい」と言っただからあたしは服を買いに行ったり、一緒に出かけたりしてきたのだった。それをやめようとしているということは、ルシフェルは、もしかして

「窓の鍵、開けておいてくれないか。帰ってきてからお前を起こすのも悪い」

夕飯時だからと、また外へ出かけようとするルシフェルがベランダに続く窓を開けて言う。黒衣の裾が風に少し捲れた。水気を僅かに含んで湿ったままの艶やかな髪をひとつとつても、そういえばもうドライヤーを扱うのに大騒ぎもしなくなったなと思ってみたり、病み上がりなんだから湯冷めを気にして欲しいとは心の中でしか呟けなかったり。

忘れられない、奏太の話。川辺で震えていたという彼のことが心配で不安で、それでも、無理にでも引き止めたいという衝動をぐつとこらえる。止めたってどうせ彼は聞かないだろう。あれだけ……必死に誤魔化そうとするくらいなんだから。

帰ってくるよね？

怖くて聞けない。またそれを口に出してしまったら、今度こそ本当になってしまいそうで。

それでもすぐに帰ってくる気はないのだろうことはわかった。戻ってからあたしを起こす必要がある時間帯って、一体彼は何をしに外へ行っているのか。

何気なく部屋の中に視線を彷徨わせて、あ、と気付く。帰って来ないということとは、ないはずだ。ソファアの上にあの銀糸で飾られた黒い上衣（うわぎ）を置いていったままだから。

それでやっと、送り出す言葉を口にすることができた。

「わかった。帰ったらちゃんと閉めてね」  
「了解」

ルシフェルは柔らかく微笑む。

……違う。あたしのことが嫌いだったらもつと厳しくあたつてく  
るはずだ。きつと嫌悪感を抱いているってことはない。あたしを気  
にかけてくれるのは前と同じで、あの夢を見た日も心配してくれる  
その目に嘘はなかった。瞳の輝きは、失われてしまったけれど。

どこか高貴なくらい凜と冷たいのに、円やかな優しさが滲み出て  
いた大好きなふたつの紅い宝石は、今はただ美しくあるだけ。生気  
がないわけじゃない。決して元気には見えないが、そうじゃなくて  
……影が濃いとでも言おうか。目に映る全てを拒絶して、自分の内  
面を隠したがっている壁のような昏い瞳。あたしを見ているようで  
本当はどこか遠くを見つめている、暖かい色が消え失せてしまった  
瞳。

誰であろうと美しい彼の目に映りたいと望むだろうけど、ひよっ  
としたら彼は見たくないものまで見てしまったのではないだろうか  
だって彼は、何かを諦めた目をしている。

いきなり空気がざわめいたような気がして顔を向けると、彼の背  
中に揺らぐ塵気楼のようなぼやけた影。彼はそのまま軽々とベラン  
ダの柵に飛び乗り、その背に現れた二枚の大きな翼を広げた。黒く  
て巨大な翼。あたしと彼が“違う”ことの何よりの証。

あたしは空を飛べない。魔力も特別な能力もない。たった十年ち  
よつとの歴史しか見ていない。人間だから。

でもあたしはそんな違い、今更気にすることではないと思ってい  
るのに。

「では、行ってくるから」

「うん」

とん、と柵を蹴り、長身がふわりと宙に浮く。真っ黒な翼は艶や  
かに光彩を反射し、暗がりの中でも虹色に輝く。全てを包み込むよ  
うな優しい闇色。絹のように滑らかで、とても柔らかかったあの翼。

「真子ならうまく触れそう」……彼はずっと前にそう言ってくれた。今もう一度触ってみたいと言ったら、果たしてどんな言葉が返ってくるのか。

ルシフェルが飛び立ってすぐにあたしはベランダに駆け寄った。彼がどこへ向かうのか知りたいと思つて。

けれど街の方へと滑るように飛んだ墮天使はひとつ羽ばたいた瞬間、ふつと姿を消してしまった。本当に夜の闇に紛れてしまったかのように。

「ルシフェル……」

手すりを握ってみても冷たいだけ。そこに彼は確かにいたのに何の痕跡も残らない、温もりも残っていない。

進まなきゃ、動かなきゃ。わかつてる。同じ場所に留まっけては淀むだけだ、でも。

あたしは、どうしたらいいの？ どうしたら前みたいに接してくれるの？ 本人に聞けないあたしは、意気地なしなのかな。

## 第15話：“仲間”

さて、今夜はどこへ行こうか。

特に目的地もないため、緩やかに空を飛びながら考える。本来なら悠長にしていられないのだが、地獄からの報告がまだ来ない。それまでは……思考することが私の仕事だ。

真子とのことに関しては、まあまあ順調だろう。このままいけば予定通りだ。仮に彼女が私の行動に疑念を抱いたとしても、事態の根幹に到達されることはあるまい。或いはその前に終わらせる。

“奴”は、そうだな、今のところ問題ない。本人が言った通り出てくる気配はないし、私の力も河原にいたあの時よりも戻りつつあるのは確かだ。完全に抑えられるかはわからないが、“乗っ取られる”ことはないだろう。

あとは……天界と煉獄か。万魔殿は安定している。結界も張り直したからしばらくは保つはずだ。対策を講じねばならないのは、それ以外の二つの世界が再び動き出した場合。あれらはまだ“生きている”。もう一度拡大が始まったら、果たして今の力で抑えられるか？

『BANG!』

「ッ?!」

突如として耳元で響いた声に体勢を崩しそうになる。慌てて身構えた視界に入ったのは、獣の尾のように揺れる茶色の束ね髪と、毛艶の良い黒の翼。

「珍しいな。オレがこんな近くまできたのに気付かねエなんて」

万魔殿幹部の一員たる《暴食》、（自称）次期魔王のベルゼブブが、手を銃の形にして私に突き付けながら笑っていた。子供のよう  
に無邪気で人好きのする笑みは変わらなかったが、それに合わせて  
頬を持ち上げるほどの気力は私にはなかった。だから代わりに、声  
だけののに過剰な反応をしてしまったことや察知できなかったこと  
への気恥ずかしさを誤魔化すためにも、呻くように問う。

「こんなところで何をしている」

「ヒヤハハ、散歩してたんだよ。どうせてめえも似たようなモンだ  
る？」

「……まあ、な」

「ンだよ、悩み事か？ えエ？」

心配されるのもわかる。余程深く考えこんでいたらしい、全く気  
配に気付かなかった。存在を掌握するはずの、この私が。

とはいえ、まさかここでベルゼブブに会おうとは思ってもみなか  
つたが。こいつが地上で誰と何をしているのかなんて、さっぱり把  
握していないのだ。庇護が必要な者ならばともかく、行動をいちい  
ち管理しなくたってこの墮天使には自分で危機を乗り越えられるだ  
けの実力はある。

「というかベルゼブブ、お前、まだ地上にいたのか」

「失礼だなー。オレだって色々やってたんだぜ？ まっ、これも魔  
王になるための修行ってヤツだよ。っつーか、てめえに“まだいた  
のか”なんて言われたくねエし！」

言っただけでベルゼブブはケラケラと笑う。「冗談を言っているのだとし  
ても、悪いが、それさえもどうでもいい。」

「てめえもなかなか長エじゃねえか。どうだ、最近会ってねエけど進藤は元気か？」

「……………」

「オイ、」

「私は……………」

ああ、恐らくこいつは万魔殿で起きつつあることを知らないに違いない。

だが、それも仕方ないかと思った。この異変は高位の者ですらはずきりと理解できていなかった。漠然とした不安を感じてはいても、真実に辿り着く者が何名いることか。それは何より私が隠そうとしているからでもあるが……………ましてや地上にいたベルゼブブが全てを知っているはずはない。

「ベルゼブブ。もう少ししたら、私は向こうに戻るよ」

「あア?!」

素っ頓狂な声と共に笑みが引つ込んだ。これだけ取り乱した《蠅王》は滅多に見られないな。

「向こう、って……………地獄か？」

「そうだ。おかしいことなんてないだろう？ 全て、元に戻るだけだ」

「いや、だがよ。てめえ、それは……………」

「何を慌てているのだ。変な奴だな」

言いながら、意地の悪い言い方だと自分で思った。きっと今の私はとても冷たく笑んでいることだろう。どうにも私はこいつに弱味を見せたくないらしい。

しかし話すことはきちんと話さねばなるまい。こいつにも幾つか

の情報は知らせておく必要がある。同じ万魔殿の幹部として、私の臣下として、……アシュタロスと同様、良き仲間として。

「進藤となんかあったのか」

「別に」

「ならなんでだよ!」

どうしてそう不機嫌そうな顔をするんだ、お前は。本当に怒りたいのはお前じゃない……

「なあ!」

「わかっている、説明はするから。お前にも聞いてもらいたいことがある」

「オレに?」

まずい、体がふらつく。自分の鼓動がやけに近くで聞こえる。いくら魔力を回復したとはいえ、やはりこつも頻繁に飛び回っては急に消耗し過ぎか。

このまま力を消費したくはない。どこかもつと静かな場所で、腰を落着けて話をしたいと思った。が、それでは恐らく長引いてしまう。変に食い下がられるのも逆に苦しいのだし、ここは己の疲労には目を瞑ろうか。

初めから私にはすべてを明かすつもりは毛頭なかった。これもアシュタロスが相手の時と同じこと。

「一体どうしたってんだよ」

わけがわからん、と呟くベルゼブブ。不良のような堕天使を、私は少しの間だけしっかりと見た。鋭く、力のある眼差しがこちらを見つめていた。正面から向き合おうとするその目を見た途端、何も

かも話して縋りついてしまいたい気持ちが進み上げてくる。

だが、それはできない。私は彼らの長だ。責任も罪も私にある。背負うことこそが私の償いでもあるから、逃げるような真似はしてはならない。

「ルシフェル」

「ああ。実は……」

本当のところ、私はもつともらしい動機と赦しが欲しいに違いないのだ。そんな甘えた気持ちが進んでくること自体がその証。

契約の“上書き”をすれば、この身を懸けた争いは避けられない。だから、命を主や世界ではなく彼女のために捧げることに、未だ私は納得できなくて。

彼女がいなくなつてからでは遅いのだとわかつていながら、何にでも理由を求めようとしている自分の必死さが滑稽で可笑しかった。疑うことを覚えた己は、もう天の使いを名乗れないのだなあ。

まして彼女の傍に留まる利点などあるまい。

我が内に眠る獣が何時周りを傷つけるか知れたものではないし、そもそも我々が同じ時を歩むこと自体が不可能だ。

それならば。もしも私が彼女を救えたその時には、それを最後の贈り物としてしようじゃないか。去り際は潔いほど美しいもの。

決意を胸に拳を握る。そうして自分の声が震えないように気をつけながら、私はベルゼブブに向かって、今最も口にしたいことを言った。

「彼女には……真子の命には期限がある」

改めて口にするると一層辛いことのように感じた。ベルゼブブは目

を白黒させていたかと思うと「それは、そいつは……」と何やら呟いた。

別段、話を止めるほどのことでもない。迷っていると悟られるのは癪だから、あくまで淡々と、厳選した事実と適度な方便のみで。少しも痛いことなどないのだと言葉で示す、態度で示す。

「わかるだろうが寿命の話ではないよ、悪魔絡みだ。一応は私とて世話になった義理を感じないではないから、少しばかり助けるために力を貸してやろうと思っっているが」

「……」

「それに恐らくこれからやろうとしている行為は、世界からすれば善行とは言い難い。だからかどうかは知らないが、万魔殿でちよつとした事件があつてな。故に魔力を一時的に都市中枢に蓄え、我々の間の回路は切断してきた」

「……」

「安心しろ、所詮はすぐに終わること。真子とのことが片付いたら、地上での遊びはお終いにしようかと考えていたところだ」

「それはっ」

ベルゼブブがわずかに音量を大きくして私の言葉を遮った。おとなしく待ち受けていると、見れば、彼は拳を握りしめて震えていた。

「……進藤はどこまで知ってる」

「何も。教える必要もないだろう、どうせ私は彼女の前からいなくな」

突然ぐらりと視界が揺れる。とうとう本気で魔力不足かと思いきや、どうやらそれは目の前で私を睨んでいる堕天使に胸倉を掴まれたせいであるらしかった。

ぎりぎりと睨みつけられる。こういう時に感情を剥き出しにして

正面からぶつかるとは幼稚だし、ろくな結果を招かない。怯えることなどあり得ないし、虫の羽音にいちいち本気で腸を煮えくり返らせる者などないはずが、やはり自分の怒りを横取りされたような気がしてそれがひどく不愉快だった。

「進藤自身に黙ってることを責めるつもりはねエ……だが理由がソレってのが気に食わねエっ！」

「お前に気に入られるための思考ではない」

「てめえは進藤をもっと大事にしてると思っただっつーの！」

吐き捨て、乱暴に放される。

軽く翼を張り衝撃を殺しつつ、黙って襟元を整える。無礼を咎める気すら起きず、自分でも驚くほどに冷めた気分で顔を上げた。誰に何と言われようと、口に出した言葉が完全な真実でないことを自分は知っている。

が、それにしたってベルゼブブの期待は行き過ぎていると言わざるを得ないだろう。仮に想像通りに彼女を大事にしていたとして、何だ。私が自分を許したとも思っているのか、幸福を呵責なく享受できるとでも思っているのか。

次は何を言われるのかとこちらが首を傾げていると、それが割と堪えたのだろうか、今度は悲しげに顔を歪められる。

「頼るって、言ったよな」

いや、違う、今の私の行動に対する反応ではない。ベルゼブブが引つ張り出してきたのは昔の、恐ろしい記憶に付随する、口約束。こればかりはこちららも平静でいられない。血に塗れた忌まわしい記憶を、よくも。

「いつからなんだよ……いつからてめえは悩んでた？　なんで、オシラに何も相談してくれなかった？」

それは単に……お前達に心配をかけたくなかったからだ。昔だって私はその思いで行動したんだ、結果はあんなものになってしまったけれど。

これ以上は私のことで負担を与えたくない。それは半分本当で、半分は嘘なのかもしれない。だから言葉にして伝えることは躊躇われて。

何もわからないくせに。

ずきん、と見える風景がぶれた気がした。音が鳴るほど奥歯で噛み締めた憤りの向こうに、醜く恩知らずな羨望があることは否定できない。極端な話　無心に従っていたところで何の危険もないのだろう、お前達の行動は……少なくとも前を歩く者の背が見えるのだろう、お前達には！

私の前には。誰もいなかった、足跡もなかった。生まれた時からずっと。

「てめえの命を悪魔が助けた時……あの時だって、てめえはオシラを全然頼ってくれなかった。そのあとで言ったじゃねえかよ、約束したじゃねえかよ。これからはもっとオシラを信頼してくれるって！」

「これは私の問題だ。口を出すな！」

言っても言っても納得してくれないだろう？　手を貸させてくれと、引き下がらないだろう？　それは逆に私が納得できないことなのに。臣下に救われることがあっては、長としての名を保てない。

力になりたいと望むならどうかこの名と役割を奪わないでくれ。黙って、何も考えずに私に従っていけば良いのだ。

私は誰よりも強くありたい。差し伸べる手しか持つてこなかった私にとつては、弱い姿を見せて幻滅されることが何より恐ろしい。そして膝をついた時に最も失望するのはきつと自分自身。主よ、主よ、私は何も変わっていなかった。いちばん傷つけないのは己のままなのです、主よ！

そんな私だからこそ……彼らが信ずるに値しない、のかもしれないとも思う。黙って従えと思いつながら、こんな長にどうして従つて 墮天までして くれたのかわからないとも思った。もしも彼らが慕ってくれるのなら、彼らの心内にあるその幻想を現実にしなければならぬ。理想像を保つために強くあらねばならぬ。

残ったのは釈然としない気持ち。それでも私は常のように酷な言葉を投げつけるしかないのだ。向こうからきつと離れてくれるように、幻想が崩れてしまうことを防ぐために。

## 第16話：墮天使と悪意

【From the . . . ?】

ひとつ、風が吹いた。

砂埃を巻き上げ、喧騒をさらい、大通りを吹き抜けていく。

ひとつ、風が吹いた。

周囲の店には目もくれず、厳しい表情で歩む墮天使の黒衣が踊る。彼女には仕えるべき主がいた。最も尊敬し、最も愛する主君がいた。

ところがその主は今、大きな問題を抱えていた。自分の身も顧みず、ひとり奔走していた。

大丈夫だ、全て任せろ。そう彼は言う。それでも彼女はこうして万魔殿へとやってきた。解決の手がかりを探すべく、愛する主の力になるべく。

不要だと言われようと、彼女は従者として主君を支えたいと願う。それに、彼が何でも自ら背負おうとするのは彼女達 仲間を思っていることだと彼女は知っていた。だからこそ影ながら支えねばならない、と。

彼女が武術の鍛錬に励んできたのもそのためだった。彼に全てを捧げようと誓った遠いあの日以来、人一倍の稽古を積んできた。強くなればきつと、女だと侮られることもなくなる。きつと……長く彼の傍にいられる。

無論、彼女のそんな決意を知る者がその大通りにいるはずもなく。談笑する悪魔や墮天使の波の間を早足で進む彼女を気に留める者はいなかった。だが。

誰も彼女を注視する者などいないはず。それなのに何故か視線を感じたような気がして、ふと彼女は足を止めた。周りを見回しても知り合いは見つからない。声をかけられることもない。

人混みですつと止まっているのも迷惑になるだろう。

暫し立ち止まっていた彼女は、気のせいだと思いつき、再び歩き出そうと前を向いた。その、瞬間。

「 ?! 」

ぞろり、と。

武人でなければ方向の特定も難しかったであろう、わずかな空気の揺れ。しかし一瞬で危機感を与えるに十分な殺気。

咄嗟に振り向いた彼女が見たものは、宙に浮かんだ漆黒の鎌。柄も刃も影のように何物にも染まらぬ黒色、更には禍々しい邪気までもが周囲に放出されている。手に持つ者はいない。だがその凶器は紛れもなく彼女に向けて振り上げられている。

逃げる間もなく、鎌が黒衣を切り裂いた。

ひとつ、悲鳴が響いた。

割れた人波の中、紅く染まった石畳の上に、ひとりの墮天使が倒れていた。

\*\*\*

「  
……………」  
「  
……………」

あたしはソファで、ルシフェルは窓辺で。互いに何も喋らず、ただ黙って休日の午後を過ごしていた。

別に、無視してるわけじゃない。話しかければ返事はくれる。何か言われれば返す。けど、それだけ。他愛もない話をしていた頃がひどく懐かしい。

あたし達の関係は日を追う毎にギクシャクしていった。だんだんと彼がよそよそしくなっていくのがわかる。自然と会話が減った。あたしが好きな、宝石みたいな紅い瞳は、ずっと昏い色をしたままだ。

ぼんやりと窓辺に座って頬杖をついて。外を眺める虚ろな目。見ているこっちが悲しくなるような陰のある横顔。

……ああ、そっか。なんかルシフェル、地獄にいる時みたいだ。甘えるように話しかけてきた彼も、信じられないような天然発言連発の彼も、あたしを抱きしめてくれた彼も、そこにはいない。目の前に座っているのは墮天使の長、万魔殿の長としての彼だ。住み慣れたはずのこの場所で、他人のように緊張している。

空気が重い。

もう嫌だと思った。なんで理由も教えてくれないでそんな態度をとるの？ どうしてあたしは……うつん、ルシフェルも、どうしてこんなに悲しい思いをしなきゃならないの？

限界だった。怒られてもいいやって思った。知らない、そんなの。ルシフェルだって勝手にしてるんだ、あたしも好きにさせてもらっもん。

疲れた。もう疲れた。

「ねえ、ルシフェル」

あたしが口を開いた時。

《 》

……なんて間の悪い電話！

ちらとこちらを向いたルシフェルは

「電話、鳴ってる」

とだけ言って、再びふいつと顔を外に向けてしまった。あー、もう！ わかってるって！

「もしもしっ？」

『もしもし真子ちゃん？！ 大変なんだよう！！』

イライラしながら精一杯の不機嫌を込めて出たつもりが、相手はそれどころではない様子。

「何？」

まだ怒りが収まらないまま、携帯電話を耳に当てなおす。電話してきたのが黎香だったから、というのもあったけど。もし親しくない人が相手なら、すぐに猫かぶりしているところだ。

『アツシュが、アツシュがあー!』

「なに、また浮気したって?」

『ちがつ、違うんだよおー!』

ところがその慌てぶりが尋常ではなくて、あたしは少し戸惑ってしまった。

『アツシュが帰ってこないの!』

「えっ?」

帰ってこない?

あんまり声大きいもんだから電話の外にまで漏れていて。無関心を装ってはいるけど、窓辺の墮天使が聞き耳を立てているのはわかってる。さつき、ぴくんと反応したのが見えたから。

「いつから?」

『朝起きたらいなかったの。多分夜中に出かけたんだと思うんだけど、今までそんな深夜に家を出たことないのに。すぐ来るだろうって待ってても全然……。今、近所を探したけど……。う、うええ〜んっ!』

まだ一日も経っていないじゃないか。でも長く一緒に生活している黎香がこうしてわざわざ言ってくるということは、本当に初めてのことなんだろう。アシュタロスさんはまめそうだし、気まぐれに普段と違う行動をするとはあまり思えない。それに最近様子が変だと言っていたから、黎香も小さなことでも不安になってしまったのかも知れない。

余程心配なのか、聞こえてくる泣き声は凄まじい。

『びえーん!』

「泣かないでって。ほら、まだ一日も経ってないし、すぐに帰ってくるよ」

『だっでえ……』

耳鳴りがする。でも電話を当てているのとは反対の耳。すると「それは。」

と、急に淡緑色の光が空中に現れる。久しぶりに見る魔方陣。そこから何かが降ってきた。

「うわあああっ?!」

ドン!、と痛そうな音。居間に白い羽根が散らばる。白い?

「ウアラク君?!」

金髪少年はあたふたと起き上がり、ばばばと居住まいを正す。テーブルの上にちよこんと正座した堕天使は、ルシフェルとあたしにそれぞれ一礼した。

「お、お邪魔しますルシフェル様、真子さん」

『あつしゅうう!』と未だに聞こえる声を一旦手で封じ、とにかく今は小さな来訪者の対応をすることに。あつちは、ちょっと泣かせておこう。

「どづしたの、そんなに慌てて」

「向こうで何かあったのか?」

「そっそれがですね……っ」

ウアラク君はわなわなと震えながら、泣きそうな顔で口を開く。

「アシユタロス様が……な、何者かに、襲撃、されました」

襲撃。

血相を変えたルシフェルがウアラク君に掴みかかるのを眺めながら、ぼんやりとその言葉の意味を考えた。

襲う？ 攻撃する？

狙われたのは……あの、アシユタロスさん。

「あいつは無事なのか！ あいつは……アシユタロスはっ！」

「おっ、落ち着……げほっ、落ち着いてください、ルシフェル様！」

ルシフェルの怒鳴り声とウアラク君の大声で我に返る。胸倉を掴まれていた少年墮天使が、解放されてから苦しそうにむせた。

「い、命に別条はありません。ただ、負傷なさっているそうです。と  
りあえず宮殿には運んであります」

怪我、してるの……？

現実味がない。けれど、驚きはゆっくりとやってくる。血が、流れた。あの穏和な墮天使さんが怪我をした……そうウアラク君は言っている？

「っ……悪かった。取り乱した」

「いえ。あの、今、治療をするところで」

あたしが事態をどうにか飲み下す間に墮天使達の会話は進んでい

く。ウアラク君の言葉にルシフェルは、はっと顔を上げた。

「ウアラク！」

「は、はいっ」

「すぐに行つて止めさせる。私が手当てする」

きよとんとするウアラク君に、ルシフェルは黒衣の襟元を正しながら。

「急を要する怪我ではないのだろう？」

「それは、そうですが……できるだけ早くしないと」

「良い、今行くから。お前は先に戻り治療師達に伝えてくれ。私が行くまであいつには指一本触れるな、背いたならば消し飛ばすと」

「ぎよ、御意っ！」

来た時よりも慌ててウアラク君は戻つて行つた。消し飛ばす……恐らく墮天使長の最高級の脅し文句だ。そこまでして一体何が……

『真子ちゃん』

でも、今は。

『アツシュって……ぐすっ、……言ったよね？』

会話を聞いていたらしい彼女のためにも。

「ルシフェル。今から地獄に行くんでしょう？ あたしと黎香も一緒にいきたい」

今にも移動しようとしていたらしいルシフェルは、少し怒ったよ

うな顔で振り向いた。

「何を。お前達には関係な  
」  
「関係なくない!!」

ちよつと怖かったけど、躊躇うより先に言葉が口をついて出ていた。携帯電話をぎゅつと握りしめる。

少なくともあたしが大声を出したことに彼は驚いた風だった。目を見開き、まじまじとあたしを見つめてくる。

「人間だからとか、そういうのじゃなしに、知り合いが怪我してたら心配になるのは当然じゃん！ 治療なんてできやしないけど、でも、知らないところで勝手に物事が進んでいくのは嫌だ！」

一気にぶちまける。本当はもっと言いたいことがあったけど、今は一刻を争うから自重。

それでも、彼の気を変えるのには充分だった。

「……これだから意志ある者は……」

舌打ち混じりに呟いて、ルシフェルは拳げかけていた手を下ろす。

「……早く呼べ。少ししか待たないからな」

そして目を合わせずに、そう言った。

## 第17話：無用の

計画通りだと思った矢先にこれだ。

一体私の何が悪い？ どうしてこうもうまくいかぬのだ！

自分の従者のひとりである墮天使に案内させ宮殿の廊下を歩きながら、私は怒りを必死に堪えていた。

怒りと……焦りか。まさかアシユタロスが襲われるとは。犯人の見当がついていないわけではないが、確証が得られないうちに下手に動くのはどうなのだろう。

……いや、もはや確証などどうだっていいな。私の大切な仲間を傷付ける者は誰であろうと絶対に許さない。必ずや見つけ出し、この私に喧嘩を売ったことを後悔させてやる。真実は力で示さねばならないのだ。

結果だけを見れば反乱か、謀反か。否、否だ。これは王としてではなく、個としての私への挑発。

しかし何故アシユタロスは万魔殿にいるのか。頼んだ仕事は済んだはず。しばらくおとなしくしていると言ったのに……。

自然と、今日何度目の舌打ちが出た。

まったく、だからあいつにはあまり話したくなかったのだ。事実を隠せば隠したで心配するかと思えば、わずかなりとも明かした途端に度を越えた尽力を望む。いつもいつも無用な心配をして、今回も案の定じゃないか。他人のことを気にかけていられるような奴ではなかるうに。

それに、と後ろをちらと盗み見て思う。私から少し離れて、それでも早足でついてくる少女が二人。唇を噛み締め、睨むように床を

見つめて。

この二人の思考がわからない。何故わざわざこんな危険なところへ来たがるのか。こいつらは全然わかっていないのだ、この万魔殿で今回のようなことが起きる、その危険性を。いくら異変が起きていたとはいえ私の魔力は注いであるし、そもそも《憤怒》の御加護を間近で受けられると言っても良いほどに完璧なる都に、裏切りがあつていいはずがない。単に珍しいで片付けられる問題ではないのだぞ。

私に挑むにも卑怯な手段しかとることのできない外道は誰か。レムレースか？ 墮天使か？ 悪魔か？ だとしたらこの都の構造自体が民にとつて意味を為さなくなった証だが、恐らくは、否、間違はなくこれは“規格外”の奴らの仕業に決まつている。都市の規則でも世界の規律でも理でも縛ることのできない者のことを、私は何人が知っている。

そしてそのうちのひとり、後ろの少女を縛っている。  
つまり私が行動したせいでアシュタロスがやられた。

私のせいで、また。

償う気でいたのに、さらに罪を増やしては世話がないじゃないか。動かなければならないのに、一步踏み込んだ分いつも痛みが跳ね返ってくる。しかも、私以外に。

どうする。ベルゼブブがアシュタロスのように何か行動を起こしていたとしたら？ こうしている間に敵が無差別に民を襲ったら？ 都市の根幹に亀裂が入り始めていたとしたら？

きりのない可能性。嘆いてもどうしようもないことだけでも、あくまでも一個に過ぎない自分に他者の動きを完全に御することが不可能であることが、何とも口惜しく腹立たしいように思われた。能力を使えば物理的に干渉はできようが、心を支配してしまうには至らない。そんな理自体をどうしようというのは馬鹿げている

が、儘ならない現実を目の当たりにして不満を覚えるなという方が無理な話だろう。

考えれば考えるほど苛立つ。何もかもが癩に障る。ああ、真の意味で“私だけの”問題であつたなら良かったのに！

表情に出してしまいそうになる怒りを必死で抑えているうちに案内の足が止まり、とうとう目的の部屋に着いたことを覚る。ここは…宿泊棟の予備の部屋か。出入りの多い救護室に運ばれていなくてほっとした。

木製の扉を開き、従者の墮天使・アルベルトは流れる動作で脇に避ける。

「こちらです、殿下」

「ご苦労。誰も手を出していないな？」

「無論でございます。伝言は確かに承りましたので」

よし、後でウアラクにも礼を言わねばならないな。それと謝っておかなければ。伝令役に過ぎないのにあんな風に掴みかかる真似をしてしまったから、きつと怖がらせてしまったことだろう。

しかし誰にもアシユタロスに触れさせるわけにはいかないんだ。私ではなく……本人が恐らくそれを望んでいるだろうから。手当てをするなど言語道断。まさか、ここまで運ぶのに誰か気付いてしまつたろうか？ アシユタロスの体が……

「処置用具は中にご用意致しましたので」

「あ、ああ、すまない」

そんなことを考えている場合ではない。早くしなければ。部屋に入った瞬間からずっと血の匂いが気になっていた。この程度の匂いならばそこまでの量ではないだろうが、しかしそれは別の意味でも

幸いだ　我が内なる獣を興奮させずに済む、と自嘲混じりに考える。

実際にこの現状に直面し、ウアラクに対する先刻の言動はいくら何でもアシュタロスに薄情だったかと省みた。命に別状はないという言葉だけで、私の思考は既に安否よりも如何に約束を保つかという点に移行してしまっていたから。冷静なままでいる頭の隅は、思いを巡らせる際に主張の声を上げてくることはないけれども、それによって逆に自分の“仲間”に対する感情への疑わしさが増した。私はどこまで“長”で、どこから彼らと肩を並べ心から笑えるのか。だが少なくとも今はそれどころではないはずだ。気を取り直して背筋を伸ばし、黙って指示を待つ墮天使に告げる。

「アル、人払いを頼む。部屋には一切誰も近づけるな」

「治療師も、でございますか」

「ああ。緊急の連絡ならお前を介するようにして、それ以外は一切だ。……わかるな？」

「……御意。何か入り用でしたら、すぐにお申し付けくださいませ」  
私がうなずくと、アルベルトは一礼して出て行った。話のわかる奴で助かる。さすがは我が従者一の古参だ、この私に臆さぬのは慣れか。

アルもアシュタロスの体のことは知っているのだものな。墮天使なのだから　我々は共に楽園に生きた過去があるのだから、当然だ。

さて……。

本当は後ろの二人もいて欲しくないのだが、何を言っても部屋から出て行きそうにない。ここで言い争っている場合ではないのだ。素早く済ませてしまった方が、或いは二人のためかもしれない。

……待てよ、そればかりではないか。この二人にアシュタロスの

体のことを明かしたなら、ひよつとするとそれがアシユタロス自身の行動を縛る要因となってくれるかもしれない。あいつは優しいから、多少なりとも縁を持った相手の心配を振り切ることなんてできないだろう。私だって心配はこの上ないほどしているつもりだが、本人に伝わっていないのか、それとも慣れてしまったか意地を張っているのか、いずれにせよ効果がなかったようだし。

ふと思いついたのはあまりに卑怯な考え。裏切りではないんだ、約束を違えるつもりはないんだ。不用意な行動がまたあいつ自身を傷つけないように、これ以上私に巻き込まれて無用な痛みを味わうことのないように、そう思っているからこそ。……赦しを乞い祈るように言い訳を唱える。

ずるいのだろうが、お前の代わりに覚悟を決めさせてもらうよ。ここまできたら仕方あるまい。許せ、アシユタロス。彼女らになら良いだろう……？

## 第18話：《戦神》の秘密

金髪の、すらりとした男の墮天使さんが先導してくれて、あたし達はやっとアシュタロスさんがいるという部屋に着いた。

どうやらアルベルトさん、という名前らしい従者さんは、あからさまに不機嫌なルシフェルに対しても淡々と受け答えをしていた。慣れてるのかな。

一言、三言主従の会話が交わされた後にアルベルトさんが去ってから、ようやく部屋の中を見ることができたあたしと黎香。緊張に唾を飲み込んで恐る恐る覗く。

隅にベッドがひとつ、それから窓が一箇所。それだけ。あまり広くなく、何とも殺風景な室内のベッドの上には黒い塊が見える。いつもならすぐに駆け寄るはずの黎香も、あたしの隣で身を硬くしている。

ルシフェルはというと、救急箱と思しき箱を手にさっさとベッドの傍に行ってしまった。あたし達のことなんて眼中にないかのような動作。好きにしるってことだね、と前向きに解釈して黎香と二人で近くに寄った。

そこに、彼は横たわっていた。

呼吸の音が聞こえているから、目は閉じているけど、眠っているとか気を失っているだけとかかもしれない。綺麗な銀髪の先端、特に右の方、そして右肩。そこには乾きかけの血糊がべったりと付いている。

本物の、血。

泣きそうになるのを堪えて震える足に力を込める。ほら、だって黎香は頑張って耐えてるじゃないか。

呆然と見守ることしかできないあたし達と違って、ルシフェルは実に手際が良かった。アシュタロスさんがいつも着ている黒いローブを脱がせ、傷口を臆することなく観察し、次々に箱から道具を取り出していく。血を見慣れてるみたいで、ちよつとだけ胸が痛くなつた。

タオルを当てながら血を洗い流し、次にかけたのはたぶん消毒液。ツンとしたアルコールに似た匂いが漂う。てきぱきと処置して最後に包帯を取り出し、彼はそこで一旦手を止めた。

「……真子、黎香」

アシュタロスさんの服に手をかけながら。

「今から見るものを絶対に口外してはならない。どれだけ信用のおける相手にも。いいか、“絶対に”だ」

緊張したような表情は、やっぱりどこか悲痛で。いやに静かな声にあたしと黎香は戸惑いながらもうなずいた。あたし達を横目で確認すると、ルシフェルは留め金をひとつひとつ外していく。

初めて見るアシュタロスさんの体。素肌が露わになるにつれて、次第にあたし達は彼の緊張の理由が分かり始めた。

確かに、見事な肉体だった。締まるところは締まった逞しい体。武術のスペシャリストらしく小さな傷は所々にあるけれど、問題はそこではなかった。

心なしか、丸みを帯びた体。はっきりとわかる腰のくびれ。そして……胸元に巻かれた布。

あたし達は絶句するしかなかった。だってあれは、あの華奢な線ときつく締め付けるような布は　　っ。

「女、なの……?」

「我々は性別をあまり気にしない。こいつの体が女のものだというだけだ」

ようやく黎香が絞り出した声に向かって自棄のようにルシフェルが言い捨て、それきり、だった。あたしも黎香も何を言ったらいいのかわからなくてずっと黙っていた。

気にしない……そう言った割には、彼の声はあまりにも悔しさに満ちていて。わざとらしく落とされ続ける視線は、決してこちらに向けられないことがない。

アシユタロスさんが、女性だったなんて。

でもそれを考えれば納得がいくこともあった。滅多に脱ごうとしなかった緩い黒衣、あれは細い体型を隠すためだったんだろう。あれだけ女装が似合うのも当然で。……ルシフェルがアシユタロスさんに特別気を配っているように見えたのも、そういうことなのだ。ああ、だからさつきもあんなに必死だったんだ

あたしでさえこんなに動揺しているくらいだから、ずっと一緒にいた黎香にとってはもっとショックだったに違いない。裏切られたとは言わないまでも、信頼していたひとに隠し事をされるのは辛い。

ただひとり、ルシフェルだけは黙々と作業をこなしていった。肩まで服を脱がせ、何の躊躇いもなく鮮やかな手つきで包帯を巻く。

……少しだけ。少しだけ辛そうだった。

「誰にも言つなよ」

黒衣を元のように着せてあげながら、ルシフェルはもう一度念を

押した。怒っているわけではない。ただ静かな威圧感があった。

「こいつは男として生きてきた。この場でお前達に見せたのは私の独断だ。だが約束を破ることは、アシユタロスを裏切ることになる。他言は無用、良いな」

「本当に、お願いしますよ」

擦れ声が続く。どきりとしてベッドの上を見ると、三人分の視線を紫苑の瞳で受け止めて、アシユタロスさんが力なく笑っていた。

「アシユタロス！ 良かった、無事で……」

「お手数をおかけしました。しかしルシフェル様、消毒はもう少しゆっくりやってくださいな。あんまりしめるのですっかり目が覚めてしまいましたよ」

と、いうことは。

「まさかお前、あの時から」

「はい、気付いていました。……ああ大丈夫です、貴方の判断に怒る気は毛頭ありませんから」

何か言いかけたルシフェルを手で制し、アシユタロスさんは微笑む。体を起こすこともせず、ベッドに仰向けに横たわったまま。

「でも……」

声が、震えていた。

「少し、心の整理がつかないだけですから。どうか……ちょっとの間、ひとりにしてくれませんか？」

片腕を目の上のせて、ほんのわずかに悔しそうに

「知られてしまいましたか……」

そう言って大きく息を吐き出した。知るかどうかの選択権はあたし達にはなかったけれども、そもそもなんで万魔殿に来てしまったのだろうか、ちょっと前の自分の主張を翻したくて堪らなくなつた。ここに来なければ、アシユタロスさんにこんな思いをさせずに済んだのかもしれないのに。

ルシフェルに目で促され、あたしと黎香は何も言わずにドアの方を向いた。言える言葉なんて持っていなかった。

「ルシフェル……貴方はいつだつてずるい。こうしてまた、僕を拒む」

背中を向けた途端に聞こえた小さな小さな声。

応じた言葉は答えではなく、彼の気遣いはどこまでも遠い一歩分の差を保ったまま。無機質で、そこはかとなく他人行儀で、空っぽの優しさで満ちていて。

「……とりあえずゆっくり休むといい。何かあったら知らせろ」

「ありがとう、ごさいます……っ」

部屋を出る時、鼻をすする音が聞こえた気がした。

## 第19話：言えない気持ち、癒えない心

「くそっ！……」

壁に思い切り拳を打ちつけた。鈍い痛みは、それでも足りない。あいつの痛みには比べれば、こんなもの。

悔しくて、自分の情けなさにはただ唇を噛んで耐えるしかなかった。この思いをどこにぶつければいい？ 何故私ではなくあいつが傷つくことになった？

……いつそ私を殴ってくれば良かったのだ。お前のせいだと、お前の力が及ばないからだと言われ、なじり、怒鳴ってくれた方がどれほど救われたか。

だがアシタロスはそうしなかった。救いなど求めることが間違っているのかもしれないが、それでもあいつの気持ちがあんな程度で収まるはずがない。

昔から、そうだ。アシタロスはいくら私が無茶をしようとも黙って従い、最後まで傍にいてくれる。……私が天界を去る時も、真っ先に何もかもを捨てる決心をしてくれた。約束されていた自分の居場所や仲間との縁を切ってくれた……こんな私のために。命を捧げるという言葉に嘘はない、それは充分過ぎるほどわかっている。だから私は誓ったのに。また泣かせてしまった。

「拒んだ」とあいつは言った、見抜かれた。しかし違う、違うんだ。私はお前が嫌いなわけじゃない、ただ！

“あいつを泣かせたら俺が許さない”

いつかの友の言葉が脳裏に甦る。アシタロスは私を選んでくれ

た。私についてきたことを後悔させてはならないというのに！

ギリ、と歯を食い縛る。爪が食い込んだ手のひらの感覚が、どこか自分から離れた所からくるように感じられた。……だが、もつとだ。もつと、この手が血塗れになるほどに傷つけても足りぬ！

世界を支える？ 笑止！ その前にやることがあるではないか。仲間ひとり護つてやることができないなんて。私の両手はあまりに小さい。そしてあまりに汚れている。

「ルシフェル……」

「……悪い。大丈夫だ」

真子は何も言わずにうつむいた。彼女達にとってもショックな出来事だったろう。何もこんな時に明かす必要はなかったかもしれないと、少しだけ悔いた。

「……今日は私は万魔殿に残る。アシユタロスがあんな目に遭わされたのだ。絶対に、絶対に……」

犯人を許さない。一つや二つの傷で楽に消してなどやるものか。あいつと同じように肩に斬りつけ、そして……

「……あたしも、残りたい」

「何？」

一体何を言い出すのか。私は驚いて少女を見下ろした。残るだけ？ この万魔殿に？

「真子も見ただろう。これは遊びではないのだぞ。今ここは危険だ」「わかってる。でも……あたしはルシフェルが心配で、だから」

揺れる瞳。それが紫苑の目と重なって見えて、思わず詰まった。拒絶の言葉が出てこない。お前も、なのか。

「……アル！ アルベルト！」  
「……」

私は何も返さずに従者を呼んだ。疾風の如く現れた金髪の墮天使は、ただじつと控えている。冷静沈着を前面に押し出したかのような無表情。緊張の色を滲ませてこちらを見つめる翠の目。それだけがいつもと同じ日常の欠片のようで、何となく安堵感を覚えた。

「如何なさいましたか、殿下」  
「部屋をひとつ用意せよ。この二人のために」

ああ、同じことを繰り返すかもしれないという不安。あの揺れる瞳、澄んだ光を何よりも守りたいのに。この上更に真子に何かあったら、私は一体どうすればいいのだ。

「宿泊棟の一室は」  
「確か……三階の角が空いていたように思いますが」  
「結構。世話役としてお前とラケルをつける。一晩で良い、目を離すな」  
「畏まりました」

何も無いとは思うが、彼らを護衛としておけば大丈夫だろう。階級がそれほど高くはないとはいえ、武芸と教養に秀でた墮天使達だ。機転も利く。しかも他の悪魔達もいることだしな。

「真子、黎香。私は外へ行って来るから、何か困ったことがあれば

アルベルト達に言つといい。万一にも単独行動は控えるように」  
「……ルーたん」

今度は暗く沈んだ黎香の声。しかし何事かと見下ろせば、見返してくる目には力があつた。

「黎香、ここにいる」

「ちよつと黎香！」

「アッシュはここで過ごすんでしょ？ だったら黎香もここにいます。ここでアッシュのこと守る！」

真子が咎めるような声を出したが、黎香はそのまま扉の前に座り込んでしまった。

無論、許可したくはない。守るも何も、お前達の方が守られる立場だと、そう言つてやりたい気すらある。

だが先刻真子に大声で言い返されてから、強く出るのを躊躇ってしまう自分がいた。人間相手に、馬鹿な。有り得ないと思つてはいたが……

「……好きにしる」

そつとだけ言つて踵を返した。真子も慌ててついてくる。

「いいの？」

私に聞くな。また怒鳴りそうになるのを堪えて

「辛くなるのはあいつ自身だ」

一言だけ、吐き捨てた。

## 第20話：従う者の話

宮殿に用意された部屋であたしは一晚　地獄にも“日”の感覚はあるらしいから、多分、一晚だ　過ごすことになった。ベッドは二つ用意されていたけれど、黎香も、もちろんルシフェルも帰って来ない感じだったからずっとひとりでいなければならぬかもしれない。

最初に案内してくれたアルベルトさんと、もうひとりの女の墮天使さんは部屋の外に控えていたから、あたしがすることといえば思考することぐらいで。

一応、自分なりに気持ちの整理はついて落ち着いた、気がする。アシュタロスさんが女性だったという事実。驚いたなんてものじやなかったけど、あたし達に教えてくれたこと自体、むしろ感謝すべきなのかもしれない。ルシフェル達のような言い方をするなら、あたし達は人間で彼らは墮天使だから。

頭を撫でたりと、時折他の墮天使さん達とは違う対応をしていたルシフェル。特別扱いをしているような気がしたが、それも合点がいく。男として生きてきたとはいっても元々は女性。彼はアシュタロスさんが自分の傍で危険な目に遭うのが耐えられなかったに違いない。だから……、とそこまで考えて、部屋を出た直後のルシフェルの表情を思い出した。だからあんなに怖い顔をしていたんだ。

昏い色をしていた瞳が生氣を取り戻したあの時。でもその輝きはあたしが知っている優しい光じゃなかった。憎しみに燃える目だった。以前に見た夢の中で鎖に縛られていた彼のような。

それであたしは心配になって、つい「残りたい」なんて言ってしまったのだ。なんだか彼をひとりにはいけない気がして。

どうしてだろう。夢だつて、別人だつて信じているつもりなのに、あの夢が本当のことだという証拠がどんどん積み上がっていくみたいだ。今の彼は確かに時々怖くなる、けど。それでも一緒に過ごしてきた毎日は嘘なんかじゃないと思いたい。思わなきゃいけない。あたしは、ルシフェルを信じてる。

考えていたらなんだか怖くなってしまった。ひとりであるのが寂しいというわけでもないけど、なんとなく部屋のドアをそっと開けてみた。

すると外ではやっぱり、ふたりの堕天使さんが入口の脇に直立不動。本当に警備員のように姿勢良くぴしっと立っている。

「あの……」

あたしの声にふたりは瞬時に振り向いた。アルベルトさんという男の堕天使さんと、ラケルさんという女の堕天使さん。どちらも金髪・碧眼で、ルシフェル達よりもシンプルな黒衣を纏っている。アルベルトさんは顔も思いつきり欧米人のようだしすごくカッコいいのだけど、ラケルさんはそれとは別でふわふわとした雰囲気を感じた愛らしい女性だ。

「如何なさいましたか」

聞いてくれたのはアルベルトさんの方。きれいな顔立ちだけれど無表情……というか平淡な表情があたしを見る。

「ええと、その……ちょっとお話ししたいなあ、なんて」

あくまでも事務的に対応されることで少し躊躇ったが、悪いひと

ではないだろうと思って正直に言ってみた。彼らの主人と面識があるという強みは自覚していたし。

逆に戸惑っていたのはアルベルトさんの方だった。そのクールな表情がほんの少し困ったように動く。

「お話し……ですか？」

「あっ、いえ。お忙しいとは思いますが、ちょっとだけ……」

「いいんじゃないかしら、アルベルト？」

ころころとした可愛らしい声に視線を移すとラケルさんが首を傾げていた。

「宮殿の内部はそれほど危険ではないわ。お付き合いして差し上げなさいな」

「あっ、可愛い……！」

初めて見た時から美女だとは思っていたが、声も鈴の音みたいで見た目にとっても似合う。喋り方までどこぞのお嬢様チックで、しかもそれが彼女にはぴったりのように思える。……ルシフェルはこんな女の子を傍に侍らせていたのか。ちょっと悔しくなったのは、あたしに元気が出てきた証拠かな。

「……それもそうだな。では君がお相手して差し上げて。女性ひとりに警護は任せたくない」

「あら、そう？」

くっ、アルベルトさんってばどこまでクールなんだ！ ラケルさんは可愛いし！

「それでは僭越ながらわたくしがお相手致しますわ。どうぞ」

「あ、はい。ありがとうございます」

アルベルトさんも、頭を下げたあたしを見て軽く会釈してくれた。あたしとラケルさんはそのまま部屋の中へ。ラケルさんはごく自然にドアを押さえてくれて、中に入ってからも、ベッドと同様にふたつ用意されていた木製の椅子に腰掛けるように促してきた。

「申し訳ありません、きちんとした椅子をご用意すれば良かったのですけれど」

「あ、いえ、全然平気です。……あの、ラケルさんも座りませんか？」

従者さんはあたしに対しても従者さんの姿勢を貫くつもりらしく、近くにずっと立ったままだったのとおりあえず勧めてみる。本当は、なんだか落ち着かないからだが。あたしは誰かを立たせたまま自分だけが座ってるのって好きじゃない。しかも実年齢は絶対向こうが上だし。

「どうかお気遣いなく。このままで結構でございますよ」

「えと、あたしが落ち着かないってどうか、そのー……」

「……そういうことでしたら」

ラケルさんは流れるような動作で斜向かいにある椅子に座り、ふわっと微笑んでみせた。

「お言葉に甘えさせていただきますね。ありがとうございます」

「は、はい」

愛らしい微笑みを至近距離で見せられて変に緊張してしまう。所作も上品で優雅だし。でもあっさりと座ってくれるあたり、お茶目

さんオーラを感じないでもない。

翠の目があたしを見つめる。無言。沈黙。うつすら汗をかき始めてからようやく気付いた。そうか、ラケルさんはあたしが話すのを待ってるのか。そもそも話したいと言ったのはあたしなわけだし、まさかラケルさんが「で、話して何？」なんて言うはずもない。

「あの一……」

「はい」

……どうしよう。なんとなくこんな流れになってしまったけれど。

あっ！ そうだ、これはいい機会じゃないか。

「あの、ラケルさん。ルシフェルのことについて聞いてもいいですか？」

「殿下の……ですか？」

「はい。ルシフェル、自分のことをあまり話してくれなくて。いつも近くにいるラケルさん達なら知ってるんじゃないかなって」

本人は語ってくれない話。ならば周囲に聞くのが早いだろう。ルシフェルの従者さんと話せるなんて滅多にないチャンスだ。

ラケルさんは金色の長いまつげを数度ぱちぱちと上下させ、それから眉を下げて困ったように笑った。

「申し訳ありませんが、それはわたくしの一存ではお答え致しかねます」

「そ、そうですか……」

……やっぱりダメか。余程沈んで見えたのか、がっかりしているあたしを見たラケルさんはちよっぴり慌てたように再び口を開く。

「あの、一体どういったことをお聞きしたかったのでしょうか？」  
質問によってはお答えできるかもしれませんが」

「えーと、ルシフェルの昔の話とか……今なんであんなにイライラしてるのかなーとか」

黙ってしまったラケルさん。あたしはそんなに返事は期待していませんでした。 「ルシフェルのことを知りたい」と言っただけで却下されたくらいだ、従者さん達はルシフェルの意思に反するようなことを絶対にしないだろう。彼が隠すと言ったら隠す。当然といえば当然のことだけど。だから思いつくままに言ってみただけだったのだが。

「……本当は、いけないんですけど」

困ったような声音に顔を上げると、苦笑しているラケルさんと目が合った。

「これも何かの縁ですわよね。わかりました、少しだけお話し致しますしょう」

「へっ？ い、いいんですか？」

「今夜殿下はお戻りになりませんわ。ですから、これはわたくし達だけの秘密です」

うわー、やっぱりどこかお茶目だこの墮天使さん。

唇に指をあてる仕草も可愛くて。思わず見惚れそうになるのを抑えてうなずいた。

「と申し上げましても、本当に少しだけですわ。わたくしは殿下の御身をいちばんに考えますから、そこはご了承くださいますか？」

「もちろんです」

「ありがとうございます」

ルシフェルは本当に慕われてるんだなあと思った。殿下と口にする時のラケルさん、すごく幸せそう。

彼女は少しだけ笑顔を引っ込め、首を傾げてふと遠くを見るような眼差しになった。

「……殿下が元々は天界にいらっしやったことはご存知ですよね？ わたくしはその時から殿下にお仕えしておりましたわ」

「ルシフェルは天使だった時も位が高かった、んでしょうか？」

「そう……そうですね。まるで雲の上の存在で、最初はわたくしなどお会いすることはないものと思っておりましたけれど、縁あってお傍にいられることになりました。わたくしは……いえ、わたくしだけでなく墮天した者は皆、殿下のことを心から愛し忠誠を誓って道を選びましたの」

道。墮天するという道。

「わたくしは今でも当時のことを鮮明に思い出すことができます。けれど……殿下は恐らく」

「ルシフェルは忘れてしまった、ということですか？」

「いえ……これは憶測の域を出ない話なのですけど……殿下は過去を思い出さないように、忘れるように自ら努めておられるような気が、わたくしにはするのです」

「それは、」

「申し訳ありません、これ以上は。……ただひとつあえて申し上げるとするならば、墮天という選択で最も苦しまれたのは殿下だということですよ」

一体どうして。肝心なことはわからないまま。

「ただ、過去の話題にルシフェルが触れたがらない理由は少しはつきりした。やはり大きな事件があったのだ、墮天するきっかけとなった事件が。彼が記憶から抹消したいと願うような、そんな苦しい思い出って……何なのだろう？」

ラケルさんは自分の頬に片手を添え、小さなため息を吐いた。

「殿下は素晴らしいお方です。強く、美しく、気高いお方。民を第一に考えてくださる、優しき名君でもあります。ですが……時に強すぎる責任感に身を蝕まれてしまうのです。御自身の心身が疲弊し壊れてしまうまで、必要以上の罪を被ろうとなさるのです。わたくし達に不安を抱かせまいと、何もかも御独りで」

「壊れる、まで……」

妙に引っ掛かった。言われてみれば最近のルシフェルは、何かに追い詰められているようにも思える。余裕面を装いながら。

「……わたくし達も近頃の殿下の御様子にはただならぬものがあると感じておりますの。いいえ 殿下だけでなく、この万魔殿自体にも。はつきりしたことは申し上げられませんが、これから何か起きようとしていることだけは確かだと思えますわ」

## 第21話：表出

アル達に真子を部屋へと送らせ、黎香とアシユタロスのことも時々見に行くよう命じてから、私はひとりで宮殿を出た。

外は暗い。

この都の空が明るく輝いた例などないのだが、それでも今は夜だ。魂は休息するだろう。レムレースは幾分気を抜けるだろう。悪魔や墮天使は宴を始めるだろう。我が憎むべき敵は次の獲物を探して駆けるだろう。そして私はそれを捕らえねばならない。

憎い。

濁った感情を自覚した瞬間、頭に鋭い痛みがはしった。またしても一瞬だけ。眉間に力を入れて歯を食い縛り耐えたが、残響のような鈍い痛みを意識を支配されていくようだった。

あくまで私の邪魔をするか、美しき獣よ。出てこないと言ったはずだが……

ふと気付く。ああ、これは。奴の力が強まったのではない、私が自ら枷を外すような真似をしているのか。

《光》は憎んではいけない。欲望を抑えねばならない。他者に救いを求めてはいけない。……私が私に科した鎖。だが本当は。

目をそらしているだけだ。今の私は間違いなく光ではない。

憎いのだ、奴が。

私の世界を壊そうとする奴が。せつかく手に入りかけた安寧を奪おうとする奴が。この思いを掻き乱す奴が！

鈍い痛みはひいてくれない。これは紛れもなく前兆。  
それでも完全に持っていかれないのは……彼女を悲しませたくないからか。そこでどうして彼女のことを思ってしまうのか、私は認められないまま。

ぼんやりと頭痛を感じながら門へと続く一本道を歩いていた時。  
道の真ん中に立ちただかる影に、私はゆっくりと歩みを止めた。

薄闇に輝く白銀の髪が摩く。辺りには、庭園の草木が風に囁く音だけ。

何故ここにいるのか。眉をひそめ、静かに名を口にする。

「ベルフェゴール……」

殺気だ。目の前の悪魔の明らかな敵意を感じて気を引き締める。

「……どういうことだ、ルシフェル」

唸るような声。彼は私を睨みつけ　？

「ベルフェゴール、お前、その目……」

私を睨む鋭い目。いつもは灰白色の　いつぞや彼女が冬空の色と形容したその目の色が、片方だけ変わっていた。私と同じ……血のような紅に。

ならば殺気も当然のこと。紅い瞳は、悪魔の本性。殺戮と殲滅を望む色。

ベルフェゴールは二色の瞳で私を睨む。発散される魔力に白銀の髪を靡かせながら。

「約束が違う。貴様にここを任せる時、俺は覚悟を見せると言ったはずだ。そして貴様は」

一旦言葉を切り、悪魔は軽く首を振る。

私は酷くなる一方の痛みから意識を逸らすのに必死だった。思考に全く集中できない。ベルの冷え切った声までもが頭の中をぐちゃぐちゃにする。

過去、現在。見えるはずのものが見えない。混在。

“そして貴様は”。こんな状態であつても紡ごとと思えば彼の途切れた言葉の続き、容易に紡ぐことができるだろう。“そして私は”……あの日、確かに、

“ 万魔殿最高責任者ベルフェゴールを、殺すつもりだった。”

「ルシフェル。否、《王》よ。一体この世界に何をした。何故世界が揺らいでいる」

「……お前は何が言いたい」

煩わしい。

だんだんと考えることが面倒になっていく。もっと簡単にこの状況を打破する方法があることを、私は知っている。

「俺は言ったはずだ、力のない者は喰われると。無能な長にもはや用などない」

「口を慎め《怠惰》」

無能、だと？ 侮辱に、頭の芯がすつと冷える。

今の私は彼の友でも仲間でもない。万魔殿の長……彼らの支配者なのだ。

「では簡単に言わせてもらおう。何をしているのかと聞いている。返答次第ではこの都、俺が譲り受ける」

「そのために制御を外すのか」

「フン。俺は自分の枷ぐらい自分で扱える」

かつて力で得たこの玉座、それを力で奪い取ろうと 取り戻そうというのか。

まったく時機が良くない。そうでなくとも私は機嫌が悪いんだ。

「去れ、ベルフェゴール。今はお前の相手をしている暇はない。力を収めよ。これは命令だ」

この立場を守るために。私の存在意義を保持するために。早く行かねばならない。私の存在を脅かす悪魔の企みを、阻止せねばならない。

耳鳴り、頭痛、動悸。鈍い痛みが邪魔をする。私は考えなければならぬのに。奴のこと、彼女のこと、目の前の悪魔のこと……

何か方法はないのか！

そう思った。

『消せばいい』

声を、聞いた。

\*\*\*

……クフ。

クフハハハ。

愉快だ、実に愉快だ。

それでこそ《傲慢》！ それでこそ我が愛しき枷！ そうでなくては面白くない。

憎めばいい。望めばいい。それが貴様の真実よ。生まれながらに紅き瞳を持った貴様の運命よ。

いつか告げた言葉は本当だ。あれだけの鎖を解けるとは思っていなかった。

だがこれは私の願いで、そして貴様の願いだ。

殲滅を望むか？ 抹消を望むか？ 破壊を望むか？

……いいだろう、この私が叶えてやる。“私達”にはそれだけの力がある。

「ルシフェル、貴様……っ」

声の方向に目をやれば、こちらを睨む悪魔の姿。ああ、こいつか。こいつが邪魔なのだ。名は確か……

『ベルフェゴールといったか？』

そう、そうだ。思い出したぞ。万魔殿の悪魔だ。久し振りの再会というわけか。ククツ、面白いじゃないか。再び私に挑むとは愚か者めが！

「まさか！」

『まあそう驚くな。なるほどなるほど……ずっと眠っていたものでな、貴様が未だ“私”と交流していたとは知らなかった』

「……ルシフェルは、貴様に体を渡したというのか」

『否。単なる目覚めの挨拶だ。少ししか保てまいよ』

それは事実だ。体が鉛のように重い。本来の力は発揮できまいな。“私”が正気に返れば抑え付けるのも難しいだろう。

しかし私には充分。一瞬でも腕が動けば悪魔のひとりくらい、大した問題ではないのだ。世界に比べればこの患者の存在など小さい小さい！

『貴様には礼を言わねばならんな。あの時はよくも我が肉体を滅ぼしかけてくれたな。どうだ、私の血は美味かったか？』

目を細め、値踏みする。弱い悪魔だ。あの時と何も変わらぬ青二才めが。この程度で私に歯向かうとはまったく片腹痛い。

おまけに目は二色だと？ 馬鹿にするのも大概にして欲しいものだ。返り討ちを食らった痛み、幾千の刻を《怠惰》に過ごして忘れてしまったのか？

「貴様は……ルシフェルは何をしている」

『迷っている。ただそれだけだ』

「何……？」

『そしてそれは私にとって好都合』

「どういう、ことだ」

ああ、話している時間さえ勿体無い。外界をあまりに久しく見ていないものだから、つい。

私がこれ以上話す気はないと見たのだろう、ベルフェゴールが、動いた。

クハハ。遅い、遅すぎるぞ。

『その爪を刺そうとでも思ったか？』  
「っ！」

向こうが地を蹴る瞬間には既に、振り上げられた腕は私の手の  
少し力を込めて握ってやれば、呻き声と骨が軋む音が聞こえた。  
心地良い音色だ。もう少し愉しませてもらおう。

『貴様は何も変わらぬ。さあ早く本性を晒せ。枷を外した状態でさ  
え敵わぬというのに、正気を保ったままではまるで勝負にもならん』  
「ぐっ、……！」

『狂えばいいだろうが。また私の肉を喰らいたくはないのか？』

耳元に唇を寄せ囁いた。愚かだが悪魔は悪魔、血肉にそそられな  
いわけがない。こちらが力を幾分か弛めているにもかかわらず、悪  
魔は小さく身震いしたきりその場に硬直してしまっている。ようや  
く思い出したのだろうか？ 私の喉を噛み切ろうとしてくれた、あ  
の時のことを。

とはいえ欲望を恐怖心が凌駕するのは結構なこと。まあ当然の本  
能か。前は私だけが愉しませてもらったものな。

『血を』

見せてくれ、魅せてくれ。あの鮮やかな紅がまた見たい。私の、  
こいつの。獲物は一匹、ただ八つ裂きにするだけでは物足りない。  
少しは抗ってもらわなければ、一匹分の血では少な過ぎる。

紅に塗れた苦悶の表情ほど美しいものはない。恐怖に誘われた悲  
鳴ほど美しい音楽はない。肉を切り裂く感覚ほど胸躍るものはない！

『さあさあさあ。私は飢えているんだ。“私”が我慢を続けてくれ  
たおかげであ。もっともっと愉しませてくれ！』

短い悲鳴があがった。いけない、興奮して手に力を込め過ぎたか。ほんのわずかに拘束を緩める。利き腕を砕いてしまつたらそれこそつまらない。抵抗してくる相手を弄なぶるのが最高なのだから。どうしようか。時間もなしこのまま殺してもいいのだが、やはり遊びたい。

『すぐに消すのはつまらない。そうだろう？』

私は片手で掴んだままの悪魔の体を投げ飛ばした。……良い音がしたな。肩を砕いたかもしれない。

遠く地面に転がった悪魔の腕は不自然に脱力している。ああ、やはりか。だが構わない。

『立て。まだ片腕が動くだろう、口を使えるだろう』

そう、武器はいくらでもあるのだ。何を使おうが傷はつけられるはず。

“、”

そんなことを考えていた時だ、私の名を呼ぶ声が聞こえたのは。

『……ちつ、もう時間か』

ふむ。忌々しいな、この体。もう限界か。どうやら“私”が目覚めたらしい。

ここからがいいところだったのに。血がざわめく。腕が疼く。だが衝動を上回る“声”が動きを制限してくる。

私は遠くに届くよう声を張り、身を起こした悪魔に向かって告げた。

『気が変わった。脆弱な悪魔よ！ 次に出逢った時は四肢をもぎ取ってやるうぞ！』

クハハハ！

愉快、愉快。せいぜいこの惨劇に怖気づくが良い、枷よ！

\*\*\*

気付くと、見慣れた端正な不機嫌顔が目の前にあった。地面にへたり込んだ私の肩に片手を添えて体を支えてくれながら、ベルがこちらをじっと見つめていた。

瞳は……両眼とも灰色。良かった、戻ったのか。殺気も消失したようだ。

「ベル、私……」

……記憶がない。身を起こすと体中がギシギシと音をたてるような怠さがあった。

私は一体何をしていた？ 何故ベルが私の体を支えている？ 私を訝しむように見る、彼の視線の意味は。

「……覚えていないのか」

問われ、正直にうなずく。この聞き方、やはり何かあったようだ。

「私は何を」

「いい、黙って聞け」

ベルの片腕にまったく力が入っていないようなのが気にはなつたが、いつも以上に真剣な眼差しに口をつぐむ。黙って切れ長の瞳を見つめ返す。彼はわざと落ち着かせるためにか一呼吸分の間をおいて、それからゆっくりと口を動かした。

「ルシファー」だ」

瞬間。全てが色を失った気がした。抱いていた疑問も、解決する前に消失した。

視界が回る。呼吸をやめた体に空気を取り込もうと必死で喘いだ。

終わりだ。何もかも。

もう答えは出た。出てしまった “私は、誰も救えない”。

「しつかりしろ馬鹿者」

静かな、けれど迫力のある怒鳴り声が、まるで水面に引き戻してくれたような気がした。

私は、こんな、優しいベルの声を、聞いたことが、ない。

「しつかりしろ。……貴様には目的があるのだろうか？」

私の、目的。

「今は面倒だから何も聞かん、だが……貴様にはそれだけの目的があったのだろう。あいつの力を一瞬でも求めてしまおうような目的が力を求めた？ 私が？」

「まさか……そんなはず、ない。私が自分から」  
「……無意識か。性質たちの悪い奴だな」

何故かベルは私の顔を見て小さく口端を上げた。これだけ綺麗な笑顔を作れるのなら普段からもつと笑えばいいのに、とそんなことをふと思った。

白銀の悪魔はため息をひとつ。一瞬その表情が苦しげな色を見せたが、私が口を開くより先に片手がまた肩におかれた。指に込められた力が、私に自分の存在を実感させてくれる。

「この際それはどうでもいい。貴様の考えていることも知らない。だが、必ず死ぬ前に世界を戻せ。これは万魔殿幹部としての言葉だ。……もし万が一にも中途半端なことをしたならば、俺が貴様を玉座から引き摺り下ろしてくれる。それがこの都を預かった貴様の責任だろうが」

“責任”。

頭の中の霧が晴れるようだった。思考の回路が一本に繋がったような感覚。

冷静になれ。落ち着いて、現実をよく見ろ。……“今回は血を流させていない”。大丈夫だ、まだいける。

そつだ、思い出せ。私は何の為に生きてきた？ どうして禁忌を犯そうとしている？

やらなければ。地獄のために、世界のために、仲間のために……  
彼女の、ために。

「行け、ルシフェル。……夜は長いぞ」

夜。そう、夜だ。

私にはまだまだやるべきことが残っているじゃないか。ここで折れるわけにはいかない。

「……お前が足止めしたくせによく言う」  
「ふん」

顔を背けてしまったベルを見て苦笑した。軋むような自分の体を持ち上げて、しっかりと大地を踏みしめる。

機嫌を損ねたか、はたまた珍しくも照れ隠しか。動こうとしないベルの横を通り、門を出る。

「ベルフェゴール」  
「……なんだ」

それでも一度。振り返り、微笑う。

「ありがとう」  
「……」

返事を聞かずに私は翼を広げた。夜は、まだ長い。

## 第22話：大切な

翌朝（多分、朝だ）ルシフェルはあたしがいる部屋にやってきて、アシユタロスさんのところへ行こうと言った。本当は内心でこっそりと、また倒れてしまっんじゃないかと思っていた。墮天使長は心配していたほどぼろぼろではなかったけれど、気のせいか目が充血しているような……

二度目の道には従者さんは誰もついてきていない。アルベルトさんでさえも。だからルシフェル自身が先導してくれた。

改めて、何とも広い宮殿だと思う。長く複雑に入り組んだ廊下、たくさんの似たようなドア。迷わない彼らが本当にすごい。

「……………昨日は眠れたか」

ぼそっとルシフェルが尋ねてきた。

「うん。ちょっと考え事してたけど、少し寝たよ」

話しかけられたこと自体に若干戸惑いつつも答えると、彼は「それは良かった」と呟くように言った。

「ルシフェルは寝てないの？ 目が赤いけど」

「アカい？ 私の目は元から紅だが」

「……………そうじゃなくて。寝不足に見えるよ」

「ああ、ああ……………」

そんなことわざわざ言わないよ。ルシフェルの目の色なんて一度見たら忘れないって。

「うん……少しな。私も考え事をしていた」  
「……そっか」

久々に普通の会話をした気がする。それ以降はなかったけど。  
ルシフェルはひどく疲れて見えた。体力的なものだけからくるのではないだろう。きっと、心も疲れているはず。

ラケルさんの言葉が頭をよぎる。

“殿下は、御自身の心身が疲弊し壊れてしまうまで、必要以上の罪を被ろうとなさるのです。わたくし達に不安を抱かせまいと、何もかも御独りで”

そつと見上げた横顔はまっすぐ前を向いている。……彼は今、何を背負っているんだろう？

……ああ、そういえば。

黎香は大丈夫だったろうか？ 廊下にずっとひとりだなんて。あんなことがあった後だ、寂しかっただろうし、廊下は寒かったかもしれない。うっかりすると風邪をひきそうだ。ドアの前で寝ちゃってないといいけど。

でも、あたしの予想は裏切られた。

アシユタロスさんがいる部屋のドアに背をくっつけ、体育座りの格好で膝に顔を埋めて毛布に包まりながら、それでも、ちゃんと起きていた。傍に置かれた銀盆の上には水とサンドイッチ。手はつけられていなくてパンが乾燥していた。恐らく毛布と一緒にラケルさんあたりが置いていったのだろう。

「一晩中起きてたの？」

あたしの疑問には答えずに、黎香はじつところらを見つめた。ちよつと痩せたように見えるのは気のせいか。

「……真子ちゃん」

「ん？」

「……黎香ね、いっぱい考えたんだ。なんで気付けなかったんだろ  
うって。それにもつと信用してあげれば良かったって」

「……うん」

「だけどね、やっぱりアッシュが言ってくれなかったことの方が悲  
しかったの」

「……うん」

「だから」

勢い良く、黎香は部屋のドアを開ける。

もう起き上がれるようになったのか、窓辺に佇んでいた墮天使が  
びっくりしたように入り口を凝視していた。

「だからね……っ」

あたし達の制止も待たずに黎香は部屋の中に飛び込む。そしてそ  
のままアシュタロスさんへと突っ込んでいく。

「うあっしゅうー！」

「黎香っ！」

「どりゃあああー！」

あつという間だった。武人でさえその場で動けなくなるくらいに。

「黎香、さん……！」

……いや。素早いから、突然のことだったから動けなかったのではない。少女が体にしがみついていたから身動きがとれなくなっていたのだった。

「もっと黎香様を頼れよ！ 水臭いって言うんだぞっ！」  
「……っ」

アシュタロスさんは一旦見開いた目を伏せ、やがて、自分にくっついた黎香の背中にそっと手をおく。その声は微かに震えていた。

「そう、ですよね……僕は、貴女にとっても失礼なことをしました」「そーだよ！ なんか言うことないのっ？」「言うこと……」「悪いことしたなって思ったら、言うことあるでしょっ？！」

ばしばしと胸を叩く少女を見下ろし、アシュタロスさんは言葉に詰まったように一瞬押し黙ったけれど。やがて漏れたのは、ちゃんと黎香が望んだ言葉。

「……“ごめんなさい”」

「うん……うん！ いいよ、アッシュは美人さんだから許すっ！」  
優しく微笑んだアシュタロスさんは泣きそうだった。

でも、黎香は泣かなかった。泣かずに怒らずに、ただ笑ったのだ。こっぴつところ、あたしは素直に尊敬する。

良かったと心から思った。男だろうが女だろうが、黎香がアッシュ

タロスさんを好きな気持ちは変わらない。ふたりを見て安心しきっていた時だった。

「……お前は」

しぼり出すような声が頭上から降ってきたのは。

「お前は、どれだけ私に手間をかせさせるつもりだ……っ！」

見上げればルシフェルが体を震わせていた。歪んだ表情。怒っているということはわかった。彼は、怒りに震えている。窓辺にいたふたりも会話をやめてこちらを向いた。

「申し訳ありません……」

慌てて謝るアシュタロスさん。

「このような事態を招いてしまったことは謝ります。でも僕は、ただ貴方の力になりたいだけ」

「軽率だと言っているのだ。私は待機の指示を出したはずだが？」

「それは、」

「感情的な行動は控える。理由など聞かぬ」

一歩一歩、歩み寄るルシフェル。その発散される覇気の、怒りの凄まじさに、黎香も数歩身を引いた。ここまで怒っているルシフェルは初めてだ。アシュタロスさん本人だけは全く引くことなく必死に口を開く。

「どうしてですかルシフェル様。僕は貴方の支えになりたいと」

「結果を見よ。まだお前は言い訳を並べるか」

「ですが！」

アシユタロスさんは本当に傷ついた表情をしていた。あたし達に体のことが知られてしまった時よりも悲しそうだった。

けど……酷いよルシフェル。あたしはだんだんと腹が立ってきて。手間をかけるとか言い訳とか、仮にも怪我人に言うことじゃない。しかもアシユタロスさんはルシフェルのために行動していたというのに。最近イライラしてるのはわかるけど、言っただけいいことと悪いことがある。

「……お前は、本当に」

「どうしてです？！ どうしてわかってくだらないのですか？

」！

「いい、やめろ……」

何も聞きたくないと言わんばかりに、ルシフェルは首を振る。それでもアシユタロスさんは引き下がらない。

「主君に尽くして何がいけないのですか！ 僕では力不足だと仰る？！」

「やめろ、アシユタロス」

「申し上げたではありませんか、僕の全てを捧げると！ だからこんなにも、こんなにも貴方のためと思っっているのに」！

「この馬鹿者っ……！」

聞いたことのないほどの大声。

それがルシフェルの声だと気付いた時には既に、彼はアシユタロスさんを強く抱きしめていた。

「大馬鹿者だ、お前は……っ！」  
「ルシフェル……様……」

呆気にとられたように絶句していたアシュタロスさんは、やっとのことでそれだけを呟いた。あたしと黎香が呆然として見つめるしかない前で、ルシフェルは銀髪の墮天使を抱き寄せる。

「わからないか、アシュタロス……！ 私は、お前が居てくれるだけでいいんだ」

「……………」  
「お前が女だからと侮られぬように、強くあろうとしているのは知っている。お前の決意も充分わかっているつもりだ。だが何かあつてからでは遅いのだ。お前が消えてしまつては元も子もない。仲間を失いたくない。……私は、託されたんだ」

「そして私にはお前が必要なんだよ」

アシュタロスさんは泣いた。ルシフェルの腕の中でぼろぼろと涙を流した。

けれどその顔はとても幸せそうで。窓から差した光に包まれた墮天使ふたりの姿は、本当に美しく見えた。

……少し、正直に言ってしまうと、ちょっぴり苦しかった。

必要だと言葉に出して言ってもらえるアシュタロスさんを羨ましく思ってしまう自分が嫌で、あたしはそっと床へと視線を落とした。

## 第23話：不可逆

影にやられたのだと、アシユタロスは言った。影でできたような、影そのもののような、漆黒の鎌だったと。

やはり……か。既に向こうは動き出している。しかしこちらの思惑が悟られたというのか？ まさか、いくら“あの悪魔”の力が強大であるうとさすがにそこまでは難しいはず。それとも他に目的が？ その可能性は否定できない。世界の揺らぎ……解けていた万魔殿の結界、まるで再び煉獄が拡大を始めたかのような地震、端に存在した闇。

異常だ。いくら私の魔力が安定を欠いたとはいっても、急過ぎる異変だと思う。

一体何を企んでいるんだ。禁忌に対する罰は《世界》から受けるべきで、当の悪魔からではないはずだが。

いずれにせよ……と壁にもたれたままで、ソファアに黙って座る少女を盗み見る。見慣れた風景、見慣れた部屋の中、私の方を見ようともしない小さな人間。

私は腕を組み、気付かれないように長く静かな息を吐いた。いずれにせよ、計画を早めねばなるまいな。時はすぐそこまで迫っている。彼女にも、私にも。

考えるのも忌々しい。緊張していると不安だとか自分で認めたくはないのだが、どうも思い通りに事が進まない。

無性に腹が立つ。アシユタロスの件についても、本当なら即刻“あの悪魔”を見つけ出すつもりだったのに。あの夜……私のがまれそうになったあの夜、ようやく戻ってきた力を一晩中行使し続けたにもかかわらず、結局何も得られなかった。まるで私が踊らされて

いるようではないか。気に喰わん。この私に道化は相応しくないのだ。

今となつては、そもそもどうしてこんなことに首を突っ込んでしまったのかすらわからない……というか最初から気まぐれで関わったのかもしれないから、我ながら呆れてしまう。

私は酷な男か、と自問してみる。ああそつだ、酷い男だな。肝心な時に手が足りない。自分の気持ちにも素直に向き合えないような情けない男だ。

だが責任は必ずとってみせる。如何に汚れた小さなこの手であるうとも、伸ばせるところまで伸ばしてやる。それが私の誇り。譲るわけにはいかない。

「ねえ、ルシフェル……」

万魔殿から戻って以来ずっと黙っていた彼女がやっと口を開いた。様子が妙だとは思っていたが、もし私から距離を置きたがっているのなら、それはそれで良いと思った。その方が彼女も辛い思いをしなくて済むだろうから。

「あの、さ」

違う、と直感した。彼女は、真子は、むしろ私に近付こうとしているのだと。

やめてくれ。心の中で叫んだ。どうかこれ以上私に手を差し伸べてくれるな。でないと、でないと私は。

「ルシフェルはさ……」

「……」

怯えたように私を見上げ、唇が小さく動く。引き下がっても追われるのなら、次は突き飛ばさねばならなくなる。だから、もうこれ以上は、お願いだから

「アシユタロスさんのことが、その……好きなの？」

「……………は？」

……思わず口を開けた。驚いた。こんな小さなことを気にしていたのか、真子は。なんと……くだらない。それでここに来る間中、無言だったのだな。よもやこんなことを気にかけていたとは。

もしもこれが彼女の唯一の懸念だとしたら？ それはとても、素晴らしいこと。

「好きは好きだ。当然だろう、一番近くにいってもらうのだし。……とはいえ恐らくお前が思っている類の感情とは違う」

馬鹿か、私は。何を言い訳してみたことを。

こんな返事をするつもりはなかったというのに。“好きだ”と言った時に一瞬だけ瞳をよぎった絶望を見、気付けば口が動いていた。真子は少しの間きよとんとした表情を見せたものの、すぐにまたうつむいてしまった。だから苦虫を噛み潰していたところは見られずに済んだのだが、一向に彼女の顔は晴れない。

だろうな、と安堵にも似た奇妙な感情を抱いてしまったが、無論好ましい状況にならないことくらい容易に想像できる。私の望みはきつと叶わない。

物言いたげに何度も真子がこちらを見てくるから、とうとう私は思い切って

「言いたいことがあるなら言え」

と促した。予見できる結果ならば手繰り寄せた方がいい、このままでは埒が明かない。時間がないんだ。

苛立ちが声に出てしまっていたか。ついに彼女は意を決したように私を見て、

「ルシフェルも、隠し事、あるよね」

そう言った。

言葉に詰まった。隠し事？ そんなもの誰にでもあるだろう。そういうことも言えなかった。

どうしてだ。どうしてこの娘は、怯えない……？

「わかってるよ。ルシフェルは墮天使だし、あたしに言えないことがあるのは。だけど最近のルシフェルは何か変だよ。言いたいことがあるなら言つてよ」

この目は、とうろたえた。以前私に強い口調で反駁してきた時と同じ目だ。きっと彼女の意思は強い。そして私は、そんな彼女に勝てない。

「ずっと思ってた……。ちょっと冷たいなっと思ってても、理由があるんだろうなって我慢したよ。でもあんなアシユタロスさんを見たら……あたし、ルシフェルが傷つくところなんて見たくない。だから何かあるなら言つて。守ってもらえばっかりで、何も知らないままで……あたしも力になりたいのに！」

お前のその優しさが私を苦しめる。その一言がどうしても、言えない。体の中身を強く握り締められたかのように呼吸が辛い。鼻の奥に感じる痛みの意味が、この切なさの意味が、私にはわからない。

い。  
彼女を傷つけてしまつかもしれないという恐怖は現実性を増していく。確実に変化している自分。私は、もう以前の私ではないのだ。何気ない日常は過ぎ去った。彼女は私に近づくべきではない。決めたはず。守るべき世界のために、自分で道を選んだではないか。

「……別に。何もない。気遣いは無用だ」

「嘘。変だよルシフェル」

「嘘じゃない。何もおかしなことなんてないだろう」

「そういう言い方だつて」

みつともないことは充分にわかっている。だがこうすることが互いのため。にもかかわらず、どうして彼女はこうも食い下がろうとするのか。黙って受け入れてくれれば良いのに。これ以上迷っていたら、また私は悲劇を繰り返すことになるだろう。それくらい自分でわかる。

……どうしてわかってくれないんだ。私ばかりが背負い、走り、聞き……私が闘っているというのに！

ふと浮かんだ乱暴な考えは、一度存在に気付いてしまつと瞬く間に私の心を占めた。

黒い、黒い、解放感と、小さな痛みと。

「そんな言い方ひとつをいちいち気にするな。私の気分かもしれないじゃないか」

「違うよ、絶対。前のルシフェルの方が怒つてもこんなに理不尽じゃなかったもの。これだけ一緒にいたらわかるよ」

わかる？ わかるだと？ “何も知らない” お前に、私のこ

とが？

「ねえ」

「煩い……うるさいっ！！」

“知っているから” “わかっているから”。皆、そう言う。昔も今も。

頭が真っ白になった。

「どいつもこいつも知ったようなことを！ 一体何がわかるというのだ！ 自分だけは理解している、自分だけは知っていると憐れみばかり……それで結局どうなった？！ 私の翼は黒いんだ！ 私の罪は消えはしないんだっ！ 誰も、私の苦しみを知る者などいないというのに！！……」

しまった、と気付いた時にはもう遅かった。

私以上に体を震わせて立っている彼女。引き結ばれた唇の、そして握りしめられた拳の何と小さいことが。小さな脆いイキモノが、私を睨み上げて。

泣くな、これは。

わかっているのに動けない。思考に行動が追いつかない。感情のままに吐き出して、ぼんやりとその光景を眺めて。

「もついいよ！！」

涙声、そして扉が閉まる音。

私はただ呆然と彼女の背を見送るしかなかった。

## 第24話：大好きなひと

久しぶりに泣いた。悲しくて悲しくて、人目も憚らずに、多分こついうことを言うんだろう。

家を出て、勢いに任せてがむしゃらに歩いた。目的地なんてない。ただひたすら家から遠ざかりたかった。彼から遠ざかりたかった。途中で何度か車にクラクションを鳴らされてしまったけど、もう轢かれちゃってもいいやつて。そのくらい自棄だった。

胸が痛い。何か突き刺さったみたいにすぎずきする。まるでそこから血が流れるように、涙が溢れて止まらない。鼻をすすってはむせた。一緒に吸い込んだ空気は埃っぽかった。

……ルシフェルに怒鳴られるなんて。すごくびっくりしたし、すごくショックだった。

もちろん怖かったけど、それ以上に悲しくなった。「煩い」って叫んだルシフェルの言葉は、どうせ誰もわかりやしないと諦めているみたいで。あたしのことも信じてくれていなかったみたいで。

本当は、違うと言いたかったのに。あたしはルシフェルのことちゃんと理解したいと思ってる、そう伝えたくったのに。でも、できなかった。

足を、止めた。涙を乾かしてくれていた生温い風が止む。顔がごわごわする。

……知りたいと思ってるだけじゃ、ダメなんだ。実際、あたしは彼のことをほとんど知らないから。こんな状態では何を言っても言い訳にしかないんだろう。

……悔しい。

このまま何もできずに終わるのか。あの墮天使が殻に閉じこもるのを放っておいていいのか。言われたままでもいいのか。

よくない。絶対に、よくない！

彼と一緒に笑っていたいんだ。あんな悲しそうな顔を見たいわけじゃないんだ。

あたしが人間で彼が墮天使でも。冷たくされても怒鳴られても。自分でも不思議なくらい揺るがない事実。これほど強気でいられるその確かな理由。

あたしはルシフェルのことが好き。大好き。

だから彼のことを知らない自分が、今まで知ろうとしてこなかった自分が嫌なのだ。

一方で。

彼が自分の将来に何をもちたしてくれらるんだろう。

ああ、なんて打算的な嫌な奴。そんなことを思ってしまう醜い自分が嫌いで、悔しい。

人間が純粹でないとは言わないけど、あたしも他の誰かと何も変わらないことが苦しい。好きだ、大好きだ、でも。それだけじゃどうにもならないことがあるという事実を知るくらいには、あたしは人間として生きてきたのだ。

もしもこの先ずっと隣に居て、と考える。何年も経って、あたしと一緒にお酒を飲める年齢も越えて、自分で稼げるようになって、それでもまだルシフェルのことが大好きだったとして。過ぎていくのはあたしの時間だけ。きっと彼はいつまでも変わらないまま。だとしたら、彼はあたしに構ってくれるのだろうか。というのは皮算用過ぎる……か。

人間でない彼、空想の中の彼。出会ってしまったこと自体が、想像以上に重たい出来事だったのかもしれないと今更になって思う。

けれども、矛盾しているようだけど、あたしはルシフェルと一緒に過ごしたことを決して後悔していない。取り返しがつかない過去だから、なんて失礼な諦めはこれっぽっちもないのだ。それだけはちゃんとと言える。いま考えなきゃならないのは今のこと、そして未来のこと。彼は果たして、あたしの希望を聞いてくれるだろうか？

『お前に何がわかる！』

そんなの、わかんないよ、あんたの過去なんて！ 話そうとしてもくれないで、身勝手な言い方しないでよ。ずっと避けるくらいなら、鬱陶しいって素直に言えばいいじゃない。

でも、本当は、何を言われたって引き下がらないんだからね。なんだかんだ言いながら人間のあたしに優しくして、見た目も性格も男前で、みんなに愛される墮天使長が何か抱えてるってこと、それで今悩んでるってことぐらいわかるもの！

そりゃあもちろん、少し、遠慮していた部分もあるのだけれど。だって彼は自分自身の過去について何も語りたがらない。そういう話が出る度、あまり嬉しくなさそうな顔をする。彼が言いたくないのならあたしも知らない方がいいと思ってきた。いつか話してくれるかも、と漠然と考えてもいた。

でも、そろそろ。

もし彼の過去が今の彼を苦しめているのなら、あたしも一緒に背負いたい。たとえ小さな力にしかなくても、あたしはちゃんと痛みや苦しみに耳を傾けてあげるよって伝えたい。そのためには彼のことをもつと知らなくちゃいけない。もう自分から行動する時がきたのだ。いや、むしろ遅いくらいかもしれない。

お人好し上等！ 冷たくされようが知らない。本当は優しくくない

人間だつてことは、自分がいちばんよくわかっている。だからこそあたしは、できることをするのだ。

立ち止まって泣いているあたしを、通行人が何人か変な目で見ていた。でもそんなの気にしていられない。考えなきゃ、考えなきゃ。あたしは何ができる？

万魔殿で一晩を過ごしたあの夜、「これから何かが起きるかもしれない」と言つたラケルさん。ルシフェルの従者である彼女は最後に、あたしに向かって頭を下げた。

『これは従者ではなく、殿下を愛するひとりの墮天使の言葉として聞いてください。……“ルシフェル様”は貴女と出会つてから、確かにお変わりになりましたわ。以前よりも明るく笑いなされるようになりました。ルシフェル様は、確実に何かを掴みかけておられたのです。お願いです、どうかあの方の重荷を降ろして差し上げてください。わたくし達だけでは足りません。貴女にしかできないことがあるのです』

あたしにしかできないこと。 。  
ルシフェルの重荷。彼が執拗に背負いたがる罪。ずっと引きずっている過去。

そう。知らなくちゃ、彼のこと。でも……どうやって？  
すぐに従者さんには会えない。本人には当然聞けない。他の墮天使さん達も教えてくれる可能性は低いだろう。

彼は墮天使長だ。有名人で、伝承の中の存在……

「じし、と目を擦る。泣いてる場合じゃない。頬を軽く叩く。ちよ

つと痛かった。

やっぱり、ものを調べるには基本ってもんがある。彼が有名な存在ならば尚更。

あたしはくるりと方向転換。デート中の学生も、タバコ吸ってるオヤジも、呑気な自転車乗りもみんなどいてっ！ あたしは今、大好きな堕天使様のために頑張らないといけないんだ！

天使とか宗教とか全然興味のないあたしにとって、堕天使長という彼の存在は未知の未知。堕ちた天使。かつては天使だったのに地獄に堕ちて、その地獄で悪魔さえも従わせている堕天使の長。

何があったの？ どうして今は天使ではないの？ 何を忘れたがっているの？ 疑問は尽きない。

だからとりあえず、とたどり着いたバス停の時刻表を見る。運良くポケットに入っていた携帯電話で時間を確認する。

馬鹿みたいな思いつきかもしれないけど、何もしないよりずっとまし。動かなきゃ、結果も何もあったものではないのだから。

……あ、ちようどよく。あと数分で『図書館行き』のバスが来るみたいだ

## 第25話：轍を辿るはオロカモノ

【From the Background】

今と昔でちくはぐだ。

そうだね。

中身と外側がバラバラだ。

うん、そうだね、《世界》。

このままでとまた“ふたり”は離れてしまつよ、悲しい結末を迎えてしまつよ。ねえ《輪廻》、彼は来てくれるかな？

今のままでと不安に思うのもわかるよ。でも彼は必ずココへやって来る。たとえ畏だとわかっていても逃れられないのさ。

じゃあ、待つ？

うーん……もっと悪戯してあげないと、開宴には間に合わないかもね。ナカマを傷つけたって足りないみたいだからなあ、これ以上は、本当に彼が壊れてしまつかもしれないけど。

宴の用意をしなくちゃ。

焦っちゃいけないよ。破壊は救いにはなりきれないのだから。さて、君は“堀”を……彼らを囲う“檻”を、狭められるかい？

できるよ。だって君を受け入れた《世界》だもの。

ふふ、頼もしいね。やつぱり好きだよ、君のこと。でも止めはこつちで刺すからよろしくね。彼を消すのは、この僕だ。

わかつてるよ、《輪廻》。

\*\*\*

取り返しのつかないことをしてしまった。

重たい足をどうにか動かし、背から倒れるようにソファーに身を埋めた。額を支え、目を閉じ、息を吐く。耳の奥にはまだ戸が閉まる硬い音がこびりついている。

こんなはずではなかった。

離れて欲しい、優しくしないで欲しい。確かにそう願った。そのために心を見せようとするのも触れるのもやめた。けれど……

違う。私はこんな展開を望んでいたのではないんだ。彼女の涙なんて、見たくはなかったんだ！

いくら叫んでも、もう声は届かない。彼女は私に背を向けた。私が彼女を泣かせた。

つくづく私は愚か者だ。《光の子》が聞いて笑わせる。同じ過ちを繰り返すなど。

一瞬にして心を支配した愚かな考え。人間を呪った時と同じ、黒い考え。

何故だ、何故私は常に光ではいられない？ この私が後悔を繰り返す？ 私が……完全ではないから？

首飾りを握りしめた。

もうそれは知っている、生まれた時から知っている。そして墮天した時に納得した。遠い過去、私を慕ってくれた少女をこの手で殺めた時にも、充分過ぎるくらいに悔いた。その上で償いが足りないのもわかる。命尽きるまで安寧を求められないことも悟った。

だがそれを彼女にぶつける必要なんて、これっぽっちも、ないのに……！

私は決めたはずだ。墮ちた理由と、私のために戦った仲間の生を守るべく、何があるうと世界を守る必要があったから。もしも世界の安定が望めないのなら、この乱れる心を収めなければ……そのためには彼女を遠ざけるしかない、彼女と 離れるしかない、そう決めたはず。

全ては私が弱いせいだ。自分の気持ちさえ満足に制御できない。だから、背負うと言った世界に影響を与えた。私の心の“揺らぎ”が力を弱めた。

それでも。認めてはいけなかったんだ。たった一言で楽になれる、けれど。樂園を汚し、人間を陥れ、数々の仲間を傷を負わせながら、のうのうと生き延びているこの私が幸福を求めるなど、許されない。

以前、夕暮れ時。偶然ベルゼブブに会ったあの時、奴は私の苦悩を鼻で笑って言った。

『んな小っせエことでグジグジ悩んでやがったのかよ。てめえは真面目過ぎ。で、とんだどアホだ』

『……私の判断は正しかった』  
『違エよ。てめえは悩む方向を間違ってる。なんでてめえがそこまでして自分の首絞めたがってんだか知ンねエけど、そんだけ進藤のこと大事に思ってるなら、そりやもう愛してるってことじゃねエのか？』

『愛、など……私には資格がない。それに、』  
『……あのなア。てめえ、そんなことぐらいでオレらの命懸けが無駄になるとでも思ってるのか？ 勘違いすんなよ！ オレ達はてめえを長として認めた。真面目で、どアホで、鈍くて、不器用なてめえについていくって決めたんだよ。 覚悟なんて、剣をとった時にとつくに決めてる』

『……』

『まっ、オレの場合は銃もとつたけどな。ヒヤハハ!』

ベルゼブブは私を“変わらない”と評した。苦笑しているような悲しんでいるような、そんな奇妙な顔で私を見つめ、ため息を吐いた。

彼の言葉が嬉しくなかったと言えば嘘になる。この道を辿ったことは無駄ではなかったと、その証を示してもらえた気がしたのだ。……だが、謝らずにはいられない。私の辿った道が消えないように、一度刻まれた彼らの傷も消えはしないのだから。

“まるでお別れみたいなこと、言わないでください”  
「……ッ!?!」

これは、

“僕、僕は嫌、だった……貴方を傷つけたくなんてなかった!!”

この、声は

“兄上っ!!”

「あ、あ……!」

いけない! 考えてはいけない!

私は愛する者を傷つけた。愛したが故に傷つけた。その事実、その罪の記憶だけで充分だ。金色の光なんて、私ではない“光”なんて、そんなもの、“存在しなかった”!

そうして罪を知っているのに、どうして凝りもせず私は失敗する?!

わからない、わからない。彼女を傷付けたのは私の意思なのか、主よ。

或いは　もし私を苦しめるために彼女を傷付けるのならば、《世界》よ、私はきつとお前を壊してやる。

……ああ、どうして私は己の事情に彼女を巻き込んだ。たった人間時間の一年で、どうしてここまで。もし彼女と出会ったのが私でなければ、これほど問題が入り組むこともなかっただろうに。

それとも……私が彼女の運命に巻き込まれたのか？　だとしたら“もし”は無意味な思考でしかない。運命ならば。

私が重たい鎖を引き摺っていることも、彼女の灯が縛られていることも。出会い、何故か、特別な存在になってしまったことも。何もかも、運命、だとしたら。

紡ぎ手よ、紡ぎ手よ。何と恐ろしいことが。

疑問に答えてくれる者はない。墮ちた自分に主の御声が聞こえないのは承知の上だが、更には《世界》の声まで聞こえなくなってしまった。内に眠る悪魔でさえも黙ったまま。呼んでいない時に出てくるくせにな。

そう、そうだ、悪魔だ。彼女の。

今はまだ、彼女と離れてはならない。私はまだ彼女を解放できていないのだ、まだ幸福を掴ませていないのだ。

なのに彼女は私の前から去ってしまった。

もうだめだと思った。不安と後悔を自覚した時、私はようやく身をもって知った。

今まで認められなかった思い。自尊心にかけて、受け入れてはな

らなかったこの感情。泣き顔を見て……目の前からいなくなってしまうから、やっと。

無論、薄々考えてはいた。そこに在ることに気付いてはいた。けれどこれまで向き合うことを避けてきた。地獄のため、仲間のため、過去の私自身のために。

しかしこれでは否定できない。この喪失感……自分の一部を抉りとられてしまったかのような。こんなにも後悔しているのは計画が思う通りにいなくなるからではない。どうか早く帰ってきて欲しいと願ってしまう、その理由は。

そう。最初から、気に入ったという程度の感情ではなかったのだ。気まぐれだと思っていた地上への居残りも、運命に逆らおうとしているのも、きつと。

相手はただの人間なのに。私が何よりも厭うた、弱く、小さく、卑しい生き物だというのに。一体これはどうしたことが。ベルゼブブの言う通りだ。

私はどうやら　彼女を愛してしまっているらしいのだ。

## 第26話：愛する貴女へ、贈る詩

『天使と悪魔 大全集』……確か、そんないかにもな名前の本を最初に手にとった気がする。全然関係なさそうな本 例えば『墮天使の掟』とか『キリスト教に見る国家の問題点』とかまでとにかく読み漁った。彼はお偉いさんなわけだし、絶対に載っているという確信を持って。

そして確かに彼の記述はたくさん目にした。名前もたくさん見た。ただし……“悪魔”として。神に仇なし人心を惑わす絶対悪として。あたしはすごく混乱した。だって彼は常々「悪魔ではなくて、墮天使だ」と強調する。だから明確な違いはあるはず。それなのに、悪魔とイコールにされているのはどうして？

疑問に思うと同時にあたしはとても後悔していた。ひとつはそんな記述を知ってしまったこと自体を、そしてもうひとつは、彼のことをちゃんとわかっているだなんて言ってしまったことを。

あたしは自分の考えの浅さを知った。もし本の内容を信じるとすればだけど、彼はあたしが思っていたよりも遥かにとんでもない過去を通り抜けてきたに違いない。どんなに偉大な学者にだって彼の苦しみを理解することはできないだろう。ましてたかだか十数年しか生きていないあたしが ううん、人間が限りある短い生しか送れないうちは、絶対に彼らの考えを推し量ることなんてできやしない。

彼が怒るのも無理はないのだ。あたしの言葉はあまりに軽率だった。

謝らなくちゃ、と思った。冷静になった頭にふと浮かんだひとつの可能性……彼が地獄に帰ってしまったかもしれないことに思い至

った瞬間、あたしは図書館を飛び出した。

このままお別れだなんて、絶対に絶対に嫌だ！

バスを降りるなり必死で駆けて、もうすっかり夕暮れになってしまつてから、あたしはようやく自宅へ辿り着いた。途中でどんな道を通つたのかすら覚えていない。考えることが怖かった。すぐに万—のことを思つてしまつから。

緊張しながら玄関のドアノブを捻る。

ガチャン、という音。ドアが開く。出てくる前と変わらず彼のブーツが置いてあるのを見た途端、あたしは更にドキドキした。まだ居るといふ安心感はある。けれどそれ以上に、どんな顔をして会えばいいのかわからなくて。

そつと室内に滑り込み、静かにドアを閉める。しんとする部屋の中は黄昏色。ひよつとして寝ているのかな、と思いながら廊下を忍び足で進む。

最初に何て言おうか。きっと怒ってるだろうな。もう話なんて聞いてくれないかもしれない。だとしても一生懸命謝ろう。その上で思つてることを伝えよう。ああそれとも、何事もなかったように振舞う方がいいのかな。……

でも。

リビングに入った瞬間に、考えていたことは全て吹き飛んだ。口の中で唱えて練習していた第一声も忘れてしまった。

墮天使様はソファア—に座っていた。

ふと、顔をあげる。

頭を抱えたまま、黒い前髪の奥にある紅眼であたしを見て。その宝石みたいな瞳が次第に見開かれていく。

「……………真子……………？」

名前を呼んでくれた声はひどく擦れていた。あまりに弱々しくて、今まで見たことがないくらいに、潤んだ瞳は頼りなく彷徨っていた。

「あの」

「ごめんね、ルシフェル」

何かを言いたげにしていた彼を遮り、あたしはとにかく謝った。ばちばちと目瞬きをしていた彼はたつぷりの間をおいてからようやく、どうして、とだけ問うてきた。あたしは少しだけ迷って、でも思っているまますうことに。

「あたし、ルシフェルのことなんにもわかってなかった。それなのに知ったようなこと言って、すごく浅はかだったと思ってる。ルシフェルが怒るのも当然なのに、あたしが勝手に思い上がって飛び出して……………本当に、ごめんなさい」

「どうして真子が謝る……………？」

「え……………」

あたしを見上げる、初めて見るようなルシフェルの表情。家を出てくる前とは全然違う表情。困惑も顕わに、まるで迷子のように不安に動く瞳は焦点が定まらない。震える紅唇から堰をきったように言葉が溢れてくる。

「何故真子が謝るの？ 悪いのは全部私なのに。私がお前を傷付けた。皆を裏切った。全て、私のせいだ……………ああ……………また取り返しのつかないことになる。何もかも消える、何も残らない。怖いんだ……………失うのが、だって、けれど、私がいるから、きつとまた皆……………」

「ルシフェル！」

ひどい……錯乱状態でも言おうか。頭を抱えてかぶりを振りつつ、わなわなと唇を震わせる。正気を失っていることは確かだった。あたしのことはもちろん、周りが何も見えていない。

壊れてしまっ、と思った。咄嗟に傍に寄って、思考に囚われて沈んでいく彼の手を握る。

とても冷たい手にあたしの手が触れた途端、ようやくはつとしたようにこちらを見た彼は口をつぐむ。ルシフェルは真っ青な顔で目を伏せ、ごめん、と小さく呟いた。

謝って欲しいわけじゃないのに、と心が痛くなる。あたしは真夏ののに氷のように冷え切った手を自分の両手で包み込んだ。

「大丈夫。あたしはここにいるから。あたしはちゃんとルシフェルの傍にいるよ、ね。だから、大丈夫」

また知った風なことを言っているみたいだったけど、でも今は違う。今はただ、大好きなひとを支えたかった。彼はたくさん辛い別れを経験しているのだろうけど、あたしはいなくなったりしないよって伝えたい。

怯えた眼であたしを見てくる彼の姿は、数多の墮天使を率いる強き長からかけ離れていた。

思い出してルシフェル。自分の強さを、誇りを、自信を。あたしはいつも彼がそうしてくれるように、まっすぐに目を見つめて微笑った。

「ルシフェルはひとりじゃないよ」

「……」

すっ、と息の音。握った手に力が込められる。

「もう、大丈夫」  
「……うん」

小さくうなずいた彼にうなずき返して、あたしはそっと手を離す。そうして台所から麦茶を持ってきて注いでやる。

そろりと彼の両手がコップを掴む。ぐいっと一気に飲み干して、長いため息。

目が合った。

薄い唇が微かに笑みを形作る。寂しさを含んではいたけど、やっと、ルシフェルは笑った。笑ってくれた。

「……おかえり、真子」

「うん。ルシフェルも、おかえり」

久しく見ていないような心のこもった笑み。あたしの大好きな紅い瞳。明るい、その色。

しばらくあたし達は無言のままだった。黙って隣同士に座って、お互いの温もりを静かに感じていた。彼の傍はこんなにも心地良い。幸福な時間。ゆったりとした空気の流れを揺らしたのはルシフェルの方だった。

「真子。……私について“何”を知った？」

どきりとした。実を言うと、このまま言わなくてもいいとずるいことを考えて始めていたのだ。あたしが本で読んだことは全部無視して、彼の傍にいらねればそれでいいやって。それじゃあ何も変わらないとわかってはいたけれど、言いたくなかった。

「私は怒らないから。正直に言っただけだ。」

……きつと、彼は全て知っているのだ。

「あの……あつ、ルシフェルが本当にすごいんだって本に書いてあったよ！ 知恵も力もいちばんで、たくさんの仲間から信用されてて」

「真子」

そうじゃない、とでも言うように彼は静かに首を振る。あたしを見た穏やかな瞳は何もかもを見透かしてしまいそうで。どうしたらいいのかわからなくなつて、あたしは黙って膝に視線を落とす。

「 “傲慢” 」

ほんと彼が放り出したその言葉。それは彼についての記述に必ずと言っていいほど含まれていた単語。

「……最高の知恵と力を持つある天使はその強大な力ゆえに思い上がり、神の座に就こうと反旗を翻した。争いの果てにその天使は敗れ、地獄へと墮とされた」

思わず顔を上げた。

「或いは……神に最も近かつたある天使は、土塊から創られた存在である人間が神の寵愛を受けていることに嫉妬し、彼らに頭を下げることを拒んで天界を追放された。……違うか？」

「……」

優しく首を傾げる彼の笑顔の真意は、わからない。

でも……ルシフェルが言う通り。あたしが読んだ墮天の理由、それらは全て傲慢な天使の転落を描いたものだった。目の前の彼からはとても想像できないような。

「……本当なの？ その話……」

「今は何も言えない」

彼は、もはや悪魔と呼ばれるべきなのかもしれない墮天使は、そつと目を伏せた。まただ、とは思ったけれど、話してくれないことを不満に思う気持ちはもうない。否定してくれなかったことが、少し寂しかった。

「だが……そうだな、私が傲慢であったことは事実だろう。しかしながら剣をとった時、我らに勇気が欠けていたとは言わせない」

紅の眼が遠くを見据えて一瞬だけ燃え上がる。その焔に背筋が凍る。

けれどたぶんそこに憎悪はなかった、と、思う。ただひたすらに強く、他者を圧倒する、暴力的な。

「ルシフェル……」

堪らず名前を口にすれば、圧倒的な覇気はたちまち消え失せて。そこに残ったのはやっぱりどこか悲しそうな微笑み。

「……怖い、だろうな。私はいわば反逆者……大罪を犯したのだから、当然だ。近寄るなど言つのならおとなしく受け入れよう。それだけの覚悟はできている。真子、お前は今まで本当に良くしてくれ  
た」

「怖く、なんて」

あたしの呟きに、ルシフェルは黙る。  
多分、きっと、このままだと彼は自ら出て行くことするだろう。  
優しい、彼のことだから。

「本に書かれてることがどうであれ、あたしが知ってるルシフェルは目の前にいるルシフェルだけだもん」  
「……」

優しく、ちょっと天然だけど、あたしとの約束を必死に果たそうとしてくれるひと。あたしが大好きになったひと。勝手にお別れだなんて、許さない！

「あたしは、怖いなんて思わない」

「真子……」

「うえっ?!」

背にまわされた長い腕に体が引き寄せられる。声をあげる間もなく倒れ込んだ先は広い胸の中。あたしの頭を押し付けるように抱えた彼の声が、上から降ってくる。

「お前のその優しさが、きっと私は好きなんだ」

好き？ あたしを好きって言った？

せつかくの言葉は自分の心臓がうるさくて聞き取りにくい。自分のと、彼のも。重なって聞こえるふたつの鼓動。

ああ、彼も生きてるんだ。

そんな当たり前のことが何だか嬉しかった。

「お前と出会えたことは決して偶然などではない。お前が生きる時代は今この瞬間だけなんだ。当然のことに気付くのに、私は随分と遠回りをした……」

「……」  
「真子は私よりもずっと強いよ。そんなお前を、ひとつの命ある者として愛しく思う」

人間だからとか墮天使だからとか、彼がずっとこだわってきたこと。無意識のうちにあたしを拒んでいた壁が感じられない。彼は何か吹っ切れたように見えた。

ゆっくりと身を離してあたしの顔を覗き込んだルシフェルは、ぎよっとしたように目を見開いた。

「な、何故泣く？」

「だって……っ」

それはあたしにとって嬉しい変化だからだ。やっと、ルシフェルが帰ってきた。

墮天使様も女の子の涙には弱いのかな。恥ずかしげもなく男前な言動をするくせに、今はおろおろとしているのが面白くて、ちょっと笑ってしまった。

「だ、大丈夫か？」

「うん、平気」

「本当に？」

「本当に。ありがとう」

「良かった」

いつも通り。ちゃんとあたしを見てくれるルシフェル。

大丈夫だと思った。大丈夫　今なら聞ける。どうしても気にな

ることがひとつ。

「あのね、ルシフェル。ひとつだけ、調べてもわからないことがあってね」

「どうした」

「あの……お腹の傷のこと。聞いても、いいかな」

予想通り、ルシフェルは少し言葉に詰まった。あの傷。彼の胸から腹にかけて斜めにはしった大きな傷痕。どこにもそんな記述はなかったのだ。

あたしは怒られるのじゃないかと思っただけで首をすくめていたけど、ルシフェルの方は穏やかな表情を崩さない。

「構わない。そこまで知ったのだから、真子には聞く権利がある。

だが、」

「だが？」

「今は時間がない。後でゆっくり話してやるよ」

時間が……ない？

おもむろにルシフェルは立ち上がる。黒衣の襟を正してあたしを見下ろす。

「仕事があるから地獄へ行ってくる。……そんな顔をするな。なに、些細なものだが、ゆっくり過ごすために煩わしいことは全て片付けておきたいんだ。真子との時間を、何にも邪魔されたくない」

「……ちゃんと、帰ってきてね」

「わかっている。何があるつと、私はお前を守るのだから」

身をわずかに屈めたルシフェルは、そっとあたしの唇を塞ぐ。柔

らかな感触。小さく響いた音に耳の先まで熱くなる。  
ルシフェルはずるい。こうされると、あたしが何も言えなくなる  
ことを知っているのだ。

「真子」

呼ばれて、見上げたけれど。

「……いや、何でもない。……ごめん」

彼はどこかぎこちなく笑っただけ。つられてはにかんでしまつと、  
それを確認したと同時に、黒い背を向けられる。

でもこの時のあたしはまだ知らなかった。

彼の一言にどれだけの決意が込められていたのかなんてこと、そ  
して

「行ってくる」

そう言って微笑んだその墮天使が、

「うん、行ってらっしゃい」

もう二度と今の彼のままで戻って来ないなんてことも。

## V e n d e t t a

「やっぱり……無理です」

ふたりの、天使がいた。

全てを吸い込みそうな漆黒の髪のア使。全てを包み込むような淡い金の髪のア使。どちらの背にも純白の光り輝く翼。

ふたりは互いに剣を構えて向き合っている。だが金髪のア使は震えながら首を振り、剣を下ろした。

「私……いえ、僕にはできない……!!」

遠くから僅かに喧騒が聞こえる。刃物が交わる音、悲鳴、雄叫び。しかしこの場にいるのはふたり。ただ、ふたりだけ。

尚も震える金髪のア使に、黒髪のア使は剣を構えたまま。

「お前がやらなければならない。でないと、きっと後悔する」

天使とは思えぬ、妖しく美しい紅の瞳。それは黒髪のア使がもって生まれたもの。

その紅玉がすつと細められた。

「それともお前は誓いを忘れたか？」

「それは……っ！」

びくりと顔をあげた金髪のア使。その瞳は深く澄んだ蒼色。

彼らはどこまでも対照だった。最も近い存在でありながら交わることはなく。

けれど彼らは、どこまでも深く互いを愛していた。誰よりも、ずっと。

「でも、僕は」

言葉を探す金髪の天使に冷たい声が浴びせられる。

「……お前の覚悟は、主への愛と忠義はその程度か」

「そんなことは」

「ならば剣を構えよ」

ゆっくりと、剣先が黒髪の天使へ向けられる。それでもなお金髪の天使は、迷うように目の前の討つべき相手を見つめる。

「まだ……間に合います。僕はこんなこと」

「お前はそれでも神軍の統率者か！」

黒髪の天使が吼える。紅い視線は真っ直ぐに相手を射抜き。

「主を裏切り、天使の誇りまでも失つつもりか?!」

「……!!」

その言葉に、今まで伏せられていた蒼眼に強い光が宿る。

「私は……貴方とは違う！」

金髪の天使が向かってくるのを見て、黒髪の天使は狂ったように叫んだ。顔には愉しげにさえ見える笑みをのせて。

「それでいい! さあ、私とお前とどちらが残るか　かかって来

い、ミカエル！」

\*\*\*

さて。さてさて。

ここからは、世にも美しい兄弟の物語。天界の至宝と謳われた《最高傑作》の愛のお話。

開宴まで少し待って欲しい。それまでは重大で無意味で羽根のよ  
うに重たい因子を覗いてみようじゃないかという、僕と《世界》と  
《器》の、計らい。

読みたくない人はとばしてくれて構わないけれど。彼らの話は事  
件のほんの一端に過ぎないのだから。

ああ、でも。

彼らが愛し合っていたことは、実に都合が良かった。信じるほど  
に裏切りは残酷さを増し、悲劇は深い傷痕を遺す。

しかし、宴……ね。いやあ陳腐でありきたりでつまらない表現だ。  
じゃあ、劇？ ふむ、同じくらい陳腐だね。まあでも。誰による、  
誰のための劇なんだろうかね。

《裏切り者》は僕かな、彼かな。

《愛のうた》は誰がうたうのかな。

嗚呼、いい表現が見つからない。拘る意味？ どれだけ確固たる  
“意味”が欲しいのかわからないけど、理由なら、そうだね、《語り  
手》は少しばかり大袈裟でなくっちゃ。そう思わないかい。何事  
も楽しむことが肝要だよ。

僕の“役割”？ 寂しいモノさ、そりゃ。

驚いた？ 僕は誰かさんと違って自分に正直なのでね。皆に知られているけど、誰も知らない……そんな状況、もう、飽いた。慣れじゃないよ、飽いたんだ。

けれど、同じような境遇にある友が居てね。そいつが居るからまだマシかな。誰って？ この世界での名前はあまり巧くないから、そうだなあ、《包括》？ そんな名前だったこともあったかね、彼は。

彼はいつでも“動かない”よ、文字通りね。僕はいつだって“廻って”いるってのに、まったく！

おやおや、語り手は自分を出してはいけないのだったっけ。でも僕は《語り手》なんだけど。

まあいいさ。僕も彼も、出演しているのだからね。

さあ、興味という名の券は持っているかい？ 宜しい、ではこの僕が特等席に案内してあげよう。

ああ愉快、愉快。

意思を持つ者が足掻く様は“何度見ても”本当におもしろいよ。

## V e n d e t t a (後書き)

愛し君、唯一の兄弟たる貴方が招いた結末は【血族間の争い】で。  
私は問うたのだ 何故、避けられなかったのかと。

今にして思えば、あの時から兄に惚れていたのかもしれない。

\*\*\*

それはまだ自分が生まれて間もない頃。義務とか責任とかそんなものは知らずに、ただ無邪気に駆け回って遊ぶことができた時代。

「かくれんぼしようよ、ミカエル！」

「いいよー！」

自分に兄というものがいることは知ってはいたけれど、一度も対面したことはなかった、そんなある日。

いつものように、小さな友とかくれんぼ。自分が生まれたという白亜の宮殿には近づいたことがなかったが、その外に広がる庭は自分達にとって絶好の遊び場だった。

その日は確か、いつもよりほんの少し遠くに。木漏れ日の差し込む木立に走り、適当な茂みの中へと身を潜める。

ここならきつと、見つからない。

じつと屈んでいること暫し。

今日は自分の勝ちだろうか。

と、長い長い静寂を小鳥達の羽音が破る。可愛らしいさえずりに

ふと顔を上げ、青空を舞う小さな姿の行方を追おうと、茂みから身を乗り出したあの瞬間。

木立の隙間から偶然見えた遠くの断崖に、ひとつの影。白くまばゆいその姿。遠くを見つめて佇むひとりの天使。

どきりとした。とても綺麗なのに、ひどく悲しくて。胸が締め付けられるような気がして。

“彼”のような真っ黒な髪は見たことがなかった。それがふわりと揺れる。白い衣が、風を孕んで翻る。

気高く、どこか儂い。知らないうちに手を伸ばしてしまっていた。

不意に彼がゆっくりと上を向く。すると彼の背中の周りの空気が揺らめいた、ように見えた。

やがて背中に現れた金色の影。それは徐々に形を成し、とうとう黄金に輝く見事な巨翼となる。

それまで見たことのないほどの、立派な一対の翼。他の天使の純白のものとは少し違う。

きつと、あのひとは特別なんだ。

漠然とそう思った。あの姿を見ることができた自分は幸福だと、そう思わせるだけの何かは彼にはあった。

息をするのも忘れて見惚れて。輝く巨大な翼はゆっくりと広がり、そして……

「ミカエルみーっけ！」

「うわぁ！」

不意に後ろから跳び付かれ、思わず前のめりに転びそうになる。

「かくれんぼなんだから、ちゃんと隠れなきゃ」

友に言われて初めて、自分がすっかり茂みから出てしまっていたことに気が付いた。それほどあの天使を見るのに夢中だったのだ。

「そっだ、あのひと……」

「あのひと？」

「あそこに」

慌てて顔を上げる。だが指差した先には、もう誰もいなかった。切り立った崖が、ただぼつんと天を目指して伸びているだけ。

「あれ……？」

「どうしたの、ミカエル？」

「……」

目を何度こすっても、二度とあの天使が見えることはなかった。しかし幻はずがないのだ。瞼の裏には、あの輝きがしっかりと焼きついているのだから。

「……ううん、なんでもない。さっ、他のみんなを探しに行こう！」

「うん！」

その時に見た天使こそが他ならない自分の兄だと知ったのは、それから間もなくのことだった。

\*\*\*

「 エル様、ミカエル様」

目を開けると、女性の天使の顔がすぐ前にあつた。ぼんやりする頭で髪色が茶色だということを確認し、ああこの天使は彼ではないのだと当たり前のことを思ってしまう。

彼女の名前はリーシャ。……あ、本名は、アリシアといったろうか。自分に仕えてくれている天使のひとりだ。

「すみません、寝てしまいました。……よいしょっ、と」

伏せていた机上には紙の山。どうやら書類の点検中に寝てしまつたらしい。椅子から立ち上がり伸びをする。

「ミカエル様、……」

震える声に目を移すと、リーシャが肩を微かに震わせていた。

「お顔に、その、痕が……！」  
「ほえ？」

机の痕が付いてしまったのか。ちよつと恥ずかしい。目の前で彼女が笑うからなおさら顔が火照る。

「わ、笑わないでくださいリーシャー！」

「す、すみませんミカエル様……っ。私、こんなに可愛い主にお仕えできて幸せですわ」

従者にまで可愛いと言われる天使って、どうなんだろう。自

分に威厳というものはあるのだろうか。

軽く嘆息。でもまあ、可愛いという言葉は兄にも言われるし……

「あ……」

兄。誰よりも美しくて強い兄。

夢を思い出して、自然と顔が綻んだ。

「どうなさいました？」

「いえ、……ちょっと懐かしい夢を見たのです。僕と兄が初めて出会った頃の夢を」

「そうでございましたか。素敵なお時間の邪魔をしてしまい、申し訳ありません」

「構いませんよ」

軽く頭を下げたりーシャに微笑みを向ける。

……相変わらず、彼女の服装は個性的だ。単なる白衣ではなく、腕の部分は裂いた布を巻きつけたような独特の形で、裾はふわふわとした花のよう。髪には白い飾りも。そして毎日これが違うのだから、素直に感心しているのだけれど。

身に付けるものに関しては、皆基本的に寛容だ。大概の天使は白衣を好み、慣習のようになってしまっただけだが、決められていることといえは衣の丈くらい。階級の高い天使は長い白衣を纏う。大天使ともなれば、自分のように、床につくほどの丈の衣を着ることになるのだ。

それでも、宮殿内で彼女ほど服装にこだわる天使はいない。そう思うと微笑ましくもあり、更に笑みを深めた。

「ところで、何かあったのですか？ 僕の部屋にわざわざ入るといふことは」

施錠はしていなかったけれど、いつもの彼女なら自分が起きるまで待ってくれるはず。首を傾げると、彼女は慌てたように姿勢を正した。

「ああ、そうでした！ ミカエル様、そのお兄様　ルシフェル様  
がお呼びです」

「兄上が？」

驚いた。こんな休養日に呼ばれるなんて、小さい頃は頻繁にあつても、最近ではあまりなくなっていたから。

何用だろうかと疑問には思った。けれど、兄に会える嬉しさは何ものをも凌駕する。仕事で毎日会っていたとしても、だ。

「ではすぐに行かなければ。執務室ですか？」

「いえ、寢室だと伺いました」

「寢室？」

ということの仕事の話ではないのか。では、他愛もない話をしてくつろぐために？ それも小さい頃に繰り返されたことではあるが、最近ではお互い忙しいからか、私室からは足が遠ざかっていた。

奇妙な呼び出しだ。しかしリーシャはあまり気にしてはいないようだった。それどころか、うっとりとした表情で手を組んでいる。

「きっとルシフェル様はミカエル様を求めておられるのですよ！

どうぞおふたりで熱い夜を……」

「ほらっ、やめなさい」

どうも彼女は想像力も逞しい。制止をするに留めるけれど。

「だってだって、おひとりでいらしてくださいということでしたよ？ 意味深ですよ、妄想せずにいられますか?! こんなにも可愛らしい弟君に、天界一の美貌をお持ちの兄君……これはもうベッドであんなことやこんなこと、」

「わかりましたありがとうリーシャ!」

こうなった彼女は暫くは止まらない。足早に部屋を出て扉を閉める。軽い疲労感にひとつため息を吐いてから、はやる心を抑えて兄の部屋へと向かった。

Old Long Since M-17-1 (後書き)

傍観者が辿る【懐かしい昔】。彼に突きつけられるのは、もう少し  
後の話。

いよいよ、あの小さな天使が宮殿の中に入る日がやってきた。

主から命と才を授けられ、私が祝福を施したあの天使が、私達の仲間として宮殿内に住まいを移すことになったのだ。

この日をどれほど待ちわびたことか。

無論、わかつていた。あの子には私のように生まれ持った責はない。だから他の子と同様、自由に外で遊ぶ時期は不可欠だと。宮殿の外で礼儀作法に縛られず、のびのびと過ごすべきだと。

宮殿の中と外はやはり違う。中にいる天使は外の天使を統率する役目がある者ばかりだ。役割と、それに伴う責任。何も大天使ばかりではないが、それなりの覚悟は求められている。

それでも私はあの子を傍に置いておきたかった。理由は単純、あの子が私の幸福だからだ。手の届くところにずっといて欲しい。そう思うのは許されないわがままだろうか？

しかしいずれにせよ、あの子は他の天使とは違う。後付け、ではないのだが。私の弟として生まれたことがそもその原因なのか、彼の力はかなりのものだ。祝福の時に私は身をもってその強大さを知ったのだ。

まだ本人が自覚していないようだし上手く制御もできないだろうが、覚醒すればきっと大天使に匹敵するほどの力。それを放っておくわけにもいかないだろう。

では何故大天使として誕生しなかったのか……そんな疑問はすぐに消失する。全ては主の御心次第なのだから、それは我々が考えることではない。

そして今。隣に立つ小さな弟は私の白衣を強く握り締めて、すっかり緊張してしまっていた。

それを見つめる焦げ茶と黒耀と翠の瞳。 さすがにいきなり大天使三名の前に連れてきたのはまずかったか。

「これがお前の弟か」

最初に口を開いたのはウリエル。腕組みをしたまま、私と弟を交互に見る。

「まあ、似ているといえば似ているな。力の波長が、なんとなく」

私の服の裾を握る力が更に強くなった。そつと金色の頭に手を置いてやると、わずかに力が緩む。

「可愛らしい御子だ」

「やっぱりルシフェルの弟ね。とっても綺麗な顔してる」

ラファエルとガブリエルの言葉に思わず微笑む。まるで自分を褒められたかのように嬉しいのだ。そう、私以外が見ても、本当にこの子は愛らしい。

「ミカエル」

その美しい響きを口にした。一瞬ザドキエルの言葉を思い出しかけたが……私には彼の名の本当の意味がわからない。一応、聞いたのだが。

いずれ理解できるだろうと思いき、そつと背中に手を添えて促す。

「挨拶を。この天界を統治する大天使達……私の友人達だ」

はい、とうなずいて彼は前へと進み出た。……ああ、白衣に皺がついてしまった。でもミカエルがつけたものなら構わないな。

「はじめまして、ミカエルと申します。これからどうぞよろしくお願ひ致します」

ぺこんと頭を下げる動きに合わせて、波打つ金髪が微かに揺れた。真っ白な頬を少しだけ赤く染め、彼は蒼い瞳で私を見上げる。

「あちらからガブリエル、ウリエル、ラファエルだ」

「ガブ、リエルさまと、ウ、リエルさまと、ラフっ……ラファエル、さま」

言いくいのか、つつかえながらたどしくミカエルは呟いた。私はどこか不安げな彼に向かってうなずいてみせると、穏やかに笑んでいる大天使達へと向き直った。

「そういうわけで、私からも弟のことをよろしく頼みたい。弟だから優遇するというわけではないのだが、ミカエルには私達と同じように宮殿内に部屋を与えようと思っている。異論があれば聞くが」

「ないな」

「特にないよ」

「ないわね。その子　ミカエルについては丁重に扱おうよにどのお達しだし」

「それに」、とガブリエルはくすくすと肩を揺らした。

「ダメだつて言ったら、大天使長の権限を使つてでもその子を傍においたでしょう、ルシフェル？」

「え？」

「ミカエルへの祝福が済んでから、ずっと上の空つて感じだったわよ」

そう……だつたらうか。他のふたりまで笑つているところを見れば、当たっているのかもしれない。確かに、ミカエルのことがずつと気になっていたことは事実だけれど。

「まあ、いいじゃないか。それよりルシフェル、今日はもう下がった方がいいと思うな。会議も祝福も終わったんだ、せつかくだから弟と一緒にいてあげたらどうだ？ すっかり疲れているようだし」

苦笑いするラファエルに言われて見てみると、ミカエルは長い間緊張し続けたせいもあるう、なんだかとても疲れて見えた。これは、大変だ。

「ああ、うん、そうだな。では詳しい話は後で。行くか、ミカエル」  
私の言葉に、ミカエルは少しだけほつとしたような表情を覗かせた。

きゅ、と片手が再び衣を掴むから、私はそつと手を差し伸べてやる。

「ほら」

「あの、でもっ……」

「いいから」

恐る恐るといった風に服を離した手を握る。包み込んだ小さな手は柔らかく、ひどく温かい。少しだけ戸惑った。私の手は、いつも僅かばかり冷たいようだから。怠い時に火照った額を冷やすのに丁度良いくらいだ。

だが、この子の手は違う。小さいのに優しい。温もりを、守りたいと 私まで穏やかな気持ちにさせてくれる。

これが兄となるということなのだろうか。そんなことを思いながら、私はミカエルの手をひいて部屋を出た。

これが、兄の。

「私の寝室だ。殺風景だろう。物があまりなくてな」  
「ひろい……」

大きな手にひかれ、長い廊下を歩き、やっと辿り着いたのは兄の  
自室。

広々とした空間に家具は寝台や机や本棚のみ。兄が自分で言うよ  
うに物は少ない。個人の部屋でこれほど広いものは見たことがな  
かったけれど、物が無いのがなんだかちよっぴりもつたない気もし  
た。

机の上には紙が広げられているが、細部まできちんと整頓されて  
いる様子が伺える。兄は、几帳面なのだ。

「適当に座っていなさい。今、何か甘い物を用意しよう」

そう言って奥へと向かった背を目で追い、しかしすぐに、言われ  
た通りに寝台へと腰掛けた。天蓋つきの、細かい彫刻が施されたも  
の。座り心地に密かに感動していると、向こうから戸棚を開け閉め  
する音が聞こえてくる。彼と同じ空間にいる。そう思うだけで緊  
張してしまう。

「ええと……ああ、酒しかないか。困ったな、茶葉も切らしている  
……」

不意に呟かれた独り言。

「あの、兄さま」

「どうした？」

「兄さまも、お酒、飲むのですか？」

「ああ。まあ、多少嗜む程度にはな」

まだ何か探しているのか、声はすれども戻ってきてくれない。気を紛らわせようとゆっくり室内を見回してみる。

物が少ないと思ったけれど、本当はそれほどでもないのかもしれない。もともと広い部屋だというのもあるし。だってよくよく見れば面白そうなものがいっぱい。

机上にはきらきら光る宝石みたいな あれは、飴玉？ が入った銀の小さな籠、くるりくるりと一定の間隔で時を刻む金色の輪の模型。壁には晴れた日の庭園を描いたような風景画、もちろん光の差し込む大きな窓もあるし、それとあの長剣は本物かな、向こうに見える水晶の玉を覗いたら何色の世界が見えるのかな……。

きちんと整頓されて、どれもさりげなく内装に溶け込んでいるから、みんな、静かにそれぞれの場所に納まって自分のお仕事をしている。きれい過ぎる場所というのは緊張するものだけど、居心地はむしろいいくらい。これが、兄の“色”なのなもの。一から十までみんな好き。

「悪いな」

色々とりとめもないことを考えていると、ようやく兄が手にお盆を持ってきた。

「飲み物がないのだが、我慢してくれるか」  
「はい」

彼は小さな机を引っ張ってきて、お盆をその上にのせた。それから自身はすぐ隣、同じように寝台に座る。ふかふかの綿が重さに沈み込む。

「さ、お食べ。私の大好きな菓子だ」

向けられた微笑みに胸が高鳴る。よく研がれた刃のように美しい天使の、鋭さがほんの少し隠れるこの瞬間が堪らなく好きだな、と思う。

「いただきます」

山盛りにされた薄茶色の小さなそれは、見た目は焼き菓子のようだった。ちよっとだけかじってみると、途端に口の中に甘い香りが広がる。甘く、どこことなく懐かしい香り。

「おいしい、です」

「だろう。疲れた時は、甘い物を食べると気分が落ち着く」

言いながら、彼は数個目を口に放り込んだ。噛んで、飲み下す。上下する喉の動きをぼんやりと眺め、“おとな”なのだ、改めて思う。それに兄は自分よりも遥かに男性的な気がする。

おいしい菓子を、そのまま自分も一緒に食べ続けたくはあつたけれど、まず、たくさんの疑問を解決してしまいたい。話し掛けるのは、やっぱり少し緊張するのだけど。

「あの、兄さま。兄さまは“だいてんしちょう”なのですよね？

さっきご挨拶した方々も“だいてんしちょう”なのですか？」

「ラファエルたちが？」

「だって、兄さまの前でも膝をついていませんでした」

紅の腫できよとんとこちらを見つめ、やがて彼はああ、と破顔した。

「違うんだよミカエル。“大天使長”というのはただひとり私だけなんだ。この衣、他に着ている者を見たことがないだろう？」

そう言っつて長い白衣をつまんで見せる。そういえば、確かに、上に着ている長衣に金色の刺繍が入っているのは兄だけだったかもしれない。

「これがその証。この天界に唯一の衣だ。お前が先に会った三名は大天使。あー、と……そうだな、私が彼らの代表だと思ってくれればいい」

兄が、大天使の代表。

「兄さまが、天界でいちばん……？」

「一番は主だよ。しかし、そう考えても間違いではないかもな」

くすつと笑った表情は柔らかくて、ひたすらあたたかいのだけど、そこに厳しさは少しも窺えないのだけど。

それでも、天界でいちばん。本当に兄はすごい存在なのだ。思わず感激していたら、おもむろに彼は頼杖をついてこちらを覗き込んできた。

「……なるほど。我々と違って、知識を授けられずに生まれたのだな」

誰に言うともなく呟かれた言葉。自分が、兄を困らせてしまったのだろうか。

「すみません、ぼくが」

「構わん、謝るな。むしろその方が楽しくなる。我々が色々教える楽しみができた」

加えて、「そうだな……」と呟く。

「礼儀についてはメフィストフェレスがいるから問題ない……あとは誰か教育係を……」

「めふいすと……？」

難しい単語、聞き取れなかった。彼は何も言わずにただ笑む。

でも、兄が考えることなら間違いはないのだろう。そのまま再びお菓子をつまみ始めた兄に従って、ふたつめを口に入れる。

「これは何のお菓子ですか？」

「花の蜜で作った焼き菓子だよ。外に咲いている白い小さな花、見たことがあるか？」

「あのたくさん咲いていた、小さなお花でしょうか？」

草原の一面を埋め尽くすように咲いた花を見たことがある。花の中を駆け回ると甘い匂いがしたのを覚えているが、あの小さな花からこんなにもおいしいものができるなんて。言われてみれば憶えのあの香だった、かも。

……そういえば、みんなはどうしているだろう。一緒に花の中を駆け回った友人たち。彼らは今も野原で遊んでいるのだろうか。

彼らにゆっくり挨拶をする間もないくらい、宮殿（みやと）に連れてこられ

たのは唐突だった。それまで自分の世界は、同じように生まれたばかりの天使が集う広い家　　宮殿とは比べものにならないけれどが全てだったのに。

“　ミカエル様。偉大なる大天使長の命により、お迎えに上がりました”

いきなり目の前に現れた天使に手をひかれ、そして。

“　ミカエル……ずっと、待っていた……”

彼と、出会った。いや、“再会”したのだ。

何故か泣き出しそうな笑顔で、切ない声を絞りだした黒髪の美しい天使。断崖に佇む姿を見たあの日以来、ずっと頭から離れなかつたきれいなひと。

彼を前にした瞬間、誰に教えられたわけでもないのに、体が勝手に礼の姿勢をとっていた。それまでしたこともない最敬礼。翼を折り畳み、膝をつき、頭を垂れて。何事かを言った気がするが、自分でももう覚えていない。それに応えて何か重々しい口調で言われたはずなのだけれども、それも思い出せない。

“　兄さま……”

ただ、最後に顔を上げて、あの紅い瞳を見上げて、初めてそう呼んだ時のことは忘れない。それに返された、誰よりも美しい天使の美しい微笑みも。

緊張していたのは初対面だからという理由だけではなかった、と甘い塊を噛み砕きながら思う。今までに見たどの花にも、どんな景色にも勝るその美貌に、畏縮してしまつたに違いなかった。

「羽根はしまえるようだが……」

ふと気付くと、切れ長の紅い瞳がまたこちらを見つめている。

羽根……そうだ、確かに仲間たちの中で翼を自由に出入り入れできたのは自分だけだった。

「普通、生まれたばかりの天使は翼をしまつことはできないはず……天使としての力は与えられたか……?」

そういうものなのかと納得した。翼を消せることは、身を隠す時にとっても有利だったのだけれど。

ぼつと考えながら、なんとなく口の中のものを飲み込んだら、

「こほっ、けほっ!」

……むせてしまった。と、

「大丈夫か?!」

かなり焦った様子の兄に、大きな手のひらを背中にあてられる。まだ声を出せなくて、それでもうなずいてみせたのだが。

「いけない、この菓子はやめよう!」

そう言って素早くお盆を片付けてしまった。惜しい気もしたけれど、兄が自分を心配してくれているなんて、すごく嬉しい。

「大丈夫か?」

「は、はい。ありがとうございます」

「良かった……。お前に何かあったら大変だ。すまなかったな」

顔が熱くなるのが自分でもわかった。なんだか恥ずかしくて、また口を開く。

「あ、あの、兄さま。たくさんお聞きしたいことがあるんですけど」  
「ああ、構わないよ」

まず何から聞こうか。知りたいことが多過ぎて、上手く口から出てこない。

暫く考えて諦めた。ちよつとずつ順番に聞こう。そうしたら、兄と長い時間を一緒に過ごせる。

「ええと、……大天使さまとぼくたち以外に、この宮殿にいるのはどんな方たちなのですか？」

この部屋へ来る途中、何名かの天使と廊下で擦れ違った。服の裾をつまんで軽く礼をした天使もいれば、気安そうに兄に手をあげて挨拶した天使もいた。いちいち聞いていたら大変なので、その度に黙って頭を下げていたけれど。

「いわゆる“上級天使”と呼ばれる天使達はここへの入殿を許されているんだ。“大天使”ではなくともな。彼らも生まれつき特殊な能力を授けられた者達だが、最初からこの宮殿で暮らしていた者もいれば、お前のように、成長してから私が迎えを遣った者もいる」

「……あの、ひよつとして」  
「ん？」

「ぼくも、上級天使……なのですか？」  
「そうなるな」

驚いた。ということは、自分にも何か力が備わっているのか。聞いたことがある。宮殿内にいる高位の天使たちは、天界を治めるためにその力を行使するのだと。

「……案ずるな。今はわからないことも、そのうち気付く時がくる」

兄は穏やかに言い、頭を撫でてくれる。それだけで心強くなるのだから、不思議だ。

「では、兄さまにも特別な力が？」

「ああ。私の能力は、」

唐突に、兄は空中で手を動かした。何をしたのかと辺りを見渡して、やっと気が付く。

「あっ」

「存在干渉能力。……実に恐ろしい力だよ」

いつの間にか、目の前にあったはずの小さな台が部屋の隅へと移動している。きっと、ものを一瞬で動かす力なんだな、と思った。だから最後に静かに付け加えられた言葉の意味は、よくわからなかった。

「……ふむ、少し語弊があったか」

彼は顎に手をあて、ひとり、ふと首を傾げた。

「そうだな、うん。ミカエル、さっきは特殊な能力と言ったが、あまりそこにはこだわらな」

「えっ？」

「上手く説明できないのだが……入殿を許された天使とそうでない天使の間には、言葉にはできなくとも明確な違いが確かにある。いずれ、お前も成長すればわかるようになるが……。我々が授けられた能力というのはその一端に過ぎない。今はただ 主が重要な役割をお与えになった者が、上級天使と呼ばれるのだとだけ思っておけばいい」

「役割、ですか？」

「そう。我々天使の判断ではない。全ては、主の御心のままに」

よく、わからない 言い掛けた先を、優しい微笑が遮った。

「いつかわかる時がくる。それまでお前の仕事は頑張って成長することだ。良いね」

兄が言うなら、そうなのだろう。ただうなずいて、今は、少し強い天使さまが選ばれて宮殿にいるんだと考えておくことにする。

「しかしだからと言って、“外”にいる天使達を軽視することはあってはならない。彼らがいなければ天界は天界ではないし、上級天使達も生きることができないのだから。焔（つよ）に価値の上下はないのだよ。必要のない生を主はお創りにはならない」

「はい」

神妙な気分で、うなずく。

「ん……ここにいるのがどのような者達なのか、だったな。あとは各々上級天使達が優れた天使を見つけ、自分の下で従者として働いてもらっている。宮殿の外にいる天使というのは様々な職能を持っている」

「しよくのつ？」

「私達の暮らしに必要なものを提供してくれる技能のことだ。例えば服や家具、菓子を作るとかな。彼らのおかげで私達、大天使の生活も成り立っている。上級天使はそういう技能に長けた者を“外”から連れてくることがあるんだ」

「兄さまも？」

「まあな。後でお前にも、身の周りの世話をする者をつけよう」

もし自分が弟でなかったなら、従者としてでも兄の傍にいたいと思っただろう。そのために仕事を一生懸命やっていたかもしれない。

「……ああ、そうだ。そろそろお前の部屋も用意されていることだろう。行ってみるか」

「はいっ」

運が良ければ、兄の従者たちを見ることができだろう。それもちよっぴり楽しみで、跳ねるように寝台からおりた。

コン、コン

「ルシフェル様、アルベルトです」  
「開いている」

私は外の闇を見ていた目を、扉の方へと向けた。

「失礼致します。夜分に申し訳ありません」

寝室に入ってきたのは、私の下で働いてくれている天使のひとり。金髪に冴えた碧眼の彼は、淡白な表情のまま丁寧に頭を下げる。常に冷静沈着な切れ者……というのが私の印象。愛想がないわけではないのだけれど。

「良い。どうした」

「はい。メフィストフェレス様より伝言でございます。“慎んでお受けする。後程そちらへ伺うから、その時に弟君の顔が見たい”、と」

「ご苦労だった。承知の旨を伝えてくれ」

「かしこまりました。それと、その……」

「うん？」

おや、アルが口籠もるとは珍しい。

彼は視線を彷徨わせ、何やら言いにくそうにしていたが、やがて意を決したようにおずおずと口を開いた。

「ぶ、「 舞踏会なんてやらないかね《紅き剣》殿！」……とのこと  
です……」

「……………」

「……………」

「……考えておく、と言っておけ」

「かしこまりました……」

まったく、相変わらず祭事の好きな紳士だ。疲れ切ったような従  
者が再度一礼して出ていったのを見送り、嘆息。

……実のところ、私に対して気安く話し掛けること 例えば、  
舞踏会の誘いなぞ は形式上は許可されていない。だが大天使長  
たる私にも“先輩”はいる。天使達をまとめるために生まれたのが  
私だから、私よりも以前から天界にいた者というのは少なくない。  
あまり身分にはこだわらないようにと、かつて私自身が宣言したの  
だ。

現に上級天使や直属の部下以外であっても、公式な場を除いて、  
私や大天使に対する最敬礼は免じてある。……そうは言っても、彼  
らは反射的に膝をついてしまうことが多いのだが。

「……………」

そろそろ休むとするか。今日はずっとミカエルについていたから、  
明日は少々仕事が増えるだろう。

私が衣の襟元に手をかけた、その時。

……………コンコン

またしても扉を叩く音。遠慮がちな小さな音ではあったが。

「開いている」

今夜は訪問者が多いな。まさか、もう伝言を返されたわけでもな  
かるつに。

「どうした？ 入っていいぞ」

ところが扉の外は静かなまま。私は訝しく思い、自分の手で扉を  
開けた。

「何用だ……って、」

全く思いもよらなかった。とつくに眠っているだろうと思ってい  
た小さな天使が、枕を抱き締めて、恐々と私を見上げていたのだ。

「ミ、ミカエル？ ええと……ひとり、か？」

「はい……」

「よく迷わずに……。一体どうした？」  
「……………」

ミカエルは頬をさつと紅潮させ、か細い声で呟く。

「……眠れ、なくて……」

「え？」

すみません、と更に小さな声で呟くと、彼は枕を抱く腕に力を込  
めた。

……なんと、可愛いのだろう。いとおしくて、自然と顔が綻んで  
しまう。

「寂しくて……兄さまに会いたくなって。あの、迷惑……ですよね」

しょんぼりと俯いた顔にさえ愛らしさを感じてしまう。いつまでも見飽きない。けれど、やはりこの子の笑顔が、見たい。

「全然そんなことはないよ。よく来てくれた。早く中に入りなさい、体が冷えてしまう」

「あ……ありがとうございますっ」

ぱつと顔を輝かせた弟を部屋の中へ招き入れる。本当に、誰が迷惑だなどと思おうか。こんなにも傍にいて欲しいと願っているのに。

「私も今から休むところだった。一緒に寝るか？」

「いいのですか……？」

「無論。すぐ着替えるから、先に入っていないさい」

既に白い夜着を着ているミカエルが毛布に潜るのを視界の端に捉え、自分も仕事用の上衣を脱いで、緩い白衣を身につけた。

……別段見られて困るものでもないのだが、なんとなく、ミカエルの目には入らないように気を配りつつ衣を替えた。そうして最後に、ウリエルに作ってもらった首飾りを服の内側に入れる。鎖を絡ませてはならないから。

すっぽりと布に包くまった小さな体を、そつと腕の中に抱いて横になる。並んで寝られない広さではないけれど、この方が温かくて良い。

ミカエルは少し躊躇いながらも、こちらに身を寄せてきた。私は彼の柔らかな金髪を、静かに指で梳いてやる。

「兄さま、いい匂い……」

くすぐったそうに笑った顔がとても可憐で。こんな距離では、鼓動を聞かれてしまうのじゃないかと思った。

「あの、兄さま」

「……ん？」

温かさとは僅かな疲労感に微睡んでいた時。腕の中から声が聞こえて、私は瞼を持ち上げ、視線を下に移した。

「ぼく、兄さまにお会いできて、とっても嬉しかったです」

「……そうか」

「でも……」

長い、金色のまつ毛が伏せられる。

「……やっぱり、みんなとお別れするのは、寂しくって……」

ああ、これは失敗だった。

声を震わせた小さな天使を見てふと気付く。急に仲間と引き離れたこの子をひとりきりにさせるのは、果たしてなんと酷なことだったか。

「……すまなかった。これは私の我が儘だ。お前の意志も考えずに

……」

「いえ……ぼくはせつかく主に選んで頂いたんです。たとえみんなと会えなくっても、頑張って」

……む？

「ミカエル？」

「……はい？」

「入殿しても、皆には会えるぞ」

蒼く澄んだ双眸が、私を見上げる。

「お前が望むのなら、また外で遊んできて構わない。まだ本格的な仕事はないだろうしな」

きよとんとした表情が、みるみるうちに明るくなっていく。彼は濡れた目をこし、と擦って笑った。

「じゃあ、みんなと会ってもいいんですね……？」

「ああ」

小さく歓声をあげて、ミカエルは私に抱きついた。胸に押し当てられる小さな頭。

どくん、と体の内側で何かが跳ねる。鼓動が背筋を伝い、全身に反響するかのような。

「良かった！ またみんなと遊べる！」

可愛くて、堪らなくて。私は思わず彼を抱き締めた。壊さないよう繊細に、離さないよう力強く。急な動きに寝台が軋む音をたてる。

「に、兄さまっ？」

鈴のようなその声も、波打つ金の髪も、泉の如く深く澄んだ蒼眼も、透き通った白い肌も、精巧な銀細工を思わせる細い手足も、……純白に輝く翼も。何もかもがいとおしくて堪らない。自分でも訳がわからないほどに、この子を抱き締めていたい。

こんな感情は初めてだ。“兄”とはこういうものなのか……？

「ミカエル……」

美しい響きを、口にする。

「お前を待っていた。ずっと、ずっと」

白い《器》がいるあの部屋で、一目見た時から。

「何があるかと傍を離れたりはしない。お前は私の幸福であり……  
そしてお前を幸せにするのは、私だ」

「……ぼくも、」

小さな手に懸命に力を入れて、ミカエルは穏やかな顔で目を閉じた。ああ、美しい。体が熱くなるのを感じながら、やがて、腕の中からくぐもった声。

「ぼくも、ずつと兄さまのお傍にいます。ちゃんと、早く大きくなって、お仕事も頑張ります」

言葉を紡ぐ度にその微かな振動が、熱い吐息が、まるで酒のように私を酔わせる。どうしてここまでこの子に固執してしまうのか、我ながら不思議なくらいに初めての感覚ばかり。

少し、迷った。もしこの感情が私だけのものなら……これ以上の勝手はない。

それでも今は、腕の中の幸せそうな微笑みを信じさせてもらおう。

「大好きです、兄さま」

その、言葉を。

「……私もだ、ミカエル」

どうか、信じさせてもらおう。

「愛しているよ」

他ならぬ小さな天使にだけ聞こえるように囁いて、柔らかな髪に口付けを落とす。

言葉を告げるのは難しくない。しかしこの想いが心に染みるまで、焦らずゆっくりと愛を伝えていけば良い。時間は、いくらでもあるのだから。

「……もし お前が望むのならば、この先もここで眠って構わないからな。寂しくなったら、いつでも遊びに来るといい」

「本当、ですか？」

「ああ。昼間に私が仕事で居なければ、他の天使達のところへ行くのもいいだろう。私からはきちんと伝えておくから、色々と話を聞いてきなさい」

「はい、兄さま！」

「良い子だ。……さあ、今夜はもうおやすみ」

元気にうなずいた宝物を抱きながら、私は最高に幸福な気持ちで眠りに就いたのだった。

「ガビイが花の冠を作ってくれたんです。ウリイに見せに行ったら“似合う”って言ってくれたんですよ」  
「ほう、あのウリエルが」

紅茶を飲みながら、まばゆい白衣を着た兄が微笑む。ここは兄の寝室 通い慣れた場所。大天使長である彼は仕事途中ながらも、自分のためならと時間を割いて会ってくれる。それが、堪らなく嬉しい。

「私も是非見たかったな。お前なら何を身に着けても、さぞ可愛らしいことだろう」

「今度兄さまも一緒に行きましょう？ 兄さまにも僕が冠を作っあげます」

「ああ。楽しみにしているよ」

兄が多忙の身であることはわかっている。けれど、どうしても会って話をしたくて。

ここに来てから二十余りの朝と夜を数えたが、仕事中の兄の姿はたまにしか見たことがない。まだ自分は宮殿の生活に慣れるまでと“外”にいた時とあまり変わらない毎日を過ごしているから。それでもこの柔らかな微笑みは、きつと自分にしか見せていないと思う。思いたい。

「しかし、よくウリエルがウリイと呼ばれて文句を言わないな。ウリイとガビイと……ラファエルは？」

「ラファエルさまは、ラファイです」

「ああ、そうだったか」

くつくつと兄は肩を揺らす。理由は、よくわからないけれど。

そもそもあだ名で呼んでいいと言ってくれたのはラファエルが最初だ。ラファエル、という名を上手く発音できずにいたら、蒼の天使は微笑んで、「では、ラファイでいいですよ」と言った。それ以来、他の大天使にも呼びやすい名をつけることにしている。ガブリエルはガビィ、ウリエルはウリィというように。

彼らも暇を見つけては構ってくれるので、とっても大好きだ。：

…もちろん兄の次に、だけれど。

「私には、ないのか？」

「え？」

「私に呼び名をつけるとしたら？」

言われて少し考える。難しい、と思った。うつむくと、両手で持った器の液面に自分の顔が映る。

「兄さまは……兄さまです」

思うままそう言うと、とうとう兄は吹き出した。彼が声をたてて笑うのなんて珍しいから、つい呆気にとられて見てしまう。

「そうか……ふふっ、なるほどな」

くしゃりと撫でられた頭がくすぐりたい。何にせよ、兄が喜んでくれるのなら自分も嬉しい。

「あ、それから」

まだまだ話したいことはたくさんあるのだ。兄に喜んでもらえるような楽しい話がたくさん。一体どれから話そうか。

そう、思っていた時だった。

「ルシフェル様」

扉が軽く叩かれる。二回。

「入れ」

「失礼致します」

入ってきたのはひとりの天使。長衣でないということは、きっと兄の従者のひとりだろう。その兄が一瞬だけ不満げに口を曲げていたのは、多分、自分にしか見えていない。

「どうした、ヨハン」

ヨハン、という名を頭の中に刻む。兄の従者はとにかく多い。まだ全員の顔を見たことがないくらい。

「ルシフェル様、そろそろ」

「ああ、もう時間か」

独り言のように呟き、天使の長は立ち上がった。

また、行ってしまうのか。残念な気持ちで見上げると、大きな手のひらで再び頭を撫でられる。

「そんな顔をするな。夜に会えるだろう」

そう、眠る時は一緒。入殿した日以来、夜はずっと兄の寝室に通

っているのだ。けれど夜はどうしても眠くて、どんなに起きていようと頑張ってもつい寝入ってしまう。だから、あまり話ができない。

「兄さま」

「ん？」

「ちょっとだけ、わがまま。兄の白衣を引っ張る。もう少しだけ話をさせて欲しい、と。」

「ヨハンは、どんなお仕事が得意だったのですか？」

「ああ、ヨハンは確か……彫刻、だったな？」

「は、はい。主に木を」

「では兄さま、この間の、フィオンは？」

「あれは矢の扱いに長けていた」

「ガルドは？」

「鍛冶屋だった」

「アルベルトは？」

「鳥獣の知識が豊富だから」

「ラケルは？」

「裁縫が上手いな」

「じゃあ、……」

「ミカエル様、ルシフェル様」

呆れ顔のヨハんに遮られ、口をつぐみ、兄と顔を見合せて笑った。せつかく楽しくなってきたところだったのに。

「恐れながら申し上げますが、大天使の御三方がお待ちかと」

「仕方ない、行くか」

肩をすくめた兄は、まるで気乗りしないと全身で語っているかのよう。彼がそうなら……と甘えたくなる。

「あの、兄さま」

「ん？」

寂しい、行かないで、なんて。

つい言っつてしまっいそうになる言葉を飲み込む。これ以上は、だめ。兄は、自分の兄であると同時に大天使長なのだ。こうして時間をとってくれるだけでも、かなりの負担に違いないというのに。仕事の合間にわざわざ私室に足を向け、夜だつて必ず自分が眠るまで起きていてくれて、貴重な休養日でさえも相手をしてくれる。

忙しい彼のために自分ができる最大限のことは、優しい彼に極力気遣わせないように頑張ること。難しいけれど、きつと我慢することも必要なのだ。

「……いえ。お仕事、頑張つて下さいね！」

「ああ。なるべく早く戻るからな」

膝の上でそつと手を握りしめ、彼が安心して仕事に行けるようにと微笑う。胸の辺りがきゅつと痛くなる。兄の背を見送る時はいつもそう。病気なのかな、と密かにドキドキしているのだけど。でも大丈夫、平気。

それに、自分もこれから行かなければいけない所があるのだ。

「ヨハン。ミカエルをメフィ先生のところへ」

「御意」

「……くれぐれも手を出すなど言い含めておけ。もし道中など、何かあればすぐ私に知らせろ。良いな」

「は、はい」

何やら低い声で兄が言い、戸口に控えていたヨハンがびくっと肩を震わせた。ひとりで首を傾げていると、兄は退出しかけた足を止めて振り返る。

「そうそう、お前の教育係が決まったぞ。後で紹介しよう」

「はい、ありがとうございます」

自分に世界のことを教えてくれる天使をつけるのだと、そう兄は言っていた。期待と緊張が半分ずつ。ちよっぴり、しみみな気持ちの方が多いかもしれない。

兄には大切な仕事、そして自分は早く一人前になるための勉強が待っている。頑張らないと。

「で……では、行きましょうか、ミカエル様」

兄が立ち去り、ぎくしゃくと動きだした天使にうなずき返す。握った手には汗をかいていた。大丈夫かな、ヨハン。

しかし今何よりも気になっているのは……これから会わねばならない“先生”のことだった。

\*\*\*

「おおーう！ よく来たねミカエル君！」

宮殿の敷地内、その端の方にある庭園。何度も来ている場所、何  
度も会っている“先生”、……それなのに。

「いつ見ても可愛いっ！」

自分のことを抱き締めてくれる天使の対応は、毎回過激になつて  
いる、気がする。頭を撫でたり、抱き締めたり、頬に口付けたり。

「唇はさすがに兄君に怒られてしまっからねえ。でももう彼の従者  
は帰っちゃったから、誰も見てないもーんっ」

「あ、あの、メフィ先生？」

「ああもう何この可愛い生き物！ 我が輩も欲しい！ 何故我が輩  
には弟がいないのかっ！」

きつく抱かれて途方に暮れてしまう。ヨハンがいたらこんなこと  
しなかったのかな。彼も忙しいからすぐにいなくなってしまった。

かなりご機嫌なメフィストフェレス先生。先生のことはもちろん  
大好きだ。優しいし面白いし、格好いい。ただ会う度にされるこの  
挨拶だけは、たまにやめて欲しいなとも思う。

一通り頭を撫でると、やっと先生は体を離し、帽子を被り直して  
片眼鏡を押し上げた。金色の鎖のついたその眼鏡が、先生にはとっ  
ても似合う。

「いやはや癒されたよ。ありがとうミカエル君。……だけどここのこ  
とは、くれぐれもルシフェル君には内緒でお願いしますよ。でない  
と、我が輩の命が危ない」

そして毎回こう言われるから、兄には話さない。まさか兄が何か  
をするとは思えなかったが、なんとなく、言ったらまずいと思っ

いるから。

「本当に君達兄弟は美しいよ。こうして一緒にいられる我が輩は幸せ者だ」

「あの、メファイ先生。今日は何をお勉強するんですか？」

「うむ、勉強熱心なのは素晴らしい」

そう言つて、兄よりもずっと年上に見える天使は、側にあつた小さな円卓の方へと手招きする。

「座りたまえ。今日は公式な場での礼について教えよう」

先生は礼儀作法について教えてくれる。聞けば、かつて兄も教わつたのだとか。これも立派な天使になるための大事な勉強なのだ。

だから……だから、わがままなんて言えなかった。

「どうしたね、ミカエル君？」

「いえ……何でもありません、先生」

せつかく色々なひとが自分のために時間を作ってくれているのに、まさか自分だけ“彼に会いたい”だなんて、言うわけにはいかないのだ。

……そんなことを思っていたからだろうか。

「疲れたかね。少し休もうか」

「いえつ、大丈夫です」

「しかしなあ……」

どうしても、教わったことが頭に入らない。礼の仕方や挨拶の手順も何度もやり直し。集中すれば簡単なことなのに。先生を困らせていることもわかっていているのに。

「いつもの君らしくないな。昨日はきちんと睡眠をとったかね？」

「は、はい。ちゃんと」

ちゃんと、彼の腕の中で。

あの温もりが傍になくて寂しいと思った。甘やかな香りが恋しいと思った。また、胸が締め付けられるように痛くなる。

「ミカエル君」

とうとうメフィ先生はため息を吐いた。せつかくこうして時間を割いてくれているのに……。申し訳なくて自分が情けなくて、ごめんなさい、と呟くように口にする。下手に話すと泣いてしまいそうで、そうしたらもっと困らせてしまうかわかっているから。

「謝らなくていいんだよ。君は最近とても忙しい。慣れない生活で疲れてしまうのは仕方のないことだ」

「……」

「ふむ……何か気になっていることがあるようだね。良ければ、我が輩に聞かせてもらえるかな？」

覗き込んでくる瞳は優しい。それが、大好きなひとの面影に重なって。

わがままを言ったら、みんなに迷惑がかかってしまう。でも……

「ごめんなさい、メフィ先生っ！」

「へっ?」

立ち上がり、駆け出す。

「みつ、ミカエル君　?!」

先生がぼかんとしている間に、翼を出して地面を蹴った。走るより飛ぶ方が速いはず。もっと速く。

願うと、背中が熱くなつたのを感じる。ちょうど翼の付け根の辺り。ふわりと体が軽くなった、気がした。

すぐに捕まってしまうかもしれないとか、後で怒られるかもしれないとか、そんなことは考えなかった。願いはただひとつ。彼に兄さまに、会いたい!

必死に翼を羽ばたかせるとどうだろう、今までにないくらいの速さで飛んでいた。

宮殿の中へ飛び込み、廊下を滑り、幾度も角を折れ、そうしてようやく見つけた長身。

「兄さま!」

無我夢中で、彼に飛び付いた。

ガブリエルは近づくと私を見るなり、何故か僅かに苦笑した。

「やあガブリエル」

「あら、ルシフェル。またミカエルと会っていたの？」

彼女には言っていないはずだが。どうしてわかったんだ？

「なんだかとてもすっきりした顔をしてるわ」

……表情にまで出ていたらしい。

廊下で出会った私達はそのまま並んで歩き始める。向かうのは我々が《談話室》と呼んでいる小部屋。そう堅苦しい話をするわけでもないのだが、一応は仕事に関する話だから私室は避けた。ウリエルやラファエルはもう着いているだろうか。

「ミカエルがとても喜んでいた。ガビィが花の冠を作ってくれた、と」

「あら」

彼女は口に手をあて、クスリと笑う。

「それは良かったわ。ミカエルったら本当に可愛いのよ。“これはお礼です。ありがとうガビィ！”って、小さな花束を作ってくれてちゃんと部屋に飾ってあるわよ」

思わず私もつられて微笑んだ。

時間があればあの子の相手をしてやってくれと、彼女らにそう頼んでからしばらく経った。最初はどうなることかと思っただが、話を聞く限り、どうやら楽しく過ごせているらしい。これも皆の協力があつてのことだ。

「私からもお礼を。これからも遊んでやってくれ」

「もちろん喜んで。ミカエルといると自然と笑顔になってしまうの。あの子が来てから、宮殿の中がとても明るくなったみたい。きつと他の天使達もそう思っていると思うわ」

優しい天使だと思う。優しく、寛大だ。ミカエルが懐くのもわかる。……これは彼女にとられないように気を付けねばなるまい。と、そんなことを考えてみたりする。

「今、ミカエルは？」

「メフィストフェレスのところにいる」

「ああ、お勉強中？ あの子も忙しいのね。そういえば、教育係の天使をつけるとか言ってたかった？」

「この間決まったんだ。アシュタロスという天使だが」

本当ならミカエルには自分はずっとついていてやりたい。常に傍にいて面倒を見たいくらいだ。しかし仕事のない時間に、となると限界がある。だから代わりに、教育係としてひとりの天使を任命したのだ。

「アシュタロス……まだちゃんと会ったことのない子ね」

「まあ比較的新入りらしいからな。私もウリエルの紹介で初めて会った。まだ言うのは早いかもしれないが、努力家で、なかなかよくできた奴だと思う」

私は銀髪の天使の、あの穏やかな微笑を思い浮かべた。礼儀正しくいくせに、何を考えているのかわからない。食えない奴だと思ったが、それでも、その意志の強さや素直さが気に入った。

そうだ、初めて会った時、私は奴を驚かせようと騙したのだったな

「余程お気に入りなのね、そのアシユタロスっていう子のこと。会える日が楽しみだわ」

ところで、とひとしきり笑った後でガブリエルは首を傾げた。

「最近、新しい天使があまり誕生していないわよね。これって……」  
「やはり、もうほとんどの環境は整ったと考えるべきだろうな。主が我々をお創りになって、後は我々自身がこの天界を組織していかなければ」

世界という土台があり、そして私達という命が生み落とされた。一個の社会が形成されつつある中で、多分、これ以上の“駒”が増えることはないだろう。私達は“基本的には”不死だから、増える一方では単純に場所が足りなくなると思うのだ。近頃《祝福》をしていないことが何よりの証。

とはいえ、天使以外への《祝福》は時々ある。個々を相手に祈りを捧げる天使とは違って、他の鳥獣や植物の類は新たに誕生した者。その祖のためにだけ祈りを捧げるから、これもいつかは回数が減るかもしれないが。

「……となると、いよいよ大天使や上級天使達の役職をきちんと決める必要があるのね」

「そうだな。これまでのように分担するのではなく、部署をつくる

などして各々に責任者を置いた方が効率が良いかもしれない。あと必要ならば、規律を定めることもあるかな」

私の言葉に、ガブリエルははたと足を止めた。自然、私も立ち止まる。彼女は少し顔を強張らせてこちらを見上げてきた。

「ルシフェル、それって……私達天使が“道を誤るかもしれない”ってことよね」

「……ああ」

「……貴方は、その可能性があると思うのね？」

「ではガブリエルはないと思うのか？」

私の問いかけに彼女は口籠もる。我ながら意地の悪い質問だが。

「私達は意志を持ってしまった。考えることができるようになってしまった。何を以て“道”とするかはわからない……が、世界において他の者が認めないならば、それは悪となり得るだろう。たとえ主観的判断であっても、悲しいことに。だから逸れる者を律する、出来る限りの正義を敷く……そのために我々は創られた。そのために大天使は存在する」

そして、私がいる。最も主の期待と願いを背負う私が。大天使長として主に愛されるべき私が！

「主がお望みになっておられる楽園を、作るわけではないか」

それは密やかな喜び。主の片腕となるべき自分の、誰にも量られることのない誇り。弟に抱くのと違う温かな気持ちに、酔って。

「そう……そうよね。私達が頑張らないと。主の御期待に沿うためにも」

彼女は笑う。そして書類を抱え直すと前に向き直った。

「行きましょう。実はもう組織の原案を考えてきてあるの」「ほっ」

やはり、彼女は素晴らしい。主が傍に侍ることをお許しになるのは当然だ。

そう思った私が再び足を踏み出そうとした時だった。

『 兄さま！！』

背後から聞こえた声と気配に振り返った途端、

「おわっ！？」

ぽすっ！、と胸に衝撃。勢いよく飛び込んできたそれを咄嗟に抱き止め、そして驚愕した。

「ミカエル?!」

「兄さま……っ、兄さまあっ……!!」

白く柔らかな羽根が床へと舞い落ちる。腕の中、しきりに私を呼んでくずる背中をなだめるように軽くだたくと、純白の翼がふつと消えた。

小さな弟をそっと地面におろしてやる。尚も彼は私にしがみついて離れようとしない。

「どうしたのミカエル?!」

「お前、メフィストフェレスのところに行ったのではなかったのか?」

困惑する他ないガブリエルと私。

と、またしても何かが来る気配を感じ、私は無意識のうちにミカエルを庇いつつ顔を上げた。

唐突に、何もない空間にばかりと穴が開いた。奥に見えるのは虹色に揺らめく空間。その中からひとりの天使が姿を現す、というか、転げ出る。

「たっ、大変だよルシフェル君! ああ本当に申し訳ない! 気付いたらミカエル君が」

「ミカエルが、どうしたと」

「いいいやだからだね! 非っ常に申し上げにくいんだが、どうか罰として天界から追放とかはやめて頂きたいというか、まあ我が輩にも非はあったりなかったりするのだが、その何というかミカエル君がいなくなってしまうってだね……ってえ?!」

初老の紳士はそこでようやく、私の腕の中にいる天使に気付いたようだった。言葉を失い、数度だけ目を瞬き、やがて力が抜けたようにその場に座り込んでしまう。

「よ……良かったあ〜! 我が輩、もはやこの世界とおさらばかと思ってしまったよ」

「メフィストフェレス、これは一体」

「いや、一瞬だけ目を離れた際にミカエル君が消えてしまっただけね。

しかし君が連れていったのだね。は、は。道理ですぐに見当たらなかつたわけだ。君の《存在干渉》には我が輩の《空間操作》を以てしても、追いつけるはずがないからねえ」

「……私は何もしていないが」  
「……………え」

先生が固まってしまった。だが、やっていないものはやっていないのだから仕方ない。

そもそも私はミカエルが来ること自体を察知できなかったのだ。存在を掌握するはずの、この私が。

ならば……………この子はどこやってここに？

「ぐすっ……………ごめ、なさい……………っ」

私の腰に腕をまわしたままひたすら謝っている天使を見下ろす。指で涙を拭ってやれども、滴は留まらない。

「大丈夫だ、私はここにいるよ」

「ふええっ……………」

「誰もお前のことを怒らないから。ただ、お前がどうやって私のところへ来たのかを教えて欲しいんだ」

「わからっ、ない、です。僕は、兄さまに会いたいって、それでっ」

息が詰まるような思いを、した。甘えてくれているのか？ いつもどこか私に遠慮する風を見せていた天使。時折申し訳なさそうな表情を覗かせていた天使。彼の、我が儘……………。

「ミカエル」

呼べば、また肩を震わせる。

「兄さま、僕……………」

「ありがとう」

「……ふえ？」

頬と鼻頭を赤く染めた天使が、蒼い瞳で見上げてくる。まばたきすると、滴が頬を伝っていった。

「……本当に、お前には悪いと思っている。私は何も兄らしいことをしてやれていない」

「そんなことっ！」

「だがこれだけは言える。ミカエル、お前を誰より愛している。だからもつと甘えなさい。私に、周りに」

ぱちぱちとまばたき数回。ミカエルは周りを見回した。慈愛の笑みでうなずいた美女に、おどけたように肩をすくめる紳士。彼らふたりと最後に私を再び見上げ、幼い天使は嬉しそうに笑った。

「兄さま……僕、兄さまのお役に立ちたい。早く立派な天使になって、ずっと兄さまのお傍にいたい」

「ああ」

「だからお勉強、頑張ります。でも……寂しくなったら、ちゃんと言います」

「そうだな。無理はよくない」

私も小さく笑う。間違いなく私は幸福だと、この子が私に幸福を運ぶのだと、そう思った。

「……けれど、どうしてルシフェルが気付かなかったのかしら？」

ガブリエルの呟き声にはっと我に返る。そうだ、まだ終わっていない。ミカエルがここへどうやって来ることができたのか。“私が” 背後をとられた？ まさか。

「なあミカエル、来る時に何か体に異変はなかったか？」

幼い天使は少し考え、それから小さく声を上げて私を見上げた。

「兄さま、なんだか背中がぼかぼかしました。ちょっとだけ、なのですけど」

「背中……」

背中には、翼……温かく……

「ふうむ。飛行速度が格段に優れているのか……我が輩はミカエル君が消えてすぐに追い掛けたんだが、あの庭からここまでの距離をこんな短時間で移動するとは」

速度……時間……

「あ……」

困ったように髭を撫でたメフィストフェレスの言葉に、私はふと思い出したことがあった。翼は力の鍵。それは忘れもしない、あの日の。

「 《時渡り》 」

思わず洩らすと、ふたりの天使がこちらを見る。

初めてミカエルに出会った日、水晶の部屋で白い天使 ザドキエルは言わなかったか。

“名はミカエル。時を渡る才有り……”

気付けば私は、その愛らしい天使を抱き締めていた。

「兄さまっ?」

蒼い瞳をまるくして見上げてきた顔の、額にかかる金髪をかき分けて口付けを落とす。

「やった……やったぞミカエル!」

何と喜ばしいことか! とうとうこの子の才能が開花したのだ。今日は何を放つても祝ってやらねばなるまい!

「……えー、と。ルシフェル? どういうことが説明してくれるかしら?」

嬉しくて嬉しくて大喜びしていた私に、ガブリエルは遠慮がちに声をかけてきた。横のメフィストフェレスもうなずく。お前達、顔が若干引きつっていないか?

一方で歓声を上げて抱きついてきたのは愛しい弟。彼の頭を撫でつつ、私は主にふたりに向けて口を開く。

「ミカエルが生まれつき授けられた能力は“時”を操る力だと。恐らく無意識のうちに時間を止めて、私のところへ来たんだろう。だからメフィストフェレスには一瞬で消えてしまったように見えたり、私にも掌握できなかった。時を渡る力とザドキエルが言っていたから、きつと完全に覚醒すれば、過去や未来に渡ることも可能なはずだ」

ふたりは驚いたように顔を見合せ、そして小さな天使を見つめた。

体は小さいが、この子の力はすごい。使いこなせるようになれば、私をも凌ぐかもしれない強大な力だ。悔しさは、全くない。ただただ嬉しいのだ。

時を渡る……それはすなわち歴史を変える力。

と、そこまで考えて、私はある恐ろしい可能性に思い至った。もし万が一にも私とこの子の力を同時に行使したなら……歴史、否、“運命をも変えられる”。

「ああ……」

主よ、何という重荷を。

思わず腕に力を込めた。不思議そうにしている顔を、そっと見下ろす。動揺を悟られないように。

「ミカエル。これからお前は、その力の使い方を身に付けねばならない。更にやるべきことが増えて大変とは思うのだが、どうか頑張ろう、な？」

彼にそれを教えるのも私達の役割に違いない。主がお与えになった、私の責のひとつ。

「はい、兄さま。僕、頑張って、早く兄さまのように立派な天使になりますね！」

うなづく小さな天使の瞳の中には不安の色は見られない。まっすぐな光、澄んだ眼差し。

弟ひとり守れずに、道を敷くことなどできはしまい。私が授けられた力と、ミカエルが授けられた力。どうして我々が兄弟なのか、その理由が少しだけわかったような気がした。

美しい、という言葉はもう、兄のために使いきったと思っていたのに。今、目の前にいる天使は間違いなく“美しい”としか言い様がなかった。

本当に、背筋がぞくつとするくらい。

「大丈夫かい、ミカエル？」

「はい……っ、大丈夫、です」

……泣いて、しまうくらい。

美しさを“怖い”と思ったのなんて初めてだった。そのふたつが繋がることのできるなんて、知らなかった。

笑顔。確かに眼前の美貌は、形の良い薄い唇は弧を描いている。それなのに、どうしてこれほどまでに寒く感じるのだろう。同じきれいな笑みなのに、どうして兄とはこれほどまでに異なった印象を受けるのだろう。

「無理しないで。僕は君をいじめたいのじゃないんだ」

優しげに細められた瞳は、兄の紅色のものよりも更に暗くて、どちらかといえば赤茶色に近い。吹き抜ける風が、庭園の草木と美しい天使の金色の髪を揺らす。後ろでゆるく束ねられた髪が大気と戯れるかのように踊って、時折光を反射してはきらきらと輝く。

身につけた白衣の丈は長い……のだけれど、襟元や裾には毛があらわれた不思議な形状の上着だった。

彼の名は、ベリアル。自分が“能力”を上手く制御できるように

なるために、指導してくれるよう兄が言ったらいいのだ。

だのに、自分は失礼なことを。会っていきなり泣きだすなんて、きつと気を悪くしたにちがいない。

「あの、すみませんでした。その……ベリアルさま？」

「いいよ、呼び捨てで。それから謝る必要もない。慣れてるからね」「慣れて、る？」

首を傾げると、うん、とあっさりうなずかれる。

「僕、初対面だと結構恐がられるみたいだね。大天使達でさえ、僕の能力はあまり好きではないようだったし」

「ベリアルのちから？」

「うん。多分、まだ君には見せない方がいいと思う。そうだなあ……僕の力を見て動じなかったのは君のお兄さんだけだよ」

くすくすと笑う天使の真意は読めない。心から楽しんでいるようでもあり、時々ひどく無感情にも見える、その笑い。

「やはり彼は特別だ、特別に聡明だ。彼は“影”の必然性をよく理解している……」

独り言のように呟いて、そして。

「僕はルシフェルのこと、大好きだけどね」

向けられた視線に、何気なく放られた言葉にたじろぐ。

怖い。

理由ははっきりとしないけれど、胸騒ぎのするその表情と声。

全てを見通すかのような自信に満ちた眼差し。

まさか、そんなはず、ないじゃないか。

気付かれないよう深く息を吸い、吐く。ベリアルはれっきとした上級天使だ。これは“恐れ”ではなく“畏れ”なのだ。美しいこの天使は、力も強大だと聞いたから。

「あの、どうしてベリアルは僕の面倒を見てくれるのですか？ 僕、ベリアルとは初めて会ったのに」

「お兄さんに頼まれたから……っていうのは、あまり答えになっていないね。ルシフェルが僕に声をかけた理由は、やっぱり僕がいちばん適任だったからだよ」

何がそんなに可笑しいのか、ベリアルはずっと笑っている。穏やかに、平淡に。

「僕は“全ての力を知っている”」

「……え？」

「どういう意味だろう、何の比喻だろう。だってそんなこと そんな、主のようなこと。」

「全ての能力、その発動条件、背負うもの、限界。みんな知っている。だからって、それを話すつもりはないけど」

「ごめんね、と片目を瞑られ、曖昧にうなずき返す。それで満足してくれたのか、ベリアルは両手をぱんと一回叩いた。

「さて、じゃあ始めようか」

「は、はいっ」

言われ、急いで翼を広げる。この白い翼こそが力の源なのだと言われ、翼をしまっていたら力は上手く発揮できないと。

「君は“時”を操ることができるのだったよね。まずは僕の言う通りにしてご覧」

今更ながら、彼につけるあだ名が思いつかないなと思った。兄に次いでふたり目だ。

\*\*\*

集中すればどうにかなる、というものではなさそうだった。

「大丈夫？ 休む？」

「いえ、もう一回……っ」

何度も何度もうんうん唸って背中に力を込めて。でも、何か起きる気配はない。既に汗だくだし、羽根も幾分抜け落ちてしまった。またすぐに生えるとは思っけれど。

「そう。じゃあ頑張ろう。想像することが大事、望むことが、大事」

「時を掴むんだよ」、ベリアルは言う。「時の流れを把握するんだ」。

掴む？ 見えないものを捕えるのは難しい。果たして以前、自分はどうやったのだろうか？

力を込めてもだめ。飛んでみてもだめ。走って勢いをつけてもだめ。兄のことを思い浮かべても、だめ。思い付く限りを試したけれど、覚えていない限りを再現しようとしたけれど、一向に何も変化がない。

とつとつ目の前がくらりとして、地面に尻餅をついてしまった。頭がぼうつとする。こんなに力んだのは初めてかもしれない。

「頑張り過ぎたみたいだね。疲れていると成功する確率は下がってしまう。今日はこれくらいにしようか」

頭を優しく叩かれ、悔しいけれど、はい、と返事をする。

本当に、自分はどうかやって発動させたのだろうか？ 自分にちょっぴり腹が立った。もう一回、後で挑戦してみよう。

「そうだなあ。ミカエル、お兄さんに助言をもらおうといいかもよ」「兄さまに？」

「うん。彼もまた、見えないモノを掴むことができるから」

存在……、何とあったか、兄の能力は。忘れてしまった。確か、物体移動のような。

兄から助言をもらえたら、それは頼もしいと思う。あれだけ立派な天使なのなもの。近くにいるのにまだまだ遠い、憧れのひと。

「ベリアル、ごめんなさい。上手くできなくて」

「いいんだよ。一度目に成功する子なんていないんだからね」

「ベリアルは他の天使にもこうやって教えてあげているの？」

「たまにね。けどきちんと指導することは滅多にないかな。“君達は僕にとって特別なんだ。“鍵”、だから」

「……？」

笑う天使の言葉はどこまでが本当で、どこからが嘘なのか。別に、嘘でも構わないと思ったけれど。ベリアルの話は不思議で、ちょっと寒々しくて、へんてこで、たのしい。そんな印象。

「ミカエル、僕からご褒美をあげようか？」

「ご褒美？」

またベリアルは笑う。あの乾燥したような美しい笑顔。優しくないけど美しい、温かくないけど美しい。

つ、とベリアルの片手が伸びてくる。額に、触れる。

つめたい。

「や……っ！」

いやだ、と思った。ぞわぞわと体を駆け上る“何か”。出てくる、出される、出てしまう。何だろう、これは。わからない。わからないけど、すごくすごく気持ち悪い。

咄嗟に身を引こうとしたのに、もう片腕に体を押さえられて。にい、と口を歪めた天使の顔は、今まででいちばん愉しそうだった。

「君に未来を見せてあげるよ、ミカエル」

\*\*\*

自分が知っている天界は、こんなに赤茶けた色じゃない。もっと緑があつて。光が溢れていて。澄んでいて。

空は、黒じゃなくて、青のはず。

まるで、空気が赤いみたい。だって全てが赤く見えるもの。

足を踏み出す。ざり、と履き物越しにかたい土の感触。

みんなを探さなきゃ。

「ガビィ？」

でも、そこにあるのは土と岩と枯れ木だけで、

「ウリィ？」

生き物は何も見当たらなくて、

「ラフィ？」

誰も、いない。

「兄さま？」

誰も。

「兄さま……？ 兄さまっ！」

否、いた。ひとり、いた、いた！ 彼がいた！ 自分はひとりじ

やなかった。彼がいれば、もう。

けれども。

「兄さま」

どうして、地面で眠っているのですか？

「ねえ、兄さま……？」

どうして、顔をあげてくれないのですか？

どうして、返事をしてくれないのですか？

衣にまとわりついた黒い影。違う。あれは、伏した彼の身体から流れる、暗い色の川。

どうして、

どうして、兄さまの体まで紅く染まっているのですか？

『もう、助からないね』

呆然と立ち尽くす耳元に、声。

『彼はお仕舞い』

誰の声だろうか？ 優しく、乾いてて、美しい声。

『けれど、これが未来』

未来？ これが？

「いや……っ！」

来るのか、この時が。生きている限りいつか必ず。

「い、やだ……いやだ……っ！」

そんなの、許さない。認めない。  
こんな未来なら、来なくていい。  
こんな未来なら、要らない。

『君はどうする？』

「僕、はっ……」

否定する。断絶を望む。

『このことは誰も知らない。彼も、みんなも』

自分だけが。

自分だけが知ってしまった未来。自分だけが存在するこの時間。  
消すことも願うことも怖れることも備えることも断ち切ることも。  
全て、自分にしかできない。

兄さまも、知らない。

時を渡る。それは、こんなにも、重い。

「ああ……っ」

漏れた声を聴くひともいない。

僕はこの世界で、

正真正銘の、独りぼっちなのだ。

剣は、他者を斬るための道具である。力により他者を屈伏させるための凶器である。

ならば何故、慈愛を司る天使は剣を扱うのか。何故 天界に剣が存在するのか。

本当に樂園が樂園であるならば、武器が存在する必要などないはず。身を傷つける凶器など知らなくて良いはず。

何故。

それは、我らに意思があるから。自ら考え進む者達だから。

誕生の時から主は剣の存在を教えてくださいました。そして我らは、己の信念を守るために剣を振るう。大切なものを救うために他者へと力を向ける。

方向は己が決める。

もしも力が破壊をもたらしたとしたら？

……否。考える必要はない。きっとそれは世界の手中。全ては、主の御心のままに。

……そうは思えど、ぼんやりと引つ掛かっていた疑問。抱いていないと自分が思っていただけで。それがはつきりとしたわだかまりとなったのは、《奴》と話をしてからだった。

\*\*\*

まるで“恋人”か“英雄”の如く弟を抱いて現れた天使を見て、驚くよりも先に怒りにも似た奇妙な感情が湧いた。

その子に、そんな風に触れるな。その美しい天使は私のものだ、“私だけの”ものだ。

「怒らないでよ。ただ送り届けただけなのに」

肩をすくめた美しい天使。唯一外見において私が劣るやもしれぬと思うほどの、その完璧なまでの美。完全であることが不完全であるような、美貌。

執務を終えた私のもとにやってきた天使は、腕の中に愛しい弟を抱き抱えていて。能力を使いこなすための“訓練”は終わったのだろうか、幼子おさなこは疲れ果てて眠っているのだろうか　と顔を覗き込んで、気付く。

「ベリアル、お前……っ」

ミカエルの白くすべらかな頬に、涙の跡。  
すう、と。一度息を吸ってから。

「おいベリアルどういうことだ私はミカエルが能力を発揮できるように教えてやれと言ったはずだが一体どこに泣く要素があったのか無理でもさせたのか怪我だしたら早くこちらに私が治すいやむしる貴様自身が原因なのかそうなのだろう答える安心するとい

こちらには剣があるのだ返事次第では今すぐ貴様を叩き斬ることができるぞ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ごめん、もう一回」

「よからう。おいお前」

「嘘だって！ 冗談！」

こら、そんなに慌てるな。ミカエルが落ちるじゃないか。

未だ彼を抱いたままの天使に、問う。

「何をした、ベリアル」

すると奴は笑った。いつもの、あの真意の読めない笑みを作った。どことなく他者を小馬鹿にしたような。

「未来を、ちよつとね。ほんの少しだけ見せてあげた」

「……余計なことを」

つい舌打ちが出る。本当に、今すぐ殴ってやりたい気持ちだったのだが。

だから嫌だったのだ、こいつにミカエルを預けるなんて。ただこいつ以上にこの仕事に向いている天使はいなかった。もっと言えば……ベリアルにしかできなかったから。

「焦りすぎだ。お前はこの子の“器”を破壊するつもりなのか」

「そんなことないよ。それに、さ。実際ミカエルは耐えられたでしょ？」

「……賭けたのか」  
「期待したんだよ」

忌々しい理屈を。物は言い様だな。

「お前も……“時”を操ったのか」

あはは、と。快活に、愉快そうにベリアルは笑う。美しい、のに、不快だ。どうも時々こいつは私の神経を逆撫でする。

「意味の無い質問はやめてよ、ルシフェル！ 無意味なのは僕の名前だけで充分だ！」  
「……………」

笑えない、笑えるはずもない。無意味な名前。この美しい天使の名。

ベリアル。その名の意味は 《無価値》。

「僕は全てを知っている。“君は”わかっているだろう？」  
「全て？ その言い方は気に喰わんな。主に対して無礼だ」

だが実際のところ、そうなのだった。この天使は誰よりも特殊でだからこそ“測れない”し“捉えられない”。つまりは、私の能力の対象として認識できない。

初めてこいつと会ったのはいつのことだったか。正確な状況は記憶していなかったが、確か誕生して間もなかったような。私と同時につくられたこの天使は当時から美しく、賢く、そして変な奴だった。

『ねえ、ルシフェル』

今でも覚えている、第一声。ベリアルは私のことを躊躇いなく呼び捨て、

『君はとても重たいものを、背負わされてしまったのだね』

そう言っつて、一本の指を私の額に当てたのだ。振り払うこともできず、とん、という感触に気付いた時には既に ……

「……っ」

「どっしたの？」

回想から現実を引き戻され、何もかも見透かしていそうな気さえする目の前の笑顔を睨み付けた。

あの時……ベリアルが額に触れた時、自分の意思とは無関係に、普段はしまっているはずの翼が勝手に広がったのがわかった。翼は力の源。同時、力も勝手に放出されたということになる。

体の中を激しい流れが駆け回った気持ちの悪さを、今でも鮮明に覚えている。隅々まで鋭敏に、感覚が研ぎ澄まされ。それまでになくくつきりと広範囲で世界を“認識”できたのだ。目の前の天使を除いては。

解き放ち楽になりたい、しかし反動で自らも無事に済む保障はないかもしれない。初めて己の力の強大さを自覚した私はそう思った。そして、自分の力の大きさだけでなく……それを半ば強引な手段で引き出すことのできた美しい天使の底知れなさに、恐怖、した。

『ごめんね。僕は君のことは嫌いじゃないけれど、選ぶのは君だから。今の段階では何も手出しできない』

ベリアルはまた、私に謝りもした。

『知っているということはそれだけで力になることもある。でも、枷になることもある。この世界の君が全てのカラクリを知った時、いったい何を選ぶのか。楽しみにしているよ』

彼の言葉の意味はわからなかった。だが当時の私はただ動揺するばかりで、そこに構ってなどいられなかった。

『これが……お前の、“力”、なのか……？』

『与えられた能力とは少し違うかもしれないね。僕の能力は皆に忌み嫌われる』

私の質問に少しだけ、ほんのわずかだけ表情を曇らせた天使は、大きく一歩後退し軽く片腕を挙げた。

するとその合図に応えるかのように、彼の足元から黒い物体が立ち上がった。影でできた鎌、だった。

『……素晴らしいじゃ、ないか？』

『……え？』

『影はいわば世界の片側だ。表に見えるものが全てではない。そんな大切なものを授けられたお前は、きっと主に愛されているのだな』

『……。やっぱり嫌いじゃないっていうのは、撤回するよ』

当時の私は純粹に羨ましく思っ

ベリアルは嬉しそうに顔を歪めて。

『 大好きだよ、君のこと！ ああ、やはり君はこの世界でも君のまま……ますます未来が楽しみだね、ルシフェル！』

「ルシフェル。僕は旅に出ることにしたよ」

あれ以来、彼の感情を見ることがない。

眼前で弟を抱きかかえた天使は、あまりに唐突な言葉をこちらに放る。それでも平静でいられたのは、口にしたのがベリアルだから。

「旅？」

「うん。僕は“違う世界”も見てきたいんだ」

あの日の言葉もだった。彼は世界という単語をよく使う。

「違う世界、だと……？ なんと、愚かな」

“ここ”以外の世界があるというのか？ 別に？

否。何を、私は期待している。

「お前は主の御元たるこの天界が気に入らないのか。最高傑作以上のものはない得ないというのに」

「……やれやれ。君は少し妄信的過ぎるくらいがあるよ、ルシフェル」

逆に私を諭すかのように首を振るベリアル。ミカエルは、まだ起きない。

「いいかい？ 今この瞬間も新しい世界は生まれている。僕らの前にある無数の選択肢……選ばれなかった世界も枝分かれしているのだと知ったら、君はどう思う？」

たとえばね、と。

「君はすぐにミカエルを奪って背を向けることもできたんだ。それもまたひとつの未来。先にあるのはひとつの世界」

奪うのではない、取り戻すのだ。訂正するのも億劫で、ただ心中で毒づいた。そろそろその子をこちらに“返して”くれないものか。

「君もさ、主を絶対的に信じるの、やめた方がいいと思うよ」

何を言い出すのだ、この天使は。呆気にとられ、私は眼前の美貌を見つめる。被造物にしか過ぎないひとりの天使を。

主がいなければ世界も我らも生まれなかった。今ここに私がいるのは主に役割をいただいたからで、光となるために私は生きるのだ。無論、他の者も。全ての起源はただひとつ。あの方が絶対でないのなら、この世界に信じるべきものは何も無い。

「たとえば、君のその剣とか」

ミカエルを胸に抱いた状態で、長い指が器用に伸びる。指差されたのは腰元。私の大事な剣。……主の、愛の証。

「ねえ、矛盾しているとは思わないかい？」

「矛、盾……？」

眉をひそめ、言いたいことを飲み込みながら顎を軽く引く。どう

してこいつはこんなにも妖艶に笑うのか。甘い、とは言い難い。ただ、果てしなく美しい。

「だって考えてもご覧よ。生に価値の上下がないのなら、どうして“上級”天使がいるんだろうね。どうして……天使長が生まれたのだろうね」

「それは……必要、だったから……」

「本当に？　じゃあ武力も必要なんだね？　互いを傷つけるだけなのに、力なんてお与えになったのも“必要”だからって、言うんだね？」

「……………」

何ということか。返す言葉が出てこない。それどころか、ベリアルという言葉が妙に心に引っ掛かる。

馬鹿な。

首を振る。雑念を振り払うように。気のせいだ、気のせいに決まっている。

「本当に、主は正しいの？」

「なっ……………」

「君の知っているものは、もともと備わっていた知識に基づいているだろう。その知識はどこからきたのかな？　君は今までの年月、誰に染められ続けたのかな？」

「いつ…………いい加減にしる、ベリアル！」

これは紛れもなく主への侮辱ではないか。

主が生み出してくださったこの世界以上の傑作はないのだ。主が生み出してくださった子の目が過つことなど、断じてあり得てはならない！

以前から、初めて出会ったあの日から不安要素ではあったのだ、この“規格外”は。“何故私が読めないモノが存在する”？

過去は戸惑うばかりだったものの、今は違う。この者を放っておいてはならないと、平穩を乱させてはならないとわかったのだ。それが長の務め、それが主の期待。

「無知なのはどちらか、ベリアルよ。お前は何もわかっていない！」  
「そうかなあ？」

無機質な表情で肩を揺らすその姿に、かつと体が熱くなった。

主に仇なす罪人。無知で哀れな子。

ああ、早く、早く。自分が道を示してやらなければ。主に最も信頼されている、自分こそが。

「主の威光を汚す者は、《光》の名に於いてこの私が裁いてくれる！」

許さない容さない赦さない。新たな秩序を求める者も、天意に齒向かう者も、主が望む掟に従わない者も全て。

樂園は限りない白でなければならぬ。光にわずかでも影を落とす反乱者には、制裁を。

主よ、私に力を！

それは主が私にのみ授けてくださった剣。断罪、正義、光明……  
《光の子》に託された願いの具現。

故に私は光であり 光でいなければならず、主の最高傑作だと、そう言われるのだ。

《神の光》と呼ばれる、全ての畏怖の対象たる光の剣は、たとえ天使が相手であろうとその命を削る。悠久を生きる存在を“消す”

ことさえも可能。限られた者にしか許されない、最後の審判の権利。創造された者は、創造主に絶対的にその命を握られている。子が母に抗うことなどできはしない。

恐怖するのは己の心に影があるからだ。潔白であれば、この武器を怖れる必要など何もない。

剣を振るった私のように。そして、

「ふうん……」

目の前で薄く笑っている、この天使のように。

「手加減ありがとう。ミカエルを抱いていてよかったよ」

躊躇せず一息に斬り付けてしまえばよかったと、後悔した。あの一瞬の隙さえなければ……そして私が冷静さを欠いていなければ、こいつの“武器”に阻まれることはなかったはず。

体に届く寸前で私の剣を受け止めているのは、まるでこの世界の闇を全て集めたかのような漆黒の槍。柄はベリアル足元の立ち上がっているのは紛れもなく奴の“影”だ。

彼の能力を重要だと思っ気持ちは今でも変わらない。けれど、羨望の気持ちはあの日ほど強くはなかった。

「……前は鎌だったと思ったが」

「うん。あれはまだちょっと扱いにくい」

皮肉に苦笑する。自分の一部を“扱いにくい”、と。

私が剣を鞘におさめると同時、向こうの槍も霞のように消失する。先程の手応えが嘘のようだ。

ベリアルは相変わらず笑ったまま、小首を傾げて呟いた。

「それはそうと、君、“まだ”その剣を使えるんだね」

「は？」

「ふふ、失礼。そうだね、君は《光》だものね」

「わけが……」

わからない、と言うより先に弟をそつと差し出され、慌てて両腕で抱き止める。まったく、こいつの言動は本当に理解できない。

「じゃあ僕は行くよ。ミカエルが起きたら、恐がらせてごめんねって伝えて」

「それくらい自分で」

……否、それはまずいかもしれない。たった一度でミカエルを泣かせた男だ。下手に口を開けば、更に不要なことまで喋りかねない。

「……わかった。別段お前を庇うつもりはないぞ」  
「構わないよ」

また、笑い。そして奴は踵を返した。金色の束ね髪が柔らかく揺れる。

「元気でね、ふたりとも」

「ああ」

返事を放った口を引き結び、遠ざかる白い背を見送る。結局ベリアルは最後まで“翼を出さなかった”。歩いていく。ゆっくりと、実に優雅に。

奴は、と考える。きっと、否、必ず戻ってくるだろう。美しいままに、あの影を従えて。世界を見て……拳げ句に持ち込むは光明か、

それとも。

私はしばらくその場から動けずにいた。自分が何を気にしているのかは判然としない。明らかなのは、彼の言葉に一瞬でも“迷い”を感じた己に戸惑いを覚えたということ。

再度、首を振る。

腕の中を見下ろせば、愛しい天使の苦しげな寝顔。

悪夢……だろうか。そこで漸くようやく、私は足を踏み出すことができた。

「兄さま」

血、と。

その紅い色の名前を聞いた。誰かが耳元で囁いていった。  
あれを出したら痛いんだよ。  
あれを出し過ぎたら、消えちゃうんだよ。

消える？ 兄さまが、消えるの？

そんなことない、平気だよ？ だって兄さまは目の前にいるもの。  
消えてなんかいないもの。返事をしてくれないのは、きつとお疲れだからだよ。兄さまはとつても強くて、とつても忙しいんだ。

さあ、僕が起こしてあげなくちゃ。

「兄さま」

そんなところでお休みになつては体調を崩してしまいます。ちゃんと毛布をかけなさい、温かくして眠りなさい。兄さま、いつも僕に仰るでしょう？

ねえ、兄さま。起きてください。そうして……名前を呼んでください。

あの優しい声で、どうか。

\*\*\*

眩しい。

まず、そう思った。重たい目蓋を持ち上げる。痛い。

「ミカエル」

あたたかい。

体中がぼかぼかとしたものに包まれている。空気を震わせた音。単語。自分の、名前。耳の中まであたたかくなる。

膝に頭をのせてくれたまま、ゆっくりと髪を撫ぜる手つきが気持ち良い。溶けて、しまいそう。

ぼんやりと、見上げた。

「おはよう、ミカエル」

兄は、白かった。

「兄、さま……？」

「うなされていたから心配した。悪い夢でも見たのか？」

これが、紅く……

「……ミカエル？」

痛くなって、紅くなって、消える。  
いつか彼は、消える。

「う、あつ……」

「っ！ どうした！」

いやだ。いやだいやだいやだ！

永劫、共二。

「ミカエルっ！」

叫んだ。違う。何かが、叫び声になって飛び出した。

跳ね起きて、捕まえられて、逃げようともがいて、抱き締められて。

痛い。体を強く抱く腕が痛い。

だから泣く？

ううん、違う。自分は悲しかった。涙は悲しいと出るのだ。

だって、見たから。白い彼の未来を。自分だけが見てしまったから。

兄さま。大好きな兄さま。

消えないで、側にいて。そう言うことは、なんて虚しい。

「大丈夫、大丈夫だつ。私はここにいるから、な、怖くない、怖くないんだ」

苦しいのは、きつく抱かれているからかしら。

とにかく目の前にあった布に顔を埋めて泣いた。兄さまの服、涙でぐしゃぐしゃになってしまう。気付いたけれど、服を握りしめた手指から力が抜けない。貼りついてしまったみたいに。

泣いて泣いて泣いて。目が痛い。胸が痛い。息が苦しい。胸が苦しい。喉、乾いた。全部を絞りだして、なんで泣いているのだったけ

と、ああこの白いもののせいだと、視界は赤くないけれど、代わりに濡れて歪んでいた。

「仕方ない。許せ、ミカエル」

トン、と衝撃。多分、首の後ろ。一瞬だけ見えたのは悲しそうな兄の顔。

お願い、往かないで、泣かないで、兄さま。

声が、出ない。

驚く間もなく、ふつと意識が遠退いた。

\*\*\*

「ルシフェル様、ミカエル様のお姿が……あつ、えつ、ミカエル様？」

「騒がないでくれ。やっと落ち着いたところだ」

「あの、本日のメフィストフェレス様の」

「無しだ。先生にも伝えておきなさい。今日は休ませる」

「は、はあ。その、一体どうなさったのでしょうか？」

「……………」

「ルシフェル様？」

「……後だ。退がれ、ヴィンセント」

「！ぎよ、御意っ」

低い声は彼のもの？

答える声は誰のもの？

……眠い。

いいや。みんな、起きてからにしよう

\*\*\*

いつの間に、寝台に運ばれていたのだろう。毛布がかけられていたのだろう。

でも、本当は知っている。

全部やってくれたのはきっと、膝枕の主。

「……っ……」

頭を起こそうとしたけれど、突っ張った腕に全く力が入らなくて動けない。

また、泣きそうになった。

「……ミカエル？」

心地よい声が、聞くだけで溶けてしまいそうな声が、降ってくる。柔らかかそうな前髪が作り出す影の奥に、潤いを湛えた紅眼が見える。なんて、きれいなひと。

目が覚めて、彼がそこにいて、本当に良かったと思った。

「……に、ちま……」

擦れた声が、出た。

「動……っない……」

必死に伝えようと絞りだす。どうして、指一本も動かないのだろう。まるで心と体がばらばらになってしまったみたいだ。

そっと、額に大きな手のひらがあてられた。ひんやりとしているのに、触れられた箇所が変に熱くなる。でも、気持ちいい。

兄は何に對してか軽くうなずき、自分の手をもう片方の手で包み込んでくれた。

「力を抜いて、楽にしなさい」

抜こうと思つて力を抜くのは、案外難しい。困つて見上げると、優しい眼差しと視線がぶつかる。慈愛も光明も温もりも、深い深い紅の中に満ちていた。自分は言葉も出せずに見惚れて。

「私に全てを預けてご覧。ゆっくり、ゆっくり」

怖くないから。

言つて、手を擦つてくれる。解きほぐすように丁寧に。触れられた場所が次々に感覚を取り戻していく、不思議。

生きている。彼も自分も。目の前に確かにいて、確かにあたたかくて、ちゃんと、生きている。

「兄さま……」

ふっと体が軽くなった。ぴくん、と。指が言うことを聞いた。次は手のひら、その次は腕、それから頭、やがて足の方へ。全身で大好きな彼を感じる。

おかえり。心の中で呟いた。おかえり、自分の体。

「どこか痛むか？」

首を振る。自然にこぼれた涙を拭ってくれた彼は、大きく息を吐いて穏やかに微笑んだ。

「良かった」

もぞもぞと毛布から抜け出して、きちんと開かない両目を擦る。まばたき。汗が冷えたか、身震いもひとつ。

見慣れた風景に、兄の部屋だとすぐにわかった。窓の外は明るい。朝？ それにしては、眩しい。

「あ……」

「どうした？」

気が付いた。朝は、とっくに過ぎている。とすると。

「お仕事……兄さま、お仕事が」

どうしよう、と思った。本来ならこの時間、兄は自分の膝枕をしていてよいはずがないのだ。

「ごめんなさい……！」

「謝るな」

びっくり、した。こんなに怖い声を聞いたことがなかったから。

見上げた顔は辛そうに歪んでいたけれど、すぐにいつもの微笑が戻ってくる。

「……謝らなくて良い。仕事よりもお前の方が大事なんだ」  
「兄さま……」

なんで、そんなに、哀しそうな顔を。  
儂げな微笑。今にも消えてしまいそう。

消えて……

「怖かったろう。でももう大丈夫だ。私がお前をちゃんと守るから。だから、もっと私を頼るんだ」

聞こえない。兄が何か言っているのはわかる。口が動くのは見える。それなのに、音はみんな素通りしていく。

ひとつ、引っ掛かった言葉。川を流れる木の葉が岩に掛かるように。

“守る”。

そうか、と。そうか、自分が兄を助ければいいのか。自分にしかできないこと。未来を知る自分にしかできないこと。

「兄さま、僕……」

白衣を引っ張り口を開くと、何かを言っていた兄は口をつぐんで首を傾げた。真摯に耳を傾けてくれた。

「お仕事の時、一緒にいたいのです。兄さまと、その……離れたくないのです」

ぱちくりとまばたきした彼は珍しく驚いているようだった。が、すぐに頬を弛めてうなずいてくれる。

「……わかった」

ああ、良かった。これでいつでも彼の傍にいられる。何かあっても大丈夫だ。自分は“あの結末”を避ければいいのだから。きっと兄は、自分が甘えているのだと思っただろう。少し、違うのです、兄さま。

もっともっと大きなこと。何よりも大事な仕事。決意、した。主は自分に、この役目を果たしてもらいたいとお思いに違いないのだ。

\*\*\*

今日は休むべきだと主張する彼にわがままを言って、一緒に湯浴みをしてから寝室を後にする。

不安で不安で繋いだ手に力を込めると、それ以上の力で、でも優しく握り返される。歩幅を合わせてもらっているのは申し訳ないなと思っただけれど、大事な役目のためだから心の中でそっと謝る。そのまま廊下を歩いて着いた先には、大天使の三名がいた。

「ルシフェル！」

真っ先に声をあげたのはガブリエル。卓で何かを書いていた顔をあげ、茶色の目をまるくしていた。

「それにミカエルまで。一体どうしたの？ 今日には来られないって、アルベルトが伝えに来たけど」

「少し急用ができてな。だがもう片付いた」

気遣ってくれてか、「ミカエルにも仕事の様子を見せることにした」と、単なる勉強だと兄は説明した。納得したような大天使達を見、そして一段高い席に座ると、自分にも傍に椅子を用意してくれた。

「遅れて悪かった。今日の連絡は？」

実際、彼らが話す内容は全くわからなかった。知らない単語が飛び交い、理解しようと頑張る間にも会話が進んでいく。ウリエルが神経質そうに意見を言えば、ラファエルが穏やかな物腰で展開させ、ガブリエルは会話を巧みに渡し、そして兄は瞬時に判断して捌いていく。すごくかつこいいと、素直に感動した。

「……………ではその泉に関しては、調査隊を組んで再び向かわせよう」

とんとん、と紙の束を揃えながら兄は立ち上がる。終わった……のだろうか。

「それでは今日は失礼する。色々とやるべきことが溜まっているものでな。すまない」

「いいや、俺らこそ任せてしまつて申し訳ない」

「構わないさ、ラファエル。私にしか権限がないのだから仕方ない。それに、これが私の喜びだから。……………ミカエル」

呼ばれ、慌てて立ち上がる。三名の天使に頭を下げ、差し出された大きな手を握る。

「ミカエル、ちょっと」

退出する時、ウリエルに呼び止められた。近くに寄るようになんわり、ひとりで傍に駆け寄った。

「……ミカエル、具合でも悪いか？」

いきなり囁かれ、驚いて黒い瞳を見返す。

「何か思い詰めているように見える。そんなにずっと緊張していたら疲れるだろうに」

そういえば彼は勘の良い天使だと、いつぞや兄が評していた。その鋭い目は何もかも見通してしまうのかもしれない。

「悩みがあるなら言った方がいい。……知られたくないのなら他の者には内緒にしておくから」

「ルシフェルにもな」。

何と言っているのかわからずに、はい、と小さく呟いた。ウリエルは珍しく肩をすくめ、「気が向いたらでいいから」と兄の方へと送り出してくれた。

手を引かれて部屋を出る。もう一度だけ振り返ると、三名の天使達がひらひらと手を振っているのが見えた。

\*\*\*

それからの日々は、ずっと兄にくっついてまわった。何か起きたら助けないと、自分が防がないと。手を引かれながらも常に周りに気を配った。だって、自分にしかできないのだから。

でも、やっぱり疲れていたのだろうか。

ある朝目覚めると、兄は既に起きていて夜着を着替えていた。こちらに背を向け寝台の端に腰掛けて、真っ白な衣に袖を通すところ。細身なはずの彼の背中。こうして見ると大きく見えるのは何故だろう。

「ん……兄さま、おはようございます……」

その兄は驚いたように振り向き、どこかぎこちなく破顔する。

「ああ、おはようミカエル」

「すみません、今、用意を……」

寝坊だ。兄が仕事に行く時間までに、急いで身支度を整えなければ。

「休んでいてもいいんだぞ？ 毎日毎日私については、今度こそ本当にお前の体が保たない」

「大丈夫、です」

「ミカエル」

起き上がろうとした体を寝台に押し付けられる。ぱふん、と毛布の糸が舞う。

「そうでなくとも、この間の疲れがとれていない身だ。無理はよくない」

「無理じゃ、」

無理なんかじゃない、自分はただ。

言いたいことがたくさんあるのに、さっきから口が重たくて動かしにくい。頑張れ、頑張れ、自分の体。兄さまを守らなきゃ。

「休養は決していけないことではないよ。お前は何か心配しているようだが、私は大天使長なのだぞ？ 多少のことは乗り切れる」

兄はおどけて言ったのだろう。けれど、

「多少じゃ、だめ、なんです」

「……？」

彼を守らなきゃ。

「僕は、平気ですからっ」

力を振り絞って、肩を押さえていた手をはねのける。何か言われるより先に寝台から逃げるようにおりた。

「ミカエル……」

彼のため息の意味は何なのか。

「仕方ないな。だが今日は会議にはついてくるな。あの部屋は遠い。執務室で待っていないさい」

「でもっ」

「いいから！」

びくんと体が震えた。みるみるうちに視界が滲む。

なんで、また、泣いてしまうのかな。自分は悲しいの？ 怖かったの？ 泣いてはいけないのに。また気遣わせてしまうのに。

わかってる、わかっている。兄は心配しているのだ。怒ってなんかいない。

「……どうか私の言うことを聞いておくれ、愛しい子」

頭にのせられた手。自分よりももっと悲しそうな顔を見上げて、渋々だけれどそつとうなずく。彼にこんな顔をさせるくらいなら、自分が我慢した方がましなのだから。

\*\*\*

兄は大天使達と会議を行い、主の御言葉を聞いたり、報告書に目を通したりしてから、それらの仕事を執務室へと持ち帰って片付けている。兄は天使の中でいちばん偉い。だから、彼の承認がなければ動かないことがたくさんあるのだそうだ。

執務室の扉が開いた途端、ぶらぶらさせていた足で椅子から飛び降りた。入ってきた長身の天使は自分を見、穏やかに微笑んでみせる。朝のことが、嘘みたいに。

「ただいま。大丈夫だったか？」

言いたかった言葉を先に言われて、一瞬だけ詰まってしまったけど。

「おかえりなさい、兄さま。ご無事で何よりです」  
「大袈裟だな、お前は」

ちよっぴり呆れ顔。自分は本気だったのに。待っている間すごく心配だった。

兄の手には分厚い紙の束。これら全てを点検し、案件の是非を決めていくのだという。

「菓子をやるうか。待ちくたびれたらどう」  
「いいえ、平気です。兄さまはどうかお仕事を」  
「そうか」

残念そうな顔を見て、ひょっとしたら兄さまが食べたかったのかなど、なんだか可笑しくなる。こういうところも大好きだ。

兄さま。大好きな兄さま。  
自分は彼と一緒にいるために生まれてきたのだ。

「……久し振りに笑ってくれたな」  
「へ？」

兄は、とても嬉しそうに。

「近頃お前はずっと暗い顔をしていたよ。お前には笑顔が似合う」

恥ずかしくなって俯く。顔が熱い。変な気持ちだ。でも、嫌じゃない。

椅子に座る兄は軽く笑い、そのまま自分に背を向けて机の上に書類を広げる。

「お前の笑顔が私にとって何よりの喜びだ。ミカエルが元気でいてくれれば、私はどんなに疲れていても頑張ることができる」

さわさわと、紙が擦れる音。

「だからな、お前が私を案じてくれるのと同様、私も　　いッ?!」

兄さま?!

急いで駆け寄ると、彼は苦笑しながら振り返る。

「……大丈夫。少し手が滑っただけだ」

放り出された筆記具。美しい羽根の先端を削って尖らせたものだ。見慣れている。

そして兄の手。きれいな指の、その……

「あ………!!」

ぶく、と紅い珠が。

紅い………体

思い出す、あの光景。目の前に甦ってくる赤茶けた風景。大好きなひとの、変わり果てた姿。

「ミカエル?!」

「あ、あ………!!」



ずっと私にくっついていたから、あの子の悪夢が私に関するものだと容易に想像がついた。

だから気を配っているつもりだったのに……！

「未来なんて、要らないっ！！」

絶叫、だった。私はあんなミカエルの声を聞いたことがない。そんなに激しい表情を見たことがない。怒りとか悲しみとかそういつたものを全て越えた、激しさ。それなのに蒼い瞳は怯えたような色。唐突に、純白の翼が広がった。

馬鹿な。まだ小さいと思っていた天使の、たったの一声で空間が“揺らいだ”。

まずい、と本能が告げる。彼の強大な力。それが制御できないままに発動したとしたら。

「《レイプス・レイプス》 時よ、止まれっ！！」  
「ミカエル！！」

いつの間に詠唱まで！

苦い思いを噛み潰し、必死で考えをめぐらせる。これが彼の本能だとしたら恐ろし過ぎる。何が彼にこうまでさせるのか。多少のぶれはあれど、正確にして強力。初心者とは思えないほどの解放の仕方。この力、完全に予想の範疇を越えている。

どうすればいい。

無意識のうちに唇を噛む。言の葉は即ち力の先駆け。あの子の言葉にはとてつもない力がある。それが口にされた今、迷っている時間はない。発動するまでどのくらいか猶予があるというのか。

もし、時が止まったとしたら。

全てが止まる。歴史は途絶える。彼が手放さない限り、この世界の時間の流れは断たれる。

この世界の、時間。

この世界に存在しない者の時間は？

「抹消を 《オブリタレイト》……！」

いわば賭けだった。

自らの“存在”を世界から消去する。そして、ミカエルの描く世界に再構築する。

失敗すれば、私の存在は文字通り消滅するだろう。

否 “しただろう”。

「う、ああ……うわああん！！」

……正直驚いた。いつの間にか宮殿の外にいたことではない。

“誰も生きていない”のだ。その世界からは、生命の音が全て消え去っていた。泣き叫ぶ天使のその周り。草木は囁かない。大気は揺れない。空は移ろわない。何もかもがぴたりと静止していて。本当に、完全なる停止。

異質だ。自分の存在をそう感じないではいらなかった。この限らない静寂に支配された世界では。

酷な。

思わず呻く。主は何をお考えか。一瞬戸惑った己に、あの子の存在の大きさを知る。この力はあまりに重すぎるではないか。時を渡ると一口に言っても、実際に行使したその瞬間、彼は誰も知らない時間を知ることになる。ひとりだけ、違う時間を生きることになるのだ。自らは世界から疎外されたのだと感じてもおかしくはない。まして、生まれたばかりの子は。

……だが少なくとも。今、ミカエルは、独りではない。

「ミカエル……っ」

何度呼んでも飽き足りない名前。口が動く。手も足もちゃんと動かせるのだ、私は。“私が”動けるということ。ここに意味を求めるのは間違いか否か。

落ち着くんだ。あの方は必ず手を差し伸べてくださるはず。

光明はあるはず。

自身の泣き声のせいで聞こえないのか……まるでこちらを見ない小さな体を、後ろから抱き締める。彼の泣き顔、私は見ていられない。

「ミカエル」

びくつ、と。彼まで動きを止めた。だが。

「どっぴしてっ……!!」

「え……?」

思っていたよりも鋭い声にたじろぐ。瞬時に振り向いた蒼い瞳は

深い深い色をしていた。

「どうして来たのですか！ 兄さまの時間が止まらなければ、意味がないのにつ！！」

それはもはや悲鳴に近かった。強い力で体を押される。

拒絶、された……？

頭を殴られたような衝撃。ふらふらと。よろけそうな身を、一方で、私の中の何かが留める。

冷静に、なれ。

逃げ出そうとばかり藻掻く小さな体は、反射的にしっかりと捕まえる。そのまま押さえつけるように地面に膝立ちになって。

“私の時間が止まらなければ意味がない”？ “未来なんて要らない”？ そして、最近のミカエルの態度。常に私の傍を離れたがらず、何かを恐れるように沈んだ顔をしていた幼い天使。

「……そういう、ことが」

思わず漏れた。

ああ、“あの天使”はどこまでもえげつない。美しい見た目に反して。

「ミカエル、ミカエル。お前は他ならぬ“私の”未来を視た。……  
そうだな？」

「っ！」

強ばった体が、今度は小刻みに震えだす。無言は肯定。

「……いやだ、あ……！」

やがて聞こえたのは、絞りだすような悲痛な声。怯える顔も見たくはなかったけれど、後ろ向きでは涙を上手く拭えないから。くるりと体を反転させてやれば、彼は抗うどころか逆にしがみついてくる。

「いやだ……いや、です兄さまあつ……！」

拭つても拭つても、涙は一向に止まらない。私を見上げる縋るような瞳。深い蒼の周りは痛々しいほどに赤い。

ミカエルがこれほど泣くのだ。彼が視せられた私の未来は……安泰ではなかったのだらう。少なくとも、我ら兄弟にとっては。

「ずっといつしよ、って、僕、ぼくつ……！」

私の未来などこの際気にするものか。今ミカエルが泣き止んでくれれば、否、この子さえ無事ならば自分はどうなっても構わないくらいだ。

しかし彼にとって、私にとって、共に歩むことが幸福となるのなら。そう、あの方がお定めになったのなら。

「ミカエル」

私の時間だけは流れるということがその証。我々にはまだ希望がある。

「ミカエル。未来は、変えられるのだよ」

私は時の理しんりなど知らない。ただ流れていくもの、世界と共に廻る

もの　そうとしか“認識”できないのだ。生憎と、守備範囲ではない。

それでも、私が命ある者だからわかること。あの方の息子だからわかること。

「変えられない運命なんてないんだ」

幼い天使は結末を見た。結末は終末で、悲劇だった。

「ミカエル。定められた生を歩むことに何の意味がある？」

行き着く先が決まっているのなら。岐路さえない終末への一本道を歩まざるを得ないなら。

「そんな無為な人形遊び、主は期待しておられない」

我々は使いではあれど無能ではない。生きているから変えられるのだ。変えられるからこそ生きているのだ。全ては、我々が意志を持ったあの時から始まっていた。史実を私は知っている。“生まれ た時から知っている”。

「私達は道を選ぶ。それぞれが、自らの意志に基づいて。その果てに広がる未来はどれだけだと思う？　幾つもの生が絡み合って生まれる可能性は、どのくらいあると思う？」

……言いながら一瞬だけ苦笑しかけた。自嘲、かもしれない。私の言葉は、先に“異界”を求め旅立った美しい天使の言に酷似していた。馬鹿にしておきながらこれだ。どうもあいつは口が立つものだから、つい。

違う。心の中でそつと言いつけを加えた。違う、私は“この”世界

を愛するのだ。別の箱庭を認めているわけでは。

「望まれて生まれた私達を、主が悪いようになさることがあるつか。善行は必ずや認められる」

私は　私達は最高傑作なのだから、なおのこと。加護を期待するのは当然だ。

「ミカエル。お前が何を視たのか、詳しいことはわからない。わざわざ思い出させて言わせるつもりもない。だがこれだけは覚えておいて欲しい。お前が視た未来は、単なる可能性のひとつに過ぎないということ。……もしも罪を犯した時は罰が与えられるだろう。この樂園に相応しくない行いには代償が付き纏うだろう。だが、私達は“能力”以上に“生きる”力を　未来を紡ぐ力を与えられたのだ。責を果たす努力を重ねていけば、必ず幸福を得られるのだよ」

だから我々はここに在る。そして主は世界を造り、我々を護り、真の光を与えてくださるに違いない。

あの方のお側に置いていただけるといふ栄光。それを享受する以上、与えられた責は果たさねばならない、恩に報いねばならない。つまりそれが懸命に未来を紡ぐこと　さすれば先には明るい結果が待ち受けていよう。

「僕、……怖く、って……！」

しゃくり上げる天使の涙を白衣の袖で拭いてやる。

まだだ。まだ解決していない。教えてやらなければ。何故なら彼の恐怖は、きつと。

「気付いたか、ミカエル？」

「え……？」

「私はこの静止した世界に存在できている」

少し、口端を上げてみせる。理解したのだろう、ミカエルも目を  
まるくして私を見上げた。

「お前は这个世界でも、ひとりじゃない」

私が、ちゃんとついているよ。

か細い体をふわりと包んでやる。小さな体に重すぎる責。ならば  
私が共に背負おう。

恐らく私達は“互いの能力が通用しない”。どちらも、その瞬間  
に世界に存在する者を対象とするからだ。ゆえに彼は孤独を背負う  
必要はない。

そうだ、やはりそうなのだ。主はちゃんとお考えだった。やはり  
素晴らしい御方なのだ……喜びに、自然と顔が綻ぶ。私達が兄弟だ  
から主はそうなさったのか……それははつきりとしなかったが。

「兄さま……っ……」

……それからミカエルは泣いた。何かが弾けたように、今までに  
ないくらいの大声で泣いた。

私はただ、そんな小さな天使を胸に抱き、永遠のような刹那を背  
中を擦って過ごした。身体中の水が失われてしまうのではないかと  
心配になるほどだったが、泣きたいのなら存分に泣けばいいと思い  
ながら。幸い、ここには私の他に彼の叫びを聞く者はないから。

私の白衣が涙でぐっしょりと濡れ　それさえもいとおしかった  
が、声が枯れるまで泣いてから、ようやくミカエルは落ち着き  
を取り戻し始めた。幾分震えも治まったか。

「全部吐き出せたか？」

静かに尋ねると、はい、と声にならない声でうなずく。今は赤い縁取りが痛々しい蒼い瞳は、心なしかとろんとしているように見える。どうやら泣き疲れたようだ。まあ、無理もあるまい。この子はずっとひとりで悶々と重荷を抱えていたのだからな。

「すまない、ミカエル……。近くにいなながら、私はお前の痛みに気付いてやれなかった」

「謝らないで、兄さま」

首を振りながらの擦れ声。いつもは自分が言っている台詞を返され、思わず言葉に詰まった。

しかしその通りなのかもしれない。真にここで言うべきは。

「……ありがとうな。心配してくれて」

「はい」

弱々しかったが、その笑顔は十分に可憐で魅力的だった。

何か、返したい。礼がしたい。

そう思っ、ふと良いことを思いつく。本当ならミカエルの力とて残っているはずだが、今の疲労した様子から察するに、彼はまだ力の“回路”の繋ぎ方を体得してはいないようだ。

だとしたら、私の力を回復に充ててやるのはどうだろうか。

「ミカエル」

名を呼ぶ。上がった顔をそっと、素早く両手で挟み、私は自分の顔を近付けた。

“もつと甘えなさい、私に”

広い胸に抱かれながら、いつかの優しい言葉を思い出す。今でもたくさん甘えているのに、たくさんお世話してもらっているのに。

「ミカエル」

少し異なる調子の声に、ふと顔を上げれば。

「っ?!」

息、できない。

そうか。唇を、兄のそれが塞いでいるから。頬を両手で挟まれて、顔を固定されて。

兄さま、きれい……。

真っ白なまぶたは閉じられているから紅い瞳は見えなかったけれど、本当に美しい顔立ちが目の前にあった。彼が今自分にしか見えていないのだと思うと、ひどく嬉しくて胸が高鳴る。

次いで、兄の顔越しに見えた奇妙な空気の揺らぎ。ちょうど、彼の背中周りで。

懐かしい。この揺らぎは知っている。

金色の光を纏う純白の翼。それが広がった途端、

「っ!」

入ってくる。流れ込んでくる。渦巻いて、碎けて、押し流すような。

触れ合った唇から何かが勢い良く体の中に入ってきた。痛い、と最初は思ったけれど、本当はその流れはとても優しかった。まるで兄自身のようにあたたかかった。

うつとりと目を閉じる。息苦しいくらいに胸が鼓動しているのに、眠ってしまいそう。気持ち良くて、全てを兄に委ねた。

「……私の力を分けた」

やがてゆっくりと唇を離して兄は言った。いつもは透けるように白い頬が、激しく動いた後のようにほんのりと朱い色をしていて。それもまた、きれいだと思った。

「少しは楽になったか」

「あ、はい……」

言われれば、確かに、何だか体が軽くなった気がする。ほんやりとした目の奥の痛みも消えていた。

軽くなった分、張り詰めていたものが一気に弛んでしまったような。両目を擦り、また彼の胸に頭を預けた。まぶたが重たい。

けれど、幸せだ。彼がいて、自分達の前には道が続くから。

もう、いいよ。

“そこ”に確かに存在している、自分に従うモノに告げる。今ならできる気がした。

流れていいよ。僕は兄さまと生きていきたい。

背中が熱い。翼が勝手に広がって。

刻む、刻み始める、時を。

「ほつ……」

廻る、廻り始める、世界が。

「戻ったな」

独り言のような彼の声に、閉じていた目をそつと開く。見上げれば微笑。風に“そよぐ”黒髪。遠くに向けて細めた紅眼は、光溢れる世界を映す。

疲れているのに心地いい。あんなに泣いたのに、どうして自分は泣いているのだろう。悲しくなんかないのに。

「ああ、そうだった。ベリアルがすまない、と……お前に謝ってたよ」

うなずく。目元が、頭が、身体中が熱い。鼻の奥が痛い。でも、いいのだ。泣いているのに、嬉しい。

そういえばあの美しい天使は、何故自分に未来を見せたのだろうか。ふと気になったけれど。それも、もういいや。考えるのが億劫で。何だかとても甘えたくなった。

「兄さま」

「うん？」

優しく香る甘やかな香。兄の匂い。いつも毛布に包まって感じるのとはまた違う。草の青い匂い、陽だまりの懐かしい匂いも、風が運んでくれる。

そよそよと揺れる真つ白な羽根。一枚ずつ柔らかそうに重なった翼は、薄く金色の光を帯びた巨翼。

ああ、どうして彼はいつも、違たがいなく自分が伸ばした手の先にいるのだろう。まるで心を読まれているみたいだ。

日差しが僅か遮られる。彼の翼が自分の身体を覆っているのだ。

「……主は、僕らを見ておいでなのですね」

「そうだよ。全てをご覧になり、そして光を与えてくださる」

見えないけれど、きつと兄は今とても嬉しそうな顔をしているに違いない。穏やかな声が少しだけ弾んで聞こえるから。

「願いは必ず高き御所に届く」

本当に、兄は主のことが大好きなのだ。主や天界を称える時の兄は至極幸福そうに笑う。晴れやかに、笑う。

そして彼が逆に主に愛されていることも、誰にだってわかる。外見も内面も、これほど恵まれた天使は他にはいないのだから。ちよ  
うあい、と、確かウリエルが言っていたのを思い出した。

ふと、兄の胸元に光る銀色が目に入る。そうだ、あれも確か。

「兄さま、その首飾り……」

「ん……ああ、これか。これも主からいただいたのだよ」

「贈り物ですか？」

「そう……そうだな。贈り物だ」

そつとつまみ上げられた鎖の先に、小さな銀色の塊がひとつ。ぐにやぐにや絡まりあった、溶けた金属のような小さな塊。どうにも何かの形を成しているとは思えないそれは、兄が下げていなかったなら、贈り主が知れなかったなら、きつと価値があるようには見え

ないだろう。

けれど兄はその首飾りをとても大事にしている。片時も寝る時や湯浴みする時でさえも、肌身離さず常に首から下げていた。

いいな、と。主から何かを特別にいただけるなんて、純粹に羨ましい気がした。

「だから、大切にしているんですね」

大好きな主がくださったものだから、いつも身に付けているのか。そう思つて微笑みかけた。

「まあ、な」

それなのに、兄の返事には含みがある。奇妙な間と、ほんの少しだけ下がった声。

「兄さま？」

「いや。……これはな、ミカエル。私の“起源”なんだ」

「きげん？」

きげん……起源。始まり。

「ああ。この贈り物は私への戒めであり、……これを持ち歩いているらば、私はきつと“完全”になれるから」

まるで独り言のようだった。訝しく思いながら、思考に沈む彼を見上げた。

「兄さまは、完璧な兄さまです」

言つと、伏せられていた長いまつ毛が上がる。紅い瞳は静かな光で満ちていた。

「そうか」

彼は微笑み、それっきり何も言うことはなかった。心配になるにしては彼の表情は穏やか過ぎた。声音とは裏腹に、とても満ち足りていた。

兄さま、笑っているのに、かなしそう　微睡みながら、ぼんやりと思う。けれどその思考は突然の浮遊感に分断される。……浮遊感？

「わ、あ」

赤子のように抱かれて。立ち上がった兄の胸の中、緑の地面は先ほどまでより少しだけ遠い。首に抱きつこうかなと思っただけれど、腕を挙げると袖口から入ってくる風が冷たいから、やめた。

「お前は完全だよ」

一瞬、何のことかわからなかった。さっきの続きだ。ようやく頭の中の回路がゆるゆると繋がる。そして続いてどうという意味かと悩む。

「全然、まだまだです」

自分はまだ力も知識もないのに。遥か高みにいる天使から褒められて、嬉しさより戸惑いが勝った。

彼は少しだけ笑って、そうか、と今度は楽しそうに言った。

「帰りましょう、兄さま」

こうして抱かれていると、あの温かな毛布がとても恋しくなる。帰りたい。もぞもぞと体を移動させ、収まりの良い位置で目を閉じた。

「ああ。帰ろう、一緒に」

穏やかな声が嬉しい。微かに聞こえる鼓動が嬉しい。一緒という言葉が、嬉しい。

「おや、迎えが来た」

薄らと目を開けると、宮殿の方からやってくる白い影が三つ見えた。

「私達の力が強過ぎたか」

笑い含みの声に、そうですね、と返した声は聞こえたらうか。歩きただした彼の規則的な揺れを感じながら、全身を託して目を閉じた。

## 幕間：E s c o r t

ただひたすらに真つ直ぐ続く回廊。前に行く大天使・ウリエルについて歩きながら、アシユタロスは眼前の大天使に緊張することさえ忘れ、ずっと同じことばかり考えていた。

自分にこんな大役が勤まるのだろうか。

吐きかけた溜息を飲み込んで、代わりに軽く唇を噛む。

事の発端は数日前。一通の書状が届いたことだった。

唐突な使者の来訪に驚く彼女に恭しく差し出された伝令書。そこには流麗な筆跡でたった一行だけ。

“ 貴女をミカエルの教育係に任ずる。 ”

何度も何度も読み返した。これは何かの間違いに違いないと思って返そうとさえした。しかし使者は面会の日時だけを告げると早々に立ち去ってしまう始末。

何故、自分が？

考えてみるも、答えは浮かんでこない。

ミカエルといえば、大天使長の弟だ。本来簡単に近づいていいよな相手ではない。だから自分が選ばれた理由がわからなかった。大天使の中でウリエルだけは仕事上わずかに関わりがあったが、その彼にも尋ねることはできなかった。

それに……、とアシユタロスは思う。

この話が広がるにつれて、少なからず“嫉妬”されているのを感じていた。彼女は入殿して比較的まだ日が浅い。他の天使達にとっ  
て自分より小さな青二才が、大天使の弟君の教育係などという大任  
を任せられては気分が良いものではないだろう。

それでも。

何回も断ろうと思っては迷い、口を開くも何も言わずにまた黙す  
できることならば是非とも引き受けたい。とても栄誉ある仕事だか  
ら。

けれど……

そうこうしているうちに目的の部屋の前に到着してしまった。扉  
に手をかけながら、ウリエルは久しぶりに口を開く。

「じきにミカエルもくるはずだ。それまで待機している」

無言で頷くと彼は顔を覗き込んできた。鋭い黒の瞳が、僅かばか  
り困惑を滲ませる。

「なんだ、緊張してるのか」

「それはもちろん……」

アシユタロスにとってミカエルに直面するのは今日が初めてなの  
だ。緊張しすぎて具合が悪いくらい。

彼は笑ってそんな彼女の肩を叩く。

「大丈夫、選ばれたのはお前なんだから。きっとお前の頑張りを認

めてくれたんだろっさ」

言われてやっときこちなく笑い返す。

じゃあ頑張れよ、と言い残して踵を返す大天使。はい、と答えたはずの声は音にならなかった。

部屋にひとり残されて、気持ちを落ち着かせようと中を見回す。

そこは応接室のような部屋だった。中央にある卓を囲むように置かれた椅子。とりあえず座って待つことにした……のだが、座り心地が良すぎて逆に腰を落ち着けていられない。妙にそわそわした気分でただその時を待つ。

……永遠とも思えるくらいの時間が経ち、本当にこの部屋でいいのか不安になり始めた頃。

唐突に扉が叩かれ、アシュタロスは文字通り飛び上がった。

「は、はいっ！」

慌てて扉を開けに向かう。忘れかけていた不安や緊張が再び戻ってくる。

震える手で扉を開け　彼女は思わず息を呑んだ。

何故って、目の前に立つ天使が美しすぎたから。

透けるように白い肌、整った顔立ち、艶のある黒髪。そして宝石のような紅色をした、切れ長の瞳。

呼吸さえ忘れ、あらゆる賛美の言葉を無意味にするような。今まで見たこともないほどのその美貌に見惚れていると、彼は怪訝な顔をして初めて言葉を発した。

「……私の顔に、何か？」

言われて、はっと我にかえる。あまりに長い時間見つめていたと気付いて、恥ずかしさと気まずさに耳まで熱くなった。

「い、いえ。すみません……どうぞお入り下さい」

「ああ、ありがとう」

彼は颯爽とアシユタロスの横を通りすぎ、ごく自然に椅子へ腰掛けた。そして穏やかな表情で、身の置き場に困って立ち尽くしていた彼女を手招く。

「座ってはどうぞだ」

「あ、はい……失礼します」

一言一言を紡ぐ彼の甘美な声。不安も緊張も、既にどうでもよくなっていった。けれどこれから勉強を教える度にこの姿と向き合わなければならぬと思うと、それはそれで苦勞するかもしれない。

と、ここでアシユタロスはふと気がついた。

勉強を教えるべきミカエルは、まだそれほど大きくはない“少年”であると聞いていた。ところが今目の前で椅子に優美に座っている彼は、外見は どう見てもアシユタロスと同一年くらいの“青年”。

「あの……失礼ですが、ミカエル様……ですよね？」

不思議に思っただけで尋ねると、彼は微かに口端を吊り上げて。

「いいや ミカエルは私の弟だが？」

一瞬、頭が真っ白になるアシユタロス。驚愕は一拍遅れてやって

くる。

ミカエル様は大天使長の弟君で、目の前の彼の弟がミカエル様で、ということはこの天使は……いやこの方は……！

固まったままの彼女を見てくつくつと肩を揺らす　大天使長ルシフェル。

「……もっ、申し訳ありません！！　とんだ無礼を……！」

座ったばかりの椅子から転げ落ちるくらいの勢いで地に膝をつき、しどろもどろになりながらそれだけ言うのが精一杯。

「構わないよ」

下げた頭の上からは笑い含みの声。アシユタロスとは対照的に、彼がこの状況を楽しんでいることは確かだった。

だが彼女は笑ってなどいられない。天界の実質的な長、天使全てを束ねる天使長が目の前にいるのだから。主の傍に侍ることを許された偉大なる《光》の名を持つ天使を前にして、冷静でいられるはずがない。

「顔をあげなさい」

優しく、しかし困ったように彼は言う。けれど彼女はその言葉に従うわけにはいかない。話しかけられるだけでも畏れ多いくらいなのだ。

「いえ、そのようなことは……」

じつと頭を垂れていると、彼はおもむろに立ち上がる。衣擦れの音。そして視界をその影に覆われた彼女が、何をされるのかと不安に思っていた時。

「頭を下げて欲しくて出向いたのではないよ。さあ、顔をお上げ。

……私は貴女の顔が見たい」

耳元で囁かれた低く、心地よい声。

体が、熱い。落ち着こうとしてバレないように深く息を吐く。

彼は一向に立ち上がるうとする気配がない。彼女が恐る恐る顔を上げると、すぐ眼前、長い睫毛の一本一本まで見えるほどの距離に穏やかな微笑があつた。

「……………！」

反射で身を引きそうになるのを、どうにか堪えてその場に留まる。ずっと彼女を見つめる紅玉は妖しく美しい。息をすることさえ忘れて、アシユタロスはその硬質な光に魅入っていた。

「ひとつ、聞きたいことがあるのだがな」

「は、はい……」

「この話を受けてどう思った？」

正直に言うべきか……

彼女は唐突な問いかけに僅か躊躇う。けれども何もかも見透かされてしまう気がして。全て話すことにした。

「あの……どうして自分なのかわからずにとても戸惑いました。私

などがそのような大役に就いていいのかどうか……現に今ルシフェル様とお話するだけでも、私にとっては恐れ多いことなのです。……それでもこのような榮譽ある仕事、やらせて頂くからには全力を尽くしたいと思っています」

「……………」

言い終えても、しばらく大天使の白哲は動かなかった。真摯な強い視線は目の前で頭を下げた天使を射抜く勢い。いい加減しびれを切らしたアシユタロスが口を開きかけた時、ようやく漏れた静かな呟き。

「……………気に入った」

満足そうな響きがこもったその言葉と共にルシフェルは微笑んだ。

「貴女を正式に我が弟の教育係として認めよう」

「え…………？」

言って立ち上がるルシフェル。アシユタロスは呆然と見上げるばかり。

「私がここへ来たのは大事な弟の教育係となる者がどのような者か、自分の目で確かめたかったからだ。もしも……………そうだな、できぬと抜かす輩、或いは社交辞令ばかり並べ立てる輩であったなら、この話はなかったことにするつもりだった」

「では、私はその……………」

「無論、合格だ」

感動して体が震えるとはこういうことなのかとアシユタロスは思った。悩みと迷いと不安。全てを打ち消すその言葉に、自然と

頭が下がる。

「ありがとうございます……！」

「こちらこそミカエルを宜しく頼む。本来なら私がついてやること  
ができればいいのだが、私にもまだまだ学ぶことがあるからな」

曖昧に笑うアシュタロスしかし、最高の知識をもつとも言われ  
る大天使長の意外な言葉に、内心はとても驚いていた。真の強者は  
己の弱さを認めて尚、高みを見据えるのだ。

「さて」、とここで大天使長は声の調子を変える。

「立ちなさい」

意図を測りかねて少し顔をあげるアシュタロス。美しい天使は相  
変わらず優しく笑んだまま。

「私は貴女と対等な関係を築いていきたい。そもそも他の者を跪か  
せなければ自分の立場がわからないような、卑小な天使に生まれた  
つもりはないからな」

彼の言葉、それこそが彼が大天使長たる所以なのだ。器の大きさ  
に身が竦んだ気さえ彼女にはした。

しかし、その言葉に従うことができるかどうかはまた別問題で。  
偉大なる《光》と対等な関係など言語道断、目線を同じくするなん  
て考えられない。

「いえ、そのようなことは大天使様が仰ることとはいえ、いたしか  
ねます」

だがその反応は、あまり彼の意向にそぐわなかったようだ。しばしの沈黙の後に発せられた声は、怒気は含んでいないものの残念そうなきげがあり、僅かに温度が下がっている風だった。

「これは命令だ。立ちなさい」

人にもものを命じることに慣れた彼の様子に、改めて彼女は立場の違いを実感する。

と、断り方を考えていたアシユタロスの体が急に言うことをきかなくなった。

「え……?!」

意思とは無関係に立ち上がるとする体。何が起きているのかわからず、紫苑の瞳で目の前の天使を凝視する彼女。ルシフェルは端正な顔に悪戯めいた笑みを浮かべていた。

「大天使様ツ……!」

完全に立ち上がって、ようやく体を拘束していた力から解放される。短時間ながらも既に息があがってしまっていた。

「な……にを……」

「少し、な。また膝をつくというのならば、貴女の体の自由は奪わせてもらおう」

「っ!」

これは脅しではないのだろうか。

何も言えずにアシユタロスが口を開閉させていると、ルシフェルは顔を曇らせる。

「……礼は強制するものではないだろう。頭を下げればかりでは顔が見えない。私に見えるのはいつも後頭部ばかりだ」

一瞬よぎった寂しそうな陰。彼も悩んでいるのだなと彼女は思う。若くして全ての天使を束ねる責を負い、自分よりも年上の天使達にまで頭を下げられ、“友人”ではなく“従者”ばかりに周りを囲まれて過ごす日々。大天使長というのも楽ではないのかもしれない。彼女は様々考え、迷いに迷った末、やがて躊躇いながらも首を縦に振った。

「それは……？」

「いえ、あの……はい。大天使様が良いと仰るのであれば、その……」

途端に彼の表情が輝く。それは一天使としての彼の貴重な素顔。

「ありがとう！」

彼が見せたとびきりの笑顔。立場も役割も無しに、ただ純粹に喜びだけの表現。アシュタロスはまだも体が熱くなるのを感じた。

「弟が世話になるといふのに頭を下げられたのでは、寝覚めが悪いからな」

そう言って自然に差し出された片手。

「宜しく、アシュタロス」

「よ、宜しく願います。ルシフェル様」

「ルシフェル、でいい」

迷いよりも、許可を与えられたこと、自分の名を知ってくれていたことが嬉しくて。

「ルシフェル……………様」

でもやはり取れない最後の敬称。彼は少し不満そうな顔をしたが、彼女にとってみれば仕方のないこと。曖昧に笑う新たな友に、大天使は肩をすくめ、それでも嬉しそうに頬を緩めた。

「まあ……………少しずつ慣れてくれ」

「はは、了解です……………」

後に彼女は、彼のお目付け役として名を知られるまでに至るのだが、それはまた別の話。

幕間・E s c o r t (後書き)

主従も運命だとするならば、【護衛者】の愛を彼は信じるだろうか。

## 幕間：Jaunt

ぼかぼかと気持ちの良い晴天。暖かいが、長く浴びるには少し疲れのような、そんな明るい日差し。

それを避けるかのように、木立の陰には真つ白な椅子がひとつ。わざわざこの林へ持ってきたばかりなのだろう、椅子の足に踏まれた下草は生氣そのままに天を目指す。椅子に座る小さな天使　ミカエルは、眩しそうに蒼い目を細め、少し離れた木のところに立つ天使を見つめた。

見つめられた側。茶髪を後ろで束ねた長身の……、白衣だから天使に違いないのだろう。たとえば、その目付きが鋭いものでも。

「ん？　あー、ダメだな。こいつアまだ早エ。……」

やさぐれ天使は何をしているのか。

答えは彼が見ているその木にある。丈は彼の身長と同じくらい。青々とした葉を茂らせた枝には、拳ほどの大きさの薄桃色をした果実がなっている。そう、彼は“品定め”しているのだ。

その様子を見ていたミカエル。椅子に座って所在なさげに足をぶらぶらさせていたが、少々退屈になったか、やがてあどけない表情のまま小首を傾げる。

「ねえ、ゼブル。その実の名前はなんて言うの？」

「これか？　あー、アンブロ……なんつつたかな。うん、そんな感じだ」

ゼブルと呼ばれた天使。どうやら名も知らない果実を幼い天使に食べさせるつもりらしい。しかしミカエルも気にはしていないよう

で、そうなんだ、と呟いただけ。

「まア安心しな。味はオレ様が保証するぜ」

「見せて」

「おう」

ゼブルことベルゼブは、漸くひとつの熟れた実をもいだ。軽く汚れを払い、放る。

ミカエルは慌てて腕を伸ばし、椅子から転げそうになりつつも、どうにかその柔らかな果実を両手の中に受け止める。ふわりと強い芳香。薄紅色が淡く優しい色合いに見えたのは、表面に生えた細かい毛のせいだと気付く。ちょっぴり痛いけれど、見た目までどこか愛らしい。

「可愛い！」

「ヒヤハハ。美味そう、じゃなくてか？」

歓声を上げた天使を見、ベルゼブは楽しそうに言う。笑うと八重歯が見えて、刺々しい雰囲気が一気に鳴りを潜めるのだから不思議だ。

「寄越してみな。剥いてやらア」

「うんっ」

手についた土を払いながら近づいてきたベルゼブは、ミカエルから実を受け取ると、慣れた手つきでその皮を剥き始めた。薄くて柔らかい皮の下からは、黄金色の瑞々しい果肉が姿を見せる。

「ほらよ」

「ありがとう！ 食べてもいい？」

「ああ。衣にゃこぼすなよ」  
「わかった」

気を付けて、一口。

「……美味しい！」  
「そりゃ良かった」

弾けるような笑みに笑い返し、ベルゼブブ自身ももいだけばかりの実を頬張る。溢れる果汁をこぼさぬように。手を濯ぐにも、小川は少しばかり遠いのだ。

大きな彼より遅れること暫し。小さな口で、小さな体なりにあっという間に実を平らげた天使は、満足げに再び足をぶらぶらさせていた。……本当は、行儀が悪いと思われそうだけど。でも、ベルゼブブは特別なのだ。平素目付き鋭い彼はミカエルにとって、いちばん親しみやすい“友”のひとりだった。

「ゼブル。この実、鳥さん達は食べないの？」  
「みてエだぜ。なんたって“しんせー”な果实だからな。天使の特権、つてヤツ？」  
「ふうん……。こんなに美味しいんだから、鳥さんや花さんも食べられたらいいのにね」

そして彼の中では、環境に在る全ても友人。“お裾分け”を真剣に悩む天使を見、ベルゼブブは優しげに目を細めた。

「そうだな。だが獣はあんまし甘いモンが好きじゃねエ。草木に至っては口もねエからなア」

肩をすくめたベルゼブブとは対照的に、ミカエルは何か思索し、

うーん、と唸る。

「……じゃあ、草木には絞ってあげたらいいのかしら？」

ぽつんと漏れた呟き。ベルゼブブは一瞬だけ目を見開き、そしてからからと軽快な笑い声をたてた。驚く天使の頭に手のひらをのせ、乱暴に、優しく撫でる。

「てめえも面白エなーミカエル！　　ったく、兄弟揃って賢いんだか賢くねエんだか！」

「わ、わ！　ゼブル、ちゃんと手を洗わなきゃ」

「要らん要らん。オレはミカエルと違って食ベンのが上手いの！」

よ、つと！」

「ふやあつ?!」

勢い余って今度こそ本当に椅子から落ちた小さな体を、大きな腕がしっかりと抱き止める。二本の腕はそのまま肩の上に幼い天使を乗せ、木立の中に再び些か間の抜けた悲鳴が響いた。

「もうっ、ゼブル！」

「ヒヤハツ、悪イ悪イ」

金髪を乱され顔を赤く染めつつも、ミカエルはどこか嬉しそうに先輩天使の頭にしがみついた。束ねてある髪を解いてしまわないように気を付けながら。

「あ。てめえこそ手エべたべたじゃねエのー？」

「今ゼブルの髪に拭いちゃった」

「うおいッ！」

「ふふっ、冗談だよ！　あんな美味しいのだから、僕だっつきらい

に食べられたよ」

小さな天使は嬉しそうに、両の手のひらを広げて見せた。安堵か呆れか、息を吐き出した大きな天使の顔も綻ぶ。

「……ゼブルは、こんな風の世界を見てるんだねえ」

身動き、座り直したミカエルが、ベルゼブブの頭上で感慨深そうに呟いた。彼にとって、こんなに高いところから景色を眺めるのは初めてのことだったのだ。

「んア、怖いかな？ だったら下ろすが」

「ううん、平気。ね、ゼブル。ちよっとお散歩しよう？」

「散歩？ どうか行きてエとこあんのかな？」

「ない、けど。ゼブルに任せるっ」

「なんだそりゃア」

呆れながらもベルゼブブはゆっくりと歩きだす。肩の天使を落とさぬように、彼が振動で舌を噛んでしまわぬように。目的地なんてない。楽園はどこまで行っても“楽園”なのだから。

「ゼブル、ゼブル」

風に卷かれた金髪を避けながら、小さな天使が目の中の茶色い頭を軽く叩く。彼がこんなことをする相手もベルゼブブだけ。

「んア？」

「お仕事、いいの？」

「朝から付き合っただけ言うかよ。今更だなア、オイ」

「だって気になったんだもん」

頬を膨らませてふいっとそっぽを向いたミカエル。その様子は見えずとも、拗ねたような声音に軽快な笑い声上がる。

「ハハツ、そーかいそーかい。安心しな、オレの仕事は滅多にねエんだ」

「暇なの？ 上級天使なのに？」

「てめっ……………」

今度はミカエルが笑う番。何か言い掛けたベルゼブブはしかし口をつぐみ、そういえばこの幼い天使には教えたことがなかったかのため息を吐く。

「オレだつてなア、ちゃんとして仕事はあんだぜ？ 立場的には…………ウリエルカルシフェルの下になるのか。あの辺は色々と兼任してっからなー。よくわからねエけど」

「ウリーの？」

「ああ、平たく言やア軍事を司る部署な。他にはマルコシアスとかがいるな。…………だがオレの“役割”はまたちと違う」

「…………？」

仕事は天使の社会を成立させるためのもの。役割は生まれた時に与えられたもの。上級の天使であればあるほど、その責任は重くなる。自覚する時期は、各々異なるようではあるが。

思いの託された生まれ、願いの込められた器、運命へと導く名前。創られた理由は、依って立つにはあまりにも曖昧で、自由を求めるとはあまりにも重大。己が己だから存在できるということ、果たしてそれは幸か不幸か。

「オレの役割は、まア《代理》…………ってのがわかりやすいか」

「だいいり？」

「そ。代わりつつーことだ」

尾の長い小型の獣が二匹、互いにこけつまろびつ茂みから飛び出して、再び別の茂みへと潜り込む。枝に並んだ鳥達が光を讃える歌を歌う。

「……つつても、オレにもよくわかンねエんだよなー」

「ねえゼブル、代わりつつて、誰の？」

「ルシフェルの、だ」

蒼い双眸をいっばいに見開き、ミカエルはまじまじと自分の下にある顔を覗き込んだ。

「兄さまの?!」

「驚いたか」

ケラケラとベルゼブブは笑う。ひとしきり笑ってからも未だ笑いを堪えられない様子で、彼は片手を離して唐突に指をひとつ鳴らした。弾ける音と同時に、その人差し指に小さな炎が灯る。

「代わりつつてあんましイイ響きじゃねエけどな、取りようによっちゃア“天界の長並の実力者”つつてことだろ？」

「でも……でも兄さまの代わりつつて、それじゃあ」

そわそわと落ち着かないミカエル。再び笑ったベルゼブブだったが、今度の笑みには優しさが滲む。

「そつさ。だから言ったる？ 仕事は滅多にねエ、つつて」

「あ……」

彼が責を果たす時。それは代理を立てざるを得ない時。

「アイツに代わりが必要な時があるかつての。何でもかんでも完璧にこなしゃがってよオ、オレ様の出る幕なんかありやしねエよ」

「けど……ゼブルの役割なんでしょう？」

「ああ。だからオレはアイツの補佐的なことをしてるワケ」

ベルゼブブ。《王》の名を戴く彼は《光》の右腕と言われること  
もしばしばだった。

「兄さま、今日もお仕事してるよ？」

「……」

……実情は定かではないが。

「いいんだよ。オレの今日の仕事はミカエルと遊ぶことなの。下手な天使に任せるよか、オレに頼んだ方が確実だろ？ それに今頃は会議の最中だろうしな」

「そっか。ガビイ達しか出られないもんね」

「そういうこった」

「じゃあこの後ゼブルは、お疲れの兄さまに代わって書類を読むんだね！」

「お……おっつー！」

きらきらとした笑顔に気圧されたかのようにうなずいたベルゼブブ。面倒くさい、仕方ない、気が進まない。そんなことはおくびにも出さない、出せない。何故なら右腕だから。“主君”はきつとそれ以上に疲れているのだろうから。

「じゃあ、早く戻らなきゃ」  
「ああ、そうだな」

彼らはそのまま回れ右。散歩はどうしたのか。それでもミカエルは大好きな天使の話に満足気だった。

「……色んな役割があるんだね」  
「だな」

幼い天使には学ぶことがたくさんある。周りのことはもちろん、自分自身についても。少年が“役割”を知るのもう少し先。もう少し、大きくなってから。

「僕ももつと頑張らなくちゃ。兄さまみたいに」  
「まあまあ、気負うなって。時間が経ちゃアわかることもある」  
「“ゼブルにだって”立派な役割があるんだし」  
「どーという意味だよコラ」

木立に響くふたつの笑い声。澄んだ空には眩しい光。

「……僕も、」  
「ん？」

楽園を隈無く照らす陽を見上げ、ミカエルは希望に満ちた瞳を嬉しそくに細めた。

「僕も、主のお役に立ちたいな」  
「……ああ。いつかきつと、な」

白亜の宮殿はすぐそこに。光の居城に待ち受けるであろう主と仲

間と。幸福に思いを馳せながら、彼らはほんの少しだけ足を速める  
ことにしたのだった。

幕間：J a u n t（後書き）

【気晴らしの小旅行】に彼を連れ出す。白亜の城の外もまた、光の加護を受けた籠。

「　　と言ってくれてな、すごく驚いたものだよ。だがあの子の優しさといったらないだろう?。」

「……………」  
「ああ、なんと私は幸福なことか！　本当にあの子は可愛らしいんだ。わかるか？　わかるだろ？　そうだつ、それからこの間は……………」  
「ルシフェル」

蒼の天使のため息に、私は理由もわからず言葉を切る。

「どうした、ラファエル?。」

「あとのくらい話の種が残っている?。」

「さて…………どこまで語るかによるな」

「……………」

「何なら出逢いから話そうか?。」

「…………遠慮するよ」

なんだ、つまらない。心中でこつそり呟き嘆息、腕組み。そのま  
ま椅子の背にもたれ、目の前で苦笑している天使から顔を背けた。  
首をめぐらせれば窓、机、何に使うかわからない細かい器具の数  
々、おおよそこの部屋以外では目にかからないであろう小瓶の群れ、  
そしてそれらが並んだ背の高い棚。更に向こうには寝台があるはず  
だ。

ラファエルの私室は数ある天使達の部屋の中でも特別に風変わり  
だった。

「…………相変わらずだな」

思わず呟くと、彼は一瞬何のことかと私の視線を追い、ああ、と間もなく微笑んだ。

「それは、俺の与えられた役割だから」

ラファエル。風を司る癒しの天使。彼が与えられた才能のひとつが“調剤”だった。すなわち、薬を創り出すこと。

無論我々として少しばかりの怪我ならば自力で治癒が可能だ。望めば他者のものでさえも。しかしそれも“対象”を理解していればこそ。体や力、精神に謎の不調を覚えた天使が　大概は宮殿の外にいる者達だ　彼のところに駆け込むことは珍しくはない。本人もそれをよくわかっていいるから、たまに外で診療を行うのだという。

“あの時から”肉体を持ってしまった我々が不調を覚えるのは驚くことではないが、しかし。

「薬、か」

正直煩わしさを感じる時がある。ラファエル曰く実験を行い、調査し、結果を検討しては試す……その繰り返しらしい。らしい、というのには私にはそういう知識はなかったからだ。最高の知識を与えられたはずの私に、重要であろう薬の知が欠けているとは。まして才を与えられた彼までも、自らの手で確認しなければ前進できないとは……そこも、いまいち解せない部分ではあるが。

それに命の保証がある天使にしてみれば、あまり合理的な手順ではない気がする。極端な話、不調も放っておいたところで大事には至るまいからな。

だが、主がこのようになさったのは、何かお考えがあつてのことなのだろう。全ては主の御心のままに。

「ルシフェル？」

「あ、ああ。何でもない」

「貴方がぼんやりするなんて珍しい」

楽しげに笑い、温かい紅茶が入った容器を口元に運ぶラファエル。何だか少しだけ気恥ずかしくて、私も同じように口をつけた。大して熱くはなかったが、わざと眉をひそめてみたりする。

「少し考え事をしていたから」

今日は久し振りの休養日。たまたまラファエルとは休みが合ったのだが、ここへ来たのは他でもない、ラファエル本人から話をしたいと申し出があったからだ。

「それよりラファエル、話とは何だ？ 私は今日は出来る限り早く戻りたいのだが」

……つい自分が語ってしまったことはこっそりと棚上げだ。

「用事でもあるのか？ 俺が尋ねた時は何もないと……」

「早く戻って、あの子が帰ってくるのを待つんだ。今はアシユタロスと勉強中だろうからな」

肩をすくめられる。その呆れ顔は心外だな。

あの子は最近ますます立派に成長している。以前より背も伸びたが、愛らしい顔立ちはまだ幼い。愛しい弟の姿を思い浮かべ私はそっと頬を弛めた。彼を大切に思うのは、当然じゃないか。兄なのだから。

「そのことも、なんだが」

も？

「いや、少し気になっっているというか……どうか貴方には何を言っても怒らないで欲しい」

ちよつとだけ顔を引き締め首を傾げる。無言で続きを促せば、彼はわずかに遠い目をしてあの子の名前を口にした。

「ミカエルのことだ。ルシフェル、彼に何か　主と通じるものを感じる時はあるか？」

「……は？」

あまりに唐突過ぎて間の抜けた声が出た。器を下ろしかけた手も止め、眼前で真剣な顔をしている天使の真意を探りにかかる。どこかを彷徨っていた翠の瞳はいつの間にか私を見つめていた。

「主と？」

やつとのもので聞き返す。質問の意味も意図も、わからない。

「ああ。これは俺の個人的な興味の問題だが」

そつ前置きして、続ける。

「ミカエルは貴方を愛している。そして貴方もミカエルを愛している」

「無論だ」

誓ってもいい。

「だよな。兄弟仲が睦まじいことは素晴らしいと思う。だが貴方の話を聞くと、それにミカエル自身の態度を見ると、些か彼の愛情は度を過ぎていている気がする」

「……………」  
「貴方も。ミカエルへの愛情は、他の者に抱く愛情と何か種類が違う気はしないか？ 何か外的な要因がありそうな予感が……そうだな、端的に言えば、貴方達はお互いの存在に固執し過ぎていているように思える」

……初めての指摘に心底戸惑った。怒りだのを感じる余裕もない。遠回しに“異常”だと そう、言っているのか？

私がミカエルを愛する気持ちに嘘はない。見た目もひどく愛らしいし、性格も思いやりに満ちているし、何事にも懸命だし、あれ以上で愛すべき天使は……

と、そこまで考えてふと違和感を感じた。言葉にするのは難しいわけもわからず鼓動が速くなる。決してときめき、ではない。違和感と呼ぶには些細過ぎるような、微妙に微妙に噛み合わない何か。私は何故ミカエルを愛している？ いつからだ？ どうして彼女のだ？ そもそも……疑問に思うことすら疑問ではないのか？

この感覚は 水晶の部屋で、彼と出逢ったあの日感じたものに似ている。

“それは君達が兄弟だからだよねえ、きっと”

白い天使の言葉が蘇る。そうだ、私は確かにあの時から違和感というものは感じていたのだ。

「すまない、深い意味はないんだ」

ラファエルの声に現実へと引き戻される。私はゆっくり首を振った。深呼吸ひとつ分の間を置く。

「いや。お前は……愛に理由を求めるか、ラファエル」

「違う。そこに理由や因果を求めてはならないというのは、さすがに俺にもわかる。誰かを愛する理由なんて、自分ではわからないものだからな」

一瞬の微笑みに幸福そうな影がよぎる。たとえば、愛しい者のことを思い浮かべた時のような。

「では一体……その、主と通じるものとはどういう意味だ？」

「ああ……何か俺も混乱してきたな。本当に、感じたままを言っただけだったから。どうにも俺は疑問をすぐに掘り下げたい性格らしい」

知っている。頭を掻いて苦笑しているこの天使は、謎めいたことは何でも調べたがる癖がある。最初は、主がお与えにならなかつた知識は不要なのだから、わざわざ求める理由がないと苦々しく思ったものだが。しかし彼が何かを求めることさえも意志の力だとすれば、敢えて止めるまでもないだろう。次第にそう思うようになっていった。

「少し疑問に思って。貴方のミカエルへの想いが、ややもすれば主への愛に似ているような気がしたから……。貴方は主とミカエル、どちらをより愛するのかと、そんな下らないことを思ってしまっただけだ」

いくら慣れたとはいえ、こんな問いに誰が驚かずにいられよ

うか？

「……主とあの子は別だ。同じ次元で考えてはならない」

「そうだよな、うん。大変失礼した。今のやり取りは忘れてもらえると助かる」

忘れられるものか。自分でも理由がわからないほどに狼狽えた己がいたのだから。笑んだ天使を前に、私はどんな表情をすべきか迷う。

あの子に主と似たものを見たことは皆無だと、果たして言い切れるのだろうか。いとおしくていとおしくて、命までも捧げられると思う相手は主以外にもいて良いのだろうか。未だ解釈できないあの子の名前の意味は　　こういうこと、だったのだろうか？

これ以上考えていると、本当にあの子を愛せなくなりそうだった。やめよう。今まで何も不都合はなかったのだ、これからも私は変わらずミカエルを愛し続ける。それは主もお喜びに違いない。

「それで……もうひとつ話があるのだろうか？」

私は何もかも忘れようと心の底に押し込めて、無理に話題を変えることにした。この笑顔に異論は唱えられまい。

「あ、ああ。そうなんだ。実はそちらの方が本題で」

“それも、ミカエルのことなんだが”　　そう、言った。

「なんだ。また過保護だとも言いたいのか」

「まあ」

軽く睨めばくつくつと笑われる。洗面をつくりつつ、今度の話題

はそれほど重くはないのだと密かに胸を撫で下ろす。  
蒼の天使は柔らかな声で言葉を紡いだ。

「そろそろミカエルにも、剣を持つことを教えるべきではないだろうか」

どうやら今日は私の予想が当たらないようだ。

「剣を？」

険のある声になってしまったのは仕方がない。何故ならあれを持つ道の厳しさは己がよく知っているからだ。できれば遠ざけたいと思うのは兄として当然だ。未だに握らせたこともない。

「あの子はまだ若い。今から他者を傷つける術を知る必要はない」  
「しかしいつまでも貴方がついてるわけにはいかないだろう。自分の身は自分で守れるようにしなければ」

「私はずっとあの子と共に、」  
「物理的な話ではなくて。精神的に、だ」

薄々思っただけのことや、指摘されると、どうも直視するのが痛くて言葉に詰まる。私は依存と言われようが構わないのだ、あくまで。けれどやはり心のどこかで、それではいけないと漠然と思っっているのも事実。

身を引くことが、手を離すことが、あの子のためになるのだろうか。正しいと納得する一方で、それはとても切ない気がした。

「それに」

ラファエルは僅かに声を落とす。

「いずれは彼も大天使となるのだろう。知らずに困るのはミカエル様”自身だ”」

思わず目を瞪る。

「ラファエル、お前」

「なに、この程度は他の大天使にも想像がつくはずだ。彼は様々な意味で特別だからな。将来、貴方と同等或いは準ずる地位に就いたとしても、驚きはしないと思う」

「そうか……」

幼い頃に世話をしやった者が、自分の上に立つ……というのは一体どんな気持ちなのだろう。本人は　ミカエルはそれを望むだろうか？

それでも主の御心には逆らえない。定められたものと自らが紡ぐもの。以前私がミカエルに告げた言葉は、またほんの少し語弊があったらしい。それは確かに変えられる未来、かもしれないが。そうまでして変えたくはない　“変えてはならない”ことだってあるのだ。

何の感情か、深いため息が出た。

「もちろんすぐには言わない。だがミカエルには素質がある、と思う」

ラファエルは私のため息を、悩みと苛立ちからきたものだと解したらしかった。気遣ってくれるのは素直に嬉しい。が、私の心は既に決まっている。

「ラファエル」

「ん？」

「……ミカエルのこと、考えてくれて感謝する。検討してみよう」

端正な顔が綻んだ。彼は穏やかに目を細め、力強くうなずいたのだった。

「天使長がいらつしやった！」

「ルシフェル様が“外”に?!」

「是非お姿を拝見したい！」

麗らかな昼下がり。普段なら子供達が駆け回り、一般の天使が集う憩いの庭。真っ白な宮殿の前に広がるその場所はいつになく騒がしかった。

数名の天使が慌ただしく駆けていく。驚きと歓びの表情で、滅多に“外”の天使には姿を見せない彼の噂を口にして。自分以外にとっても兄は憧れなのだ。誇らしいような、悔しいような。

それにしても、一体どうしたというのだろう。庭園を照らす陽はまだ高い。今は仕事中にはずなのに。……というのは“たてまえ”。会いたいな。会えるかな。

実は夜まで待ちきれない。彼はこんな庭園の隅まで来てくれるだろうか。この……

「ミカエル？」

「……あ、はいっ！」

あいにく、自分を呼んだのは兄ではなかった。しかしどうやら何度も呼ばれていたみたいだ。紫苑の瞳が心配そうに見つめているから。

「す、すみません！ えと、どこから……」

慌てて本を捲る。気付かない間に風に頂を戻されていたらしい。

さつきまで読んでいた箇所が見当たらない。

「天界の創造について」、ですね。もう少し先……ええ、そこで  
す」

向かい側で微笑んだ美しい天使は、自分の教育係であり兄の友人だ。そして自分の友人でもある。肩まで伸ばされたきれいな銀髪は今みたいに下ろしていた方が好き。華奢な彼女にはその方が似合うもの。

「ごめんなさい、アッシュ。ぼーっとしてしまいました」

アシュタロスという名前は長いから、自分はそう呼ばせてもらっているのだけど。

「大丈夫ですよ、ミカエル」

最初は何故か“ミカエル様”だなんて呼んでいたアッシュも、それは嫌だと言ったら、今では時々を除いて自分のことをこう呼んでくれる。大切な、友達。

ああ、集中しなくちゃ。

アッシュは本当に色々なことを教えてくれる。メフィ先生の礼儀講座が修了して、今度は彼女と毎日のようにこうして一緒に本を読み、それから体術の稽古を少しずつ。体を動かすがすごく得意なアッシュだけれど、勉強中も質問には何でも答えてくれる。密かに憧れた。

庭園の隅に置いた卓に広げた書物はいわば“歴史書”。誰が書いているのかは知らない。そこにはずっと昔 兄が生まれるよりも前のことが、全ての天使にわかるように記されている。知らなかつ

たことがわかるのは楽しい。だから読書は好きだ。

『こちらにいらっしやる?!』

『お迎えの用意を!』

……兄の方が、もっと好き、かな。なんて。

「ミカエルー?」

「……あ! ご、ごめんなさいっ!」

まただ。また向こうに気をとられた。集中集中!

と、気合いを入れて文字を睨んでみたのに。

「……貴方達は本当に……」

「アツシュ?」

ぱたん、と本を閉じたのはアツシュの方だった。

怒らせちゃったかも!

焦る、焦る。彼女は微笑んだままだけど、そんな笑顔は当てにならない、らしい。自分はまだ怒られたことはない。しかしいつのことだったか、ニコニコと談笑していたはずの彼女の話し相手が、かなり凹んだ様子で“解放”されたのを見たことがある。何故か寒気がしたような。

首をすくめておすおすと見上げる。笑顔の彼女はゆっくりと口を開き……

「今日はもう終わりにしましょう。気になるのでしょうか?」

降ってきたのは存外に優しい声。目をぱちぱちさせていると、逆に首を傾げたのはアツシュの方。

「どうしました?」

「え、いえ……あつ、僕、平気です! 頑張れます!」

「いいのです」

慌てて書物に触れた手をやんわりと剥がされる。戸惑って顔を上げてみても、微笑は変わらずあたたかい。

「ここまで来て、彼が貴方に会わないで帰ると思いますか? あの兄馬鹿な彼が」

兄馬鹿。馬鹿?

「行って差し上げなさい。その方が彼も喜びます」

顔が熱い。変な表情になっていないか心配でうつむき、でも、正直に甘えてひとつづなずいた。それに、これ以上はどう頑張っても集中できない気がしたから。

頭を軽く撫でられる。そしてその手が優しく背中を押し出してくれる。

「さあ、もうすぐ麗しの天使長がお見えになりますよ」

「あ……はい!」

椅子をおりて、駆ける。

嬉しい、嬉しい! 会えるんだ、今すぐに会えるんだ!

跳ねたいくらいに楽しい気持ち。飛んで行きたいくらいにはやる気持ち。そこに来ているのはわかっている。近くにいるのを確かに感じる。

そうだった。

はたと足を止めた。そのまま急いで方向転換。

「アッシュー！」

書物を抱えて立つところだったらしい天使は、自分を見て目をま  
るくした。

早く行きたいけれど、ひとつだけ言いたいから。

「ありがとうございます！ あの、明日はもっと頑張りますねっ！」

今日の分まで、ちゃんと。

「ふふ、楽しみにしていますよ」

笑顔の彼女に手を振って、今度こそ彼を探しに走り出した。

\*\*\*

彼が歩を進める度に周囲の天使はその美貌にため息を漏らし、羨望の眼差しが後を追う。風に翻る金刺繍の白い長衣。彼の威厳とまばゆさに天使達は恭しく頭を下げ、子供達までもが道をあけてその姿に見惚れていた。

数名の従者に囲まれながら堂々と歩む姿は《光》の名にふさわしい。彼を遠くに感じる瞬間。憧れと、ちよっぴりの寂しさ。

「兄上！」

紛らわすように呼ぶと、こちらに気付いた端正な顔が優しく弛む。それは彼の“兄”としての顔。自分しか見ることのない特別な彼。来るのが待ちきれなくて、自分から急いで駆け寄った。

「ミカエル！」

「兄上っ！」

もう幼子ではないけれど、周りに従者さん達はいるけれど。両腕を広げた彼の胸に思い切り飛び込む。

「会いたかった、ですっ……」

「そんなに急がなくても、私はどこへもいかないよ」

すごく急いだから息苦しい。でも幸せだ、とても幸せだ！

互いに頬に口付け、地面におろされ、それから改めて兄を見上げる。ちよつと礼儀を欠いてしまったけど許してね、メフィ先生。

「丁度良かった。お前に用事があったな。これから探しに行くところだった」

「ぼ……私に、ですか？」

どきつとして、思わず間違えそうになった。“兄さま”は“兄上”、“僕”は“私”。ふたりきりの時以外はそうすると決めたのだ。おとな、への一歩。さっきの分も挽回しなくては。

「ああ。少し唐突かもしれないが……」

兄は脇に控える天使のひとりから何かを受け取り、自分の方へと

差し出した。あ、アルベルトだ。涼しげな顔の従者を見て思ったが、それよりももっと目を惹いたのはその差し出された“モノ”。

「これをお前に」

「これは……？」

「見ての通り、剣だ」

兄の長剣に比べれば質素ではあるけれど、鞘に納まったそれは紛れもなく本物。両手にもずしりと重い一振りの剣を素直に受け取って、途方に暮れて彼を見上げる。こんなモノ、初めてちゃんと触れた。何せ他でもない彼が、危険だと言って握らせてくれなかったのだから。

「そろそろお前にも剣を教えるべきではないかと思つてな。上級天使として、身につけておいた方がいいだろう」

びっくりしてまばたきするしかなかった。どうして急に？  
かと思つと、兄は気まずそうに頬を掻く。

「……と、説得された」

奇妙に歪んだ表情に、本人はきつと納得していないのだと、何だかとても可笑しくなる。そんな兄が、大好きだ。

「とは言つものの、一応は私も了承した。確かに一理あるからな。遅かれ早かれ……といったところか」

「あの、兄さ……じゃなくて兄上。教える、というのはその……」  
「私が指導するつもりだが」

兄が、自分に。

「……嫌か？」

もう、ぶんぶんと首を振った。

兄は全てにおいて抜きん出ている。それはもちろん剣を扱うことに關しても。最高の剣の使い手……そう謳われていることは弟である自分の自慢なのだ。そんな天使に、しかもあの表情で問われて、一体誰が嫌がるだろう。

ましてや兄と一緒にいる時間が増えるのだ。断る理由はひとつもない。

「良かった。毎回私がつくわけにはいかないが、出来る限りの配慮はする」

「はいっ。ありがとうございます」

「そうだな……剣といえばマルコが妥当か。あれが空いていれば良いが。これ以上アシユタロスには」

……あ。

兄も気付いたようだ。

「そっいえばお前、アシユタロスは？ まだ勉強の時間ではなかったか」

まずい。

「えと、アツシュが行っていいって言ってくれて、その、……」

「ああ、そうか。大丈夫だ、怒るつもりはないからそう慌てるな」

くくっ、と喉の奥で笑った彼は頭を撫でてくれる。とりあえず、安心。

「ゆつくりと学んでいけば良い。それはアシュタロスにも言っている。あまり気に病むことはないからな」

「はい。……でもっ、明日からもっと頑張るって約束してきました」「ふむ。ならば期待しよう」

ひとしきり笑い、やがて従う天使のひとり　また、アルベルトを呼んだ兄。少し温度の下がる、硬質な声色。

「ミカエルを“陽出る先の庭園”へ。軽くだが稽古をつける」  
「御意」

「ミカエルも、いいな？」  
「はい」

早速始まるのか。どちらにしろ兄は“勉強会”を切り上げさせるつもりだったに違いない。楽しみだけれど、ちよつと緊張。

無言で差し出されたアルベルトの手を握る。見上げて笑いかけると、ほんのちよつとだけ表情を和らげてくれた。

「さて、では先に行っていないさい」

「兄上は……？」

「少しアシュタロスと話を。すぐそちらに行くから」

「わかりました。お待ちしていますね！」

軽く手を振って脇を通り過ぎる。

振り向いてちらりと見た彼の背中。真っ白な衣を翻し歩いていく後ろ姿、その腰にある立派な長剣がやけに印象に残った。

軍、というものはまさしく“力”の象徴である。

規律があり、序列がある。強者と弱者が生まれ、勝敗がつく。戦士は剣を取り、能力を磨き、来るべき時に備える。

その時とは。

或いは地獄との境界が乱された時。或いは煉獄の悪魔の気が変わった時。或いは掟を破る仲間が出た時。或いは 主に剣を向ける天使が現れた時。

そのために《神軍》は存在する。

この箱庭を守るために。主との約束を果たすために。

\*\*\*

銀光が煌めく。白布が翻る。褐色の肌に滴が輝き、青い目が鋭く光る。その姿は勇ましく、気高く、華麗。

庭園の一画で素振りをする剣士の姿を、私は離れた場所から暫く眺めていた。

あの先端が尖った風変わりな剣は《炎の氷柱》といったか。氷柱、というのはきつとああいう形で、あの剣のように美しく澄んだ色をしているのだろうな。地獄の、寒い地域にあるのだと聞いたことがある。温暖な天界で見られないのは少し残念ではあるが。代わりにこの剣舞が見られるのなら悪くない。

「マルコシアス」

鍛練に勤しむ真面目な部下に満足し、私は近寄りながら彼の名を呼んだ。向こうも私に気付いたか、剣を下ろして青い目を見開いている。

「ルシフェル様」

彼は愛剣を鞘へと収め、流れる動作で膝をついた。立ち止まった私に向けて下げられる鈍紺色の頭。

「失礼しました。お久しぶりでございます、ルシフェル様」

「久しいな。こちらこそ突然すまない」

「とんでもありません」

頭を上げさせ、立つように言う。礼儀、忠誠、仁義　そんなよ  
うなものを彼は重んじるから。私がいくら最敬礼を免除しても、実  
に自然に頭を下げてくれるのだ。有り難いけれども、たまにこちら  
が申し訳なくなるくらい。

「更に唐突な話になるが許してもらいたい。頼みがあるんだ、マル

」

「何なりと」

誠実かつ聡明。そして私に匹敵するほどの剣の腕前。彼以上の適  
材はいまい。

「実はミカエルに剣を教えることにした」

「……！」

……何故そう驚くのだ、お前まで。

「マルコ？」

「……いえ、すみません。その、一体どのような心境の変化かと……以前は断固反対なさっていたように思いますが」

「気は進まないさ」

そう、今でも。誰が愛しい子に厳しい道を歩ませたがるものか。あの柔らかな白い肌に傷がつくなど、考えただけで恐ろしい。花を愛でるためにあるような彼の手に、肉刺まめをつくらせたくはない。

「……だが、私はひよつとすると 守るための剣ならば教えても構わないと思ったのだ。それがあの子のためになるのなら」

「そうでしたか。私個人の意見を申し上げるならば……ええ、賢明な判断かと存じます」

白い歯を見せた剣士の言葉に私もつられて笑う。マルコシアスに賛同してもらえるとやはり安心感があるものだ。そのまま、続ける。

「そこでマルコシアス。お前にミカエルの指導を一任したい」

「私に？」

「ああ。私はそう頻繁に仕事を抜けられない。だから、どうか。お前は最も信頼できる仲間のひとりだから」

暫し固まっていた青年天使は、やがて穏やかに微笑んだ。おもむろに鞘ごと剣を身体の前に掲げ、“誓い”をたてるような素振り。

「そこまで仰ってくださいたら、やらないわけにはいかないでしょう。このマルコシアス、全力で弟君を立派な剣士に育てて差し上げ

ます」

剣士、まではどうだろう。

少し苦笑したが、承諾してもらえたことは本当に嬉しい。

「……では、と言っでは何ですが」

ふとマルコシアスの表情が変わる。悪戯っぽく笑んだ青い目の中に好戦的な光を見つけ、私は小さく身体を震わせる。恐怖ではない、紛れもなく歓喜だ。次に彼が口にするであろう言葉への期待だ。

「私からもお願いがございます」

「……ああ」

「以前ルシフェル様に敗北して以来、私は日々剣術の鍛練に励んで参りました。今、是非とも力を試してみたいのです。お相手を願えましょうか」

私はニヤリと口端を上げ。

「良かるう」

腰の鞘から一息に剣を引き抜いた。シャリン、という冷たい音。

こんなにも興奮しているのは久々に強い相手と剣を交えるからなのだ。そう言い訳めいたことを心中で呟きながら。

\*\*\*

マルコシアスと手合わせするのは何時以来か。

振り下ろされた《氷柱》を剣の腹で受け止めつつ思う。どうもこの特殊な形状はやり辛い。片手で押し返すのは難しいか。

私とマルコシアス。互いに仕事が忙しく、稀に廊下で見かけることはあっても、随分と久し振りに口をきいたように思う。まして稽古など遙か過去の記憶の気さえする。それだけ、彼の技術は上達していた。圧されている？ まさか。

まったく、模擬剣を借りるべきだった。この剣で傷を負わせるわけには。マルコシアスほどの強者相手では下手な手加減はできないというのに。

しかし一方で、私の太刀筋に揺らぎがあることも事実。理由はわかってる。剣を振るう度に“奴”の言葉が頭を掠めるのだ。忌々しい！

一度大きく薙ぎ、後ろへ跳んで間合いを切る。マルコシアスも私の異常に気付いたのだろう、牽制するように構えたまま攻めては来ない。

「……なあ、マルコ」

堪え切れず、問う。

「どうして天界に剣があるのだろうか」

対するマルコシアスはミカエルの話をした時よりも驚いていた。

一瞬だけ惚けたように緊張の糸が弛み、それでも気付いた時には剣士は剣士らしく私だけを見据えていた。強い眼差し。優しく、正

義感に燃えた眼差しが私を貫く。

「決まっております、ルシフェル様。それは主が必要だとお考えになったからです。私達に望んだからです」

「……………」

「それ以上の理由が必要ですか？」

私も、こう真っ直ぐに返したのだが。大切なことを思い出したような気がして、少し心が落ち着いた。どうやら言いくるめられた、ということらしい。あの美しい天使の詭弁に。

数度、己のために首を振った。

ああ、主よ。愚かな私をお許してください。僅かでも疑念を抱いてしまった愚者にどうか慈悲を。

「まだ、ですよ！」

すぐ近くで聞こえた声に、はっと意識を現実に戻される。咄嗟に剣撃を防ぐことができたのは、反応が体に染み付いていたおかげ。

「戦場では相手のことのみを。それが礼儀です！」

「っー！」

そつだ、その通りだ。無用な問題に意識を散らしている暇はない。

叩きつけられる剣。受け止めたその衝撃に土が抉れる。どうにか力を流し、向こうの勢いを殺しつつ刃を返す。

確実に、彼は強くなっていた。

「くっ……………！」

斬らねば、倒さねば、勝たねば！

僅かな焦りが生まれる。齒噛みした。何故だろう。いつもの調子が出ない。

最高傑作は膝についてはならない。誰よりも強くあらねばならない。こんなところで　こんな……

コンナ、私ニ劣ルヨウナ者ニ。

「?!」

つきん、と。

頭を貫いた鋭い痛み。

……本当に頭だったか？

一瞬後には不確かな記憶。何故なら痛みは今や“手”を蝕んでい  
たから。剣の柄を握った手のひらが、燃えるように熱い。

「ッ！」

踏み込んだまま、躊躇う。隙ができる。逆に攻め込まれ、私は諸  
手で力任せに一撃を弾き返した。諸手。添えた左手にさえも焼け付  
くような痛みが。

わけがわからなかった。何故？ どうして？ 一体何が？

強く握れば握るほど、手への痛みも激しさを増す。突き刺すよう  
な、切り刻むような。この剣が原因だというのか。主が下さったこ  
の唯一無二の剣が……。

「く……!!」

呻きを噛み殺した齒を食い縛り、私は左手を引き剥がす。仕方な

い “犠牲にするのは片手だけでいい”。

仮の勝負であれ本当の断罪であれ。たとえこの手が朽ちようとも、私は負けるわけにはいかない。《光》が負けることだけは許されないのだ。負けたら私は私でなくなってしまう！

言うことを聞け！

愛剣に怒鳴る。私を拒絶するかの如き激痛は続く。

腹が立った。

この私を拒むなど……

下レ。

温い液体が腕を伝っていく。既に剣を握っているという感覚はない。手が溶けて貼りついてしまったのではなからうか。そう思うくらいにひたすら手のひらが熱かった。

突き出された切っ先を体を反らして避ける。が、僅かばかり頬を掠め。

私二従工！

紅い軌跡が宙に。

ふと。俊敏な剣士の動きも、風に揺れる草木も、煌めく銀色の光も。何もかもが静止した、ように見えた。

遅い。遅すぎる。

中空に留まったままの紅い雫。停止した世界に構うものか、先にやらねば私が“消される”。だから最短の軌道で大気を貫く。

……そして。

「……っ！」

そして、気が付けば……

「ルシフェル様……」

《炎の氷柱》は持ち主の手を離れて遠く向こうの地面。肩で息をする剣士と私。《光》の切っ先は変わらず相手の喉元に。

「相変わらず、お強い」

苦しいほどの動悸は体を動かしたせいか。こちらを見る青い瞳の中にある憧憬の光は純粹で、反射的に視線を逸らしてしまう。

勝った、らしい。終盤の記憶が曖昧だ、なんて。

気のせいだ、偶然だ。そう考えるにとしては、柄を握る右手は濁った色に塗れ過ぎていた。

\*\*\*

「貴方は馬鹿ですかッ!？」

小瓶の並ぶ部屋に入るなり、ラファエルに怒鳴られた。

痛み止めだと言って渡された何かの葉。私はそれを噛み続け黙したまま。手のひらを切り刻むような苦痛が鈍くなってきたのは、やはりその葉の効能なのか。

未だにぶつぶつと言っている蒼の天使は、椅子に座る私に背を向けて、棚から次々に小瓶を選んで並べていく。

「本当に……一体どうするつもりだったんだ?! そうまでして稽古を続けようだなんて、まったく信じられない!」

ガチャンツ、と叩き割る勢いで置かれる瓶達。ラファエルは何をそんなに怒っているのか。

「……。もう、いい。自分でどうにかする」

些かむっとしたので立ち上がろうとすると。

「黙って待つ!」

「……」

瞬時に振り向く不機嫌な顔。翠の瞳で強く睨まれ、浮かしかけた腰を再び落ち着ける。……実際、自分ではどうにもならないのだが、それがわかったからこそラファエルの部屋を訪ねたのだ。

見下ろした手。左手は、大したことはない。だがやはり利き手は酷い有様だった。

爛れている、というのか。指の付け根、腹。初心者ならば肉刺ができるような場所を中心に、べろりと皮膚が剥けて所々の肉は剥き出し、血やら何やらよくわからない液体に濡れた、元は白いはずの手。……重傷だ、どう見ても。

無論、自力で治そうとは試みた。しかしどうもこれは普通の傷とは違うらしい。あの剣が原因なのだからと私は妙に納得したものが、それだけ痛みも並大抵ではなくて。

耐えきれずにラファエルのもとを訪れたは良いが、我らに備わった“治癒”の力では少しも治すことができず、ゆえに彼は薬を探し

ている。

薬効に、頼るのか。少し複雑な気分だが、背に腹は代えられない。「すぐに貴方がここへ来てくれて良かった。あと少しでも遅かったら、その片腕ごと使い物にならなくなるところだったろう」

私は手首に包帯を引つ掛けたまま肩をすくめた。消毒した時の名残か、鈍い痛みが伝わってくる。和らいだとはいえ、正直、かなりのものだ。だがそれを顔に出すことはしない、私は強くあらねばならないのだから。

「……不思議なものだよな。俺達が祝福した草木が、逆に俺達を助ける薬となるのだから」

「ああ、そうだな……」

白い粉末、茶色い枝のようなもの、粘り気のある薄緑の液体。瓶の中身が混ぜ合わされるのをぼんやりと眺めながら、私は適当に相槌を打った。別のことをずっと考えていたから　というより、はじめからそれしか考えていなかった。

“何故？”　それに尽きる。

あの痛み。たかが一天使の言葉で揺らいでしまった私への戒めなのか？　主の御意向に疑念など抱いたから？　……それしか思い当たる節はない。

壁に立て掛けた剣を見る。主が下さった《光》……主が、私だけに……。

強くならなければ。誰よりもずっと、今よりももっと。私が私であるために、光が光として存在するために。敗者に用意された

椅子は私が望む席とは違う。

無事な左手で、かの首飾りを服の上から握りしめる。これは、まだまだ私の心が弱いことの証。きつと主が剣を通して私を叱って下さったのだ。元々自分は《最高傑作》、不可能なはずは、ない。あの方を信じていさえすれば全てうまくいくに違いないのだ。

「……とりあえず、これでいいだろう」

気付けば処置は終わっていた。塗り薬でも使ってくれたのだろう、恐らくはその上から右手全体に白い布が巻かれている。数度開き閉じを繰り返す。少し、動かしにくい。

ずっと噛んでいたがためにすっかり柔らかくなった葉を吐き出し、軽く水で苦みを流し込んでから礼を言う。気の持ち様というか、何というか。これが本当に草木の力ならばやや信じがたいものではあるが。

「しばらくは剣を扱わない方がいい。完治するには大分かかると思う」

「ああ、あれは控えるよ」

「あれ“は”？」

「模擬剣ならばいいだろう？ 特別なものじゃなし」

何とも形容しにくい声でラファエルは呻いた。

「甘く見てはいけない。患部を動かすなど言っているんだ」

そう言われても。私はミカエルに稽古をつけると約束したのだ。それは困る。

なかなかなかうなずかない私を見、とうとう向こうが折れた。

「……と言つても貴方は聞かなさそうだな」

はあ、とため息。

「激しい動きは控えるよう。極限まで我慢するのはあまり感心しない」

「……ああ」

保証しかねる、と言いたいところだが。私から剣を取つたら誰が断罪するというのか。

だが無闇に心配をかけるのも嫌だから、そこは素直に承諾の意を示しておく。

「軍団の方は……」

「わかっている。ウリエルにも連絡せねばなるまいな。《神軍》兵士達への指導はしばらく休むことにしよう」

だがミカエルは、別だ。いくら彼が恵まれているとはいえ、さすがに剣に関してはまったくの初心者なのだ。実はミカエルだけでなく兵士達も、私は怪我をした状態で相手をして問題ないと思つてはいるのだが。

統率者として示しはつかないが、まあラファエルの手前仕方ない。適当に休養させてもらうことにしよう。その方がミカエルの指導にも専念できるしな。

立ち上がり、自分の剣へと腕を伸ばした。握る直前に一瞬だけ躊躇い……そして何も起こらないことに密かに安堵。またあの方に拒まれるのではないかと 恐怖感が皆無だったと言えば、嘘になる。

「そういえば」

何か書き物をしながらラファエルが口を開く。

「近々誕生するという生き物、噂によれば我々と似た姿形をしているらしい」

「ああ、あれか」

確かにそれらしい噂は聞いたな。最近はずっと祝福していなかったから、少しでもそういう話題があればすぐに天使達の間にも広まってしまう。どこから漏れるのかはまったくの謎だ。

「どうせ外見だけだろう。二番煎じは“原本”に勝つことはあるまいさ」

「だと、いいがな」

軽く言っただけならラファエルは苦笑する。否、苦い表情をした。

「ルシフェル、怖くはないか？」

「何が」

「……………いや。何でもなし。俺の考え過ぎだ」

萎れたようなその姿に首を傾げ、しかしまた彼の癖のせいだろうと思っただけで大して気には留めなかった。知識を探究する者は得てして余計なことに気を揉む傾向がある、気がする。

「主は私達を悪いようにはなさないさ」

言い置いて部屋を出る。思わず握りしめた剣の柄は、嘘のように冷えたままだった。

“素振りを日に百本”

それが、マルコ……マルコシアス先生からの課題だった。

百、なんて最初はすごい数だと思ったけれど、実際にやってみるとあっという間だ。むしろ全然足りないのじゃないかと思うくらい。でもマルコは、

「回数ではないのです。一本一本を丁寧になすことが上達への近道」

と言っていた。マルコの剣の腕はかなりのものだと思っていたし、あの青い瞳でまっすぐに見つめられると自然に、ああこのひとは正しいんだ、と、そんなことを思ってしまう。

マルコの目は、好きだ。

まっすぐで強くて正直で。彼は絶対にこちらの目を見て話してくれるし、変に遠回りな言葉も言わない。天使長の弟である自分に対して物腰は丁寧だが、だからといって子供扱いはしない。

本当ははじめましてだったのに、少し会話を交わしただけですぐに彼のことが好きになった。それもあって、剣術の稽古は結構楽しみだったりする。

今日は稽古はお休み。でも早く上手くなりたいから、ひとりで素振りをしている。宮殿には中庭がたくさんあるから、大概は貸し切り状態になってしまうのだ。まして普段世話してくれる天使もこの場にはいない。というか、自分がそうお願いした。彼らもあまりやることなくて退屈だろうし、見られていると緊張するから。中のひとり……ヴェンセントが、少ししたら迎えに来てくれると言って

いた。

手の位置、構え方、振る角度、刃の向き、呼吸。

色々と気を付ける点があつて、一本毎に考えてやると、やっぱり難しいし疲れる。マルコの言う通りだ。

銀色の光は模擬剣といえど冷たくて、鋭い。

これが、誰かを傷つけるんだ。

そう思うと怖い。とても怖い。けれど剣は主がお与えになったものだから、兄が奨めてくれたから。余計なことは考えないように、ぶれる手に必死で力を込める。早く立派な天使になりたい。兄に追いつきたい。

その兄は。実はまだちゃんと稽古をつけてくれたことがない。マルコとの練習中にふらりと現れて、少しばかりの指導をしてから、すぐに仕事へと戻つてしまう。姿勢を直される時に後ろから包まれて……ちよっぴり胸が弾むけど。いつも多忙な兄は、最近更に忙しいのだそうだ。《祝福の儀》があるとか、地獄との使節交換が何か。……難しい。

そういえば、兄は手を怪我していた。片手は包帯ぐるぐる巻き。《神軍》兵士の指導は休んでいるのだとマルコが言っていて、よほどの怪我じゃないかと心配した。けれど兄本人は「平気だ。少し慣れない動きをしたからな」と苦笑い。後でラファイのところへ行つて、何か役立ちそうなお薬をもらつてこようかな。

『 ミカエル君！ 』

その時。唐突に自分を呼んだ声は、明らかに兄のものでもマルコのものでもなかった。少し洪くて、それでいてよく透る声。

振り返ってみると、廊下から中庭に出てくるメフィストフェレス

先生の姿が見えた。右手には編み籠、左手には取っ手の部分がくるっと曲がった杖。どこかへお出かけするところなのかな。

「メフィ先生！」

そのまま駆け寄ろうとして、思い直し、きちんと鞘に模擬剣を収める。大きくなったのだし、礼儀はしっかりしないと。

まだ慣れなくて少しもたついていたら、先生は弾むように軽やかな足取りで、瞬く間に自分の目の前までやって来た。

「久しぶりな気がするねえ、ミカエル君」

「お久しぶり？ です、メフィ先生っ」

やっと剣を収め、視線を上げた。優しげな眼差しに自然と顔が綻ぶ。礼儀講座が終わってからは滅多に話ができいなかったから、本当に、嬉しい。最後に会ったのは、ついこの間のことではあるけれども。

「大きくなつたねミカエル君。我が輩も嬉しいよ。両手が塞がっていて抱き締められないのが残念だ」

メフィ先生の前だと、自分はすごく子供になってしまったみたいな気がする。もちろん嫌じゃない。いっぱい甘えられそうだ。でもちよつとだけくすぐつたいような。

「練習中にお邪魔だったかな？ これを届けに行く途中で、たまたま姿が見えたから寄ったんだが……」

軽く掲げられた籠。自分は勢いよく首を振って。

「いいえ、お会いできてとっても嬉しいです！ ……えと、メフィ先生、それは何か聞いてもいいですか？」  
「ああ、これはだね」

籠の中を覗き込む。そこには色とりどりの……

「お茶会で余ったお菓子だよ。甘いものが好きなルシフェル君にあげようかと思ってね。良かったらミカエル君もどうかね」

「ありがとうございます。今、休憩しようと思っていたところなんです」

お茶会……。先生主催で行われているとよく聞くけれど。このひとのお仕事って、一体何なのだろう？ そんなことを一瞬思った。でも確かにこれだけのお菓子をもらったら、兄はとても喜ぶに違いない。

模擬剣を両腕で抱えて少し歩き、そして先生と一緒に丸木に腰を下ろした。ふわりとお菓子の甘い匂いがして、動いたばかりなのにいっぱい食べられるかも、と感じる。

「どうだね、剣術の稽古は」

籠からひとつお菓子を取り出してメフィ先生が尋ねる。木の実が入った素朴な焼き菓子だ。入殿するより前にも食べたことがある。あの頃は、友人達と取り合いになったっけ。

「んと……。大変ですけど、でも、楽しいです。何だか自分がとても強くなった気がして」

「ふむ、そうか」

「マルコシアス先生のこと、好きです」

「ああ、」

くっくっ、と初老の紳士は笑う。髭を軽く撫でるのは、何かを思い出そうとしている時の先生の癖だ。

「そうかそうか、マルコシアス君か。彼は非常に優秀だったね」

「マルコにも、教えたことがあるのですか？」

「もちろん！ 実に気持ちの良い紳士だったよ、彼は。……ベルゼブブ君とは大違いだった！」

思わず笑う。失礼だけど、あの目付きの良くない友が真面目に指導を受けたとは思えない。きっとメフィ先生も手を焼いたのだろう。手渡されたお菓子を頬張りながら色々なことを考えた。色々なことを、思い出した。

「先生はみんなに礼儀作法を教えたことがありませんか？」

「ふーむ。そうだね、ここの天使達はほとんど全員が我が輩の“生徒”だった」

「では……ベリアルは」

どうしてそんなことを聞きたくなったのかはわからない。ただ何となく。不思議な彼について少しだけ知りたいと思ったから。

メフィ先生はしばらく固まっていた。が、やがてゆるゆると髭を撫でる手が再び動きだす。

「……彼を教えたことはあるよ。非常に……非常に変わった天使だった」

「ベリアルは他の天使と違うと思いました。でも、怖いくらいに美しかった」

あの笑みを思い出すだけで背筋がざわりとする。

「怖いくらいに、ねえ。なるほど。ミカエル君は彼のこと、好きかね？」

「わから、ないです」

それは正直な感想だった。好きとか嫌いとか、そんな感情はあまり抱かなかつたような。ただあの美しさだけが強く印象に残っている。

「メファイ先生は？」

尋ねると、先生もちよっぴり困り顔。

「嫌いではないが……苦手かもしれない」

何だかわかる気がする。メファイ先生にも苦手な相手がいるんだ、と意外だったのは本当だけれど。

「……しかし安心したよ」

「へ？」

やがておもむろに立ち上がるメファイ先生。安心？

「ミカエル君が元気で。優しい君のことだ、剣を持つのは辛いかと思っただけで心配していたのだよ」

はつとした。「また言われた」 咄嗟にそんな感想がよぎる。

上手く笑い返せずにいたら、やっぱりメファイ先生も不思議そうな顔。身を屈めて覗き込んできた。

「ミカエル君？」

「先生、あの……」

“優しすぎる”、とよく自分に言うのはマルコシアスだ。その困ったような表情に、言葉の実際の意味は違うのだろうとだんだん悟るようになった。正直な彼は隠し事ができないから。

だから……自分では剣が向いていないのではないかと時折思うのだけれど。そう言ってみると首を振られるから頑張ってはみるもの、やはりどうしても刃を他人に向ける自分の姿が想像できない。

一体何故、兄は自分に剣を教えると言ったのだろう？ 少しでも心の片隅にあった疑問。メフィ先生に話してみたくなった。答えが欲しくなった。

「剣を学ぶのは楽しいです。ほんとに、嫌いじゃないのです。でも……でも僕は、本当に剣を持つべきなのでしょう？ 僕は立派な天使になれるのでしょうか……？」

不安は一度吐き出したら限りきがなくて。メフィ先生が制してくれなかったら、ひよっとするとまた泣いてしまったかもしれない。

「落ち着きなさい、ミカエル君」

恥ずかしくなって口をつぐんだが。紳士はどこか楽しそうに微笑んで身を翻す。

開けた視界。宮殿の廊下までのまっすぐなそこに。

「あ……！」

「その答えは、彼に聞いた方が早いと我が輩は思うよ」

杖で、くにやりと空間に描いた円の縁に片足をかけたメフィ先生。  
その姿が消えた向こう……剣を携えた兄が、庭園の入り口に佇ん  
でいた。

「何？」

会議の最中、いつものように報告に来た天使の言を私は思わず聞き返した。思いの外、詰問するような調子になってしまっても驚く。ああそんなに怯えてくれるな。ウリエルよりいいじゃないか……多分。

「で、ですから……」

彼の宵闇色の視線が、巻紙と我々との間を行ったり来たり。私のような反応はしないまでもすっかり固まっている他の大天使達に凝視され、哀れ伝令役の天使はあからさまにおどしなから口を開く。

「“ミカエルを大天使に叙する。それに伴い、大天使を四大元素天使として編成し直す”、という……」

ため息が出た。それは安堵からか、それとも憂鬱からなのか。深い深い息を吐きつつ椅子にもたれて天井を仰ぐ。ついに、という気持ちと少しばかりの、切なさ。

「……ありがとうございます。さがりなさい」

「はい、失礼致します……」

じっと、ただ乳白色の天井の一点を睨むように見つめていた。ガ

ブリエルが呟くまで。

「とうとう、なのね」

思わず漏れた私の呻き声は返事と言えるかどうか。それでも皆、何となく私と似たような 寂しさを抱いているのには違いなかった。

片手に巻き付けた包帯を弄る。ほつれて床に落ちる白い糸。無言が続いた。

「……辛気臭い。別に、喜ぶべきことじゃないか」

ぶつきらぼうに言ったウリエルの声も何だか覇気に欠ける。

喜ぶべきことだというのは、わかっているのだ。主の近くに侍ることは名誉、与えられた仕事に生きる意味があるはず。

けれど、だ。ついこの間まであんなに小さかった天使が大天使となる、それはとても信じがたいことのように思えた。大天使というのは私を除けば天界の最上位たる役職。他の天使を治め、天界の中心的な執務をこなし、祝福までも施す。そんな大きな役割。

「……泣き虫だったのになあ」

ぼつりと。苦笑したラファエルの言葉は私達の思いを代弁していた。私がついていてやらなければ、しっかり面倒を見てやらなければ。いっそ心地好いほどの義務感は、どうやらもう次第に不要になっていくようだ。

再び、ため息。

私はゆっくり立ち上がり、書類もそのままに部屋の出口へと向かう。無言で追ってきた視線には言葉を投げて。

「少し出てくる」

さて ミカエルには、何と言おう？

\*\*\*

「マルコ」

会議の場を後にしたは良いものの、いまいち気持ちちが定まらぬままふらふらとやってきた武器庫 稽古用の模擬剣がしまつてある倉庫で、私はここ最近話す時間が増えた剣士を呼んだ。整理と点検を行っていたらしい彼がまた膝をつこうとするのを手で制し、私の方から向こうに近寄った。

「ご苦労様。今日の《神軍》の稽古は」

「問題なく。ベルゼブ様がいらしてますから」

ああ、そんな話もしていたな、あの《代理》は。だるい、とかほやいていたくせに……はて、あれに剣が扱えたか？ 無鉄砲に、振り回してはいないだろうな？

……。

怖いから想像するのはやめておこう。後で模擬剣の本数を確認しなければ。

「その……手の具合は如何ですか？」

眉を僅か下げ、心配してくれるマルコシアス。視線は真つ白な我が右手に。平素と同じだとは言いがたい。が、今それを言ったところで更に彼を不安にさせるだけ。これしきの痛みには耐えられずして、主の願いを叶えて差し上げることができないのだ。

「大丈夫だ。ラファエルに釘を刺されたからな、少し長めに様子を見ているだけで。……ところであの子の調子はどうか？ たまにか行つてやれていないのだが」

軽く軽く本題を掠める。するとマルコシアスは複雑そうな表情をしてみせた。何と言つべきか躊躇っているらしい。なるほど、十分だ。私はそれで理解し、息をそつと吐き出した。

「……やはり、難しいか」

「ええ……」

腕に抱えた模擬剣の束を棚へとしまい、誠実なその剣士はどこか浮かない表情。

「技術に関しては申し分ありません。素直な御子ですから」

あれからというもの、ミカエルは懸命に稽古に取り組んだ。マルコシアスの指導のおかげか、はたまたやはりあの子は特別なのかとにかくその上達には目を瞠るものがある。

しかしミカエルには致命的とも言える弱点があった。

「腕は良いのです。けれど、まだ剣を他の者に向けることに抵抗があるようです」

そう……あの子は“優し過ぎる”。

それは傍から見てもわかる。マルコシアス相手に練習する時  
でさえ、どこか戸惑い嫌がる様子が見てとれるのだ。逡巡の隙に間  
合いを詰められたのを見たのは、決して一度や二度のことではない。

「慈悲の心、他を想う気持ちは元来我々が持つもの……いえ、むしろそれが天使の存在理由でもあります。しかしあの優しさはいざという時、命取りになるかと」

剣の道を極めたいと願う彼だからこそその言葉。命取り……完全に正しいとは言えないが、もっともな言ではある。ましてミカエルが大天使となるのだとすれば尚のこと。ひとつ頷く。

「私もその点は気になっていた。ミカエルは本当に優しい子だ。その優しさが損なわれるようなら剣は持たせないつもりだった」

しかしそれをあの方がお望みならば。

「……だが恐らく、ミカエルはまだ“守る”ことが痛みを伴うことだと理解していない。あの子は、その痛みを知らねばならない」

ふたつのモノが相反する時。己の信念を無傷で貫けるほど、世界は緩くできてはいない。良くも悪くも、意志あるところに力は生まれる。

「少し厳しくしなければならぬか……」

呟いた途端、何故かマルコシアスが吹き出した。珍しいこともある。というか、どこで笑ったんだ？

「マルコ？」

「す、すみません……ルシフェル様の彼に対する“厳しく”とは一体どの程度かと思ひまして、つい」

……そういうことか。私はどう見られているんだ、まったく。

「私とてやる時はやるのだよ。それにミカエルはもう」

勢いで口をついて出たが、それでも一瞬迷う。青い双眸が怪訝そうに私を見た。

一足先にマルコシアスに言うくらい構わないかもしれない。もうじき宮殿中の話題になるだろうから。

「マルコ。……ミカエルが大天使に任せられることが決定した」

「え……！」

瞬間、目を見開き、次いで彼は穏やかに微笑んだ。曇りのない笑顔。彼もまたあの方に全幅の信頼を置いていることの証。

「それはおめでとございます。心よりお慶び申し上げます」

大天使達とはまた違う反応を返される。

よろこび、か。

口の中でその言葉を転がしてみた。きっとそうなのだろう。これは祝うべき事柄で、だから、私もあの子の背を押してやらねばならない。それが“正しい”気の持ち方なのだ。拭えない一抹の切なさ、単なる私の我が儘になるのか……。

「ならばこの問題も少々切実になりますね」

「そうだな……」

いよいよ覚悟を決めねば。私も、あの子も。

「……すまない、邪魔をしたな。今ミカエルはどこに？」

「いつもの中庭かと。自主練習すると言っていましたから」

「そうか、ありがとう。その」

言葉を続けるより先に、目の前に一振りの模擬剣が差し出された。驚いて顔を上げると強気な光を宿した青い目に、明るい笑顔。

「くれぐれも無理はなさいませんよう。行ってらっしゃいませ、ルシフェル様」

全て見通しているであろう真っ直ぐな眼差しを暫し見つめ。やがてその手から剣を受け取り、しっかりと握りしめる。私も彼に向けて口端を上げてみせた。

「行ってくるよ、マル」

向かうは庭園。そこにいるであろう、あの天使に会いに。

「兄上！ どうしてここ……ここ？」

彼が模擬剣を手にしている理由は、稽古をつけにきてくれた以外にあり得ない。しかし今は執務中ではなかったか。それに怪我は。混乱しながらも会えたことが嬉しくて、急いで駆け寄……ろうとした、けど。

「兄上……？」

立ち止まらざるを得なかった。それは兄が一步も動こうとしなかったからで、そして模擬剣の切っ先が自分へと向けられていたから。彼は何やら鞘の処理に困っている素振りを見せた。いつもの剣とは勝手が違うから、腰帯にうまく納まらないのだが、やがて指をひとつばちんと鳴らす。すると鞘が“消えた”。すごい。

「剣を抜け、ミカエル」

朗々とする声が届く。そうだ、感心している場合ではなかった。本当に、本当に稽古を始めようとしているのだろうか？ こんなに唐突に？

けれど、質問は許されない空気がそこにはあった。剣を構えた大天使の姿は輝かんばかりに美しい。彼こそが《光》なのだ、自然と体が震える。威厳と自信に満ちた立ち姿。同じ模擬剣なのに、彼のは斬れるのじゃないかと思うくらい。

未だにまとまらない頭で、それでも言われた通りに剣を構える。向ける相手は兄しかいない。既に自分はいっぱいいっぱいだったの

に、更に続けられた言葉に思わず耳を疑った。

「私を倒すつもりで、全力でかかってきなさい」

「たお……っ」

兄を？　いくら稽古とはいえ、それは、嫌だ。だって兄が痛い思いをするのに。大好きなひとを斬るなんて、練習だとわかっていてもやっぱり……

「来ないのならば　私から行くぞ！」

「?!」

気付いた時にはもう、眼前に剣を振りかぶった兄の姿があった。咄嗟に防ごうとしたが耐えきれずに後ろへと吹き飛んでしまう。

疑問も吹き飛んだ。消え失せた。

考えている暇はない。この一撃で、あの目で、冗談などでないことを瞬時に悟る。いつも優しく微笑んでくれる兄が別人のように恐ろしい。

「来い。防ぐだけでは勝てない」

本当に別の天使、なのかもしれないかった。

こんな兄を自分は知らない。視線が交わっただけで疎んでしまうほどの目の奥の光。まるで鋭く研ぎ澄まされた刃のような気配。

どうにか姿勢を立て直し、両手で柄を強く握りしめた。やらなければ　やられる！

「お相手をお願いします、兄上っ！」

「ああ！」

覚悟を決めて地を蹴る。一瞬で隙を探り、わずかな空間に切っ先を突き出す。当然防がれることは予測済み、そのまま流して下から斬り上げる。

「ほう、やるな！」

マルコならば切り結んでくるところを、兄は器用に体を反らして避けた。しなやかな動きは読むのが難しい。

これならっ！

更に踏み込みつつ下段を一閃。跳んで避けるしかないはず。返す刃を再び斜めに斬り上げて

「っー！」

手が止まる。

彼なら避けられるだろうと、避けているだろうと無意識に自分は思っていたに違いなかった。軌道上に彼がまだ浮いているのを見た瞬間、振りかけていた剣を急に止めようとしてしまう。

怖い。彼を傷つけたくなんてない、痛い思いをさせたくない。

自分が迷っているうちに兄の姿は遠い向こう。散々隙があつたろうに、彼は自ら間合いを切るような真似をする。何かを待ち受けるように。

「何故、やめた」

訝しげ……というよりも不機嫌そうに柳眉が跳ねる。自分はその問いに答えられず。

「私相手に手加減か？ 見上げたものだな」

「違っ……っ！」

違う、それだけは断じて違うのに。兄が怒っているのだとわかって益々泣きそうになる。

「違うのです兄上。僕はただっ……」

ただ 何だというのだろうか？

どうして兄は怒るのか。舐められたなどと彼が本気で思うはずはない。自分の行為は、どういった意味を為したのだろうか。

怖いと思った。傷つけるなんて嫌だと思った。

周りはそれを優しさだと言う。君は優し過ぎる、辛かろうに、無理をしては、……

本当に、優しさなの？

打突せんと向かってくる兄。彼が稽古以上の“何か”を意図していることは明らかだった。だって手加減してくれていなければ、自分が彼の初動を見切ることなんて不可能なはずなのだ。

彼は、何を待つ？

「ミカエル。お前はその剣で何を守る」

守る？

「何を断ち、何を通す」

「僕……僕は、」

受け止める剣を握る手が痺れるくらいに一撃一撃が重たい。とても手負いとは思えないその力。それなのに兄は表情を変えない。紅い視線は微塵もずれない。

ああ、兄さま。自分は。

“守りたい”　それを証明しなければならぬがために、守るべきものに剣を向けざるを得ない、矛盾。

「僕はっ」

激しく打ち合いながら、何だか気が遠くなるように感じた。変な感覚。体は確かに彼の動きに反応しているのに、自分はぼんやりと自分自身を内から眺めていて。懐かしくさえ感じて。

……懐かしい？

何故？　過去に経験したはずがないし、“視た”わけでもない。けれど、自分は確かにこの状況を知っている。

何故？　……わからない。

切っ先が腕を掠める。模擬剣だから本当に斬れるはずはない。わかってはいるけれど、じわりと伝わる痛みは練習中にできたどの痣の痛みよりも強い。

この痛みを相手に与えてしまうのだ、剣は。体だけでなく、悲しい、真つ暗な心の疼き。

誰かが誰かを悲しませたら、その誰かがまた他者を悲しませる。連鎖はどこまで続くのだろう。廻り廻った痛みはいつか消えるのだろうか、それとも誰かが背負うのだろうか。

……ならば自分は、最初から悲しみなんて生み出したくない。力は傷つけると同時に救うものであるはずなのだ。抑えつけると共に引き揚げることもできるはずなのだ。

「ミカエル！」

「兄上、僕は！」

でも自分は、救う側面だけでいい。我が儘だと、無謀だと言われ

ても構わない。

「全てを……この天界を、主を、今という時間をっ！ 僕は守りたい！」

楽園もそこに住まう者も。見守る者も紡ぐ者も。みんなが笑っていられたらいい。光に満ちたこの時が続けばいい。

それを実現するために自ら動かなければ、求めなければ。そのためににはもつと 強く、なりたい。

「ッ……！」

思い切り振り下ろした剣が兄の肩を捉える。しっかりと感じる重さと金属を打ち付けた鈍い音。どくん、と胸の奥で跳ねた何か。さつと身体中が冷える。声になり損ねた吐息が漏れた。

全く避けようとしなかった兄は一瞬間を歪めたが、すぐさま体勢を立て直し、そしてくいつと唇を弓形にして見せる。そして満足げに、言った。

「それでいい。その思いを、貫け！」

「……！」

ひゅん、と風を切る音。やっぱり手加減していたのは兄の方。いきなり剣撃の速度が上がったかと思えば、身のこなしまでも段違いの速さ。一転、自分は剣を振ることすらできない。あまりの力量差に愕然とする。

それでもどうにか体を振り、一旦牽制しようと無理矢理腕を伸ばした、その瞬間。

一瞬、何が起きたかわからなかった。

気付くと手の中から“剣がなくなっていた”。そうとしかわからなくらいの軽さと速さ。

決して兄は“モノを消す”能力を使ったわけではない。だってさつきまで握っていたはずの模擬剣が宙を舞うところを、自分はこの目で確実に見ていたのだから。

弧を描く軌道の向こう、兄が次の動きに移ろうとしていた。今や丸腰の自分には避ける以外の選択肢はあり得ない。

それでも、まだ諦めない！

これも教えてもらったこと。退くことは大事、だが諦めるな。最後まで己には誇りを、相手には敬意を。勝機はどこにあるかわからない。

先からの流れに身を任せ、そのまま後ろに重心を移動。勢いをつけるために足へ力を込め、最大限の加速をつけて跳び退る。これできとりあえずは

「え……?!」

一陣の風が巻き起こる。

アッシュが教えてくれた体捌き。あの体術に秀でたアッシュが教えてくれたものだというのに。

マルコシアスだって剣の腕は一流なのに。《神軍》の指導的立場にいるくらい。

でも……でも、だ。

いくら彼らが優れた天使であろうとも 最高傑作には、かなわない。

「っ！」

自分の動きは、否、動こうとしたのはほんの一瞬。数えることす

らできないような刹那の間の出来事。

だのに、どうやって彼はあれだけの距離を詰めたのだ。あり得ない。つい、ずるいと思ってしまう。あまりにも“速過ぎる”じゃないか。翼も出していないのに！

剣を払った直後には既に彼はこちらの懐へ。

驚きと、それ以上の本能的な恐怖。ふっと鋭さを増した瞳に思わず息が詰まる。冷たく燃えた紅。吸い込まれるような錯覚すら起こす、底の見えない深い紅色。

と、ぐらりと視界が回った。後ろへ傾く体。躓いた。理解した時にはもう見えるのは一面の青だけ。

まずっ……！

背中に地面を感じて目をきつく閉じた。

「い……………？」

しかしいつまで経っても衝撃は訪れない。恐る恐る目を開けると銀色の光が端に見えて……身を縮ませたまま見上げると息を切らした彼の姿。包帯を巻いた右手は剣を自分の首へ押しあて、そして左手は胸ぐらを掴んでいる。それはきつと、自分が地に頭を打ち付けないように。

切っ先からひんやりとした空気が伝わってくる。勝負は着いたのだ。見下ろしてくる視線も、先程までのような覇気は薄い。

「勝負あり、だ」

言っ、背に手を回して優しく抱き起こしてくれる。情けないけれど、腰が抜けてしまったみたいだ。

兄はようやく少しだけ笑い。

「疲れたろう。少し休もう」

「……………」

息が整わなくて、ただ声も出せずにつなずいた。

\*\*\*

泉で顔を洗って戻ると、兄はついさつきまでメフィ先生が座っていた丸木に腰掛け、自分にも座るようにと隣を示して言った。言われた通りに並んで座る。ずっと抱えたままだった模擬剣も、隣に倣って静かに草の上へ置いた。

彼は何も喋らない。自分も何を言っているかわからない。地面を見つめて黙っていると風が頬を掠めていった。

「怖かったか？」

顔を上げると兄が自分の顔を覗き込んでいた。僅か迷って、うなずく。

「少し、だけ……………」

くつくつと笑う天使の表情は優しい。

「そうか。よく言われる」

「全然違う天使みたいでした。その、嫌われたかなって……」  
「まさか」

彼は目を丸くしているが、正直なところ本当にそう思ったのだ。ふとした瞬間に見せたあの気配。兄の紅い瞳をあれほど怖いと思っただことはない。思い出すだけで背筋が寒くなる。

「私がお前を嫌うなど、主に誓ってあり得ない」  
「でも、その……」

「しかしまあ、あれはウリエルと稽古していた時だったか。“怖すぎるから相手になりたくない”とまで言われてしまった」

なんだかその気持ちがわかる気がして曖昧に苦笑。大天使だって怖いと思うのだから、仕方ない。

それきり彼は黙ってしまった。再び訪れる沈黙。

……今ならば、ずっと抱いていた疑問を言えるかもしれない。

口を開こうと顔を横に向けた時だった。

「ミカエル」

いつになく真剣な眼差し。その声は怖くないけれどひどく静かで、自分は言おうとしていた言葉をそっと飲み込む。

「私はお前に“守る”ための剣を身につけて欲しい」

兄が稽古の最中に求めたこと。そして自分が初めて“義務感”のようなものを自覚したあの問いかけ。優しく、しかし揺るぎのない声で彼は続ける。

「愛するものを守るためにその剣を使って欲しい。だがそれを使うからには、何か他のものを傷つけなければならぬ」

黙って俯く。だからこそ自分は嫌だったのだ。自分が痛いものは相手だって同じ、だから。

「ならばその時は、お前がその剣で道を示してやりなさい。相手の痛みを己も理解しなさい。それはとても苦しいことだ。痛く、辛いことだ。けれどその苦しさに耐え得る強さも身につけなければ、剣をとってはいけない。つまり私がお前に剣を渡したということは……わかるな」

そう言っ て彼は自分の頭にぽんと手を置き微笑んだ。

「そういう強さも“優しさ”なのだよ」

必死に唇を噛んでまたうなずいた。力を入れないと、何故か泣いてしまいそうだったから。

「さすがは私の弟だ」

労るように軽く頭を叩かれて、それから。

「……ミカエル」

「はい」

「大事な話があるんだ」

その声の調子に、今度は全く別の話題なのだと悟る。緊張して見上げると、兄はゆっくりと口を開いた。

「主の御意向だから、落ち着いてよく聞きなさい」

「わかりました」

「ミカエル。お前は今日から“大天使”だ」

「……………はい？」

大、天使？ そう言った？

「それは、ガビイ達と……………」

「そうだ」

「えっ……………でも、大天使は兄上を入れて四名のはずじゃ、」

「ああ、そう“だった”。厳密には大天使は四大元素天使エレメンツと名称を改める。そこには同じく四つの席があるが、私は《天使長》という個の座に就き、そして《エレメンツ》にはお前が入るんだ」

わけが、わからない。頭がついていかない。くらくら、ぐるぐる。噛み砕く、噛み砕く。たっぷりの時間を兄に待ってもらってから、ようやく臍気に糸の端を掴んだような。

自分が大天使になる？ あの憧れの天使さま達と肩を並べる？

兄は混乱している自分を見て面白がるでもなく、落ち着くまでじっと待っていてくれた。ひとつ、深呼吸。

「急、です…」

「そっだな」

どうにか口をついて出た言葉に彼は微笑う。 うん、やっぱり

彼の笑顔が、好き。そんな場違いなことをこっそり心の中で呟く。

「しかし必然であったのかもしれない」

「それは……………僕が兄上の弟だから、ですか？」

「私を基準に考えるものではないよ。お前にはお前の価値がある。」

もちろん、私にとってお前は特別だがな」

彼の片手はいつの間にか自分の頭を滑っていた。緩く波打った金髪を、梳くように撫でる長い指。優しく気持ちいいその手つき。少しずつ切り整えてきた金髪は、肩にかかる程度の長さからもう伸びることはない。これもおとなになった証、なのだろうか。過ぎた月日を実感すると同時、大きな手を離さなければならぬことが寂しくもある。

「近く、任命の儀式が行われる。事務的なことに関しては追々わかるはずだ。今お前がしなければならぬのは気持ちを……主の御傍で楽園を築いていく心構えをすることだ。良いね」

「はい、兄さま。……これで僕も兄さまにもっと近付けるのですね」「そうだな。とうとう私の直下まで来たか……。追い越されぬよう、私も精進せねばなるまいな」

兄と弟。そして主と従。

自分が進めばそれだけ彼も進んでいて。憧れた背中はどこまでも遠い。

「兄さまったら、いつも僕より何歩も先にいるのですもの。少しは待ってくださってもいいのに」

「ふふつ。それは悪かった」

軽く唇を尖らせてみる。彼が頭を撫でる手を止めることはない。

ああ、彼に甘えたい。片時も離れたくない。守りたいのに、誰よりも守りたい。不思議だと思う。どうか、どうか。大好きな彼をもっと。

「兄さま」

「ん？」

「……僕が大天使になって、兄さまが天使長でも、ずっとずっと一緒がいいです」

「当たり前だろう」

待ち望んでいたことが目の前に迫っているのに、いざとなるとこの切なさは何だろう。でも、わかる。今感じる寂しさは“明るい”寂しさだ。希望ある寂しさだ。だから自分は笑える。

「私は愛する者のいる世界を守りたい。お前も確かに感じたはずだ。我々の存在理由を、主の御望みを。いよいよお前は守られるだけではなく、“背負う”立場になる。これから私と……私達と共に樂園の守護者となろう、ミカエル」

「はい」

これからも自分は彼を追いかけ、守られ、守るのだろう。主に認めて頂いた喜び、未来への期待。決意を胸に大きくうなずいた。

## Elements

世界は四つの《元素》で構成されている。

その日、選ばれた天使達はそれらの元素の《名》を与えられた。世界の礎となる責を与えられた。そして。

主の御座に最も近いところには二つの席があった。片一方を埋めるのは《表》たる御子。  
だがもう一方の席はずっと、空のままだった。

\*\*\*

疑問を抱けば光は潰える。  
過剰を望めば裁きが下る。  
疑うな。求めるな。  
ここは楽園。御座におわすは唯一絶対。  
謳を捧げよ。愛を捧げよ。  
従うことが、世界の全て。

\*\*\*

“やあ、また会ったね”

なんて、意味の無いことを言わないよ僕は。優しいからね。

“そっち”と“こっち”を混ぜたら、愚かな君達の頭じゃ理解できないだろうし。見覚えがある？ それはそれは、君は運がいいんだね。けど記憶違いということにしておいた方が、いいと思うな。忘れよう。“はじめまして”、愚か者さん。

どうやら歴史を辿ってしまったようだね。知る、ということは実に偉大で崇高な行為だ。その好奇心は称賛に値する。

それでも敢えて言っておこう。忠告しておこう。

“もう戻れないよ”、ってね。

ふふっ、今更遅いけれど！

ご覧。楽しい時間はもうお仕舞い。

何もかも、最初から狂っていたんだ。

そう、狂ってた。狂ってたんだよ全てが！ 気付かないうちにさ！ 内側からは枠が見えない。殻を破ることを誰が望んでいたかなんてどうだっていい。それが選択の結果で、それが未来だったただの話。

誤ったかもしれない。でもそれが選択。

可能性を潰したかもしれない。でもそれが運命。

世界を物質的に認識せざるを得ない天使と、時空として求めた天使。

泰然たる《地》の眼力は手遅れに。

たゆとう《水》の役割は破壊の引き金に。

捕らわれぬ《風》の疑念は同士討ちを。

天を向く《火》の正義は齒車を狂わせ。  
そして、誇り高き《光》の絶対は脆く崩れ去る。

ああ。

最後に残る天使は謳うだろう。大切なモノを失い、安寧を忘れた  
世界で独り。

響く歌声は新たな糸を手繰るだろう。橋は横にも縦にも伸びてい  
く。

今はまだ誰も知らない。

否。

“ほとんど”誰も、知らないんだ。

《崩壊》の足音と《更新》の兆し。陳腐な表現だけれど、これ以  
上の言葉はない。

さあ諸君　楽しい《宴》を始めようか。

## Elements (後書き)

楽園を支える【根本】の席。はじめに幾つ在ったのか、知る彼は未だ帰らず。

執務室での仕事が一段落し、久々に外の風にあたって来ようと廊下へ出た時。

私はふたりの天使と出くわした。……否、向こうが突っ込んで来たと言う方が正しいか。そのまま、抱きつかれる。

『ルシフェルさまっ！』

『ルシフェルさまっ！』

ぴったり重なる二つの高い声。胸の辺りでふわふわと揺れる鮮やかな黄金色の二つの髪。

自分とそう背丈の変わらない“青年”に懐かれるのは違和感があるが、既に慣れたことだ。彼らは少しだけ、変わっている。

一瞬の緊張に詰まっていた息を吐き出し、私は彼らの名を呼んでやる。

「メタトロン、サンダルフォン」

同じ顔が二つ、こちらを見上げて綻んだ。似ている、そっくり、という次元ではない。まるで複製、鏡像。ふわりと柔らかな黄金の髪、幼げな顔の中に輝く茶色の双眸、全く同じ造りの顔と白く長い衣。赤と青……首に巻いた布の色が異なっていなかったなら、見分けることは困難を極めるだろう。同じ炎から同時に生まれたふたり。彼らは双子なのだ。

「ルシフェルさま、あのね！」

「きいてほしいおはなしがあるんだ！」

見た目にそぐわぬ高い声。天使としての中身はまだまだ幼いということか。先に器が出来上がったかのような、そんな印象。

最も新しく入殿した双子の天使。彼らの誕生は時機的に都合が良かった。新入りの上級天使がいるという状況は、新入りの大天使が自覚を持つ上で非常に助かったのだ。可愛らしい我が弟は今頃、慣れない仕事に四苦八苦しているはずだ。

「も、申し訳ありませんッ!!」

と、続いて走ってきたのはひとりの女天使。長衣ではないから一目で立場はわかる。

余程必死だったのだろう。彼女は髪を振り乱してやって来たかと思えば、真つ青な顔で頭を下げた。それはもう、勢い良く。

「すみませんルシフェル様っ！ 少し目を離した隙に……」

それからキツと顔を上げて双子を睨む。

「メタトロン様！ サンドルフォン様！ あれほど申し上げたでしょう！」

「ちがうよ」

「ちがうよ」

対する双子は、私に抱きついたままクスクスと笑い。

「ぼくがメタトロンで、」

「ぼくが、サンドルフォンだよ」

「あわててたって」

「まちがっちゃだめだよ」

啞然とする彼女の顔を見て、不覚にも笑ってしまった。

が、今度はその顔が真っ赤になっていく。もはや私のことなど眼中にない。体を震わせ始めた自分達の従者に、さすがの双子も笑みを強ばらせた。

「……襟巻きを交換しないでくださいと……何度申し上げたらわかるんですかああ!!」

「うっ、」

「ごめんなさい!」

雷だ。まさしく天罰が下ったとしか言い様がない。

なるほど、ふたりはやはり互いに襟巻きを交換していたのだな。私の記憶違いかと思った。本来なら活発な兄のメタトロンが赤で、物静かな弟のサンダルフォンが青のはずだから。

彼女はてきぱきと双子の身支度を整えた（当然襟巻きも）。従者というよりも保護者か。……まあその後の平身低頭ぶりといったら、些か辟易するくらいに凄まじいものであったが。

どうにかそれらを治め、私は双子が彼女に連行される前に話を聞いてやることにする。彼らがわざわざ私の元へ来るなど、いくら中身が幼いとはいえそう頻繁にあることではない。

それに……目の前でしゅんとしているふたりの姿がどこか懐かしかったからでもある。つい重ねて見てしまうのだ、私の愛しい天使の過去を。無論、あの子の方が何倍も愛らしいがな。

「一体どうしたんだ。私に聞いて欲しい話とは？」

肩を落としていた双子は同時にぱっと顔を上げ、再び興奮した様

子で口を開く。

「あのね、あのねっ」

「すごいことにきづいちゃったんだ」

「きつといままでだれもふしぎにおもってなかったんだよ」

「だからね、ルシフェルさまにききにきたの」

気付いた、のに、聞きに来た……ああ、疑問に思ったこと自体が彼らにとっては“すごいこと”なのだ。

「ふたり共、きちんと自分で調べたか？」

「しらべたよ！」

「ほん、いっぱいよんだよ！」

「それにともだちにもきいた」

「でもわからなかったの」

ふむ、一応は自分で努力したのだな。その上でわからないというのなら、喜んで相手をしてやろう。私はそういう努力が好きだ。

きつと単に彼らが書物に記述を発見できなかったか、もしくは大天使でなければわからないような疑問か。無邪気な双子の後ろでおるおろしている従者の彼女を安心させるために笑いかけ、それからその笑みをわずか下へ下ろす。

「よかろう、何でも聞いてご覧」

この私に。主に最高の知恵と栄誉を与えられた、この私に！

「ルシフェルさま、」

「ルシフェルさま、」

私には余裕があった。“幼い”天使が抱く疑問については、これまで様々経験したから大体把握しているつもり。答えられないことはない　はずだった。

「せかいのはじつこは、」  
「どうなっているのですか？」

“世界の端はどうなっているのですか？”  
なんだ、それは。

真っ先を感じたのは微笑ましさの混じる呆れだった。彼ららしいというか何というか。ミカエルは絶対にそんな疑問を抱かなかった。期待に輝く茶色の大きな瞳が四つ。私は鮮やかな金髪をぽふぽふと撫でて

「それはな、」

そして

「それは……」

愕然と、した。

「ルシフェルさま？」  
「ルシフェルさま？」

双子の声が聞こえていても、もう私には手を動かすだけの余裕すらなかった。

絶句。呆然。嘘だろう。まさか。信じられない。……真っ白な頭に浮かぶ、ひとつの疑問。

“何故、私が《世界》のことを知らない？”

そもそも果たして私が世界の端など、そんなことを考えたことがあったか？ 主に与えられなかった知識は不要なはず。求めることさえ無意味だと言ってきた、信じてきた。

しかし、しかしだ。私は《世界》を託されたはずではなかったか？ 守るべきものを知らない……これは実に由々しき事態だ。何故ならその場所を《光》は照らせないということだからだ。

ひよつとすると、私は、本当は何も……

「っー！」

そんな……そんなはずがあるものか！ 私は《最高傑作》なのだぞ。一瞬浮かびかけた忌々しい考えに苛立つ。

私が眉根を寄せていることを不安に思ったのだろうか、従者の天使が慌てたように頭を下げる。

「すみません、すみません！ 不快にさせるようなことを申し上げてしまつて……！」

「いや……」

不快なことに違いはないが、私はただ事実を認めたくなかつただけだ。調剤に関する知識も、時の操り方も、……“役割”でないことに関しては仕方がない。それは努力の領域。意志次第で発展するのは皆同じだ。

認めたくないのは他ならぬ《世界》を私が知らないという、その事実。

「メタトロン、サンダルフォン」

「はい」  
「はい」

だからそれを口にすることはできなくて。

「それは話すとしても長くなるんだ。今は答えることはできない」

理由は違えど結論は同じ……か。これは嘘になるのか、いや、なるまい。軽い失望を感じながら自分自身に言い聞かせる。

ああ。笑顔をつくるのはこんなにも労力が要ったのか。素直にならずいた純粋な青年達に、そつと心の中で謝った。

「わかりました！」

「またあとでできさせてくださいね！」

「……ああ」

急かされるように去っていくふたりに手を振り返し、私は外へ向けていた足をそのまま廊下の反対方向へと向ける。散歩は中止だ。一刻も早く、早く、答えを求めなければ。

知りたい。もっと優れた天使となつて、少しでもあの方を喜ばせたい。きっとあの方は私がこうすることを望んでおられたから、だからこそわざと“欠陥”をお与えになったのだ。そうに違いない。そうでなければおかしい。欠けた完璧は、私しかないのだから！廊下を早足で進みながら、首飾りを強く握りしめる。失望と驚愕はいつのまにか、義務感と好奇心に変わっていた。

「アルつ。アルベルトっ！」

中庭の木の剪定などという、我が従者とは思えぬ仕事をしている天使を呼ぶ。それでも彼は一応、最古参なのだが。

私の声にすぐさま木から滑り降りてくるアルベルト。動きは実に滑らかだが……

「お呼びですか、ルシフェル様」

頼む、その無表情はやめろ。何だか笑える。

「至急、伝令を頼みたい。そうだな……ああ、ベルゼブブ、あいつがいいな、うん。ベルゼブブとその配下数名を私の執務室に召集する」

上級天使を責任者として調査隊を組む。そこに私のところのフィオンやヨハンを加えれば良いか。その間に私は書物を調べる。ここにある本全てにもう一度目を通す……難しいが、不可能ではないだろう。

ベルゼブブを選んだ理由は簡単、良くも悪くも“単純”だからだ。奴ならば下手に詮索してくることはあるまい。それに 本当はこちらの理由の方が大きいのだが あん天使は最も信頼のおける友のひとりなのだ。

「御意。直ちに行つて参ります」

「頼むぞ」

さて、フィオン達も探さねば。彼らが集まるまでにきちんと計画を立て、それからまずは資料室の書物から始めようか……。

ふと見上げた空は底抜けの蒼。姿も見えぬ愛しい相手を想う。

これで良いのですね、主よ。

そつと問いかけ足を踏み出した。おさまらない鼓動を微かに感じながら。

二種類の布地が手元にある。色は白と黒。どちらも肌触りの良い、滑らかな上質の布。だって“お客様”用だから。

「楽しそうですね、ミカエル様」

「ねえ、クーダ。どちらが良いと思いますか？」

室内に入って来た自分の従者に問い掛ける。鈍色の長い前髪の向こうで、まるやかな黒の瞳が細められるのが見えた。両腕に抱えた箱を執務室の床に静かに置き、彼はこちらへ来ると自分の手元を覗き込む。

「この布は何に使うんです？」

「寝台に。ほら、眠る時に上から布を垂らすでしょう？ どちらの方が落ち着いて休んでいただけるかと思って」

「難しいですね……。黒、と言いたいところですが、悪魔の皆様も我々が白を好むのと同様に、何となく黒を好んでいらっしやるだけのようにですからねえ」

「ねー？」

顔を見合せ、笑う。クーダの言う通り、楽しんでいることは否定しない。

先日行われた会議。議題は、近々この天界を訪れるという地獄からの使節への対応についてだった。

地獄と言っても、何も天界と敵対しているわけではない。天使が住む世界と悪魔が住む世界、端的にはこれだけの違いだ。だから互いに交流はある。

しかし自分はこの行事に深く関わるのは初めてで。ずっと前入殿して間もない頃に、遠目で悪魔らしい姿を見たことがあるだけ。当時は兄達の仕事にはあまり関わっていなかったから。

どのような感じなのかとガブリエルに尋ねたら、彼女は少しぷりぷりしながら、「あの悪魔ってバルシフェルをたぶらかしにかかるんだもの。今度は遠慮してもらいたいわね！」と呟くように言っていた。たぶらかす？ って、何だろう？ よくわからなかったけれど、楽しみであることに違いはない。

まして今回自分は接待の責任者となったのだ。大天使となって間もないのに、どうしてそんな大役を任されたかというところ

“あの、悪魔の皆さんに接待の内容を内緒にしてみてもどうでしょう？”

会議の場で思い切って発言した時の、大天使達の顔は忘れない。惚けたような驚きの表情。やがて口々に賛成してもらった時のあのむず痒い感覚も。

“内緒、ねえ。いいかもしれないわね”

“確かに新しいな”

“結構良い案だと思うよ”

それまでは事前に部屋の内装から手土産から、事細かに向こうの希望を聞いて用意していたのだそう。単純に、何があるかわからない緊張感も楽しいかなと思っただけなのけど……どうやら慣習とは違うというのが評価の理由らしい。新参者の強み？、なんて。

ああ、彼らの仲間なんだ。そう実感できて、嬉しくて嬉しくて。一段高い席に座る兄を伺い見ると、優しく笑い返されて更に嬉しくなった。

“異論はないようだ。私も賛成だ。ではミカエル、お前にこの件を一任してもいいか？”

“私に、ですか?! ”

執務中はあくまで大天使同士。どこか他人行儀に振る舞う兄に合わせ、“正式に”命を承った形と相成ったのだった。

「でも、いらつしやる地獄むじうの幹部の方は御一方おひとかただけなのですよね？それと従者の方々が数名。少し寂しい気も致しますね」

「うん。けれど、だからこそうんと力を入れて、素敵なおもてなしをして差し上げましょう。苦勞をかけますが宜しくお願いしますね、クーダ」

「ふふっ、仰せのままに」

にこやかに腰を折った彼は家具の設計などを得意としていた天使。装飾、という技能に関しては一番適しているはず……ということを中心となって働いてもらっているのだ。

「頼まれていたものは、こちらの箱の中に入れておりますので」

「ありがとうございます。ご苦勞様でした」

「お安い御用です。次は何を致しましょうか？」

「ええと……ああ、確か楽隊が演奏を披露するのでしたね。場所や時間がどうなっているか確認してきてもらえますか？あと、もしモリーシャに会ったら客間まで来るように伝えてください。彼女にも用意を手伝ってもらいます」

「御意」

クーダも、楽しそうじゃないか。

足取り軽く退出していく白い背を見送ってから、次に自分は件の箱を開けてみる。中から出てきたのは、お酒。悪魔は水のように酒を口にする<sup>と</sup>聞いた。余程強いに違いない。だから寝室にも置いておいたら喜んでくれるかと思っただのだ。お土産にしてもいいかもしれない。メフィストフェレス先生に選んでもらった取って置き(らしい)果実酒、気に入ってもらえると、良いのだけど。

ああ、まだ見ぬ悪魔さまは、何色の花が好きなんだろう。話し合いの場に焚く香はどんなものがいいだろう。歓迎の歌は疾る旋律か、それとも緩やかに流れる音色か。差し上げるのは着物が食べ物が、装飾は単色がいいのか凝った方が好みか。

わくわくする、ドキドキする。自分達とは違う環境で過ごしてきたひと、ある意味天界の“外”から来るひと。黒いというその翼も見てみたいし、礼の仕方も異なったりするのだろうか……想像は、尽きない。

「……そうだっ」

せつかくだから、もつときちんと“予習”しておこうかな。悪魔について一応最低限と思われることは調べてみたのだけれど、もつとたくさんのこと 例えば地獄の歴史とか を知っていた方が会話も弾むはず。天界の書物に何か載っていればいいけど。いざとなったら他の大天使に尋ねることもできるが、とりあえずは自分で調べてみよう。まずはできることをする。兄が、よくそう言っていた。

ということ、部屋の用意に目処が立ったら書庫へ行くことにした。でもまずは白か黒か、この布を選ばないと

\*\*\*

「わっ?！」

「わあっ! ご、ごめんなさいっ」

「いえ、こちらこそ……って、ミカエル様?!」

「えっ?」

書庫の中に入った途端、本を抱えたひとりの天使とぶつかりかけて。重たげな音を立てて緋色の絨毯の上に散らばった大量の本達。慌てて拾い上げている時に名前を呼ばれ、ふと見上げると……

「あ、ヨハン!」

「申し訳ありません、ミカエル様! あっ、ありがとうございます

……じゃなくて、お怪我はございませんか?!」

「ううん、大丈夫です。……」

ヨハンがいる、ということはその“主”も……

「兄上!」

誰もいないと思っていた書庫の中、ひとりだけ。机にうずたかく積まれた書物の山の向こう、愛しい天使がその美しい顔を上げた。

「おや、ミカエル」

ふっと柔らかな微笑。早鐘のような鼓動に急かされ傍へ近寄る。本当に彼は埋もれてしまうのじゃないかというくらいに書物の山。

さつきヨハンが運んでいた数の何倍もある。

「すごい数……兄上、これ、みんな読むのですか?!」

思わず問うと彼はあっさり首肯して。

「ああ。この書物は全て読んだのだがな、もう一度読み直しているところだ」

「……」

今、さらっとんでもないことを言わなかったか。全て読んだ？  
しかももう一度全部？ うわわ。

「し、調べ物……ですか？」

「ん……いや、ちょっとな。ところでお前はどうしたんだ？」

「あっ、はい。えと、今度の接待に備えてもっと地獄のことを知っておこうと……」

慌てて答えると兄はそうか、と笑った。彼ならばたくさんのことを知っているだろう。でも、まだ聞かない。ちゃんと自分で頑張るんだ。

「兄上、後で悪魔の方をお迎えするお部屋を見に来てくださいますか？ 結構良い出来だと思っているんですけど」

「ん、ああ、そうだな……」

呟く兄の視線がちらりと書物に落ちる。あまり話をしているとお邪魔かもしれない。

「お忙しいところすみません、兄上。では、また後程」

「ああ」

さて、と。

柔らかな緋色の毛を踏む。ずらっと並んだ背の高い棚には、これまたきちつと整頓された膨大な数の書物が納まっている。アシユタロスと一緒に読んでいたのなんて、歴史書のほんの一部に過ぎない。どこから手をつけようか？

うろつろつと棚の間を縫い、ようやくそれらしい数冊を選び出す。

重たいそれらを両手で抱え、兄の近くの席に座った。そつと盗み見た彼の真剣な表情に胸を高鳴らせてみたりする。

いけない、いけない。集中！

気持ちを落ち着けて読み始めた

《ぱら……ぱら……》

……のだが。

《ぱら……ぱら……ぱたんっ》

「次を」

「はっ！」

《パタパタパタ……》

「次」

「只今っ」

《パタパタパタ……》

何度も何度も自分の目の前を横切っていくヨハン。往復の度に書物の山を抱えて。

一度気になつてしまつともう気にせずにはいられない。思わず彼らの動きを見つめる。次から次へと運ばれるたくさん書物と、淀みなく頂を捲る白い手指。再読だと言つていたが、それにしたつて兄の読む速さは尋常ではない。自分も流し読みしているつもりなのに、同じ時間で兄は一体自分の何倍の量を読んでいるのだろう。

「これで七番目の棚は全てです」

「まだ七つか……先は長いな。疲れただろう、ヨハン。交代してもらうか？」

「自分はまだまだ大丈夫です。ルシフェル様の方こそ、休憩になさいますか？」

「いや、平気だ。時間が惜しい……」

陽が沈む頃、やっと緊張の糸が弛んだように、ひそひそと交わされた会話が耳に入ってきた。自分も選んだ本を読み終えたところ。ちょうど良い。

「あの、兄上」

話し掛ける機会を逸しないように、立ち上がる。

「そろそろ、失礼しますね」

「そうか。探していたものは見つかったか？」

「ええ、十分です」

「それは良かった」

眠たそうな紅い目を細めて兄は笑う。さすがに彼も疲れているよ  
うで、その笑顔はどこか力なく見えた。

「兄上はまだ？」

「ああ。もう少しいるよ」

「そうですか……あの、できるだけ早くお休みになってくださいね  
？」とてもお疲れのように見えます」

「ありがとう、ミカエル」

一礼したヨハンにうなずいて書庫を後にする。

ちよつと残念だったのは、事実だ。自分達が頑張つて用意した部  
屋、見てもらいたかったな。でもそれをわざわざ言うのはわがまま  
な気がした。だから仕事が片付いて、それから兄がふと思い出して  
くれたなら、それでいい。

認めよう。自分は誉めてもらいたかったのだ、きつと。けれど我  
慢できる。だって、自分は《火》を司る大天使。もう“子供”じゃ  
ないのだから。



してンぞ」

「ん……、大丈夫だ」

私の場合には純粹な寝不足だからな。通常の執務の合間を縫い、睡眠時間を削って書物を開いていたら、こうなつた。会議中は保つ<sup>も</sup>んだが、気を抜くとどうにもいけないな。

しかし連日の徹夜の甲斐あって、手の届く範囲にある書物は全て再読できた。そして……どこにも見落としがなかったことも確認できた。つまりは真に誰も知らなかったということだ。

主は私を最高傑作だと仰つた、最高の知識をくださった。いちばん世界に近い私知らないことで、まして記述がないのなら、他の誰が知り得るだろう？ 幼い天使の疑問に端を発したこの知識の探求、さほど重要でない事柄であっても、何かを新たに知ることは素晴らしい。重要な情報であるならば私知らないはずがないのだし。

「そうか？ 大丈夫ならいいが……。で、どこから言えばいい？」

「……………」

「まさか……また最初っからか？」

「……………」

「ったくよ〜！」

何も言えない。申し訳なさ過ぎる。

「心優し〜いオレ様だから平気なンだぜ？ もう面倒くせエから掻い摘んで言つぞ」

「ああ」

聞かねば。集中。

「ほい、怪我人無し、目標を確認、任務達成！ 以上ッ！」

「……………」  
「わ、わアってるよ。冗談だ！ そう睨むなって！ ……おほんっ。  
あー、参加はオレを含めて五名。武器は予定通りの装備で足りた。  
剣を使う機会なんざなかったからな。陽の沈む先に進路を取って、  
以降三度の陽の入りを観測。四度目の朝、“端”に到達。外部に広  
がる“虚無”を確認済みだ」  
「ふむ……………」

これで少なくとも双子には報告できるな。“端は確かに存在する”、と。

「“虚無”とは……………“端”の向こうには何もなかったということか？」  
「そうだな。暗闇にも見えたが、どうやらアレは“存在しない”らしい。なんつーか……………上手く説明できねエけど、知覚できねエンだよ、あの変な空間は。てめえかメフィストフェレスのジジイならわかるか？ まあ、曖昧とか混沌とか、そんな感じだな。オレアあんまし近づきたくねエ」

そう言っただけでベルゼブブは渋面を作った。なるほど、なるほど。

「距離は」

「十の山を越えた。直線進路上に川の流れは十二回、数えたぜ」

山を十……………思ったよりも近いな。

「了解。ご苦労だったな。ゆっくり休め、とお前の部下にも伝えてくれ」

立ち上がり、腰帯を締め直す。ベルゼブブが怪訝そうに首を捻っ

た。

「どっか行くのか？」

「その“端”とやらを見てくる」

「ああ？　せつかくオレらが行って来たのに……」

不満げな声を宥めるように微笑う。

「別に疑っているわけではないよ。単なる私の好奇心だ」

世界を確かめたいという願望。話を聞いて更に自分の目で確かめてみたくなった。主に、近づいてみたくなった。

「それに、その“虚無”とやらも気になるしな」

「ふーん。まっ、無理すんなよ？」

じゃ、オレはこれで。

言って出て行った友を見送り、私は純白の上着に袖を通す。留め金を嵌めて襟元を整え。緩やかに高まっていく緊張と興奮に手が震えた。

「……よし」

準備は万端。新たな知への旅だ。

従者を連れたベルゼブブで四日かかったということは、私ひとりならば長くて一日、全速を出せば恐らく半日で帰ることも可能だろうな。だが万が一にも明日の会議を無断で抜ける……などという事態があつてはならないし。ベルゼブブには今言ったが、誰か他の者にも私の外出を知らせた方がいいだろう。

宮殿内、この一画に並ぶのは大天使の私室だ。私は少し迷ってひとつの扉を選び、叩く。

「……はい？」

「私だ。話がある」

やがて姿を見せた美しい天使。茶色の長い髪が肩から零れた。

「あら。上着まで着てどうしたの、ルシフェル？」

特に深い理由はないが、私が選んだのはガブリエル。慈愛を司り、先頃《水》の座を与えられた美女は小首を傾げてみせる。

「ちよつとな。工作中だったか？」

「ええ、でも大体片付いたところよ。ほら、あの生まれたばかりの天使のための教育施設……あそこの規模を縮小するって言ってたじゃない？」

「ああ、あれか」

最近では誕生する天使の数も次第に減りつつある……と言い続けて暫くが経った。まだ、皆無ではない。

そもそもここにいる鳥獣や草木は元からここで生きる者ばかり、彼らも“消える”ことはない。その他……下界へ降ろされ生を全うした命は、やがて主のお側へ召し上げられる。……それは少し羨ましくはあるが。だが我々は“生きている”。生きて、主の愛情を最も近くで享受しているのだから、不満は言わない。

この天界に新たにやって来るのは、天使のみ。果たしてこのままで場所は足りるのか、と思う時があるのは事実だ。そうなる土地獄の役割は……ん、無用な思考か。まあ、現段階で我々が心配する必要などなからう。

「どうだ、上手くいくか」

「そうね……あそこで働いていた天使達には、ちゃんと新しい務めが割り当てられそうよ。それに規模を小さくするだけだから、基本的には今まで通りでいいと思うわ。どうかしら？」

すらすらと並べ立てる彼女はやはり素晴らしい天使だ。思わず笑みが零れる。

「この件はガブリエルに任せる。私が敢えて口出しする点はないよ  
うだしな」

「そう？ それなら良かったわ。後で承認、お願いね」

「わかった」

「ところで……」

ああ、そうだった。何か言い掛けた彼女を遮りうなずいた。

「これから少し遠出してくると伝えに来た。ひよっとすると、明日の会議には帰りが間に合わないかもしれない」

ガブリエルはわずかに目を見開く。

「どれくらい遠くに行くつもりなの？ ルシフェルが一日で帰って来られないかもしれないなんて……」

「遠くも遠く、この天界の“端”を見てくる」

ミカエルと書庫で会った時ははぐらかしたが、あれは単に少しばかりの見栄を張りたくなっただけ。彼女になれば特に何も構わない気がした。啞然とした風のガブリエルに私は“掻い摘んで”事情を説明。

話を聞き終えても彼女は未だ信じられないといった様子で瞬きしている。きっと私と同様、そんな疑問など抱いたことがなかったのだろうか。

「私もあの双子には驚かされたよ。よもや“端”などと……限りがあるのだという概念を持つとは」

「本当ね。まったく、斬新過ぎるといっつか、怖いもの知らずというか……」

感心と呆れが半々のガブリエルの笑顔。今度は彼女が私にうなづく。

「わかったわ。何かあったら特任で遠征だって伝えておきます」

「うん、頼む。個人的な活動だからな、あまり詳細を知られたくないんだ」

本当の理由は少し違うけれども。

「はいはい。心配ないと思うけど……気を付けてね」

「ありがとう。行ってくるよ」

優しく笑い掛けて。何故かぎこちなく笑んだ天使のもとを後にした。

「お出掛けですか」

「行ってらっしゃいませ、ルシフェル様」

「ん、ありがとう」

服装が服装だと、擦れ違う天使達にも声を掛けられる。頭を下げ、  
る彼らにその都度礼を言いながら、長い廊下を早足で進み、ようや  
く宮殿の外へ出た。

青い青い空。明るい日差し。旅立ちには相応しいじゃないか。白  
亜の宮殿を背に、私は深呼吸をひとつ。

陽の沈む先……ベルゼブ達が進路を取ったという方向には、深  
い緑の森が見える。その先はここからでは見えないから。

つ、と軽く上を向いて目を閉じる。意識を背後へ向ける。自分の  
中に眠るモノを引き出すように、力に自由を与えてやるように。

### 《解放》。

一瞬、大きな風が巻き起こる。背中が熱い。薄らと目を開けると、  
草と共に舞い上がる黄金の羽根が見えた。

今私の背中には六対、十二枚の翼があるはず。普段は一对にまと  
めているが、これこそが本来の姿。滅多なことでは出さない。強い  
て言うなら……気分を使い分けているだけだ。何となく気が引き締  
まるというか。生まれた時の姿を解放してやりたくなったのだ。

「やっ……」

とん、と地を蹴る。一度、二度羽ばたき。上空から眺めても尚、  
端らしきものは確認できない。行くしかないようだな。

何なら《空間転移》を繰り返して時間を短縮することは可能だが、  
せっかくベルゼブ達が距離を測ってくれたのだ、私も地道に数え  
ながら行くことにした。確か山を十で、川を十二だったか。川は蛇  
行しているから当てにはなりにくい、保険として横切った回数は  
数えておこう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1550s/>

---

墮天使がうちにやって来た！ 2      The Betrayer and A Lyric of Affection

2011年10月26日09時03分発行